岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 490 集

平成 17 年度発掘調查報告書

釜 沢 館 跡 下 大 谷 地 I 遺 跡 川口 I 遺跡第1次調査 宮古道路関連可能性あり① 宮古道路関連 可能性あり(2) 宮沢遺跡第11次調査 本宮熊堂B遺跡第30次調查 宮古道路関連 可能性あり③ 宮古道路関連 可能性あり④ 本宮能堂B遺跡第31次調查 中村遺跡第1次調査 宮古道路関連 可能性あり⑤ 道上遺跡第1次調查 宮古道路関連 可能性あり⑥ 宮沢原下遺跡 十 文 字 遺 跡 八 木 沢 Ⅱ 潰 Ш 0 神 潰 跡 跡 岩 八木沢駒込Ⅱ遺跡 洞堤遺 跡 北 丑 転 遺 の神遺 跡 跡 八木沢皿野来遺跡 ほか調査概報

2006

(財)岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター

平成 17 年度発掘調査報告書



写真1 二戸市釜沢館跡発掘調査前の状況



写真 2 奥州市前沢区道上遺跡航空写真



写真 3 二戸市川口 I 遺跡出土近世陶磁器



写真 4 花巻市石鳥谷町中村遺跡出土縄文土器

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発 事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置 をとってまいりました。

本報告書は、平成 17 年度に当センターが発掘調査をした遺跡の調査成果をまとめ、調査報告書及び調査概報として発刊したものです。全県下で 41 遺跡 47 件、179,413 ㎡が調査され、旧石器時代から近世までの遺構、遺物が検出されております。奥州市衣川区において、奥州藤原氏の時代の遺跡群が発見されたことをはじめとして、各地の調査で地域の歴史に新たなーページを書き加えることができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました た委託者をはじめ、地元の教育委員会及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成 18 年 3 月

財団法人 岩手県文化振興事業団 理事長 合田 武

目 次

平成17年度の調査結果について

	I 発	掘調査	報告
(1)	釜沢館跡(二戸市)	5 (5)	本宮熊堂B遺跡第31次調査(盛岡市) ····· 57
(2)	川口 I 遺跡第 1 次調査 (二戸市) 2	25 (6)	中村遺跡第1次調査(花巻市) 67
(3)	宮沢遺跡第11次調査(盛岡市) 4	17 (7)	道上遺跡第1次調査 (奥州市) 93
(4)	本宮熊堂B遺跡第30次調査(盛岡市) ····· 5	(8)	十文字遺跡 (藤沢町) 127
	Ⅱ 試掘	·確認調	查報告
(9)	可能性あり① (宮古市) 14	19 (17)	八木沢Ⅲ野来遺跡(宮古市)・・・・・・・ 161
(10)	可能性あり② (宮古市) 15	50 (18)	八木沢駒込Ⅱ遺跡(宮古市)164
(11)	可能性あり③ (宮古市) 15	(19)	八木沢Ⅱ遺跡 (宮古市) 166
(12)	可能性あり④ (宮古市) 15	(20)	宮沢原下遺跡 (奥州市) 171
(13)	可能性あり⑤ (宮古市) 15	55 (21)	山の神遺跡(奥州市)・・・・・・・175
(14)	賽の神遺跡(宮古市) 15	66 (22)	岩洞堤遺跡 (奥州市) 179
(15)	可能性あり⑥ (宮古市) 15	(23)	北丑転遺跡 (奥州市) 183
(16)	下大谷地 I 遺跡 (宮古市) 15	59	
	Ⅲ 発:	掘調査	既 報
	1 =	関	係
(24)	野中遺跡 (一戸町) 18	37 (29)	宮沢原下遺跡第1次調査 (奥州市) 192
(25)	野里上遺跡 (一戸町) 18	(30)	六日市場遺跡 (奥州市) 193
(26)	野里上Ⅱ遺跡 (一戸町) 18	(31)	細田遺跡 (奥州市) … 194
(27)	中屋敷上遺跡 (一戸町) 19	00 (32)	接待館遺跡 (奥州市)195
(28)	飯岡才川遺跡第7次調査 (盛岡市) … 19	1 (33)	衣の関道遺跡(奥州市)・・・・・・196
	2 独立	[行政法人	関係
(34)	千足南遺跡 (田野畑村) 19	9 (36)	細谷地遺跡第9次調査 (盛岡市) 201
(35)	飯岡才川遺跡第8次調査 (盛岡市) … 20	00 (37)	向中野館遺跡第7次調査 (盛岡市) 202
	3 岩-	手県・市門	関係
(38)	板子屋敷 3 遺跡 (軽米町) 20	(43)	本宮熊堂A遺跡第 29 次調査(盛岡市) 210
(39)	舘Ⅱ遺跡 (二戸市) 20	(44)	野古 A 遺跡第 29 次調査(盛岡市) 211
(40)	飯岡才川遺跡第9次調査 (盛岡市) … 20	77 (45)	新平遺跡 (北上市)212
(41)	細谷地遺跡第 10 次調査 (盛岡市) 20	(46)	芦萱遺跡 (北上市)······ 213
(42)	向中野館遺跡第8次調査 (盛岡市) … 20	9 (47)	里古屋遺跡 (住田町) 214

平成17年度の発掘調査結果について

今年度は、37 遺跡 43 件 155,498 ㎡ で発掘調査を開始し、最終的には 41 遺跡 47 件 179,413 ㎡ の調査を終了した。そのうち、試掘・確認調査は 15 遺跡である。遺跡の所在地は県内 4 市 8 町 2 村 (発掘調査時の市町村名による)に及んでいる。

旧石器時代の調査はなかった。縄文時代では、後期の集落遺跡として軽米町板子屋敷3遺跡(38)がある。山間にある小規模な遺跡ながら、竪穴住居跡8棟や土器埋設遺構・土坑などが見つかっている。後期の中でも時間を異にする集落がごくわずかに場所を変えながら短期間営まれたものと考えられる。一戸町野里上Ⅱ遺跡(26)は中期末~後期初頭と晩期の小規模な集落遺跡で、それぞれ2棟の竪穴住居跡を調査している。盛岡市細谷地遺跡(36・41)では、これまでに周辺では発見例のなかった晩期前葉の竪穴住居跡1棟が見つかり、廃絶後は墓として転用した様子が観察された。58,700㎡という広大な面積を調査した奥州市(旧胆沢町)宮沢原下遺跡第1次調査(29)からは溝状や楕円形・円筒形の陥し穴状遺構208基が検出された。大部分は縄文時代に属するが、一部の遺構の埋土最下部に十和田 a 降下火山灰が堆積していることから、平安時代に属するものもあることが判明した。

次の弥生時代は土器がいくつかの遺跡で散見されるが、細谷地遺跡で焼土遺構 1 基が見つかっている以外に遺構はなく、古墳時代の遺構や遺物は皆無だった。

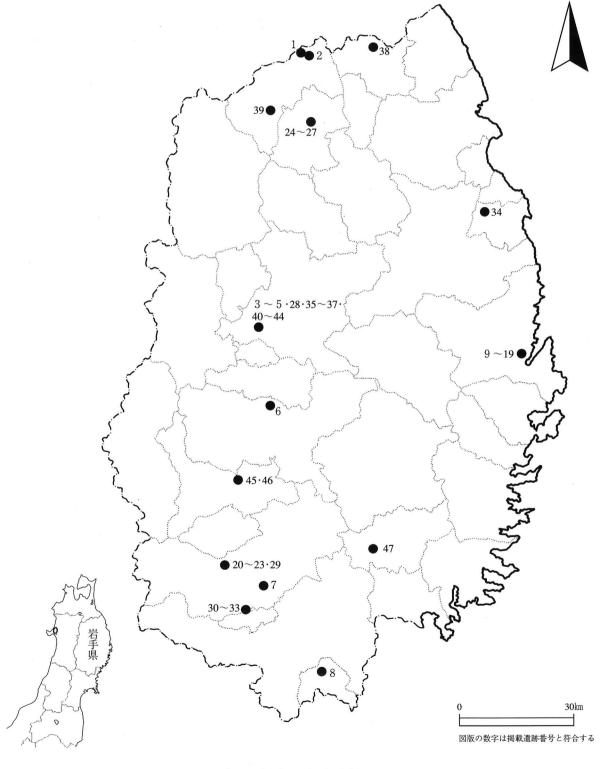
奈良時代の集落遺跡としては細谷地遺跡ほかがある。細谷地遺跡は平安時代の集落と複合しており、埋没した旧沢跡に沿い、あるいは重なって11棟の竪穴住居跡が検出された。一戸町野里上遺跡(25)では奈良時代末~平安時代初頭の竪穴住居跡2棟を調査し、内1棟は一辺が8mを超える大型のものであった。盛岡市野古A遺跡(44)でも竪穴住居跡1棟が見つかっている。

平安時代では、上述の細谷地遺跡から竪穴住居跡 46 棟と掘立柱建物跡 1 棟・墓壙 1 基などが検出された。大部分が 9 世紀に属するもので、10 世紀の遺構は少数である。遺物の中には内外黒色処理の坏の外面に樹木と推測されるものを細線によって描いた「刻画文」のような特殊例がある。過去の調査と併せると 100 棟を超える竪穴住居跡を調査したことになり、台太郎遺跡や本宮熊堂 B 遺跡など、周辺の同時代の大規模集落遺跡との関係が注目される。そのほか、同一事業に関連して調査され、近接した位置にある向中野館遺跡(37・42)や飯岡才川遺跡(28・35・40)・野古 A 遺跡も平安時代の集落遺跡である。

衣川左岸築堤工事に関連した奥州市(旧衣川村)六日市場・細田・接待館・衣の関道の4遺跡(30~33)はマスコミ等で大きく報道され話題になった。低位段丘縁で、東から西へ六日市場・細田・接待館と連続する遺跡は東端が南北に延びる六日市場遺跡の溝で限られ、それより東には遺構が存在しない。現在のところ、六日市場・細田・接待館の3遺跡で併せて84棟の掘立柱建物跡を復元しているが、12世紀に属することが明確なものは少なく、中・近世の遺構も含まれていることが予測される。なお、接待館遺跡の一画は幅7~8m、深度2mの堀に囲まれていることが推測でき、東西での幅は120mに及ぶ。内側の中央付近には方形の区画溝も存在し、両者が時間差をもって存在したのか、あるいは同時存在なのかが注目される。衣の関道遺跡は上述の3遺跡より一段低い沖積段丘に立地する遺跡で、やはり12世紀に属すると推測される掘立柱建物跡や池状遺構・テラス状遺構ほかを調査している。衣川の北岸に平泉藤原氏に関連する遺跡が存在することを広範囲の発掘調査によって明らかにできたことは、地域の歴史の解明にとどまらず平泉研究に大きな影響を与えることになろう。調査途中の遺跡もあるが、遺構と遺物の詳細な分析と検討を行い、遺跡の実態を明らかにして考古学的な見地から評価を与えることが今後の課題である。

中世の遺跡としては二戸市(旧浄法寺町)舘 II 遺跡(39)を調査した。全体では 10 万㎡を超す館の北端の一部を調査したにすぎないが、複数の堀で区画され、曲輪には竪穴状遺構や竪穴建物跡・掘立柱建物跡など多くの施設が造られ、重複関係からは数期の変遷があることが見てとれる。16 世紀にこの地を支配し、浄法寺城を拠点にした浄法寺氏に関係する館跡であろう。同時期の館跡と推測される二戸市釜沢館跡(1)は確認調査とトレンチによる堀跡の部分調査をしたにすぎないが、上幅27.5 m、深度 16.2 mの大規模な薬研堀を伴う館跡であることが確認できた。

(首席文化財専門員兼調査第一課長 三浦謙一)



平成 17 年度調査遺跡位置図

I 発掘調査報告

(1) **釜**沢館跡

所 在 地 二戸市釜沢字寺館地内 遺跡番号·略号 IE79-1077 KSD-05

委 託 者 二戸地方振興局農政部農村整備室 調査対象面積 1,000 m² 事 業 名 畑地帯総合整備事業(担い手育成型) 発掘調査面積 1,000 m²

発掘調査期間 平成 17 年 9 月 1 日 \sim 10 月 17 日 調 2 担 当 者 横井猛志・西澤正晴

1. 調査に至る経過

釜沢館跡は、畑地帯総合整備事業(担い手育成型)舌崎地区の事業区域内に位置しているため、当該事業の施行にともない発掘調査を実施することとなったものである。

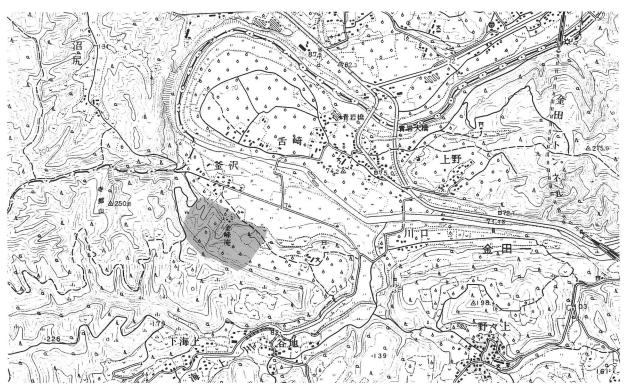
本地区は青森県との県境に位置し、一級河川馬淵川沿いに拓けた、りんご・きゅうり栽培を主体とする畑作地帯である。

地区の現状は、畑地へのかんがい用水施設が未整備であり、農道幅員が狭小なため、生産性・品質・物流に支障をきたしている。そのため、国営事業で水源・幹水路を、本事業で支線用水路、末端かんがい施設、農道等を整備し、計画的・安定的生産や品質の向上及び多目的用水の活用等を図り、併せて生活環境の向上に寄与するものである。

当該事業区域の埋蔵文化財包蔵地に係る試掘調査については、当該事業の施行主体である当室が岩 手県教育委員会事務局および二戸市教育委員会に依頼し、平成14年度に実施した。

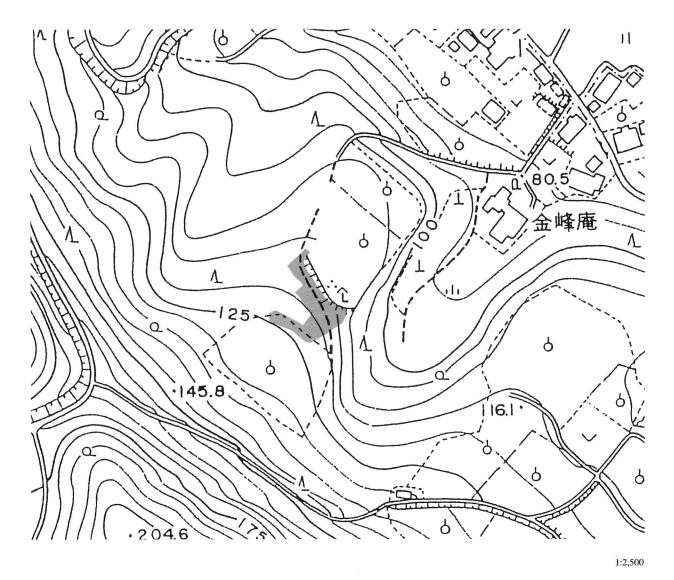
その結果を踏まえ、当室が発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団に委託することとなったものであり、発掘調査は平成15年度に続き2度目となる。

本発掘調査については、岩手県教育委員会から平成17年度事業として実施することとして、当室 へ通知されたものである。 (二戸地方振興局農政部農村整備室)



1:25,000 三戸・陸奥福岡

第1図 遺跡の位置



第2図 調査区の位置

2. 遺跡の位置と立地

本遺跡は二戸市の最北端、いわて銀河鉄道金田一温泉駅の西北西約 3.9km に位置し、およそ 400 m 北方には青森県三戸町との県境をのぞんでいる。また、市内の中心を北流し八戸湾にそそぐ馬淵川が大きく蛇行し、それによって形成された舌状地形の南方、寺館山から東に延びる尾根状の丘陵の突端に立地している。釜沢館跡は本館と古館とに分かれているが、今回の調査範囲は前回の調査範囲(岩文埋 2004:土坑 2 基検出)から北西約 200 mの位置にあたり、本館の堀跡を中心として南北の平坦地を含んでいる。標高はおよそ 115 ~ 124m である。

3. 基本層序

本調査区の基本層序は以下の通りである。なお、土層の観察および柱状図の作成はトレンチ1 堀跡 の両曲輪斜面において行った。

- I層 10YR6/1 褐灰色粘質土 現表土 (層厚 20 ~ 30 cm)
- Ⅱ a 層 10YR5/6 黄褐色土 **盛土 1** 締まりやや強、粘性中、十和田八戸テフラ(火砕流)のブロックを多く含む。(層厚 0 ~ 32 cm)
- Ⅱ b層 10YR3/2 暗褐色土 盛土 2 締まりやや強、粘性中、十和田南部テフラ、同八戸テフラ(火砕流)を多く含む。

(層厚 0 ~ 44 cm)

II c 層 10YR3/1 黒褐色土 **盛土3** 締まり中、粘性中、十和田南部テフラ、同中掫 テフラを多く含む。(層厚0~32 cm)

Ⅱ d層 10YR3/1 黒褐色土と 10YR3/3 暗褐色土の互層盛土4 締まり中、粘性やや弱、十和田南部テフラを多く含む。(層厚0~80 cm)

Ⅲ層 10YR3/1 黒褐色粘質土 (層厚 0 ~ 18 cm)

IV層 10YR3/3 暗褐色粘質土(層厚 $0 \sim 14$ cm)

V層 2.5Y8/8 黄色浮石 十和田中掫テフラ層 (層厚 $0 \sim 10 \text{ cm}$)

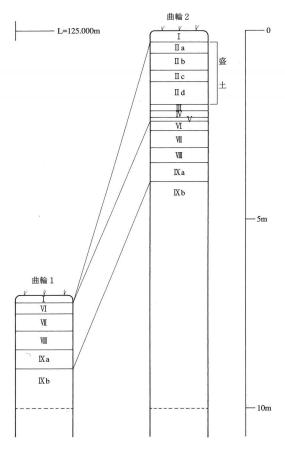
VI層 7.5YR3/4 暗褐色粘質土 遺構検出面 1 十和田中掫テフラ、同南部テフラを含む。 (層厚 $0\sim60~\mathrm{cm}$)

WI層 5 YR5/8 明赤褐色浮石 十和田南部テフラ層遺構検出面 2 (層厚 44 ~ 46 cm)

Ⅷ層 7.5YR3/4 褐色粘質土 **漸移層**(層厚 40 cm)

X a 層 7.5YR5/6 明褐色火山灰 十和田八戸テフラ・ 降下火山灰層 (層厚 50 cm)

区 b 層 10YR5/1 灰白色火山灰 十和田八戸テフラ・ 火山灰火砕流層 (層厚不明)



第3図 基本土層柱状模式図

曲輪1ではVI層上面およびVI層上面までの削平整地がみられ、すべての遺構はこれらの削平面において確認された。また曲輪2では4層(II a \sim d 層)にわたって盛土整地(あるいは土塁か)が確認された。いずれも築城時にともなう普請の痕跡と考えられる。

4. 調査の概要

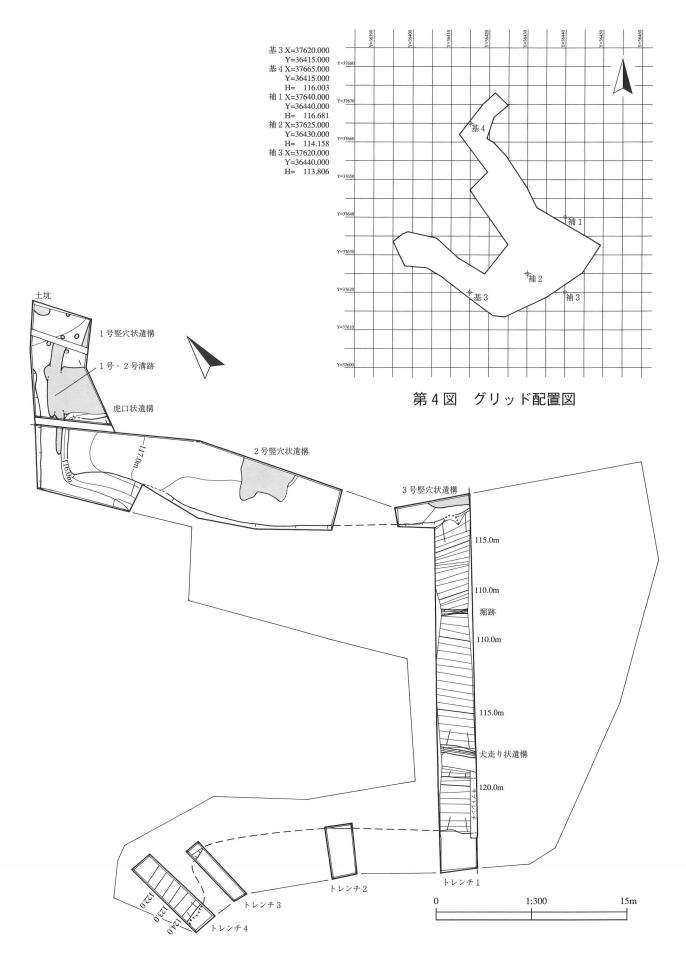
今回の調査区は本館の堀跡を中心に東西の平坦地に及んでおり、堀跡の北東側を曲輪 1、南西側を曲輪 2 とした。なお本調査は確認調査が主体となっており、遺構の大半は検出作業で調査を終了している。そのため、適宜サブトレンチを設定し、その観察結果から各遺構の性格を判断しているが、実際のものとは異なる可能性がある。唯一堀跡のみ 3 m幅のトレンチによりその規模と堆積土層を確認している(トレンチ 1)。なお曲輪 1 においては平坦部を全面検出したが、曲輪 2 においてはまずトレンチによる調査を行った(トレンチ $2 \sim 4$)。その結果、範囲内全てが盛土部分であり、かつ盛土上に構築された遺構が確認されなかったためトレンチ調査のみで終了した。

(1) 検出遺構

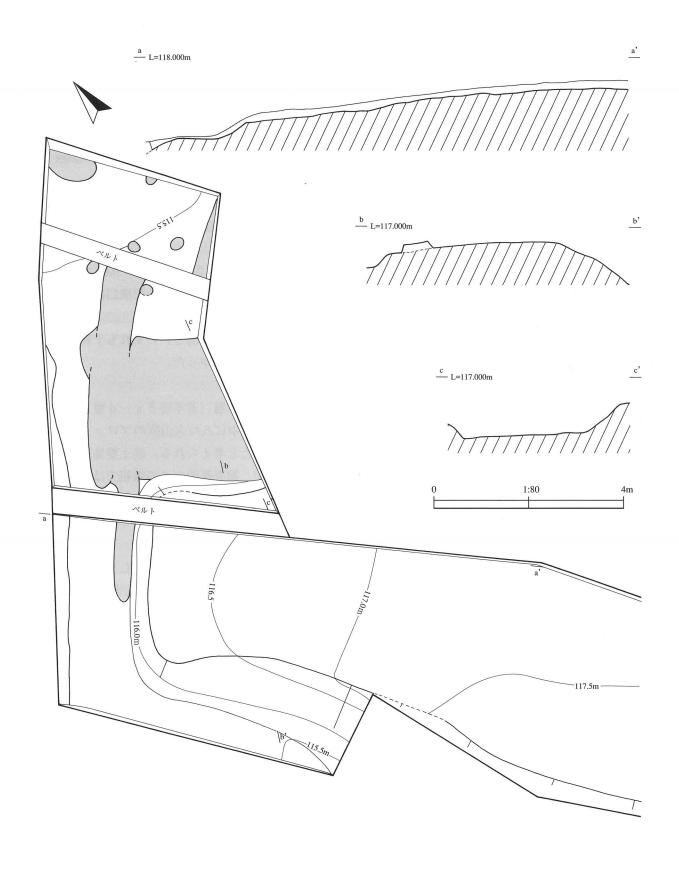
今回検出された遺構は、曲輪1において竪穴状遺構3基、虎口状遺構1箇所、土坑1基、溝2条、柱穴状土坑5基、曲輪2において盛土遺構(整地層)1箇所、そして両曲輪間の堀跡1条、犬走り状遺構1条であった。以下に詳細を列記する。

曲輪1の遺構

<**竪穴状遺構**>調査区の北側、中央、南側で1基ずつ検出された。いずれも調査区外にのびており全体形が把握できるものはないが、概ね方形を呈するものと思われる。また2号竪穴状遺構において張り出し部を有することが確認された。検出規模は1号竪穴状遺構で2.56×0.40 m、2号竪穴状遺構



第5図 遺構配置図



第6図 虎口状遺構エレベーション

は主体部 4.24×2.36 m、張り出し部が 1.28×1.04 m、 3 号竪穴状遺構では 3.22×0.76 mであった。 なお、第 2 号竪穴状遺構においてはサブトレンチより壁際に柱穴状のプランが確認されており、竪穴 建物跡である可能性が高い。

< 虎口状遺構>調査区北側で検出された。地山の削り出しにより土塁状の高まりが形成されており、その突端に隣接して方形の黒色土プランを確認した。防塁が途切れるところから入り口に関連する施設と捉え虎口状遺構とした。削り出しの地山は幅 6.05m、壁高 0.8 mで方形プランは 3.6 × 3.28m であった。曲輪内での位置は南西隅、山側に当たり、搦手(裏手)に相当するものと解される。

<土坑>調査区の北隅において南側半分が検出された。全体形は定かでないが、概ね長楕円形を呈するものと考えられる。開口部の検出幅は $1.4 \times 0.88 \text{m}$ であり、十和田南部テフラ(To-Nb)混じりの 黒色土が堆積する。

<溝> 調査区の北側で2条重複して検出された。1号は5.74×0.92 m、2号は7.04×0.64 mで、前者が後者を切っている。いずれも十和田南部テフラの混じる黒色土が堆積する。また虎口状遺構とも重複しているが、新旧関係は不明であった。

<**柱穴状土坑**>調査区の北東隅に5基まとまって検出された。径26~34cmで、いずれも十和田南部 テフラ混じりの黒色土が堆積する。柱痕跡、配列の規則性は確認できなかった。

曲輪2の遺構

< 盛土遺構>すべてのトレンチにおいて確認されており、堆積土は4層(基本層Ⅱ a ~ d 層)に大別できる。確認できた範囲では最大で1.9 mの高さに及び、また土層中に八戸火山灰のブロックが混入していることから、削平整地した際の地山や堀の掘削土を利用したと考えられる。盛土整地にしてはあまりにも大規模であり、土塁と見るのが妥当であると考えるが、調査範囲内での様相では断定できなかった。現況では土塁の痕跡は確認できなかったが、畑地造成の際のものであろうか重機による攪乱がうかがえ、その際に一面平地化したものと考えられる。

その他の遺構

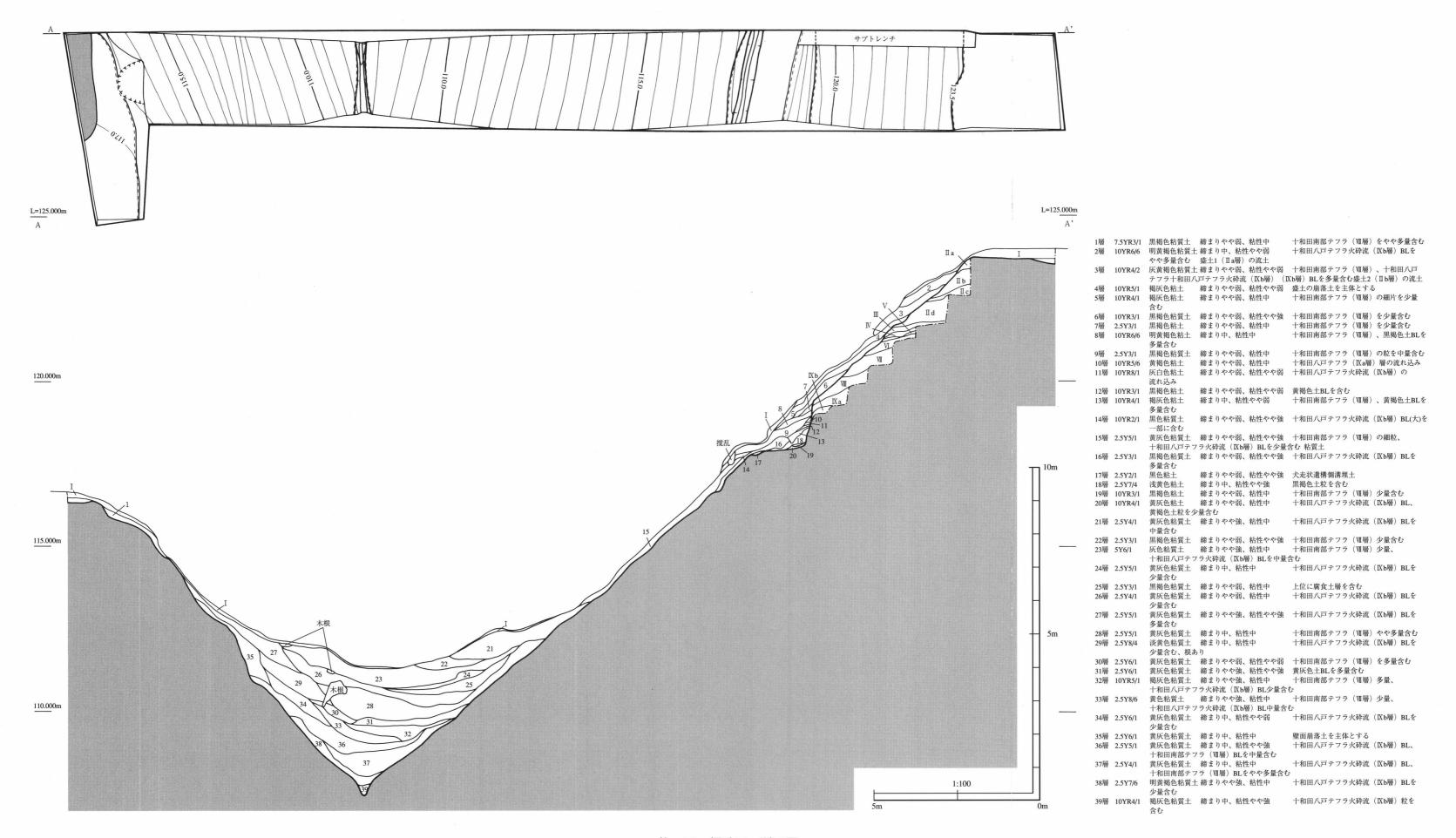
<堀跡>両曲輪をのせた尾根を真横に分断する形で、堀底は曲輪1を巻くように湾曲しながら両脇の腰曲輪へと続いている。規模は実効堀幅27.55m、垂直塁壁高16.23 mと非常に巨大で、現状においても埋没しきらずに残されていた。断面形は薬研状を呈し、曲輪1側に41°、曲輪2側に48°で立ち上がる。堆積土は地山ブロックが主体となっており、壁面の崩落土が大半を占める。曲輪2側の斜面中段付近には犬走り状の遺構が確認された。また普請の際に生じた大量の土は曲輪2の盛土や曲輪1両脇の腰曲輪へ利用されたものと考えられる。遺物は底部埋土中位から下位にかけて寛永銭が3点、下位から凹石、台石が1点ずつ出土している。

<大走り状遺構>堀跡の曲輪2側の斜面で確認した。幅は1.7 mで堀底側に幅0.32 mの小溝を有している。全体を調査していないので定かでないが、遺構上にそのまま現在の林道が設けられており、当遺構も同様に曲輪2の東側から曲輪1の西側へ、また堀底から曲輪1の両腰曲輪への動線を確保していたものと考えられる。

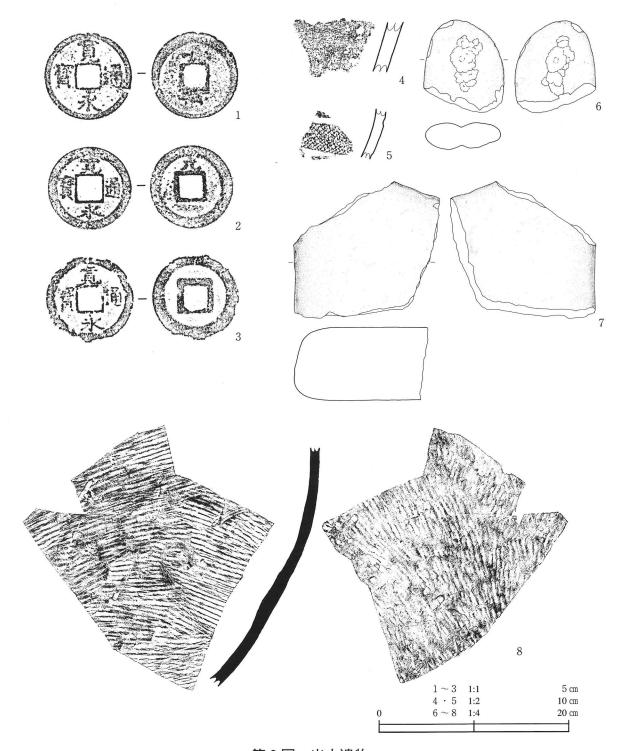
(2) 出土遺物

今回出土した遺物は縄文土器片2点、須恵器片1点、台石1点、凹石1点、寛永通寳3点と非常に 少数であり、またいずれも館の存続期に伴うものではなかった。以下に詳細を列記する。

<縄文土器>2号竪穴状遺構付近において表土中より2点出土した。いずれも小破片で、6は晩期中葉(大洞 C₂式期)の鉢の体部とみられ磨消縄文が観察される。7は無文鉢の胴部破片であるが時期は不明である。



第7図 掘跡平・断面図



第8図 出土遺物

< 須恵器>3号竪穴状遺構付近において表土下より1点出土した。甕の胴部破片で外面に平行叩き具痕、内面には平行当て具痕が見られる。

<凹石>堀跡底部埋土下位より1点出土した。安山岩製で両面に使用痕が観察される。

<合石>堀跡底部埋土下位より1点出土した。花崗閃緑岩製で断面形状は扁平である。明瞭な使用痕は観察されなかった。

<寛永通寳>堀跡埋土中位から下位にかけて3点出土した。いずれもいわゆる新寛永(ハ貝寳)で元禄10 (1697) 年以降の鋳造とされる。背文は「長」、「元」と無背銭が各1点である。

5. 釜沢(樺沢)館について

<縄張り>釜沢(樺沢)館は複郭式の山城であり、西の釜沢館(本館)、東の常楽寺館(古館)からなる。 釜沢館(本館)はいわゆる主郭と考えられ、南北160m、東西70mにおよび、東西を自然の沢を利用 して画されている。また館跡の東や西側には腰曲輪が存在するが、東側は現在墓地となっており一部 地形が改変されている。館跡北側は急な段差となって低地と区画されており、この部分にも何らかの 普請の痕跡が予想される。館の南端は明瞭な区画施設が確認されておらず、丘陵へとつづいている。 しかし、現在の林道が設置されている付近に、かすかにではあるが溝状に窪んでいる地形がうかがえ、 あるいはこれが区画施設かもしれない。

東に隣接する常楽寺館(古館)は、釜沢館(本館)と同等の規模で、本館側に腰曲輪を有するとみられる。古記録や伝承では館主小笠原氏の菩提寺である常楽寺が築かれていたとされる。

<城主・館の沿革>次に、館の城主について触れたい。ここでは主に『二戸郡・九戸郡古城館址考』(築部 1971)を参考にした。

初代城主は小笠原伊勢守信浄といい、もとは信濃の深志城城主小笠原信濃守長時の末弟であったとされる。天文14(1548)年、甲斐の武田信玄に攻略された塩尻峠の合戦の末、伊勢守は敗走し、奥州南部にあった小笠原家の領地であった明野(現在の釜沢)に落ち着き、明野与四郎と名乗ることになったという。その後与四郎は明野の地に常楽寺館を築き、一戸城城主、南部大和守宗綱の娘を内室として迎えるなど、周辺地域との関係を強化している。天文22(1553)年、南部大和守が津軽大浦為則に召抱えられた際、与四郎もこれに従った。弘仁2(1556)年には旧姓小笠原に復し、小笠原伊勢守信浄を名乗り家老となったが、その後詳細は不明であるが3000石を没収され、天正15(1587)年には南部の樺沢(釜沢)に立ち返ったという。天正19(1591)年、いわゆる「九戸の乱」では2代目城主となった小笠原伊勢守重清は九戸政実と親戚関係にあった。九戸城落城後、南部信直によって600人余の兵をさしむけられ落城し、重清は自決したとされる。

このように、文献記録によると釜沢館は戦国時代末期に存続した館跡であり、いわゆる「九戸の乱」 に関係していたことがわかる。城主については、地元では上記とは異なる伝承もありいまだ確定され たわけではないが、由来不明の館跡が多いなかにあっては重要な情報であろう。

6. まとめ

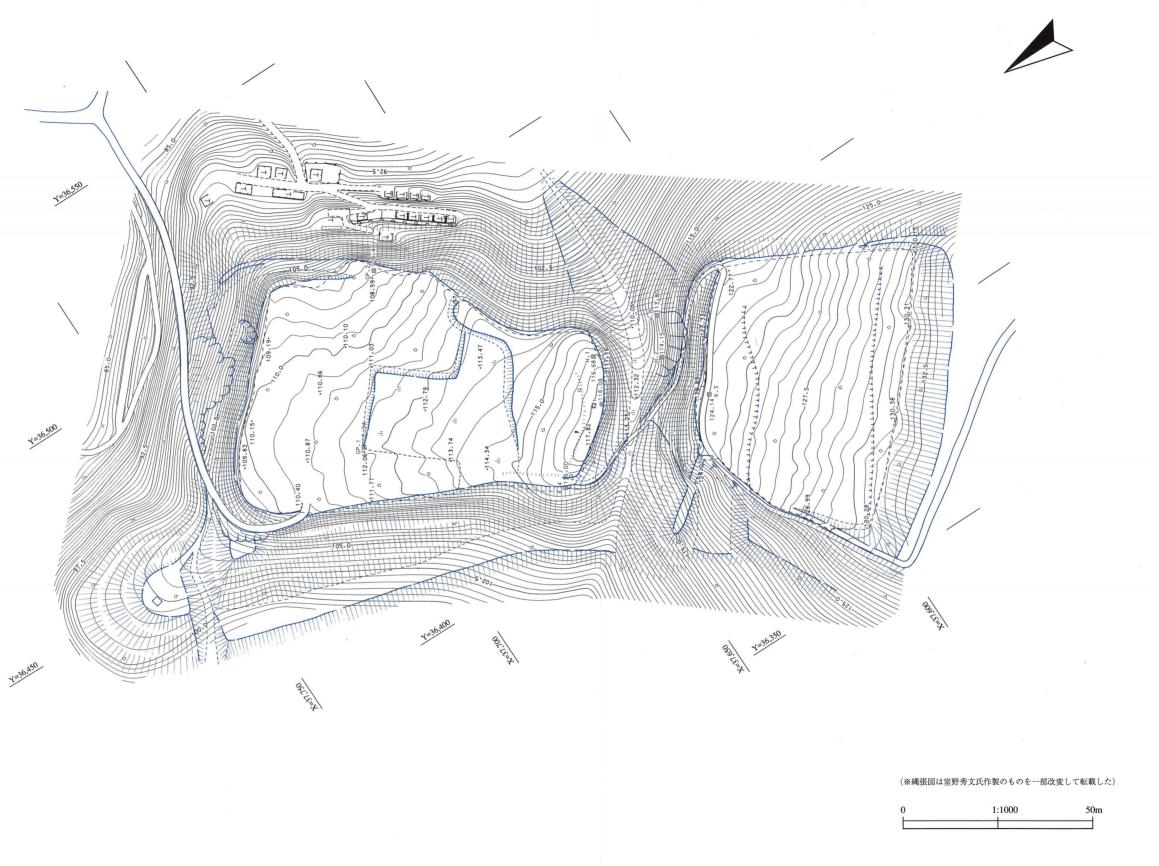
今回の調査成果について、再度触れつつまとめとしたい。

館跡からは地表面の観察どおり、堀をはさんで両側に曲輪が2箇所確認された。北側の曲輪1において前述の通り竪穴状遺構が検出されるなど建物跡が存在することが確認された。また整地の痕跡も明らかになった。しかし、主体と考えられる中央部は調査範囲外であり、曲輪の全体像には迫ることができなかった。また確認調査であったことも相俟って当時の遺物と断言できるものは皆無であった。

曲輪1は現在、果樹栽培に利用されているが、その開墾の際に刀剣が出土したといい、未掘範囲に は館の存続期の遺物・遺構が埋蔵されているものと想定される。

曲輪2においては大規模な盛土遺構が確認された。最大高が約2mにも及ぶもので、堀の掘削とともに大規模な普請が行われたことがわかる。この盛土は堀の一部でもあり、整地層でもある。盛土の範囲がどの程度まで及んでいるかは確認できなかった。なお、曲輪2では調査区が周縁部でもあり、建物跡は確認できない。遺物については館跡にともなうものは出土しなかった。

今回は部分的な調査であり、かつ確認調査がその主体であったため得られる情報も限られていた。 そのなかで特筆すべき成果として堀跡の構造と規模がおおよそ判明したことがあげられる。堀跡の上幅が約27 m、深さが最大で16 mという規模は山城においては県内では類をみないものである。この



第9図 現況地形図および縄張図

ような大規模な堀が普請されていることから、釜沢館跡は周辺地域においては最重要の館であったと思われる。このような規模の必要性を考えると、非常に興味深いものがある。当時の絵図によると館跡の直下には街道が通っている。これは難所である蓑笠峠をへて三戸へと通じる主要な交通路であり、この地区は交通の要衝であったと考えられる。また、この地は文献などから三戸南部氏と九戸南部氏の勢力範囲の境界にあたるなど、政治的にも重要な地域であったことが予想される。そのように考えるとこの館跡の巨大な堀の必要性が理解できるかもしれない。堀跡の普請された時期については今回確認できなかったため上記の点は推定の域をでないが、今後の調査には期待がもたれる。

釜沢館と沢をはさんで東側にある古館(常楽寺館)との関係についても調査が及んでいないこともあり情報も少なく不明といわざるをえない。いずれ相互関連的な館であると考えられるため今後合わせて検討していく必要がある。このように釜沢館跡の調査は端緒についたばかりであり、今後の調査や研究に期待することが大きい。

なお、釜沢館跡に関する報告は、これをもって全てとする。

引用・参考文献

岩手県教育委員会 1986 『岩手県中世城館跡分布調査報告書』 岩手県文化財調査報告書第82集

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004 「(28) 釜沢館跡」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(平成 15 年度)』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第 445 集

千田 嘉博ほか 1993 『城館調査ハンドブック』 新人物往来社

鳥羽 正雄 1971 『日本城郭辞典』 東京堂出版

南部町教育委員会 1994 『聖寿寺館跡』 南部町埋蔵文化財調査報告書第1集

永井 久美男 1996 『日本出土銭総覧』 兵庫埋蔵銭調査会

沼館 愛三 1978 『南部諸城の研究(草稿)』 みちのく双書第33集 青森県文化財保護協会

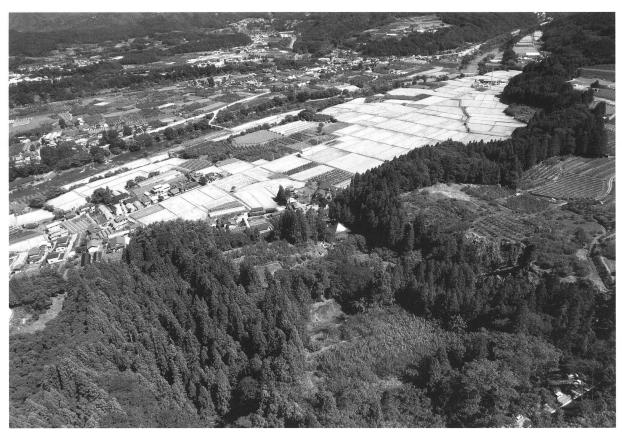
盛岡市教育委員会 1998 『聖寿禅寺―南部重直墓所―発掘調査報告書』

築部 善次郎 1971 『二戸郡·九戸郡古城館址考』 東北民俗研究会

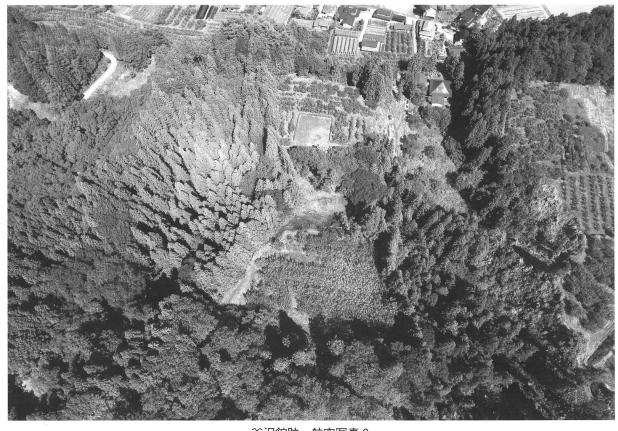
報告書抄録

			• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •					
ふりがな	へいせいじゅう	うななねんどは	っくつちょう	さほうこく	しょ			
書名	平成 17 年度発	掘調査報告書						
副書名								
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興	專業団埋蔵文	化財調查報告	書				
	第 490 集							
編著者名	横井 猛志(約							
編集機関	(財) 岩手県文		里蔵文化財セン					
所在地	$\mp 020 - 0853$		了下飯岡 11 地書	月185 番地		TEL (0	<u> 19) 638 — 9</u>	9001
発行年月日	2006年3月27	<u> </u>						
ふりがな	ふりがな	コー	- ド	北緯	東経	調査期間	調查面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	0 / //	0 / "	神往州间	神油油質	神重原囚
かまさわたてあと	ニ戸市釜沢			40 度	141 度	2005.09.01		畑地帯総合整備事
かまさわたてあと 釜沢館跡	まざてらだてちない 字寺館地内	03213	IE79-1107	20 分 19 秒	15 分 44 秒	~	1,000 m ²	業に伴う緊急発掘 調査
	1 /1 \(\text{VD} \)			19 19	44 19	2005.10.17		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺	構		主な遺物		特記事項
			曲輪2、堀跡	1条				
			犬走り状遺構	1条				
釜沢館跡	城館跡	中世	竪穴状遺構 3	基				
			虎口状遺構1					
			土坑1基、溝	2条				
	釜沢館は戦闘	国期の山城で、	東西の2郭か	らなってレ	いる。今回]の調査は西側の2	本館 (主郭)	跡において行われ、
)結果、堀幅約 28m、
要約	深さ約 16m と	非常に巨大な薬	薬研堀であるこ	と、堀底	へ下る犬	走りを併設してい	る事がわか	った。その他の遺構
	に関しては確認	忍調査の為、詳	しくは知りえる	よかった。	遺物は縄	文土器、須恵器、	礫石器、貨幣	が出土しているが、
	館の存続期に作							· ·

※緯度・経度は世界測地系における数値である。



釜沢館跡 航空写真 1



釜沢館跡 航空写真 2

写真図版 1 釜沢館跡 航空写真

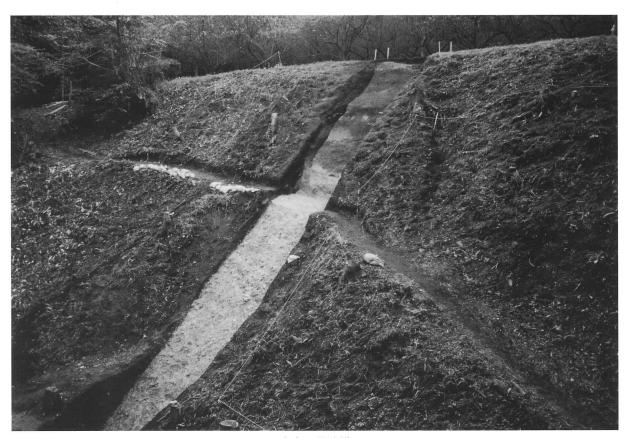


堀跡調査前状況1

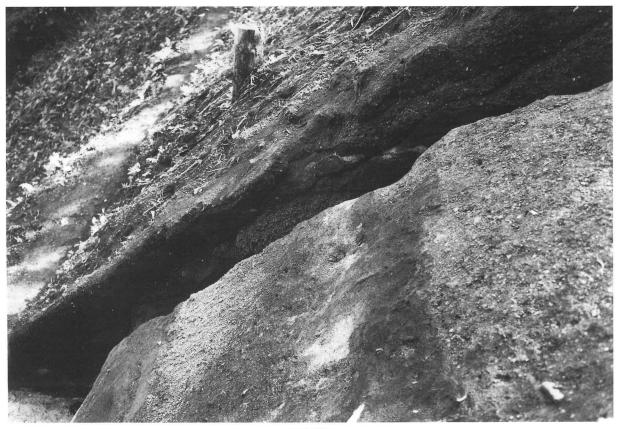


堀跡調査前状況2

写真図版 2 釜沢館跡 調査前状況



犬走り状遺構



堀跡断面

写真図版 3 釜沢館跡 検出遺構 (1)



堀跡 (底面付近)



堀跡断面

写真図版 4 釜沢館跡 検出遺構(2)

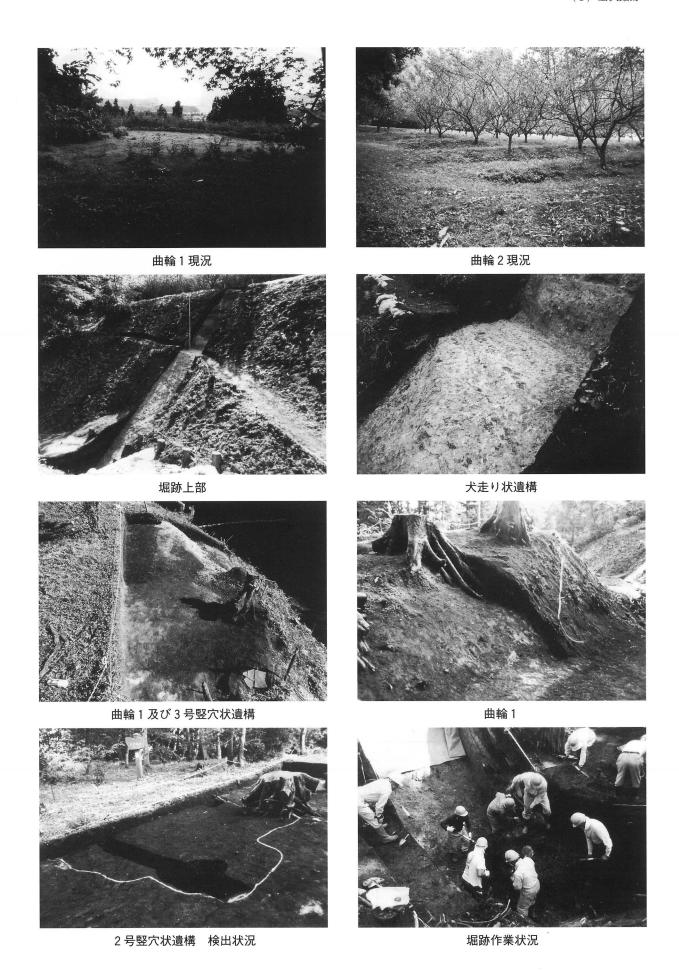


曲輪1近景(南から)

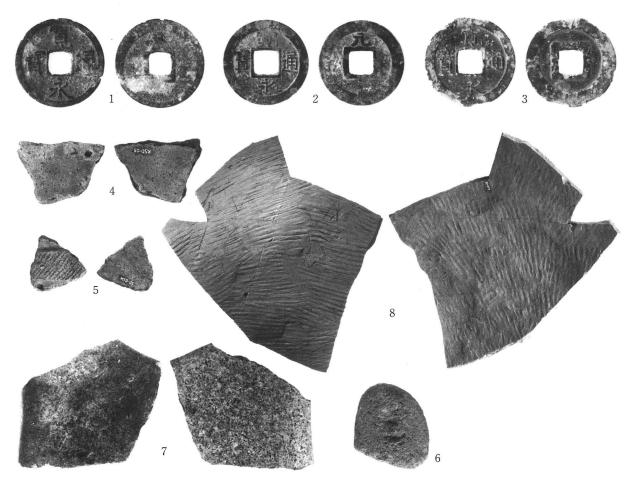


曲輪1近景(西から)

写真図版5 釜沢館跡 検出遺構(3)



写真図版6 釜沢館跡 検出遺構(4)



写真図版7 釜沢館跡 出土遺物

銭貨観察表

亚 貝田	元宗公										
図版 番号	種別	銭文		出土位置	層位		計》	則値	,	鋳造年(西暦)	備考
番号	(生力)	面	背	山上心里	/智104.	外径 (mm)	穿径(㎜)	銭厚 (mm)	重量 (g)		佣号
1	古銭	寛永通寳	「長」	トレンチ1 (堀跡)	中~下層	23	6	1	1.89	1697 ~ 1747 年、 1767 ~ 1781 年	
2	古銭	寛永通寳	「元」	トレンチ1 (堀跡)	中~下層	23	6	1	1.90	1697 ~ 1747 年、 1767 ~ 1781 年	
3	古銭	寛永通寳	無背	トレンチ1 (堀跡)	中~下層	22	6	1	1.80	1697 ~ 1747 年、 1767 ~ 1781 年	

土器観察表

図版 番号	種別	器種	出土位置	層位	特徴	時期	備考
4	縄文土器	鉢	曲輪1	Ι		不明	海綿状骨針混入
5	縄文土器	鉢	曲輪1	I	磨消縄文 原体:LR	大洞C2式期	海綿状骨針混入
8	須恵器	甕	曲輪1	Ι	外面:平行タタキ目 内面:平行当て具痕	不明	

石器観察表

図版 番号	版 種別 器種 出土位置		層位		計測値			丁	进业	
番号	但力リ		山工河區	僧心	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石質	備考
6	礫石器	凹石	トレンチ1(堀跡)	下層	(14.5)	(15.4)	7.2	312.49	安山岩 (新生代新第三紀)	
7	礫石器	台石	トレンチ1 (堀跡)	下層	(9.8)	8.5	2.9	2942.45	花崗閃緑岩(中生代白亜紀)	

(2) 川口 I 遺跡 第1次調査

所 在 地 二戸市金田一字川口 20番・21番

委 託 者 二戸地方振興局土木部

事 業 名 一般県道上斗米金田一線豊年橋地区道路整備事業

発掘調査期間 平成 17 年 9 月 1 日 ~ 10 月 27 日

遺跡番号·略号 IE 79 - 1188 · KGI - 05

調査対象面積 1.000 m²

発掘調査面積 1,156 m²

調查担当者 千葉正彦・丸山直美

1. 調査に至る経過

川口 I 遺跡は、「緊急地方道整備事業豊年橋工区」の道路改良工事に伴い、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することとなったものである。

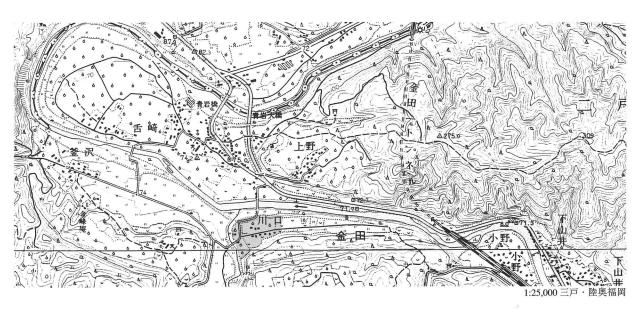
一般県道上斗米金田一線は二戸市北西部に位置し、主要地方道二戸田子線と一般国道4号とを連絡する道路であり、その機能は当該道路沿線の地域交通を広域的幹線道路である一般国道4号へと誘導する補助幹線道路である。事業対象地域である「豊年橋工区」においては、通学路としての指定や道路ネットワーク状況により生活基盤としての性格が強く、年間を通じて走行性や安全性および信頼性の確保のため平成12年度「地方特定道路整備事業」により事業着手したものであるが、平成17年度に新たに「緊急地方道路整備事業」の採択となり早期完成を目指すものである。

当事業の施工にかかわる埋蔵文化財の取り扱いについては、二戸地方振興局土木部から平成 16 年 12 月 1 日付二地土第 459 号「豊年橋地区道路整備にかかる埋蔵文化財の試掘調査(依頼)」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

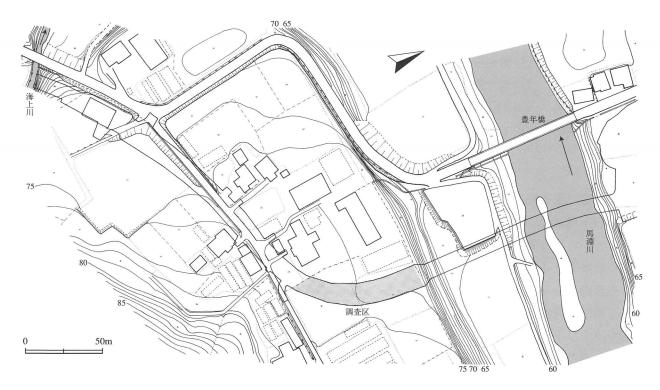
依頼を受けた岩手県教育委員会は平成16年12月2日に試掘調査を実施し、工事に着手するには川口I遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成16年12月3日付教生第1225号「一般県道上斗米金田一線豊年橋地区道路整備予定箇所における埋蔵文化財の試掘調査について(回答)」により当土木部へ回答してきた。

その結果を踏まえて当土木部は教育委員会と協議し、平成17年度に財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結して発掘調査を実施することとなった。

(二戸地方振興局土木部)



第1図 遺跡の位置



第2図 調査区と周辺の地形

2. 遺跡の位置と立地

川口 I 遺跡は岩手県北部の二戸市金田一に所在しており、 J R 東北新幹線二戸駅から北東へ約8.8 km、青森県境に近い北緯40度20分16秒、東経141度16分38秒付近に位置している(世界測地系)。遺跡は市域を縦断して北流する馬淵川とその支流・海上川との合流点に近い、馬淵川左岸段丘上に載っている。馬淵川は二戸市付近でその両岸に、明瞭な崖線をもつ狭い段丘面を複数形成している。それらの段丘面は大池昭二氏、中川久夫氏らの研究により、低位から順に仁左平・福岡・米沢・堀野・中曽根の各面に分類されている。さらに、松山力氏の分類によれば米沢段丘はさらに細分され、高位面は中町段丘、低位面は堀野段丘の一部に含められている(岩手埋文1983、1990a・bなど)。川口 I 遺跡の載っている面は標高72~76 m、馬淵川との比高16~18 mであり、南部浮石以上の十和田系火山灰を載せている。このことから当遺跡の所在する段丘は松山分類の「堀野段丘」(または「中町段丘」)に対比される沖積段丘であると思われる。

今回の調査は遺跡東部にあたり、緩やかに西に屈曲する概ね 10 m× 100 mほどの範囲である。調査地の現況は南北 2 面の畑地であるが、北側の畑地は数年前までは林檎畑だったものを抜根して造り替えたものである。そのため、北半部では抜根によって著しい撹乱を受けており、IV層より上位が撹拌された状態であった。なお、その抜根の際に多量の縄文土器が出土したという。後述のRA 01 付近のことではないかと推測される。以下、便宜的に北半部の畑地を「北区」、南半部のそれを「南区」と呼称する。

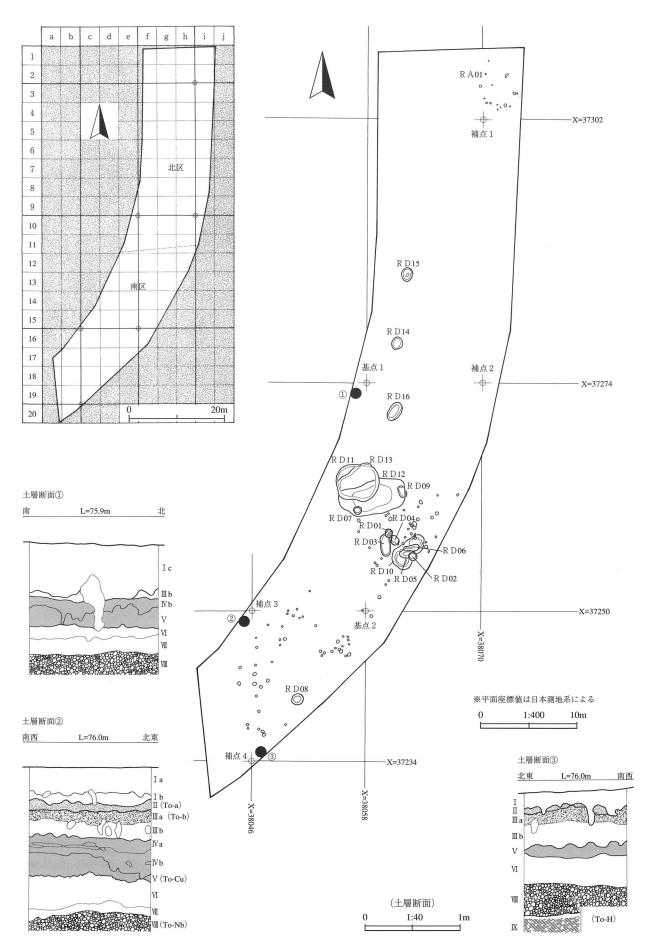
3. 基本層序

調査区の堆積土層は概ね次のとおりである(第2図)。

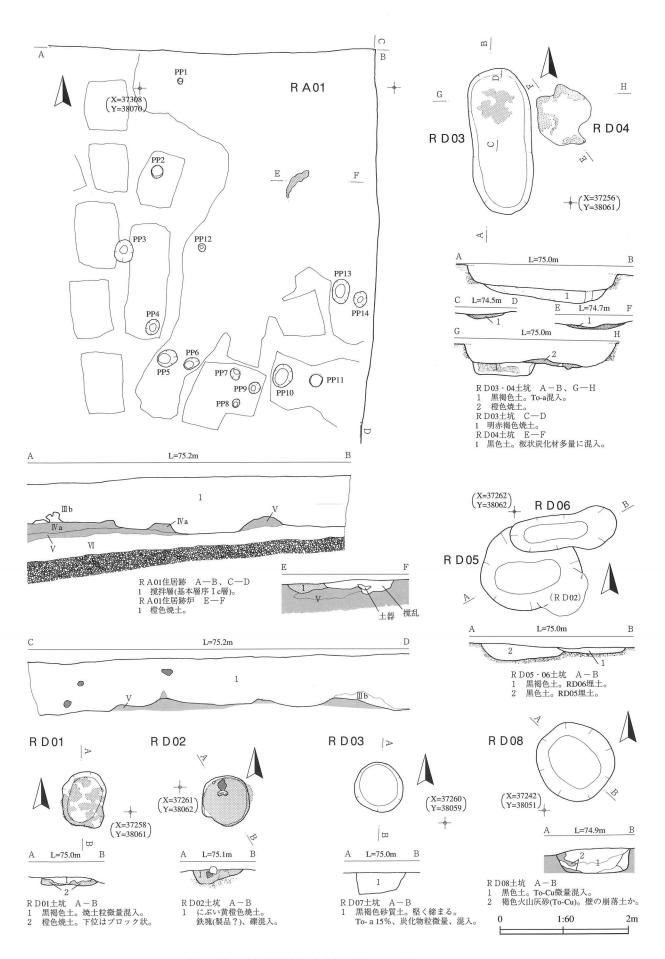
I 層 I a 層 10 Y R 4/2 灰黄褐色~7.5 Y R 3/3 暗褐色。シルト。表土、耕作土。

Ib層 7.5 YR 3/1 黒褐色。シルト。遺物を含む。

Ⅰ c 層 人為的な撹拌土。 Ⅱ~Ⅳ層が混合。北区のみで見られる。遺物を含む。



第3図 川口I遺跡遺構配置図·土層断面図



第4図 検出遺構(1) RA01、RD01~08

- Ⅱ層 2.5 Y 8/3 淡黄色~ 8/2 灰白色。十和田 a 降下火山灰 (To-a)。遺構検出面。
- Ⅲ a 層 十和田 b 降下火山灰 (To-b)。粒径 5 ~ 20 mの発泡良いスコリア。Ⅲ b 層 10 Y R 2/1 黒色~7.5 Y R 3/1 黒褐色。クロボク。遺物を含む。
- IV a 層 10 Y R 3/3 暗褐色。シルト。土壌化した中掫火山灰。To-Cu 細粒(径 1 mm程度)5%、同中粒(径 5~10 mm) 1%混入。上位に板状に固結した砂塊を含む。遺構検出面。
 IV b 層 10 Y R 7/4 にぶい黄褐色。シルト質砂土。To-Cu 粒(径 2~3 mm) 3%混入。
- V層 2.5 Y 8/2 灰白色~ 8/3 淡黄色。火山灰砂。中掫火山灰(To-Cu)純層。粒径 3 ~ 5 mm。調査区西側の W層以下の落込み部分〔縄文前期以前の河川跡〕に最大 50 cmと厚く堆積している。
- VI 層 VII a 層 7.5 Y R 2/1 黒色。シルト質粘土。南部浮石粒(径 3 ~ 10 mm)3%混入。遺物を含む。 VII b 層 7.5 Y R 2/2 黒褐色。シルト質粘土。南部浮石 5%混入。
- Ⅷ層 10 Y R 7/8 黄橙色。南部浮石 (To-Nb)。粒径 5 ~ 50 mmほどの発泡良いスコリア。
- WI層 2.5 Y R 3/1 暗赤褐色~ 2.5 Y 3/3 暗オリーブ褐色。粘土。漸移層。
- 以層 7.5 Y R 5/8 明褐色。シルト質粘土。八戸火山灰(To- H)。細粒。

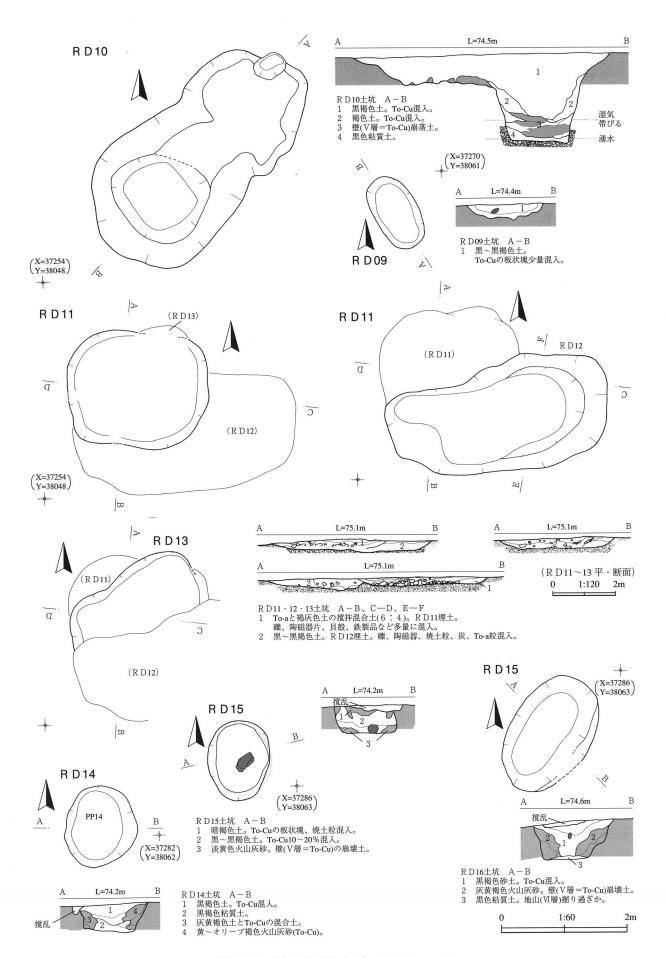
4. 調査の概要

(1)遺構

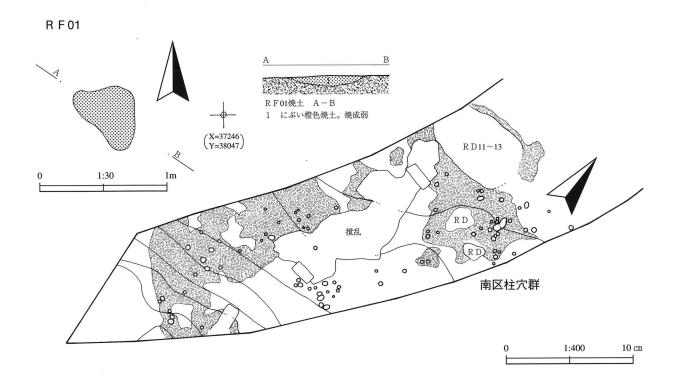
<竪穴住居跡>(第3図) 北区の北東隅の1iグリッドにおいて重機でIc層を除去した際、Ic層直下のVa層面で焼土を検出した。次いで、焼土周辺で弧状に配列する柱穴14個を検出した。またこの焼土周辺グリッドは北区の他グリッドに比して、攪乱層からではあるが遺物出土が顕著であった。以上から当該焼土を炉跡と判断し、竪穴住居跡と認定した。当該グリッド付近は果樹の抜根による著しい撹乱を被っており、壁・床面ともに確認できなかった。炉跡と思われる焼土も撹乱を受けて

,	K A	\U I 1±	:八	計測了	₹							*
,	柱穴	規模	深さ	底面	柱穴	規模	深さ	底面	柱穴	規模	深さ	底面
1	番号	(cm)	(cm)	レベル	番号	(cm)	(cm)	レベル	番号	(cm)	(cm)	レベル
4	1	9×10	22	73.88	6	17×24	32	73.77	11	20×22	43	73.81
	2	18 × 22	14	73.81	7	16 × 23	38	73.77	1 2	13×14	13	73.77
)	3	28×36	85	73.17	8	13 × 15	8	74.17	1 3	27×38	18	74.01
₹	4	20 × 26	28	73.79	9	18 × 20	5	74.25	1 4	17 × 25	4	74.25
-	5	27 × 33	46	73.62	1.0	30×38	39	73.86				

出土しているのみで、本遺構に確実に伴う遺物はほとんど無いに等しいが、住居範囲と推測される撹乱部分出土の縄文土器片(5・12・15・21~24・26)は本住居跡に伴っていた可能性が高い。所属時期の詳細は不明であるが、検出面および周辺の出土遺物から判断すると縄文時代後期前葉と思われる。<土坑>(第 3 ・ 4 図) 16 基検出した(R D 01~16)。 II 層上面検出:9 基(R D 01~07、R D 10~13)。十和田 a 火山灰よりも新しく、概ね 10 世紀前半以降の土坑である。R D 01・03・04 は II 層面で検出されたが、当初はこれら密集する土坑プランを竪穴住居跡のそれと誤認して精査を行った経緯がある。そのため、R D 03・04 については壁の大部分を掘削してしまい、複数の土坑と認識した時点で確認できたのは底面付近のみであった(写真図版 1)。R D 01~04 は土師器片が出土しており、平安時代に属すると思われる。これら 4 基の埋土には多量の焼土粒・炭化物が含まれている。R D 11~13 は、埋土から肥前 IV~V 期(1690~1860 年代)の陶磁器や寛永通寶の銅一文銭「新寛永」(初鋳 1697 年)が出土していることから、本土坑の所属時期は 18 世紀を上限とし、概ね 19 世紀に属するものと考えられる。R D 05・06 は遺物が出土せず、所属時期の詳細は不明確であるが、層位と重複関係(R D 05 は R D 02 に截られる)から古代の可能性がある。 IV a~IV b 層面検出:6 基(R D 8~10、14~16)。R D 10 は IV a 層面検出ではあるが、本来はより上位層から掘り込まれていた可能性が高い。平面形やや隅丸方形ぎみの土坑で、北側に浅い皿状の窪みが伴う。別遺構の重複の可



第5図 検出遺構(2) RD09~16



第6回 検出遺構(3) RF01、柱穴群

南区	II 層面柱7	悟 ゲ	測表											
柱穴 番号	規模(cm)	深さ (cm)	底面 レベル	出土遺物 等	柱穴 番号	規模(cm)	深さ (cm)	底面 レベル	出土遺物 等	柱穴 番号	規模(cm)	深さ (cm)	底面 レベル	出土遺物 等
1	36 × 28	21	75.338		3 1	35 × 35	39	74.618		6 1	32 × 29	32	74.632	
2	32 × 25	25	75.295		3 2	20 × 18	23	74.824		6 2	22×22	59	74.348	
3	24 × 22	43	75.062		3 3	21 × 20	31	74.672		6 3	24 × 24	42	74.501	
4	27 × 21	22	75.233		3 4	30 × 24	21	74.800		6 4	35×30	54	74.405	
5	36 × 23	27	75.182		3 5	33 × 24	29	74.724		6 5	32 × 27	52	74.432	
6	26 × 21	52	74.970		3 6	18 × 17	14	74.923		6 6	20×19	33	74.496	
7	27 × 23	22	75.144		3 7	29 × 24	21	74.702		6 7	49 × 27	45	74.460	
8	28 × 26	20	75.089		3 8	28 × 22	21	74.803		6 8	20×19	25	74.590	
9	34 × 31	23	74.982		3 9	28 × 23	25	74.766		6 9	36×30	49	74.435	
1 0	42 × 33	31	74.856		4 0	25 × 18	20	74.821		7 0	36 × 32	54	74.389	縄文土器
1 1	31 × 22	25	74.925		4 1	21 × 19	28	74.734		7 1	32 × 29	47	74.440	縄文土器
1 2	25 × 22	24	74.867		4 2	20 × 17	32	74.696		7 2	38 × 23	44	74.515	
1 3	31 × 27	24	74.902		4 3	25 × 24	47	74.564		. 7 3	30 × 30	41	74.558	
1 4	22 × 21	21	74.884		4 4	31 × 29	22	74.752		7 4	26 × 24	49	74.475	
1 5	33 × 25	17	75.000		4 5	26 × 25	40	74.641		7 5	30 × 25	42	74.556	
1 6	17 × 16	27	74.876		4 6	35 × 29	30	74.776		7 6	32 × 24	40	74.600	
1 7	19 × 17	22	74.889		4 7	26 × 26	28	74.785		7 7	29 × 23	57	74.396	
1 8	46 × 28	50	74.552		4 8	21 × 19	16	74.886		7 8	$(40) \times (27)$	52	74.316	
1 9	26 × 21	60	74.485		4 9	25 × 28	34	74.722		7 9	$(38) \times (26)$	61	74.332	
2 0	22 × 20	27	74.756		5 0	33 × 21	47	74.548		8 0	(24) × (18)	56	74.385	重複
2 1	19 × 16	20	74.838		5 1	28 × 23	44	74.550		8 1	$(34) \times (27)$	66	74.277	縄文土器
2 2	33 × 29	17	74.872		5 2	22 × 20	13	74.859		8 2	(35) × (21)	72	74.234	
2 3	22 × 22	26	74.798		5 3	25 × 24	44	74.515		8 3	(21) × (15)	57	74.384	
2 4	40 × 34	29	74.778		5 4	33 × 24	53	74.402						
2 5	27 × 23	17	74.914		5 5	27 × 24	40	74.535						
2 6	22 × 18	20	74.878		5 6	27 × 21	34	74.586						
2 7	39 × 29	35	74.736	*	5 7	23 × 20	16	74.745						
2 8	43 × 36	33	74.745		5 8	53 × 30	34	74.555	縄文土器					
2 9	34 × 24	30	74.782		5 9	28 × 26	54	74.369						
3 0	52 × 38	32	74.748		6 0	28 × 27	70	74.298						

1 1	計測	_
ΤТЛ.	= + \H	7

工儿	司坝	14							
遺構名	検出面	平面形。	規模 (cm)	断面形	深さ (cm)	重複関係 等	出土遺物	備考	時期
R D 01	Ⅱ層	楕円	77 × 68	方形	14		土師器	覆土に焼土多量混入。	平安
R D 02	Ⅱ層	略円	83 × 75	不整	23	RD 05・10 を截る	不明鉄製品	覆土に焼土多量混入。	古代?
R D 03	Ⅱ層	長楕円	235 × 95	皿状	(19)		土師器	底面の一部が焼土化。	平安
R D 04	II層	楕円?	95 × 85	皿状?	(5)	R D 03 を截る	土師器	底面付近のみ。底面に焼土、板状 炭化材。	平安
R D 05	Ⅱ層	楕円	162×138	皿状	27	RD 10 を截る	縄文土器		古代?
R D 06	Ⅱ層	溝状?	168 × 54	U字?	9	RD 05・10 を截る	なし		古代?
R D 07	Ⅱ層	円	81 × 78	方形	33	R D 12 を截る	なし		近世~?
R D 08	IV a 層	楕円	117 × 115	逆台形	38		なし		縄文
R D 09	IV a 層	長楕円	120 × 68	浅皿状	20	RD 11・12 の下層	なし		縄文
R D 10	IV a 層	楕円、 長楕円	408 × 225	逆台形、 皿状	144	RD 02·05·06 に截られる? 明確に確認できなかった	なし	底面は南部浮石層。検出面より 上位層から掘り込まれていた? 井戸跡か。 埋土は人為的埋め戻し。	古代~?
R D 11	II層	楕円	448 × 362	浅皿状	22	RD 12・13 を截る	陶磁器(肥前、瀬戸・美濃)、磨石、 石臼、寛永通寶、柄鏡、煙管、釘等	埋土は人為的埋め戻し。 近世のゴミ廃棄穴?	近世
R D 12	Ⅱ層	長楕円	696 × 370	皿状	36	RD 13 を截る	陶磁器	埋土は人為的埋め戻し。	近世
R D 13	Ⅱ層	隅丸方形	454 × (210)	皿状?	(26)	R D 11 の下位	なし	埋土は人為的埋め戻し。RD11 埋土との区別は明確ではない。	近世
R D 14	IV a 層	楕円	134 × 114	逆台形	43		なし	袋状土坑の壁が崩落したもの。	縄文
R D 15		楕円	127 × 98		45		底面に亜角礫	袋状土坑の壁が崩落したもの。 フラスコから墓壙に転用?	縄文
R D 16	IV a 層	楕円	202×130	逆台形	57		なし	やや小判形。墓壙?	縄文

能性もあるが明瞭ではない。底面付近では南部浮石が露出し、湧水する。Ⅲ層面以上ではプラン確認できなかったものの、形態から井戸状遺構の可能性がある。その他の5基は遺物を伴わないが、検出層位から縄文時代に属するものと思われる。

<焼土遺構>(第5図) 16 c グリッドⅡ層面で検出した。焼成弱く、痕跡程度の焼土である。層位から10世紀前半以降のものと思われるが、具体の時期やその性格については不明である。

<柱穴状小土坑>(第5図) 南区のⅡ層~Ⅲ a 層面において、83 個検出した。平面形は円形~楕円形を基調とし、径 17 ~ 42 cm、深さ 14 ~ 57 cmである。埋土は I b 層系の黒褐色土で、流れ込みと思われる縄文土器片を僅かに含む。数個が直線的に並び掘立柱建物を構成するように見えるが、建物としての柱配置を把握するに至らなかった。検出層位や埋土の様相から見て中世~近世に属するもので、近世の可能性が高いと思われる。

(2)遺物

総量大コンテナ4箱分の遺物が出土した。種別は土器(縄文土器・土師器・須恵器)、陶磁器、石器類、土製品、石製品、金属製品である。土器(2箱弱:14.2 kg出土)、特にも縄文土器が主体である。なお掲載にあたっては、実測個体(土師器・陶磁器の一部)を除いて、断面図を付加した写真掲載としている。また、写真掲載した資料の多くはベタ置きでの撮影であり、断面図の表現と必ずしも一致していない。

<縄文土器>(第8・9図) 遺構に伴って出土したものは僅かであり、大部分が北区(特にその北半部)の I c 層 = 撹拌層から出土している。撹拌されたためか、接合状況は悪い。文様や特徴ある破片を中心として 29 点掲載した。破片資料ばかりで、器形や文様構成が不明なものばかりであり、所属時期の同定は難しいが、主体を占める土器は後期のものと思われる。早期~前期:掲載した 3 点が出土した($1 \sim 3$)。 1 は北区 11 e グリッドの試掘において I c 層から出土した尖底土器底部である。早期後葉~末葉にあたる資料と思われるが、攪乱出土であり層位的な裏づけはない。 $2 \cdot 3$ はI 層上位で出土。 2 はムシリ 1 式に比定される。 3 は前期初頭か。中期:4。口縁部に沈線の渦巻文が施されている。中期後半の榎林式か。後期: $5 \sim 19 \cdot 21 \sim 29$ 。確実ではないが、後期初頭~前葉に属するものが多い。 $11 \sim 15$ は韮窪式、 $9 \cdot 16 \cdot 21 \cdot 22 \cdot 24$ は十腰内 I 式。 $17 \cdot 27$ は中葉の十腰内 I 式。晚期:20。不確実ではあるが、口縁部の様相から晩期と考えた。

<土師器・須恵器>(第9・10図) RD 01・03・04 埋土および遺構外から出土している。器種はロクロ使用の土師器坏(30・34・35)および甕(31~33)、須恵器甕(36・37)である。当地方における従来の土師器編年に照らせば、出土土師器は概ね9世紀後半代期に属するものと思われる。

<陶磁器>(第 $10 \sim 12$ 図) R D $11 \cdot 12$ 埋土から纏まって出土している。実測可能個体を中心に 23 点掲載した。陶器($38 \sim 43$ 、 $57 \sim 59$)と磁器($44 \sim 56$ 、60)があり、いずれも肥前産のものが 主体である。鉢、浅鉢?、碗、皿、徳利、香炉、紅皿、水滴がある。38 は在地窯産陶器であるが、具体の生産地は不明である。 $39 \sim 41 \cdot 53 \sim 56$ は肥前産陶器、 $44 \sim 51 \cdot 60$ は肥前産磁器、 $42 \cdot 43$ は瀬戸・美濃産陶器、 $52 \cdot 57$ は相馬産磁器である。 $38 \sim 42$ は遺構内出土の陶器である。38 は黄瀬戸の折縁鉢に酷似しているが、胎土の様相が異なっており、黄瀬戸鉢の模倣品である。在地のいずれかの窯産と思われる。 $41 \cdot 42$ は鉄釉の腰錆碗。 $43 \sim 56$ は遺構内出土磁器。 $49 \cdot 50 \cdot 52$ の皿は蛇目に釉剥ぎされている。54 の青磁香炉は内面無釉であるが、見込みに蛇の目様に白色の釉が掛かる。56 は肥前 V 期の水滴である。 $57 \sim 59$ は遺構外出土の陶器で、59 は刷毛目鉢。60 は遺構外出土の磁器で、蛇目釉剥ぎの皿である。これら出土陶磁器の主体をなす肥前産陶磁器については、大橋康二氏の陶磁器編年における「N 期」(1690 年代 1780 年代)・「V 期」(1780 年代 1860 年代)に該当するものである(九州近世陶磁学会 2000)。遺構一括での出土状況から見て、出土陶磁器の所属時期は概ね $18 \sim 19$ 世紀代であると思われる。

<石器類>(第 $13 \sim 15$ 図) 13 点を掲載した。石匙 1 点、磨製石斧 1 点、敲磨器類 17 点、台石 4 点、剥片 14 点、石臼 4 点が出土した。石臼・台石は R D $11 \cdot 12$ 埋土から一括出土している。石臼は近世、陶磁器との共伴関係から $18 \sim 19$ 世紀代。台石は時期不明だが、縄文時代の可能性もある。それ以外は縄文時代に属するものである。

<土製品>(第15図) 縄文時代の円盤状土製品1点(74)。時期の詳細は不明である。

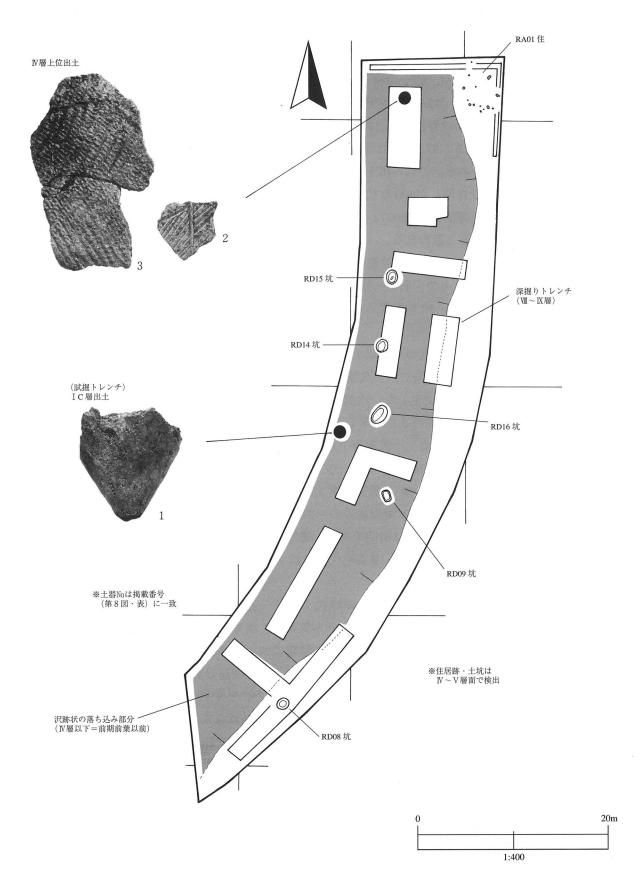
<石製品>(第15図) 石剣1点(75)。欠損しており詳細は不明である。縄文時代と思われる。

<金属製品>(第 15 図)31 点出土した。内訳は、R D 02:器種不明 1 点、R D 11:寛永通寶 5 点・柄鏡 1 点・釘 4 点・鎌? 1 点・鉄滓 3 点、R D 12:寛永通寶 4 点・煙管 1 点・釘 6 点・器種不明 2 点・鉄滓 1 点、遺構外:寛永通寶 3 点・一銭銅貨 1 点・器種不明 1 点、である。うち、寛永通寶 5 点(76~80)、柄鏡(81)を掲載した。76~80 は銅一文銭 3 期、いわゆる「新寛永」(鋳造 1697~ 1781 年)に該当する(兵庫埋蔵銭調査会 1998)。背面に背文字や記号等がないため、鋳造銭座については不明である。柄鏡は R D 12 埋土の、礫・陶磁器片の一括廃棄ブロックから出土した。全面に砂粒や炭化財が融着しており、背面の文様装飾は不明である。遺構外出土の一銭銅貨は近代、その他は陶磁器との共伴関係等から類推して近世(18~19世紀代)に属する可能性が高い。

5. まとめ

調査の結果、川口 I 遺跡が縄文時代・平安時代・近世〜近代の複合遺跡であることが判明した。かつて北区から多量の縄文土器が出土したという事実から、調査開始当初は縄文時代の遺構・遺物が纏まって検出されるものと予想された。結果的には該期については住居跡 1 棟、土坑 5 基と縄文土器少量が確認できたに過ぎないが、調査地が縄文時代、おそらく後期の集落の一部を占めているだろうことが確認された。また、早期〜前期初頭の土器片が出土したことから、調査区の 15%程度にIX層(八戸火山灰層)までの深掘りを行ったものの、該期遺構は確認されなかった(第7図)。中掫浮石降下以前には調査地点が窪んだ沢状の地形だったためと思われるが、調査区外に該期の遺構・遺物が存在する可能性はある。一方、平安時代と近世の遺構・遺物が検出されており、調査地点が該期遺跡の一部であることが判明した。とりわけ、RD 11・12 土坑から 18 世紀〜19 世紀代の陶磁器が纏まって出土したことは、調査区周辺に陶磁器を所有する人物の屋敷が存在していたこと、近世のムラの一部を占めていたことを示唆している。

なお、川□Ⅰ遺跡に関わる報告は、これをもって全てとする。



第7図 縄文時代の遺構と深掘トレンチ位置

<参考文献>

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター [(財) 岩手県埋蔵文化財センター]

1983 『荒谷 A 遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター埋蔵文化財調査報告書第 57 集

1990a 『馬場遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 137 集

1990b 『馬場 $II \cdot 沖 I$ 遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 152 集

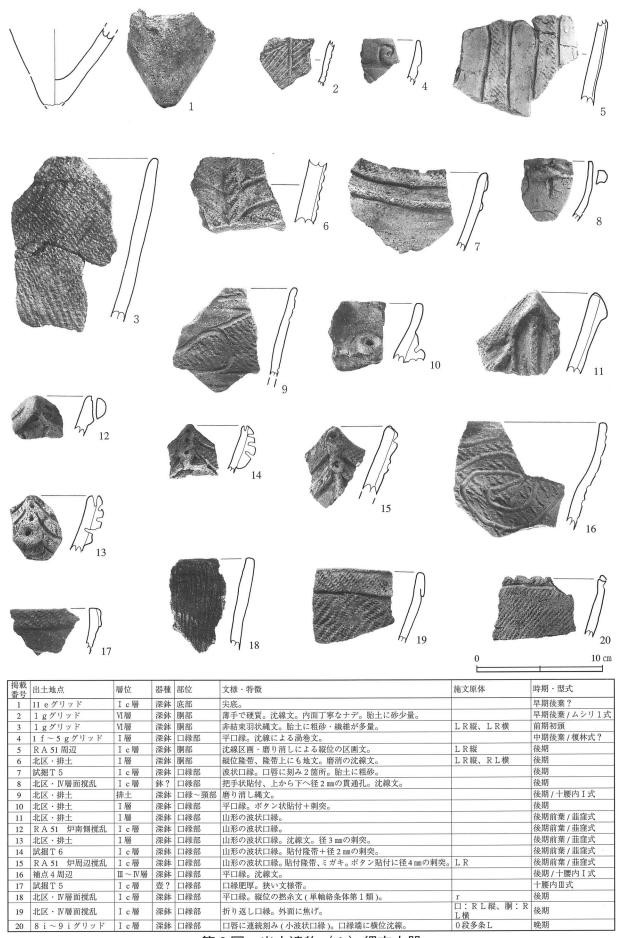
1992 『八ツ長Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 168 集

九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』(佐賀県)

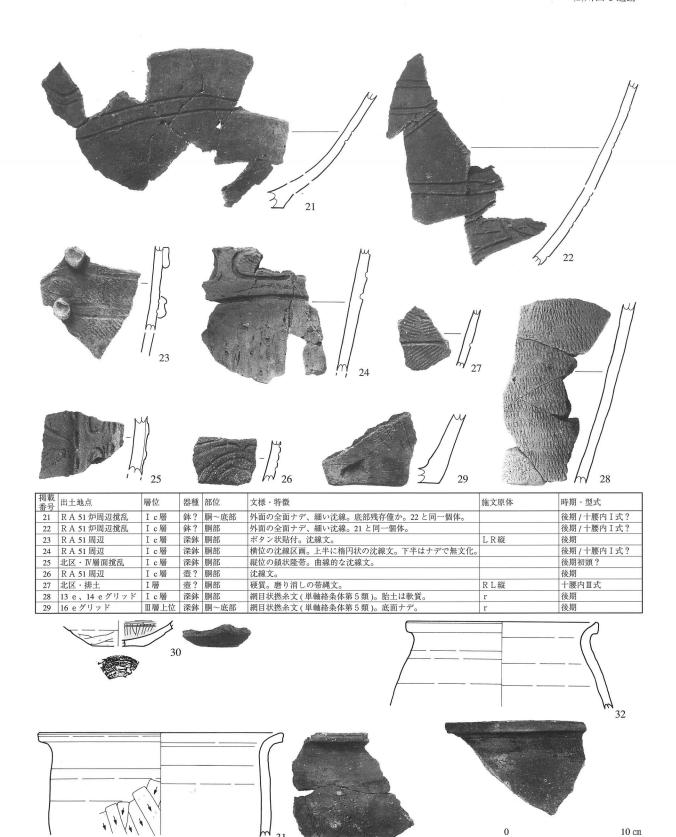
兵庫埋蔵銭調査会 1998 『近世の出土銭 II 一分類図版篇一』(永井久美男・編)

報告書抄録

				干风	ш	日 17	业人			
ふりがな					つち	ょうさほうこ	くしょ			
書名	平成 17	年度発掘	屈調査:	報告書						
書名 副書名										
巻次										
シリーズ名			事業日	日埋蔵文化則	け調査	報告書				
シリーズ番号		集								
編著者名	千葉正									
編集機関	(財) 岩	手県文化	上振興	事業団埋蔵	文化則	ーセンター				
所在地		-0853	岩手児	具盛岡市下倉	返岡 1	地割 185 地	TEL (01	<u> 19)638 - 90</u> 0	01	
発行年月日		3月27	H							
ふりがな	ふりがな			コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地		市町村	寸 遺跡都	号	0 / //	0 / //	門里知间	阿	阿 且
	岩手県二戸市	きんたいち				10 E	44 15			一般県道改
	右手県 一 戸 巾	金田一				40度	141 度	2005.09.01	2 2 2	修事業に伴
川口 I 遺跡	あざかわぐち ばん	ばん	03213	3 IE79 —	1188	20分	16分	~	1,156 m ²	う緊急発掘
	字川口 20番・	21 金				16秒	38 秒	2005.10.27		調査
所収遺跡名	種別	主な時	什		Eな遺		主力	☆遺物	特許	事項
771-12.88.99.11	1主//5		14		L & 155	117	縄文土器	大 2 箱	縄文十器は早	期末~前期初
				竪穴住居跡	1 核	i	土製円盤	1点		€○、後期前葉
	集落跡	縄文時		土坑	5 寿		石器類	27 点		始どが撹拌層
				1.96	0 4	2*	石剣	1点	出土。	/I C % 1)E11/E
							土師器、須	東晃	шо	
川口I遺跡	散布地	平安時	代	土坑	7 基	ş.		、0.5 箱		
				* * * * * * * * * * * * * * * * * * *			陶磁器	25 点	1 11. 1 A la	C
	// 	\		土坑	4 差		石臼	4点		5廃棄された陶
	集落?	近世		柱穴状土坑			古銭	13 点		<i>I~</i> ∨期)が出
				焼土遺構	1 差	ş.	釘・鉄滓等	20点	土。	
	縄文時代の	竪穴住居!	跡・土	坊を給出し	ナッが	生落の中心			平安時代の土	上坑4基が検出
要約										出され、肥前
	産や瀬戸・美活									CTT C 400 NPHI
	<u> 庄、田田 大</u>	灰圧 7月91	以入石庁と	嘘ょつ て口	<u> </u>	- 0 10 巴凡沙	一 19 匹 利	いに何りるもり	しいいれている。	

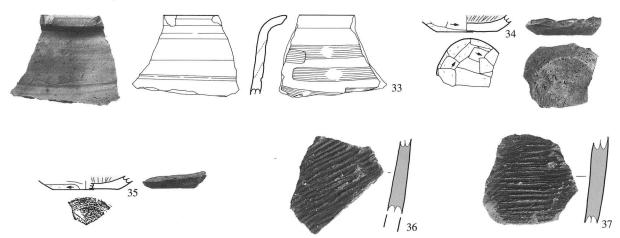


第8図 出土遺物(1)縄文土器



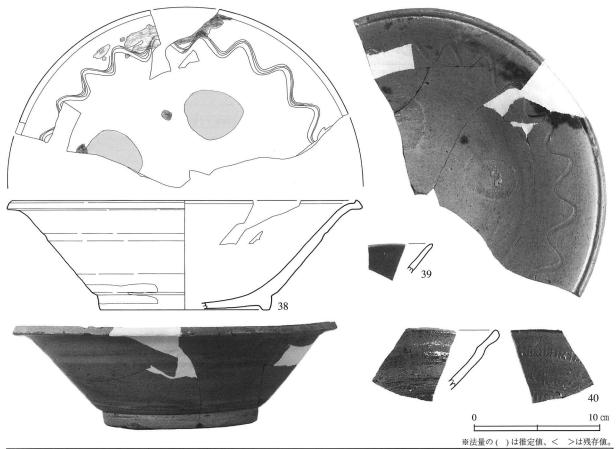
									,	*法重の()は推定他、くっは残仔他。	
掲載 番号	出土地点	層位	種別	器種	外面調整	内面調整		法量	(cm)		胎土	
番号	山工地州	省区	1里力リ	667里	クト田 門金	門田剛笙	口径	底径	器高	器厚	(粗密・含有物等)	
30	R D 01	埋土上層 (焼土層)	土師器	坏	体:ロクロナデ→へ ラナデ底:回転糸切 り痕	体:ヘラミガキ 底:ヘラミガキ 黒色処理	_	(4.2)	< 1.5 >	0.7	密。	
31	R D 03 · 04	埋土	土師器	甕	口:ヨコナデ 体:ヘラケズリ	口:ヨコナデ 体:ロクロナデ	(19.4)	-	< 8.2 >	0.8	粗。小石·金雲母?多。	
32	R D 03 · 04	埋土	土師器	甕		口:ロクロナデ 体:ロクロナデ	(15.4)	_	< 6.8 >	0.7	密。小石含む。	

第9図 出土遺物(2)縄文土器・土師器



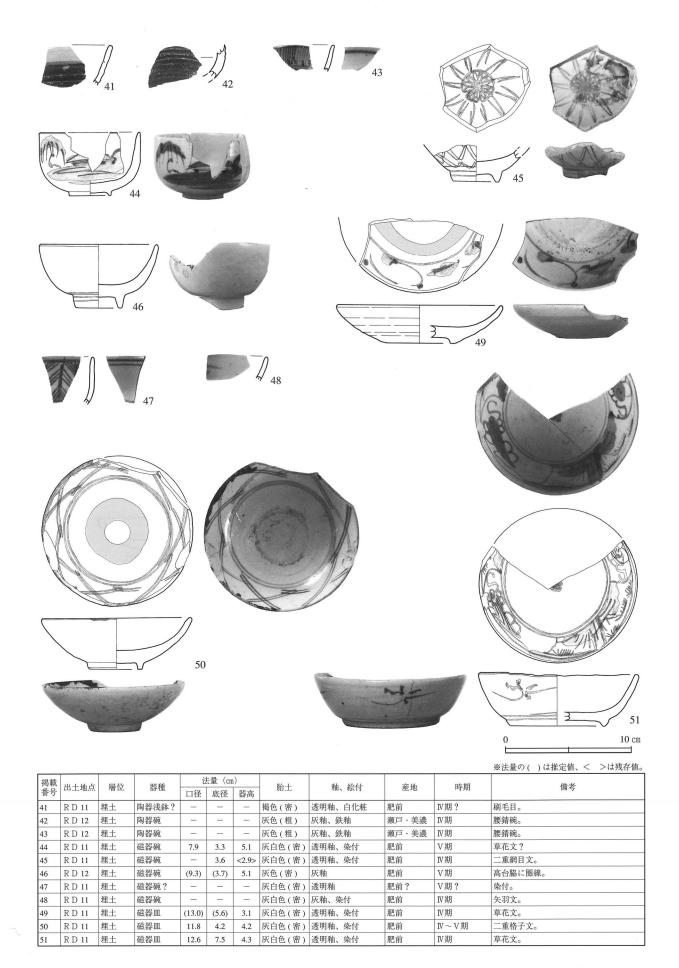
※法量の()は推定値、< >は残存値。

										1100) (0.1EVC 1EV / 2.100/2/11 1E0
掲載 番号	出土地点	層位	種別	器種	外面調整	内面調整		法量	(cm)		胎土
番号	山土地从	眉见	但上がり	667里	7ト田 両金	门田開金	口径	底径	器高	器厚	(粗密・含有物等)
33	R D 03 · 04	埋土	土師器	甕	口・体:ロクロナデ	口:ロクロナデ 体:ロクロナデ	-	_	_	0.7	密。
34	16 e グリッド	I層	土師器	坏	体:ヘラケズリ 底:ヘラ再調整	体:ヘラミガキ 底:ヘラミガキ 黒色処理	_	(5.0)	< 0.8 >	0.7	密。
35	14 f グリッド	I層	土師器	坏	体:ヘラナデ 底:回転糸切り痕	体:ヘラミガキ 底:ヘラミガキ 黒色処理		(5.2)	< 0.7 >	0.75	密。
36	11 e グリッド	Ic層	須恵器	甕	体:タタキメ	体:ハケメ	-	-	_	1.1	10 Y 5/1 灰。粗。小石含む。
37	19 cグリッド	Ic層	須恵器	甕	体:タタキメ	体:ハケメ	-	_	_	1.2	10 B G 5/1 青灰。粗。小石含む。

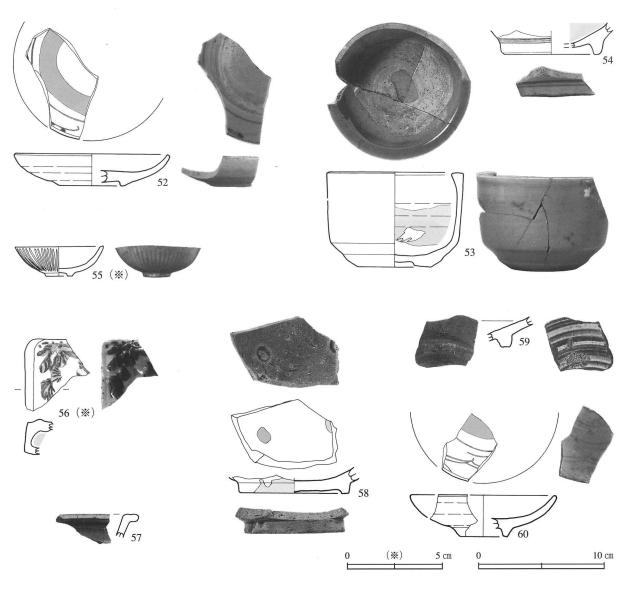


法量 (cm) 出土地点 釉、絵付 時期 底径 器高 口径 折縁鉢。目跡。内面に波状文。黄瀬戸鉢 の模倣品(胎土が異なる)。 埋土 陶器鉢 浅黄色(密) 灰釉(黄) 在地(東北) 18 c後半以降 R D 11 (27.4) (13.4) 38 8.7 39 R D11 埋土 陶器碗 灰白色(密)透明釉、染付 矢羽文。 内面に花弁文? 陶器鉢 灰色(密) 灰釉(暗緑)、鉄釉? 肥前(唐津) Ⅲ期以降 40 R D 12

第10図 出土遺物(3)土師器・須恵器・陶磁器



第11図 出土遺物(4)陶磁器



※法量の()は推定値、< >は残存値。

											※法重の()は推定他、< / / / / / / / / / / / / / / / / / / /
掲載 番号	出土地点	層位	器種	挝	法量 (cm)	胎土	釉、絵付	産地	時期	備考
番号	山上地点	骨以	667里	口径	底径	器高	ЛПТ	作田、 形云门)))))	H-1-797	VIII 45
52	R D 11	埋土	磁器皿	(12.1)	(5.2)	2.6	灰色(密)	灰釉	相馬?		
53	R D 11	埋土1層	磁器香炉	10.9	5.7	7.6	灰白色(密)	青磁	肥前?	IV期?	貿易陶磁かもしれない。見込みに白色釉。
54	R D 12	埋土	磁器徳利	-	(7.6)	<2.0>	灰白色(密)	透明釉	肥前	IV期	内面無釉。
55	R D 12	埋土	磁器紅皿	4.6	1.4	1.6	灰白色(密)	透明釉	肥前?	IV~V期	
56	R D 12	埋土	磁器水滴	_	_	-	灰白色(密)	透明釉、染付	肥前	V期	裏面に布目。
57	13 f	I層	陶器鉢	-	=	_	灰色(密)	透明釉、白化粧	相馬?	19 世紀代	折縁鉢。唐津産かもしれない。
58	南区中央 部撹乱	撹乱土	陶器鉢	-	(8.8)	<1.2>	浅黄色(粗)	灰釉(黄)	肥前?		目跡。瀬戸・美濃産?
59	南区	Ⅱ層?	陶器鉢	-	-	-	灰色(粗)	透明釉、白化粧	肥前	Ⅲ期以降	刷毛目。
60	19 d	I層	磁器皿	(11.4)	(3.8)	3.4	灰白色(密)	透明釉、染付	肥前	IV期	蛇目釉剥ぎ。

陶磁器 凡例



染付

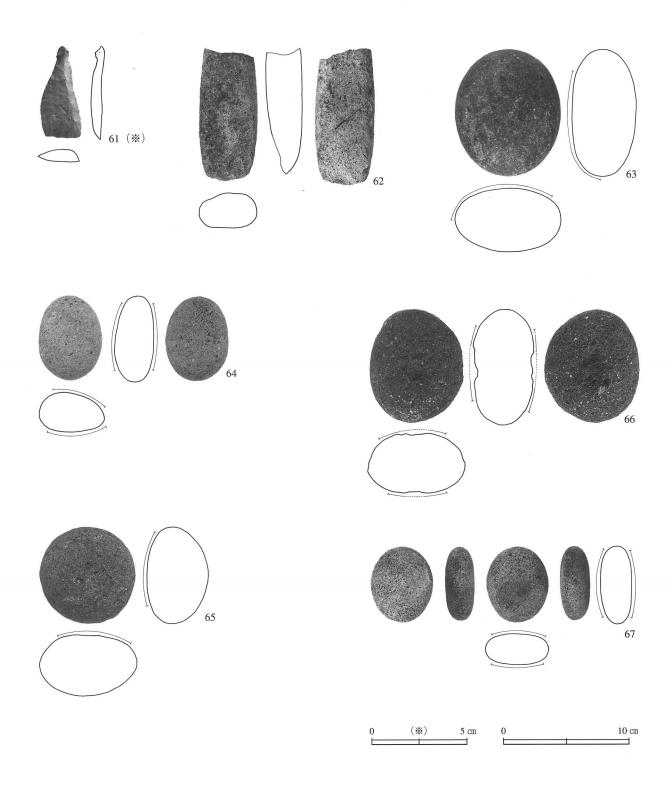


釉剝ぎ、目跡



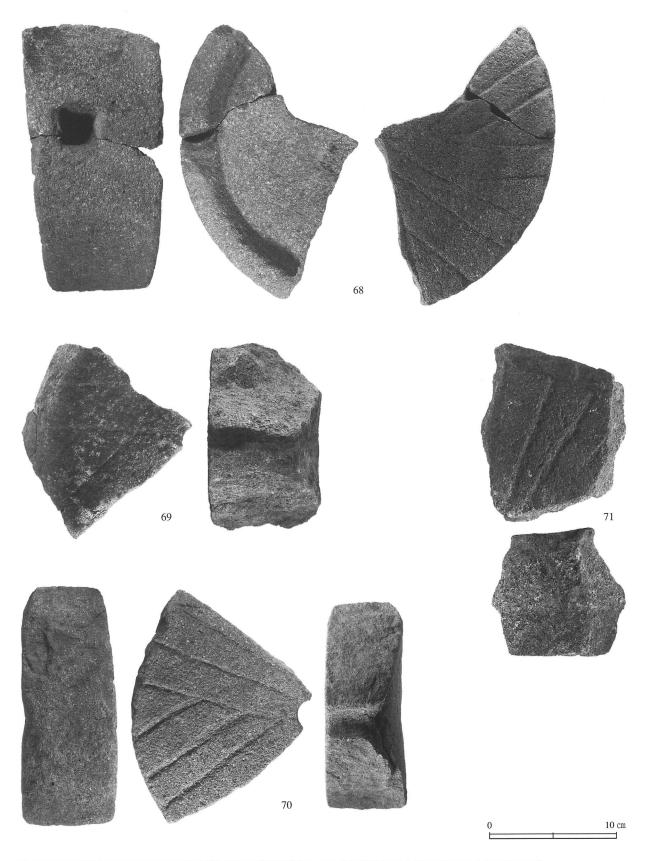
無釉

第12図 出土遺物(5)陶磁器



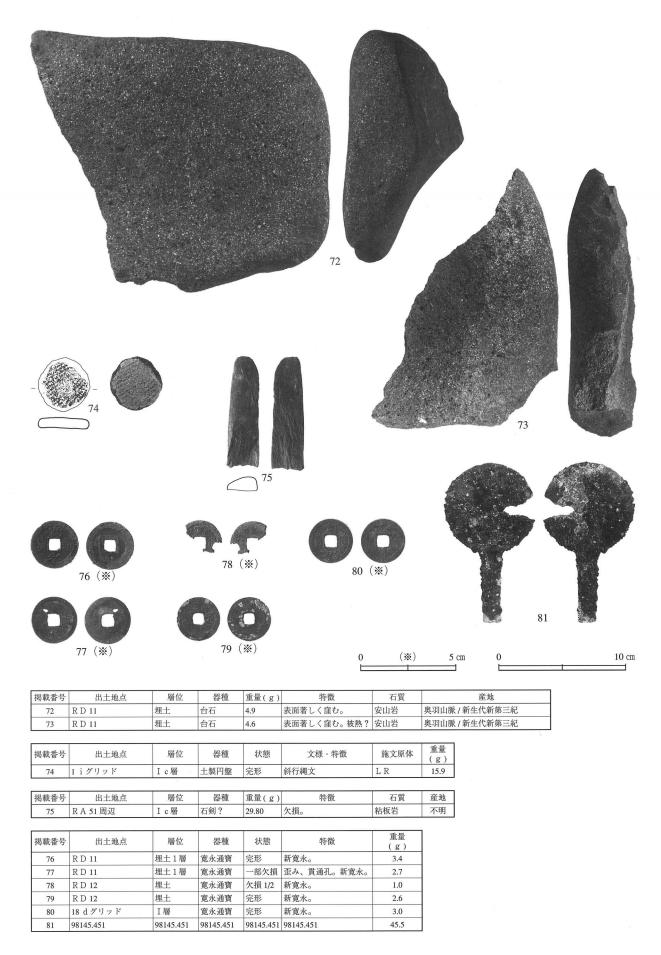
掲載番号	出土地点	層位	器種	重量(g)	特徴	石質	産地
61	南区 pp24	埋土	石匙	6.0	縦型。	頁岩	奥羽山脈 / 新生代新第三紀
62	北区西半部	Ic層	磨製石斧	236.8	基部・刃部片面が欠損。	玢岩	北上山地?/中生代白亜紀?
63	R D 11	埋土	敲磨器	641.8	磨石。	砂岩	奥羽山脈 / 新生代新第三紀
64	RA 51 炉北側撹乱	撹乱土	敲磨器	171.9	磨石。	デイサイト	奥羽山脈 / 新生代新第三紀
65	R D 11	埋土	敲磨器	368.6	磨石。	砂岩	奥羽山脈 / 新生代新第三紀
66	13 gグリッド	Ⅲb層	敲磨器	452.6	磨石+凹石。	安山岩	奥羽山脈 / 新生代新第三紀
67	11 e グリッド	Ic層	敲磨器	118.6	磨石。	安山岩	奥羽山脈 / 新生代新第三紀

第13図 出土遺物(6)石器

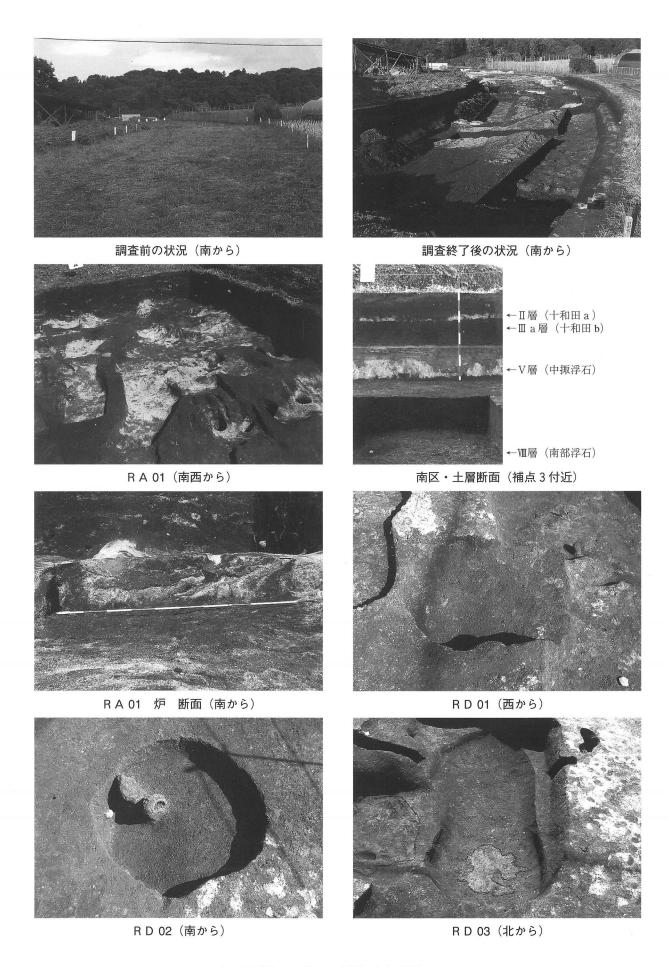


掲載番号	出土地点	層位	器種	重量(kg)	特徴	石質	産地
68	R D 11	埋土	石臼	3.4	上臼。挽木孔。	安山岩	奥羽山脈 / 新生代新第三紀
69	R D 11	埋土	石臼	2.1	下臼。軸受孔。	安山岩	奥羽山脈 / 新生代新第三紀
70	R D 11	埋土	石臼	2.6	下臼。軸受孔。	デイサイト	奥羽山脈 / 新生代新第三紀
71	R D 11	埋土	石臼	2.4	下白。	デイサイト	奥羽山脈 / 新生代新第三紀

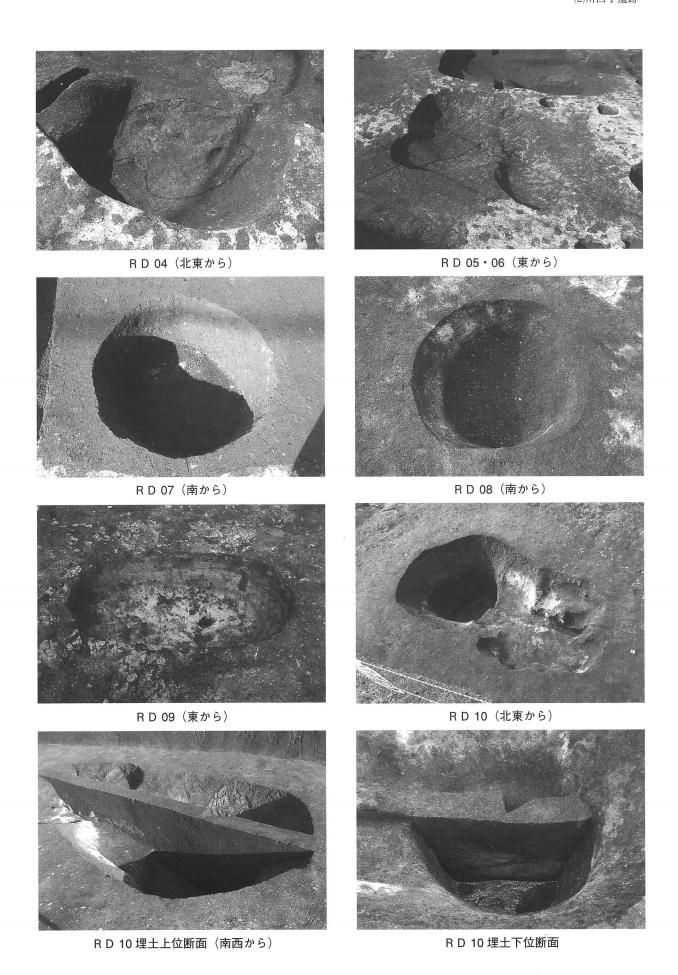
第14図 出土遺物(7)石器



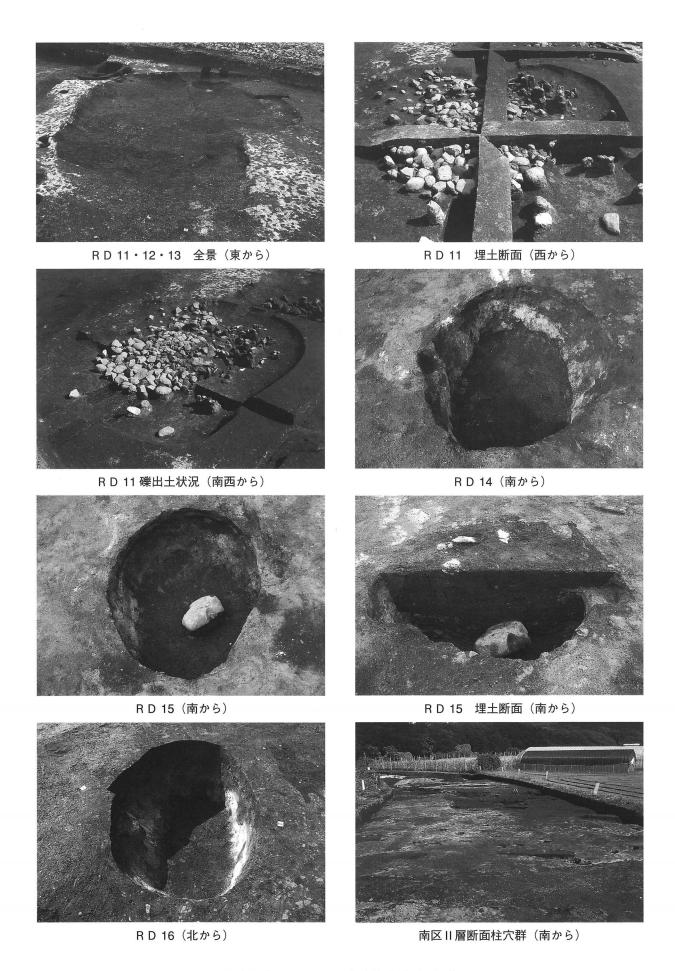
第15図 出土遺物(8)石器・土製器・石製品・金属製品



写真図版1 川口I遺跡検出遺構(1)



写真図版 2 川口 I 遺跡検出遺構 (2)



写真図版 3 川口 I 遺跡検出遺跡 (3)

(3) 宮沢遺跡 第11次調査

所 在 地 盛岡市本宮字宮沢 29 ほか 遺跡番号·略号 LE 16 - 2101 · 〇M Z - 05 - 11

委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課 調查対象面積 2,001 m² 事 業 名 盛岡南新都市土地区画整備事業 発掘調查面積 1,667 m²

発掘調査機関 平成17年7月1日~7月22日 調査担当者 濱田 宏・石崎高臣

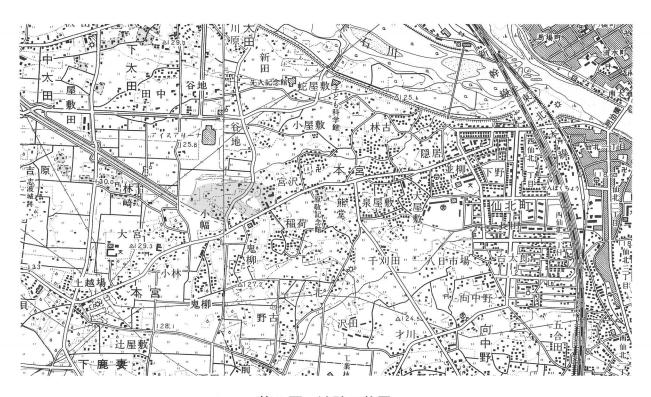
1. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、盛岡市が経済・文化などに対する機能を備えた北東北の拠点都市を目指して、市の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。岩手県・盛岡市・旧都南村の三者は、平成2年9月に地域振興整備公団(当時・現都市再生機構)に対して事業申請を行い、これを受けて公団は実施計画を作成した。平成3年12月には建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可がおり、平成3年度から平成17年度までの15年間を事業予定期間とし、対象面積313haの土地区画整備事業が実施されることとなった。なお、本事業については、当初計画より数年の期間延長が示されている。

宮沢遺跡第11次調査については、岩手県教育委員会と盛岡市が協議した結果、平成17年度の事業として確定し、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなった。 (盛岡市都市整備部盛岡南整備課)

2. 遺跡の位置と立地

遺跡は盛岡市の南西部、JR 東北本線仙北町駅の西約 2.5 kmにあり、雫石川によって形成された標高 125m 前後の河岸段丘上に立地する。本遺跡の西側には小幅遺跡が隣接し、西方約 1 kmには古代城柵 志波城がある。調査前の状況は、宅地および畑地であった。



第1図 遺跡の位置

3. 基本土層

全域で以下に示したような土層が観察された。調査区南西側については、地形の凹凸により第Ⅲ層が厚く堆積する箇所がある。

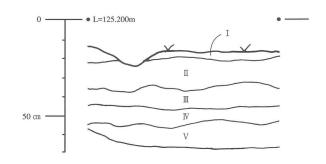
第 I 層 10YR4/2 にぶい灰褐色 シルト質土 現表土。

第Ⅱ層 10YR2/1 黒色 シルト質土 畑の耕作土である。

第Ⅲ層 10YR3/3 暗褐色 シルト質土 古代の遺物を包含する。

第Ⅳ層 10YR4/4 褐色 シルト質土 遺構検出面である。

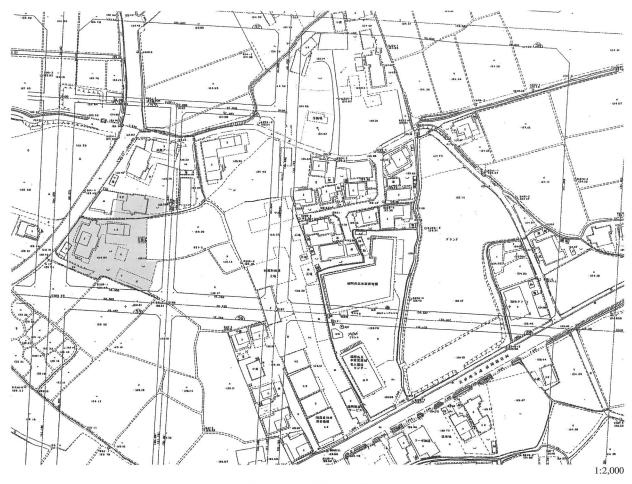
第 V層 10YR4/6 褐色 シルト質土 基盤層。



第2図 基本層序

4. 調査の概要

かつて実施されてきた調査区北側・西側の調査では、古代の竪穴住居跡や溝などが確認されているが、今回は掘立柱建物跡 1 棟の検出にとどまった。遺物も土師器片や銭貨などがわずかに出土したに過ぎない。



第3図 周辺の地形

(1) 遺構

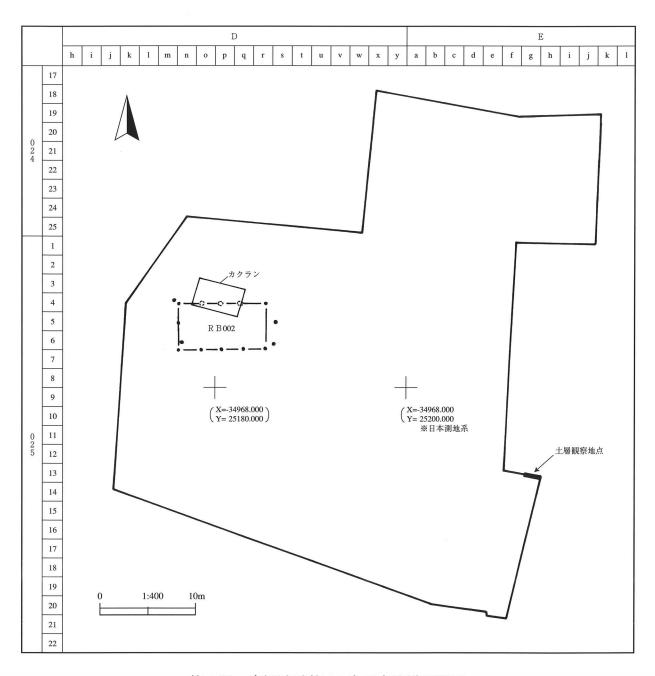
SB002 掘立柱建物跡は、調査区北西寄り、基準点1の北側5m付近に位置する。10個の柱から構成されるが、後世の攪乱により北側の3個を欠く。PP4のみ直径約12cmの柱痕跡を確認している。

全体規模は、桁行 4 間(8.90m)・梁間 1 間(4.82m)・面積 42.9 $\rm m^2$ で、ほぼ正方位に沿う東西棟の建物跡である。桁行の柱間は $\rm 2.15m$ (7 尺)から $\rm 2.32~cm$ (7.6 尺)を測り、柱間寸法は $\rm 2.2m$ (7.3 尺)から $\rm 2.4m$ (7.8 尺)を基準とするようである。

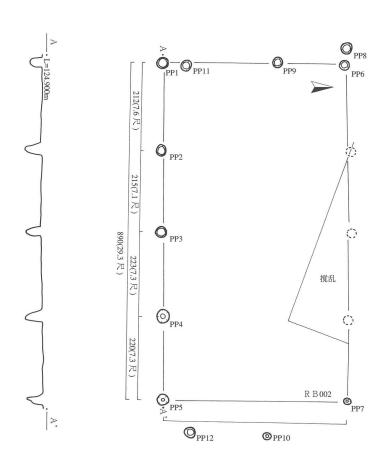
出土遺物がなく詳細な時期は不明であるが、近世に属するものと考えられる。

(2) 遺物

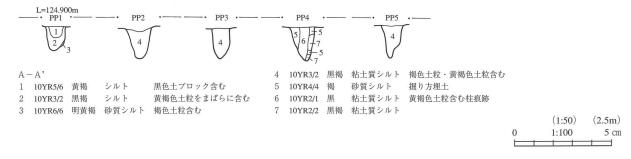
遺物は、表面採集したものと先述した地形の凹部から出土している。内訳は土師器片 10 点、泥面子あるいは土人形の類 5 点、ビー玉 4 個、現代の陶磁器の破片 10 点あまり、銭貨(寛永通寳) 2 点である。



第4図 宮沢遺跡第11次調査遺構配置図



	平面形	径(cm)	深さ(cm)	底面標高(cm)
PP1	円形	28 × 31	32	124.46
PP2	不整円形	25 × 32	42	124.41
PP3	不整円形	29 × 30	41	124.45
PP4	円形	32 × 36	47	124.32
PP5	円形	30 × 32	43	124.37
PP6	円形	24 × 26	30	
PP7	円形	17 × 21	30	
PP8	不整円形	28 × 31		
PP9	円形	24 × 28		
PP10	楕円形	18 × 23		
PP11	円形	25 × 30		
PP12	円形	29 × 29		



第5回 掘立柱建物跡(RB002)・柱穴

遺物写真の1はロクロ成形の土師器坏の口縁部破片、2は近世・近代の火鉢と思われる素焼きの製品、3は七福神かと思われる泥面子、4・5は寛永通寳である。

遺物観察表

VET 113 F	2021 20				
番号	出土地点	層位	器種	部位	特 徴 (計測値)
1	調査区中央	Ⅱ層	土師器・坏	口縁部	内外面ロクロ痕、赤焼き
2	基1南側凹部	Ⅱ層	火鉢	口縁部	内外面ロクロ痕、素焼き、内側に煤付着
3	基1南側凹部	Ⅱ層	泥面子	頭部	内面に指頭痕多い
4	調査区中央北側	検出面	銭貨		「寛永通寳」、直径 2.4 cm、重さ 2.18g
5	調査区中央北側	検出面	銭貨		「寛永通寳」、欠損あり、重さ 0.86g



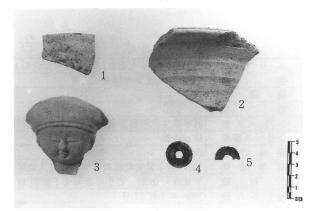
調査前の状況(南から)



基本層序



調査区全景(北から)



出土遺物



掘立柱建物跡 (RB 002)

写真図版 宮沢遺跡第 11 次調査検出遺構ほか

5. まとめ

今回は古代を中心とする遺構の検出、遺物の出土が予想されたが、近世と思われる掘立柱建物跡1棟とわずかな遺物しか確認されず、また調査ではほぼ全域にわたって、比較的浅い所から湧水があることが判明した。このことから、この付近は居住域としては不適な場所であり、元々遺構はあまり存在していなかったものと考えられる。

なお、宮沢遺跡第11次調査に関わる報告はこれをもって全てとする。

<引用・参考文献>

(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

1998 『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 266 集

報告書抄録

ふりが	な	へいせ	いじゅうなな	ねんどはっく	つちょうさほ	らこくしょ	N. 18111113 132 1					
書			7 年度発掘調		<i>y</i> 0. <i>y</i> 2 1.	, , , , , , , ,						
副書	名											
巻	次											
シリース	名	岩手県	文化振興事業	団埋蔵文化財	調査報告書							
シリーズ看	香号	第 490	集									
編著者	名	濱田	宏									
編集機	関	(財) ね	号手県文化振9	興事業団埋蔵	文化財センタ							
所 在	地	〒 020	- 0853 岩手	5. 具盛岡市下館	页岡 11 地割 18	85 番地	TEL	(019) $638 - 9$	9001			
発行年月	年月日 2006年3月27日											
ふりがな	ふり	がな	コ -	- ド	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因			
所収遺跡名	所在		市町村	遺跡番号	0 / //	0 / //	刚且为加	門且即復	网旦尔凶			
宮沢遺跡	岩手県	盛岡	03201	LG16-2101	39 度	141 度	2005.07.01	1,667 m ²	「盛岡南新都市土			
第 11 次調査	市本宮	あざみや			41分	06分	~		地区画整備事業」			
	沢 29 1				13 秒	47 秒	2005.07.22		に伴う緊急発掘調 査			
所収遺跡名	種		主な時代	主か	<u> </u>	主な	<u> </u> -遺物	生				
宮沢遺跡	集落					土師器・陶磁		· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	いる掘立柱建物跡を			
白八是助	未作	1, fr/(1),	шту	加业生产物助	、 1 7本	泥面子ほか	X 11 11 ²	検出。	C.O.加工工产的的, C.			
要約	かつて宝焼された木濃駄国辺の調本では、主に正字時代の潰構が確認されたが、 全回の調本区では検出された											

※経度・緯度は世界測地系における数値である。

(4) 本宮熊堂B遺跡 第30次調査

所 在 地 盛岡市本宮字稲荷 3 - 15 他 遺跡番号・略号 LE 16 - 2131・〇 K 〇 - 05 - 30

委 託 者 独立行政法人都市再生機構 調査対象面積 159 m²

岩手都市開発事務所 発掘調査面積 159 m²

事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業 調査担当者 濱田 宏・石崎高臣

発掘調査期間 平成17年5月2日~5月18日

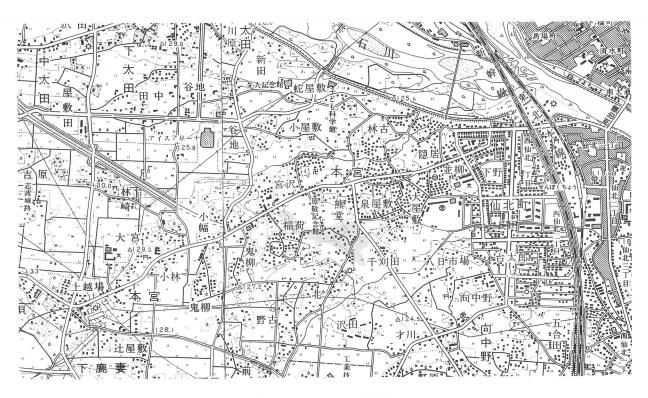
1. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、盛岡市が経済・文化などに対する機能を備えた北東北の拠点都市を目指して、既成市街地の他に南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。この事業は、岩手県・盛岡市・都南村(平成5年に盛岡市と合併)の三者が、地域振興整備公団(現都市再生機構)に対して事業申請を行い、これを受けて公団は実施計画を作成した。平成3年12月には建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可がおり、平成3年度から同17年度までの15年間を事業予定期間とし、面積313haの土地区画整備事業が実施されることとなった。なお、事業期間については、当初計画より数年の延長が示されている。

本宮熊堂 B 遺跡第 30 次調査は、岩手県教育委員会と独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務 所が協議した結果、平成 17 年度の事業として確定し、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなった。 (独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所)

2. 遺跡の立地

本宮熊堂B遺跡はJR東北本線盛岡駅の南西約2kmに位置し、雫石川南側河岸段丘面の微高地上に立地している。標高は124m前後で、おおむね平坦な地形である。本遺跡の北側と南側は段丘面の縁にあたる。1mほど低い北側の段丘面には縄文時代晩期の集落である本宮熊堂A遺跡が立地する。



第1図 遺跡の位置

3. 基本層序

層位 色調 粘性 しまり

第 I 層:10 Y R 6/6 明黄褐色土 やや強 ややあり

10 Y R 8/3 浅黄橙色土1%・小礫微量含む

盛土

第Ⅱ層:10 Y R 2/2 黒褐色土 強 あり

水田の床土

第Ⅲ層:10 Y R 3/3 暗褐色土 やや強 ややあり

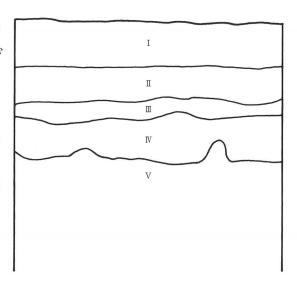
漸移層

第 IV層:10 Y R 4/4 褐色土 やや弱 ややあり

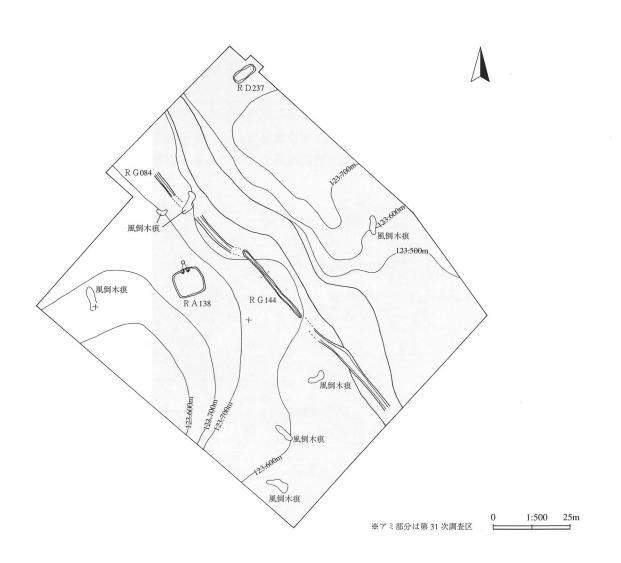
古代の遺構検出面

第V層:10 YR 4/4 褐色砂 なし なし

基盤層



第2図 基本層序



第3図 遺構配置図

4. 調査の概要

(1) 遺構

< R G 084 溝跡 > 南側調査区の北西 7 P 15 h グリッド周辺に位置する。第 \mathbb{N} 層で検出し、重複す 7 る遺構はない。北西方向はかつて調査が行われた第 10 次調査区に、南東方向は並行して調査が行われた第 31 次調査区に続く。第 10 次調査では深さが約 20 \sim 30 cmあったが、今次調査では 5 cm ばかりで、削平により底面をわずかに検出したのみと思われる。遺物が出土していないので時期は 8 不明だが、第 10 次調査では平安時代ないしはそれ以降かとしている。

(2) 遺物

土師器片数点が検出面より出土した。

P Q + X=-35350.000 + X=-35350.000 Y= 25760.000 Y= 25780.000

第4図 グリッド図

5. まとめ

今次調査区は、奈良時代の竪穴住居が検出された第10次調査区と隣接するが、RG 084 溝跡以外の遺構は検出されなかった。また、並行して調査が行われた31次調査区でも遺構密度は高くない。これまでの調査で確認された奈良・平安時代前期の集落は今次調査区まで広がっていないことが判明した。

なお、本宮熊堂B遺跡第30次調査に関わる報告は、これをもって全てとする。



写真図版1 遺跡全景(南から)

(4)本宮熊堂B遺跡 第30次調査



基本層序



遺構検出状況

写真図版 2 基本層序・遺跡検出状況

報告書抄録

ふりが	な	へいせ	いじゅうなな	ねんどはっく	つちょうさほ	うこくしょ						
書	名	平成 17	7 年度発掘調3	 企報告書								
副書	名											
巻	次											
シリーズ	(名	岩手県	文化振興事業	団埋蔵文化財	調査報告書							
シリーズ都	昏号	第 490	集									
編著者	名	濱田	宏・石崎高臣						*			
編集機	関	(財) 岩	号手県文化振り	興事業団埋蔵プ	と化財センタ・	_						
所 在	地		1020 - 0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地 TEL (019) 638 - 9001									
発行年月	日	2006年	三 3 月 27 日									
ふりがな 所収遺跡名	ふり 所名		コ - 市町村	- ド 遺跡番号	。北緯	。東経	調査期間	調査面積	調査原因			
電影 本本 〈 まとうびー本宮熊 堂 B 遺跡 第 30 次 調査	いお手も本り	しょりおか		LE16 — 2131	39 度 21 分 40 秒	140 度 45 分 27 秒	2005.05.02 2005.05.18	159 m²	盛岡南新都市土地 区画整理事業に伴 う緊急発掘調査			
	ほか											
所収遺跡名	種	別	主な時代	主な	遺構	主な	よ 遺物	华	寺記事項			
本宮熊堂 B遺跡		落	奈良・ 平安時代 前期	なし 土師器片 なし								
要約	北上建物が	川の支 検出さ	流である雫石 れているが、	5川南側河岸段 今回は確認で	丘面の微高地 きなかったこ	とから今次訓	周査区は集落の	縁辺にあたる	で周辺からは多数の ものと思われる。			
	※経度・緯度は世界測地系における数値である。											

※経度・緯度は世界測地系における数値である。

(5) 本宮熊堂B遺跡 第31次調査

所 在 地 盛岡市本宮字稲荷 3 - 11 他 遺跡番号・略号 LE 16 - 2131・OKO-05 - 31

委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課 調査対象面積 2,412 m² 事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業 発掘調査面積 2,412 m²

発掘調査期間 平成 17 年 4 月 12 日~ 5 月 31 日 調 査 担 当 者 濱田 宏·石崎高臣

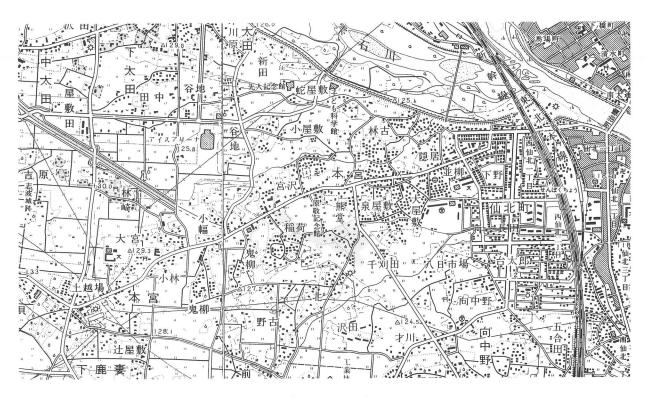
1. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、盛岡市が経済・文化などに対する機能を備えた北東北の拠点都市を目指して、既成市街地の他に南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。この事業は、岩手県・盛岡市・都南村(平成5年に盛岡市と合併)の三者が、地域振興整備公団(現都市再生機構)に対して事業申請を行い、これを受けて公団は実施計画を作成した。平成3年12月には建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可がおり、平成3年度から同17年度までの15年間を事業予定期間とし、面積313haの土地区画整備事業が実施されることとなった。なお、事業期間については、当初計画より数年の延長が示されている。

本宮熊堂B遺跡第31次調査については、岩手県教育委員会と盛岡市が協議した結果、平成17年度の事業として確定し、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなった。 (盛岡市都市整備部盛岡南整備課)

2. 遺跡の立地

本宮熊堂 B 遺跡は J R 東北本線盛岡駅の南西約 2 kmに位置し、雫石川南側河岸段丘面の微高地上に立地している。標高は 124 m前後で、おおむね平坦な地形である。本遺跡の北側と南側は段丘面の縁にあたる。 1 mほど低い北側の段丘面には縄文時代晩期の集落である本宮熊堂 A 遺跡が立地する。



第1図 遺跡の位置

3. 基本層序

層位 色調 粘性 しまり

第 I 層:10 Y R 6/6 明黄褐色土 やや強 ややあり

10 Y R 8/3 浅黄橙色土1%・小礫微量含む

盛土

第Ⅱ層:10 Y R 2/2 黒褐色土 強 あり

水田の床土

第Ⅲ層:10 Y R 3/3 暗褐色土 やや強 ややあり

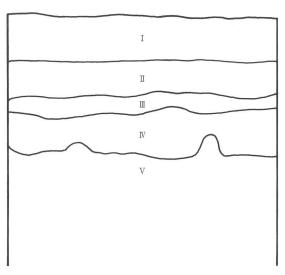
漸移層

第Ⅳ層:10 Y R 4/4 褐色土 やや弱 ややあり

古代の遺構検出面

第V層:10 YR 4/4 褐色砂 なし なし

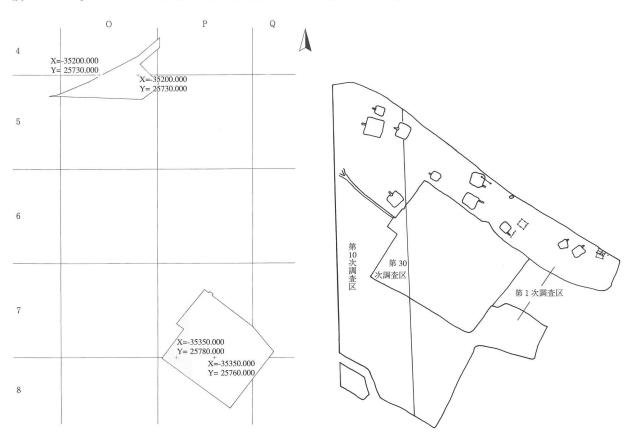
基盤層



4. 調査の概要

第2図 基本層序

調査区は北側と南側の2つに分かれており、それぞれ北側調査区・南側調査区と称する。北側調査区は14・15・18・25次調査区と接し、また、段丘の縁から一段下がったところには本宮熊堂A遺跡が位置する。南側調査区は1次調査区と北・南側で、並行して調査が行われた30次調査区と西側で接している。さらにその西側は10次調査区となる(第4・5図)。



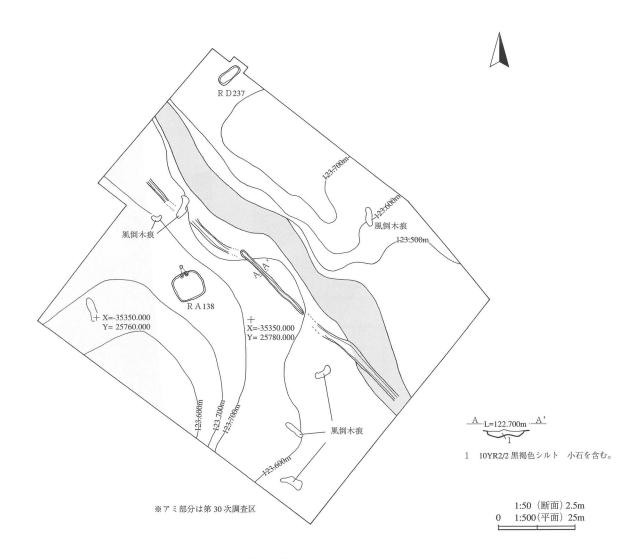
0 (1:1000) 50m

第3図 グリッド図

第4図 南側調査区周辺の状況



第5図 本宮熊堂B遺跡過年度調査地点



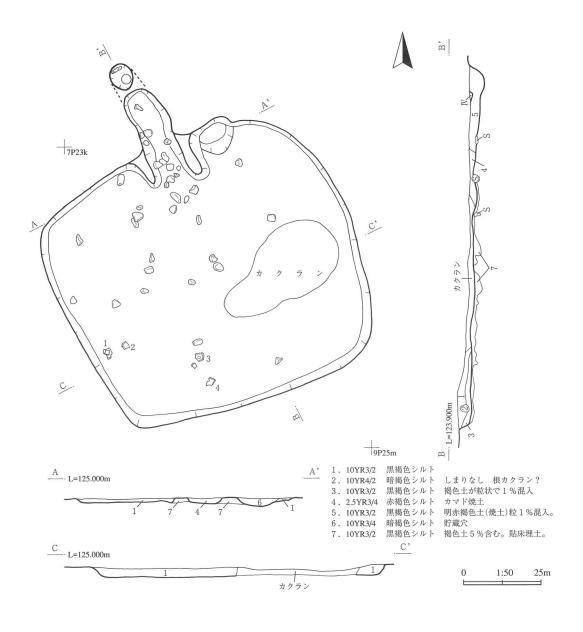
第6回 南側調査区遺跡配置図・地形図

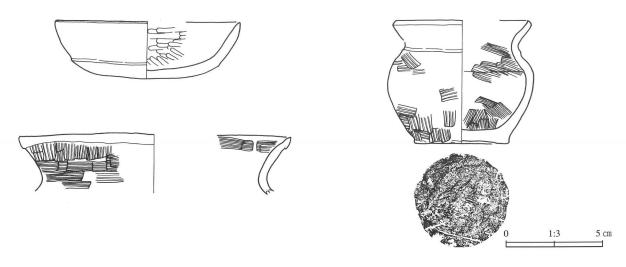
(1) 遺構(第6~8図、写真図版2·3)

<RA 138 竪穴住居跡>南側調査区の中央、7 P 22 k グリッド付近に位置する。第 IV層で検出した。重複する遺構はない。平面形は隅丸方形で、東西 3.9 m、南北 3.6 mを測る。軸方向は $N-27^\circ-W$ である。埋土は、検出時点でカマドの袖が見出されるほどの削平を受けているため、それほど深くなく、下層のみ残存する。住居本体の埋土としては 2 つの層が確認され(1 層と 3 層)、これらは一部レンズ状に堆積していることが観察されるので、自然堆積と考えられる。床面はほぼ平坦で、黒褐色シルトによって貼り床が施されている。また、拳大から 10 cm前後の礫が散乱していた。壁は外傾しながら立ちあがっているようで、約 15 cmが残存する。壁溝や柱穴は構築されなかったのか、確認できなかった。カマドは北西壁の中央よりやや北寄りに構築されている。袖は地山を削りだして構築されたと考えられるが、前述のようにかなりの削平を受けているため詳しい構築方法は不明である。燃焼部は 0.7×0.45 mで、床面より若干掘り込まれている。煙道は刳り貫き式で、壁より 1.0 mの所が煙出となる。カマドの右に直径 0.5 m、深さ 5 cmほどのピットがある。位置的に貯蔵穴と見られる。

遺物は、土師器の破片ばかり 1.1kg が埋土から出土している。これらのうち図化可能な 3 点を掲載した。

時期は、遺物の特徴から8世紀後半と考えられる。

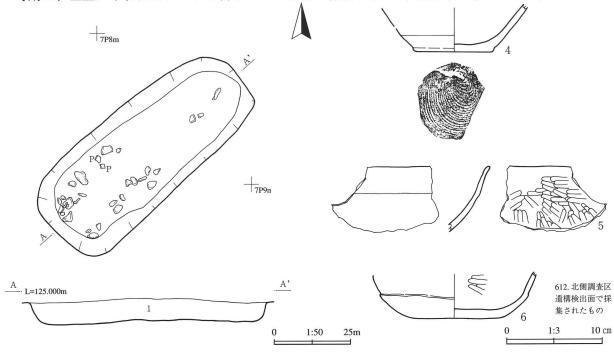




第7図 RA137竪穴住居跡・出土遺物

<RD 237土坑>南側調査区北隅の7 P 8 mグリッド付近に位置する。一部調査区外に延びていたが、あわせて精査した。第 \mathbb{N} 層で検出し、重複する遺構はない。平面形は長方形で、主軸は $\mathbb{N}-52^\circ$ — Eである。規模は 3.18×1.34 m、深さは 30 cm。平らな底面には握り拳大の礫がみられた。これらは底面全面に渡るのではなく、特に南側に集中する。埋土は、暗褐色・褐色シルトを含む黒褐色シルトの単層で、非常によくしまっていた。削平を受けているので確実ではないが、人為的に埋め戻されたと考えられる。このことと、規模・形状から本遺構は墓壙の可能性がある。また、検出面で十和田 a テフラを確認している。

遺物は底面の南側から出土した。すべて土師器の破片で合計 130 gで、このうち 2 点を図化した。 時期は、埋土に十和田 a テフラを含むことと遺物の特徴から 10 世紀前半と考えられる。



第8図 RD 237土坑・出土遺物

< R G 084 溝跡>南側調査区の北西 7 P 15 h グリッドから南東 8 P 5 y グリッドにかけて位置する。第 N層で検出し、重複する遺構はない。北西方向は並行して調査が行われた第 30 次調査区に続く。そのさらに西側の、かつて調査が行われた第 10 次調査区で検出された R G 084 溝跡と方向が同じであることから、直接は接続しないけれども、本遺構も一連のものと考え、R G 084 溝跡と命名した。第 10 次調査では深さが約 20 \sim 30 cmあったが、今次調査では 5 cmばかりで、削平により底面をわずかに検出したのみと思われる。遺物が出土していないので時期は不明だが、第 10 次調査では平安時代ないしはそれ以降かとしている。

<RG 144 溝跡>南側調査区の中央 7 P 20 n グリッドから 7 P 25 r グリッドにかけて位置する。第 IV層で検出し、重複する遺構はない。規模は、長さが 11.6 m、幅が $0.5 \sim 0.8$ m、深さは 8 cm前後である。位置と方向から RG 084 溝跡と考えられるが、北西端と南東端とが立ちあがっているため別遺構とし、RG 144 溝跡と命名した。遺物の出土はない。

(2) 遺物(第7·8図、写真図版3)

 $1 \sim 3$ はRA 138 竪穴住居跡から出土したもの。 1 は土師器坏で、内面が黒色処理された非ロクロ成形のものである。器壁は厚く、焼成もややあまい。平底に近い丸底で、体部には段が見られ、それより上は内湾しながら立ちあがる。 2 は非ロクロ成形の小型甕で、頸部には段がわずかに認められる。

焼成はあまりよくない。これらは1から、8世紀後半でも中ごろに近い時期と考えられる。4・5はRD 237 土坑の底面から出土したもので、いずれもロクロ成形の土師器坏である。5には内面に黒色処理が施されて、器壁は薄い。体部は内湾しながら立ちあがり、口縁部にいたってやや外反し、端部に至る。これらの土器は、底径が小さく体部下半に再調整が施されていないことから10世紀前半と考えられる。6は非ロクロ成形の土師器坏である。北側調査区の本宮熊堂A遺跡へと続く段丘の縁の検出面から採取された。底部は平底で、体部にはわずかに段が認められる。褐鉄が付着しており水分の多い環境に埋蔵されていたと推測される。時期は、器形から8世紀後半に位置づけられよう。

5. まとめ

前述のように、今次調査区の周辺は過去に調査が行われており、奈良・平安時代前期の竪穴住居跡があわせて 10 棟検出されていて、遺構密度は盛南開発関連の遺跡に比べそれほど低くはない(約417 m^2 あたり 1 棟)。それに比べ、今次調査では調査対象面積 2,412 m^2 で検出された竪穴住居跡が 1 棟のみと、遺構密度は決して高いとはいえない。これは、今次調査区が集落の縁辺にあたっていたためであろう。今次調査区内の地形図を作製すると、南側が低くなっていることが判明する。そして、最も低い部分では基盤層である第V層が細長く露出しており、おそらく沢のような状態になっていたと思われる。これらのことから、今次調査区は居住に適しない場所だったと推測される。遺構密度が低いのはそのためと考えられる。

なお、本宮熊堂B遺跡第31次調査に関わる報告は、これをもって全てとする。

報告書抄録

ふりが	なへ	ハせいじゅう	ななねんどはっく	つちょうさほ	うこくしょ						
書	名 平原	戊17年度発掘	調査報告書								
副書	名										
巻	次										
シリース	、名 岩	手県文化振興	事業団埋蔵文化財	調査報告書							
シリーズ和	番号 第一	490 集									
編著者	名濱田	日 宏・石崎?	高臣								
編集機	関 (財)岩手県文化	振興事業団埋蔵	文化財センタ							
所 在	地ーデ	020 - 0853	岩手県盛岡市下館	反岡 11 地割 18	85 番地	TEL	(019) $638 - 9$	9001			
発行年月	日 200	6年3月27日									
ふりがな	ふりがた	3	1 — ド	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因			
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	0 / "	0 / //	門重知间	門 鱼田	調重原囚			
もとみゃくまどうびー 本宮熊堂B	岩手県盛	岡 03201	LE16 - 2131	39 度	140 度	2005.04.12	2,412 m ²	盛岡南新都市土地			
遺跡第 31 次	古 本 営	a ž 字		21 分	45 分	~		区画整理事業に伴			
	稲荷 44-			40 秒	27 秒	2005.05.31		う緊急発掘調査			
		17									
	ほか). h H-h /	D	Arts 1-Mr							
所収遺跡名	種別	主な時代		遺構		遺物		寺記事項			
本宮熊堂 B遺跡	集落	奈良・	竪穴住居		土	師器	土坑は墓壙の	O可能性がある。			
D退哟		平安時代									
	北上川の支流である雫石川南側河岸段丘面の微高地上に立地する古代の集落遺跡。										
要約	これまで見	ヨ辺からは多数	数の建物が検出さ	れているが、	今回は竪穴住	主居跡1棟だり	い。 けだった。今回	司の調査区は集落の			
	り これまで周辺からは多数の建物が検出されているが、今回は竪穴住居跡 1 棟だけだった。今回の調査区は集落の 縁辺にあたるものと思われる。										
								2 12 - 301 61 - 2 -			

※経度・緯度は世界測地系における数値である。



遺跡遠景(南から)



南側区遺構検出状況(北東から)

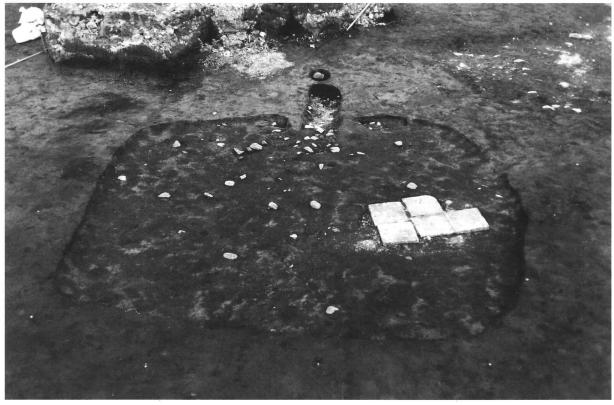
写真図版 1 遺跡遠景・遺構検出状況



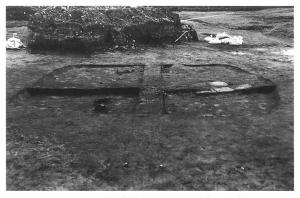
北側調査区検出状況(東から)



基本層序(南側調査区)



RA 137 竪穴住居完掘状況(東から)



RA 137 竪穴住居跡埋土(東から)



RA 137 竪穴住居跡カマド完掘(ひがしから)



RD 237 土坑完掘状況(南から)



RD 237 土坑埋土断面(東から)



RG 144 溝跡完掘状況(東から)



RG 144 溝跡埋土断面(東から)





写真図版 3 検出遺構② 出土遺物





(6) 中村遺跡 第1次調査

所在地 花巻市石鳥谷町八重畑 18 地割 22 番地ほか 遺跡番号・略号 ME 06 - 2387・NM- 04

委託者 花卷地方振興局農林部農村整備室 調査対象面積 1,425 m²

事業名 経営体育成基盤整備事業八重畑地区 **発掘調査面積** 1,580 m²

発掘調査期間 平成 17 年 4 月 8 日~ 5 月 18 日 調査担当者 村上 拓・菅野 梢

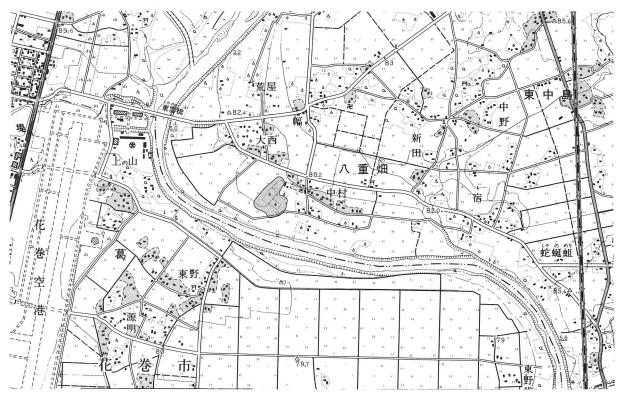
1. 調査に至る経過

中村遺跡は、経営体育成基盤整備事業八重畑地区の実施に伴い、その事業区域内に存することから 発掘調査を実施することになったものである。

本事業地は、花巻市に位置し、一級河川北上川の左岸、稗貫川と添市川に囲まれた平坦な地域であるが、地区内水田は10 a で区画が小さく道路は幅員が狭く土砂道であり、水路は土水路で用排兼用となっているため水利用の合理化が図りにくく、農業機械の大型化、水田の汎用化ができず営農に多大な労力を費やしていた。

このため本事業により、1 ha を標準とする区画の大型化や道路・用排水路の整備を実施し、農地の流動化と担い手農家への集積を進めると共に、農業生産性の向上と農業経営の安定を図るため、平成9年度より371 h a の区画整理を実施している。

当該遺跡については、本事業の施工主体である花巻地方振興局農林部農村整備室からの依頼により 岩手県教育委員会が平成 15、16 年度に試掘調査を実施した。その結果を踏まえ岩手県教育委員会と 協議し、平成 17 年度に財団法人岩手県文化振興事業団と花巻地方振興局農林部農村整備室との間で 委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。 (花巻地方振興局農林部農村整備室)



1:25,000 石鳥谷

第1図 中村遺跡 遺跡の位置

2. 遺跡の位置と立地 (第1図)

中村遺跡は、花巻空港の東方約 1.5 kmに位置し、北上川によって形成された自然堤防上の細長い微高地に立地する。調査区は南北 2 地点に分かれており、北側を A 区、南側を B 区と仮称した。標高は A 区では 78.4 ~ 79.3 m、 B 区では 77.5 ~ 78.6 m を 測る。調査前の現況は A 区は畑と水田、B 区は南縁部が盛土造成による道路、それより北は水田であった。

3. 基本層序 (第2図)

A区はトレンチや風倒木痕の観察などから、 I 層は褐色のシルト(現耕作土)、 II a層は黄褐色の粘土質シルト(洪水堆積層)、 II b層は暗褐色の粘土質シルト、 III a層は暗褐色の粘土質シルト、 III a層は暗褐色の粘土質シルト、 III b層は黒褐色の砂質シルト、 IV層は黄褐色の砂、 V層は暗褐色の砂質シルト、 IV層はにぶい黄褐色の砂である。調査区の北側は北東方向に向かってゆるやかに傾斜しながら下っており、 II ~ III 層はこの範囲にのみ残存していた。その他の区域は IV 層近くまで削平されており、 I 層直下が III ~ IV 層であった。

B区は、I層は褐色の粘土質シルト(現耕作土)、Ⅱ層は暗褐色の砂質シルト(一部盛土を含む旧表土)、Ⅲ層は黄褐色の砂質シルト〜砂(無遺物層)である。

4. 調査の概要

今回の調査では、A区から土坑6基、柱穴6個、遺物包含層が検出された。B区は表土、盛土中から遺物が散発的に出土したのみで全体量はきわめて少なく、遺構は検出されなかった。

(1) 遺構

$A \boxtimes$

< 土坑 > (表 1、第 3~5 図、写真図版 1~3)

いずれも造成による削平を受けてⅣ層近くまで露出していた区域(南西側)での検出である。

各土坑の開口部の平面形は、 $S K 02 \cdot 05 \cdot 06$ は円形、 $S K 04 \cdot 07$ は楕円形、S K 03 は不整形を呈する。遺構埋土にII 層土を含むか($S K 04 \cdot 07$)、含まないか($S K 02 \cdot 03 \cdot 05 \cdot 06$)により分けることができるが、いずれも確実に遺構に伴うと判断できる遺物が出土しておらず、土坑の帰属時期は不明である。

また、調査区中央のSK07は埋土の状況から人為的に埋め戻されたものと判断されることから、埋土から出土した土師器坏底部片(第7図1)もその際に混入したものと考えられる。

表1 A区土坑観察表

遺構名	位置 (グリッド)	開口部径 (長×短:cm)	底面標高 (m)	深さ (cm)	出土遺物 (掲載番号)
S K 02	I A 19 o	112 × 105	79.182	18.3	_
S K 03	I A 19 n	163 × 131	78.844	25.2	_
S K 04	I A 18 n \sim I A 18 o	150 × 141	78.977	35	_
S K 05	I A 17 m \sim I A 18 m	118 × 110	70.986	28.9	_
S K 06	I A 17 m ~ I A 17 n	122 × 121	79.063	25.2	
S K 07	I A 14 j · I A 14 k · I A 15 j	145 × 102	79.048	32.4	土師器坏底部片(1)

※SK 01 は欠番

<柱穴>(表2、第3·5図)

調査区内から6個の柱穴状ピットが検出された。SK07の周辺にのみ分布している。造成による 削平を受けた区域のためか、数が少なく、建物跡を構成する配置を復元するには至らなかった。いず れも出土遺物を伴っておらず、帰属時期は不明である。

表 2 A 区柱穴観察表

No.	位置 (グリッド)	開口部径 (長×短:cm)	底面標高 (m)	深さ (cm)	掘り方埋土	柱痕跡
P01	I A15 k	31 × 30	78.825	42.4	10 Y R 2/3 ~ 3/3 砂質シルト	
P02	I A15 l	34 × 34	78.914	37.9	10 Y R 2/3 ~ 3/3 砂質シルト	10 Y R 3/3 粘土質シルト
P03	I A14 k	45 × 38	79.006	35.2	10 Y R 2/3 ~ 3/3 砂質シルト	_
P04	I A15 k	32 × 30	79.032	31.3	10 Y R 2/3 ~ 3/3 砂質シルト	_
P06	I A15 k	50 × 46	79.135	17.9	10 Y R 2/3 ~ 3/3 砂質シルト	_
P07	I A15 j	32 × 27	79.25	11.9	10 Y R 2/3 ~ 3/3 砂質シルト	_

※ P05 は欠番。

<遺物包含層>(第6図、写真図版3)

IA11 j グリッドから IA19 p グリッドまでを結んだライン (おおよそ標高 79.3 mの等高線と一致する) より北東部の約 480 m²の範囲で検出した。本調査区が立地している微高地が北東側へ向かってゆるやかに傾斜しながら下っているため、この範囲だけ遺物包含層が造成の際の削平を受けていなかったと考えられる。

精査方法は、人力でスコップとジョレンを用い、小グリッド($4 \times 4 \,\mathrm{m}^2$)単位で一層ごとに $\mathrm{II}\, a$ 層上面まで掘り下げていった。一つの層を掘り下げ終わるごとに、遺構の有無の確認を行った。出土した遺物は全体の出土状況を把握するために、原則としてすぐには取り上げずに残し、遺物の出土状況の記録写真を撮影し、出土地点の図面の記録を行いながら遺物を取り上げていく方針をとった。また、精査中に出土位置から動いてしまったものは、小グリッドごとに「 $\mathrm{II}\, \sim \mathrm{III}\, a}\, \mathrm{III}\, a$ 層一括」としてまとめて袋に入れた。

II 層は洪水堆積層で、北側の斜面下になるほど厚く残存している。おそらく短期間に数度の堆積があったものと考えられる。調査では遺物の出土層位を「 $II \sim III$ a 層一括」としたが、遺物の分布が面的に広がるのは II b 層上面のみであり、これに一部 II a 層下部のものを含んでいる。 II a 層下部の遺物は II b 層上面に分布する遺物が二次的な堆積(再堆積)をしたものと考えられる。 II b 層上面の出土状況は低密度ながら面的な広がりをもち、なおかつ復元可能な個体が点在するような様相を呈することから、廃棄時の原位置を保っているものと考えられる。

Ⅱ b層以下については北東部全体をⅢ a層上面まで掘り下げ遺構検出を試みたが、結果的に遺構は 検出されなかった。

遺物分布面を覆う洪水堆積層(II a 層)は、風倒木痕の断面観察から本来調査区全体に堆積していたことが明らかである。しかし、遺構の分布が想定される微高地頂部(南西部)は、造成によりIV層近くまで削平を受けていた。今回出土した遺物と同時期の遺構はこの造成によって失われた可能性があると考えられる。

B 区 (第6図、写真図版1)

調査ではまず I 層と II 層を重機で除去し、遺構検出面と想定された III 層を露出させた。その結果、本調査区は南側低位面へ落ち込む崖上の縁辺部に位置し、南縁の現道は低位部に盛土を施して構築されたものであり、また現水田範囲は全面削平を受けていることが判明した。

このあと、調査区全域で遺構検出を行ったが、Ⅲ層上面において遺構と認定できる痕跡は検出され

なかった。また、本調査区西側南縁および東側中央付近にトレンチを設定しⅢ層以下の確認を行ったが、埋蔵文化財を包蔵する土層の堆積は認められなかった。

遺物は、表土・盛土中から散発的に出土するのみで全体量はきわめて少なく、出土状況に考古学的な有意性を見出せる個体は認められなかった。

(2)遺物

出土遺物の総量は大コンテナ($42 \times 32 \times 30$ cm) 3 箱である。掲載遺物は土器 54 点(縄文土器 53 点・土師器 1 点)、石器 7 点である。遺構内出土土器は 1 のみで、 S K 07 埋土からの出土の土師器坏底部である。 $2 \sim 54$ は遺構外出土土器であり、54 がB区の検出面出土の遺物であるほかは A 区北東部の遺物包含層からの出土である。石器はすべて遺構外からの出土である。

<土師器>SK07から1点出土しており、掲載している(1)。坏底部で、底部の切り離しには回転 糸切り技法が用いられている。

<縄文土器>すべて晩期中葉~末葉の土器であると思われる。完形に近い形で復元できたものも見られたが、ほとんどが破片である。掲載および記述にあたっては、時期を特定できたもの… I 群、時期を明確にできない土器… II 群の区分を行った。 I 群の中での小分類は 1 類、2 類…、として記載した。 I 群 1 類…晩期中葉期の土器群で、大洞 C 2 式に比定されるものである(4・13・15・34・37・41・43)。15・34・37・41・43 は粗製の深鉢であるが、いずれも僅かながら装飾が加えられている。 口縁部は外傾して立ち上がり、数条の平行沈線が巡らされている。 口唇部には刻みや押圧が施されている。 41 は山形突起をもち、口縁部内面に沈線が施されている。 4 は A 突起と B 突起をもち(4 単位か?)、胴部上半に刺突列、平行沈線、連弧状沈線が施されている鉢である。13 は口唇部に刻み、口縁部に沈線が施されている。また、4 と 13 は晩期の中でも 1 時期新しい大洞 A 式に分類される可能性がある。

- ・ I 群 2 類…晩期後葉期の土器群で、大洞 A 式に比定されるものである($12 \cdot 14 \cdot 29 \cdot 38 \cdot 42 \cdot 44 \cdot 45 \cdot 48 \cdot 52$)。 $12 \cdot 29 \cdot 38 \cdot 52$ は深鉢であるが、いずれも口唇部は押圧や沈線が施されている。胴部は縄文のみが施されているものが多い。 $42 \cdot 44 \cdot 45$ は文様の特徴から大洞 A 式の中でも新しい時期に分類される可能性がある。14 は胴部上半に平行沈線と粘土粒が施されていることから、次の大洞 A 、式に帰属する可能性がある。
- ・I 群 3 類…晩期後葉期の土器群で、大洞 A '式に比定されるものである $(9 \cdot 24 \cdot 36)$ 。いずれも浅鉢で、変形工字文が施されている。
- ・ Ⅱ 群…時期を明確にできない土器群である(2・3・5~8・10・11・16~23・25~28・30~33・35・39・40・46・47・49~51・53・54)。深鉢・鉢・台付鉢・壷が見られる。ただし、5の深鉢は晩期後半、7の深鉢と28の浅鉢は晩期後葉~末の時期に分類される可能性がある。

<石器> $55 \cdot 56$ は石鏃でどちらも有茎のものである。57 は石匙で両面加工されている。 $58 \cdot 61$ は不定形石器で 58 は両面に加工が施されている。 $59 \cdot 60$ は打製石斧で、60 は一側縁に両面加工が施されている。

5. まとめ

調査成果の概要を以下に列記し、まとめとしたい。

- ・A区南西部では土坑と柱穴状ピットが検出されたが、遺構の時期を特定する遺物が出土しなかった ため、帰属時期は不明である。
- ・A区北東部では洪水堆積層に覆われた遺物分布面が検出された。出土した遺物は縄文時代晩期中葉から晩期末葉と考えられる。

- ・A区は南西部が造成によって削平されていたが、北東部で確認された洪水堆積層は調査区全体に堆積していたと判断できる。北東部で出土した遺物と同時期の遺構は削平された南西部に分布していた可能性がある。
- ・B区は南側低位面へ落ち込む崖上の縁辺部に位置し、造成により全面削平を受けており、遺構は検出されなかった。

なお、中村遺跡第1次調査に関わる報告は、これをもってすべてとする。

<参考文献>

側岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

1997『上鷹生遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 253 集(以下第○集と略す)

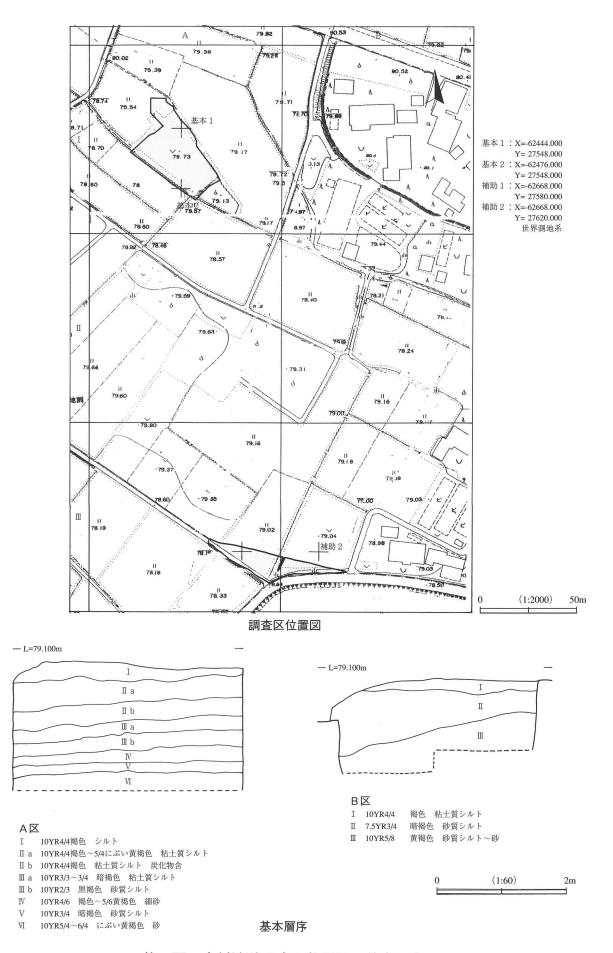
2000 『川岸場Ⅱ遺跡発掘調査報告書』第 317 集

2000 『峠山牧場 I 遺跡 B 地区発掘調査報告書』第 320 集

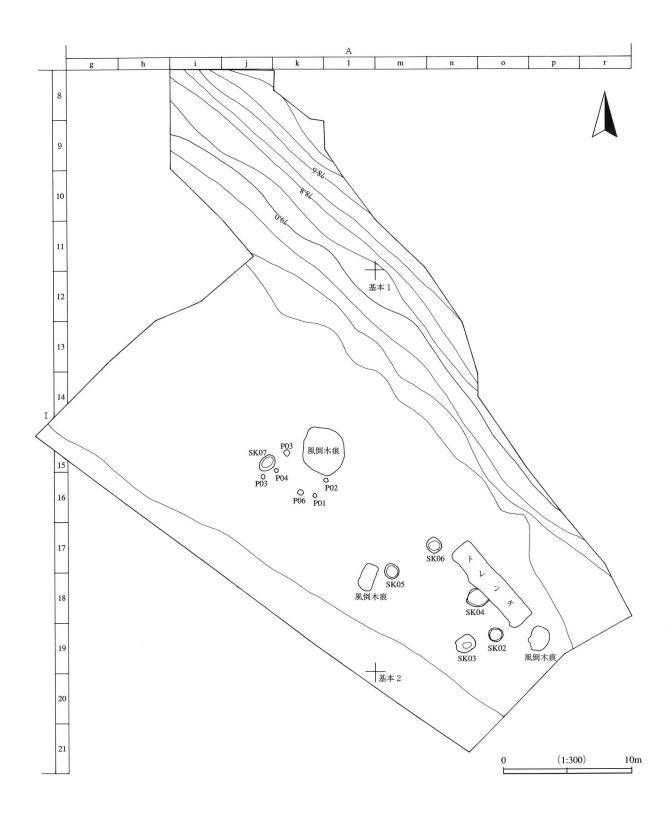
報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうなな	ねんどは	っくつちょう	さほうこ	くしょ			······································
書 名	平成 17 年度発掘調	查報告書				1000	The second secon	
副書名								
巻次				13336				
シリーズ名	岩手県文化振興事業	美団埋蔵文/	化財調査報告	書				
シリーズ番号	第 490 集							
編著者名	菅野 梢							
編集機関	(財) 岩手県文化振	興事業団坦	蔵文化財セ	ンター				
所 在 地	〒 020 - 0853 岩雪	手県盛岡市	下飯岡 11 地	割 185 番	地 TEL	(019) $638 - 9$	0001	
発行年月日	2006年3月27日							
ふりがな	ふりがな	コ	ード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	0 7 11	0 / "	列红形 月	神生山頂	嗣
中村遺跡 第1次調査	岩手県花巻巻市石島 岩手県花巻市石島 谷町八重畑 18 地 約 22 番地ほか	03205	ME06-2387	39 度 25 分 45 秒	141 度 10 分 26 秒	2005.04.08 ~ 2005.05.18	1,580 m²	経営体育成基盤整備 事業「八重畑地区」 に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺	構	É	Eな遺物		特記事項
中村遺跡 第1次調査	散布地	縄文時代 時期不明	遺物包含層 土坑6基 柱穴状土均		縄文	土器・石器		
要約	本遺跡は、花巻市石 した結果、北側の調	5鳥谷町八 査区で低	重畑に所在し 密度ではある	、北上川 が縄文時	東岸の自 代晩期の	自然堤防上に立)遺物包含層が植	地する。遺跡 食出された。	かの南北2地点を調査

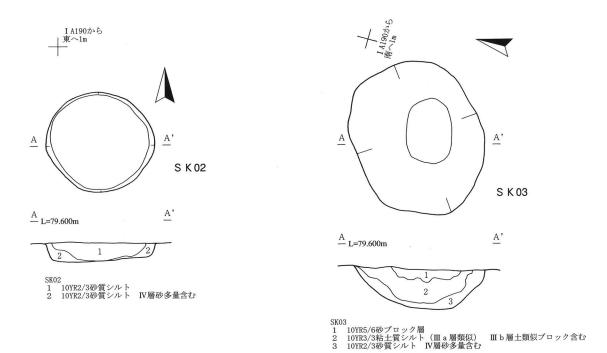
※経度・緯度は世界測地系における数値である。

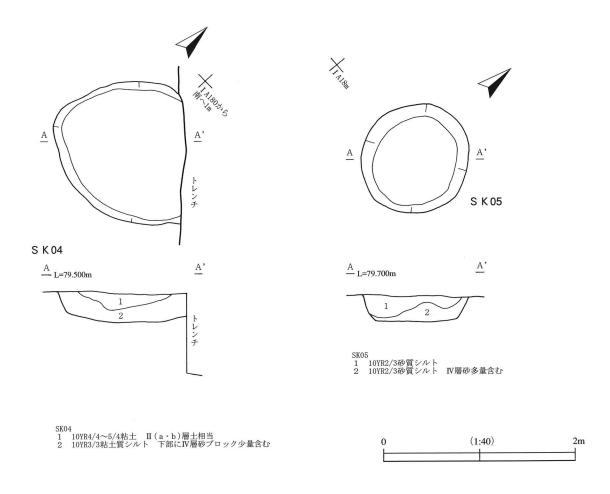


第2図 中村遺跡調査区位置図・基本層序

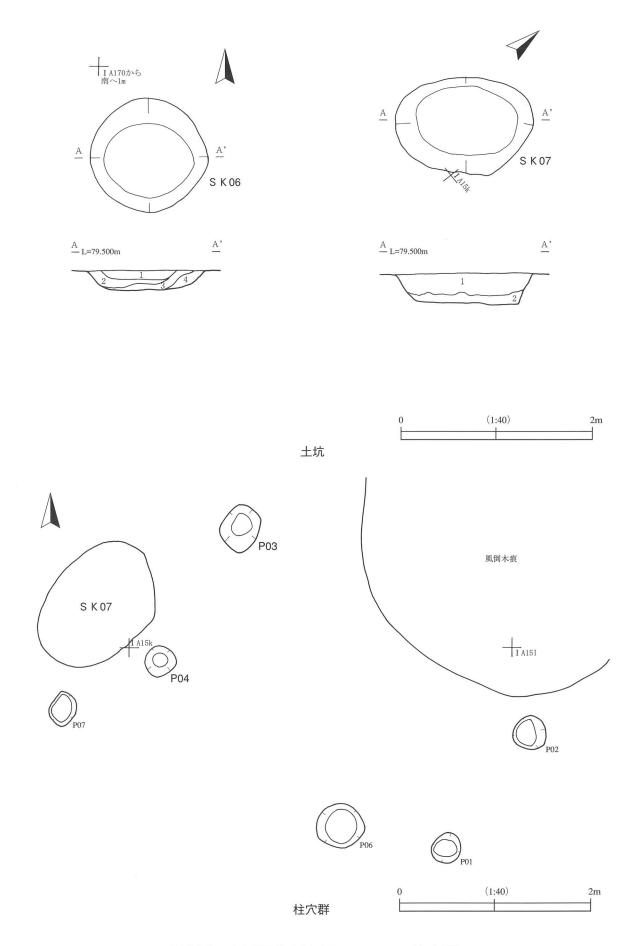


第3図 中村遺跡A区遺構配置図

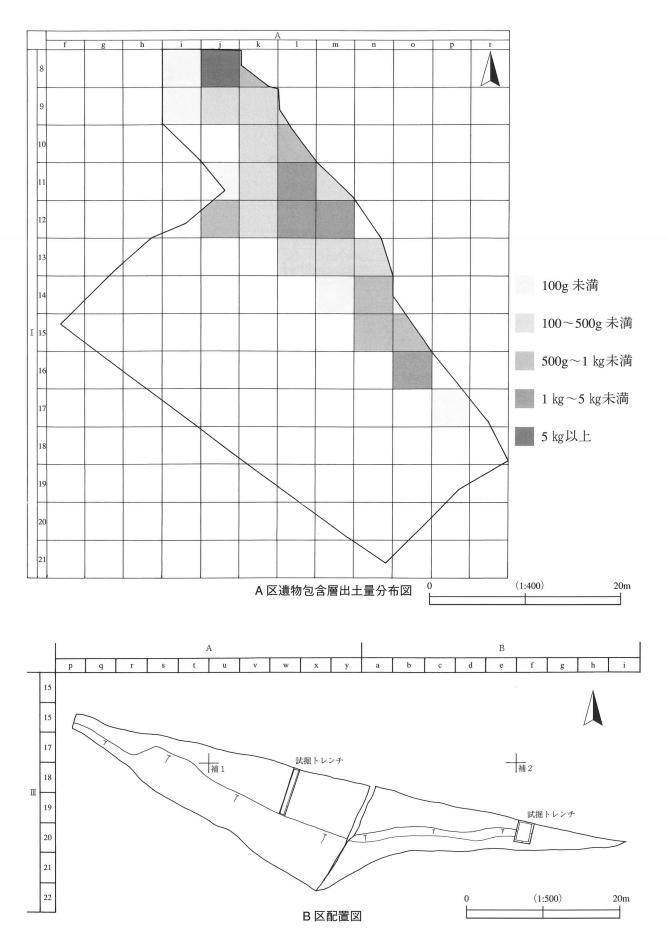




第4図 中村遺跡土坑SK 02~05



第5回 中村遺跡土坑SK 06·07、柱穴群



第6回 中村遺跡A区遺物包含層出土量分布図、B区配置図

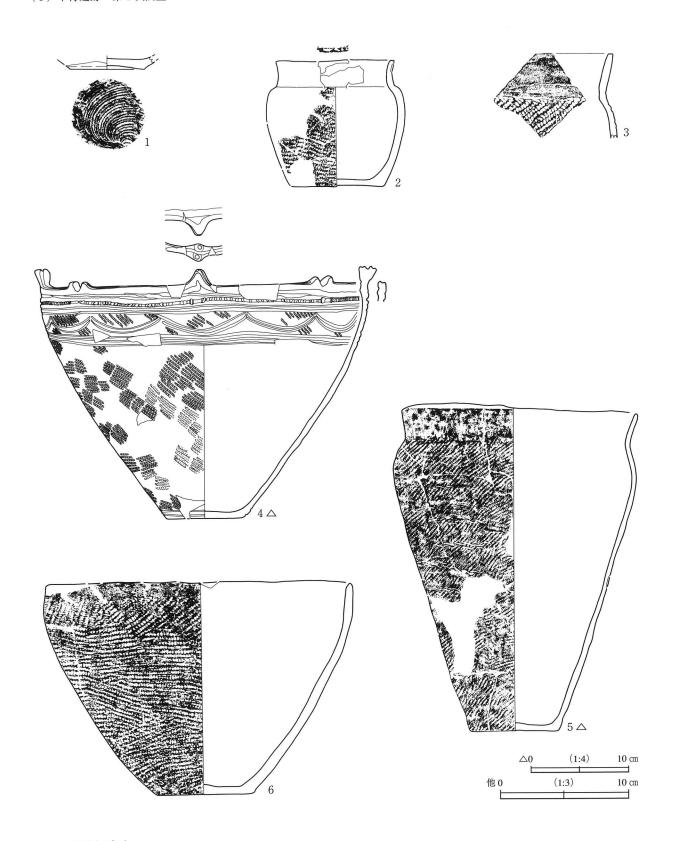


表 3 遺物観察表

No.	出土位置 (遺構名・グリッド)	その他の破片のグリッド	器種·部位	特徴	時期
1	A区 SK07 埋土	=	土師器坏・底部	底部:回転糸切り	平安時代
2	I A 8 j	=	深鉢・口~底	口唇刻み?、口縁無文、縄文LR	II
3	I A 8 j	IA8k	深鉢・口~胴	口縁無文、縄文LR	П
4	I A 8 j	-	鉢・ほぼ完形	口唇沈線、平行沈線、連弧状沈線、縄文RL	I - 1
5	I A 8 j	IA8k·IA9k	深鉢・ほぼ完形	口縁無文、縄文LR	П
6	I A 8 j	a =	鉢・ほぼ完形	口縁無文、縄文LR	П

第7図 中村遺跡出土遺物(1)

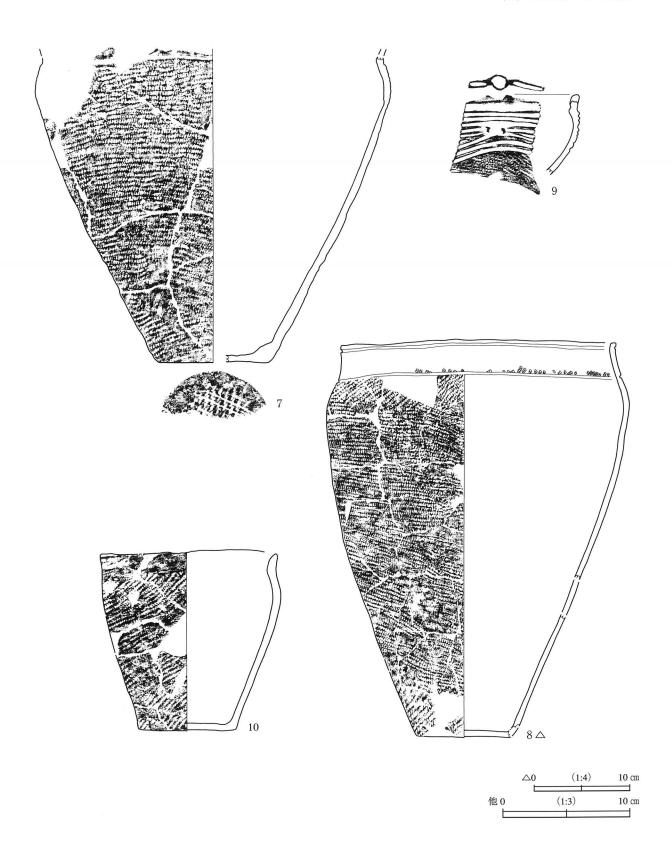


表 4 遺物観察表

No.	出土位置(遺構名・グリッド)	その他の破片のグリッド	器種·部位	特徵	時期
7	I A 8 j	-	深鉢・胴~底	沈線、底部:網代痕、縄文LR	Π
8	I A 8 j	_	深鉢・ほぼ完形	平行沈線、縄文LR	II
9	I A 9 k	=	浅鉢?・口縁部	口唇部沈線、口縁内沈線、変形工字文	I - 3
10	I A 10 l	=	深鉢・口~底	口縁部無文、縄文LR	II

第8図 中村遺跡出土遺物(2)



表 5 遺物観察表

No.	出土位置(遺構名・グリッド)	その他の破片のグリッド	器種·部位	特徴	時期
11	I A 11 k	-	深鉢・口~胴	口縁無文、縄文LR	П
12	I A 11 l	_	深鉢・口~底	口唇施紋、波状口縁、縄文LR	I - 2
13	I A 11 l		浅鉢・口~底	口唇刻み、沈線、ミガキ?	I - 1
14	I A 11 l	I A 12 1 · I A 16 o	深鉢・口~胴	口唇沈線、口縁内沈線、波状口縁、平行沈線、粘土瘤、縄文LR	I - 2
15	I A 11 l	I A 12 l · I A 12 m	深鉢・口~胴	平行沈線、口唇部、縄文LR	I - 1

第9図 中村遺跡出土遺物(3)

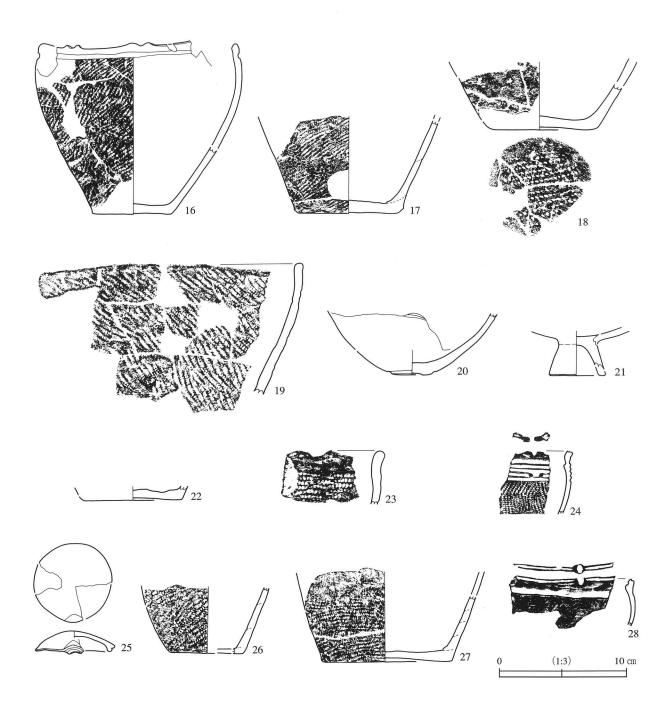


表 6 遺物観察表

No.	出土位置(遺構名・グリッド)	その他の破片のグリッド	器種·部位	特徴	時期
16	I A 11 l	_	深鉢・口~底	山形突起、沈線、縄文LR	П
17	I A 11 m	I A 12 m	深鉢・胴~底	輪積痕、縄文LR	П
18	I A 12 j	V—V	深鉢・胴~底	器面磨耗、底部:網代痕	П
19	I A 12 j	-	鉢・口~胴	地紋のみ、縄文RL	П
20	I A 12 l	_	浅鉢? · 胴~底	沈線	П
21	I A 12 1	_	台付鉢	脚部:ミガキ?	П
22	I A 12 l	1—9	深鉢・底部片	縄文RL	П
23	I A 12 1	_	深鉢? · 口縁部片	波状口縁?·縄文LR	П
24	I A 12 l	1-1	浅鉢	B突起、口唇沈線、変形工字文	I - 3
25	I A 12 m	-	蓋?		П
26	I A 12 m	I A 9 h	深鉢・胴~底	輪積痕、縄文LR	П
27	I A 12 m	(-	深鉢・胴~底	輪積痕、縄文LR	П
28	I A 12 m	*	浅鉢・口縁部片	口唇·口縁内沈線、縄文LR?	П

第10図 中村遺跡出土遺物(4)

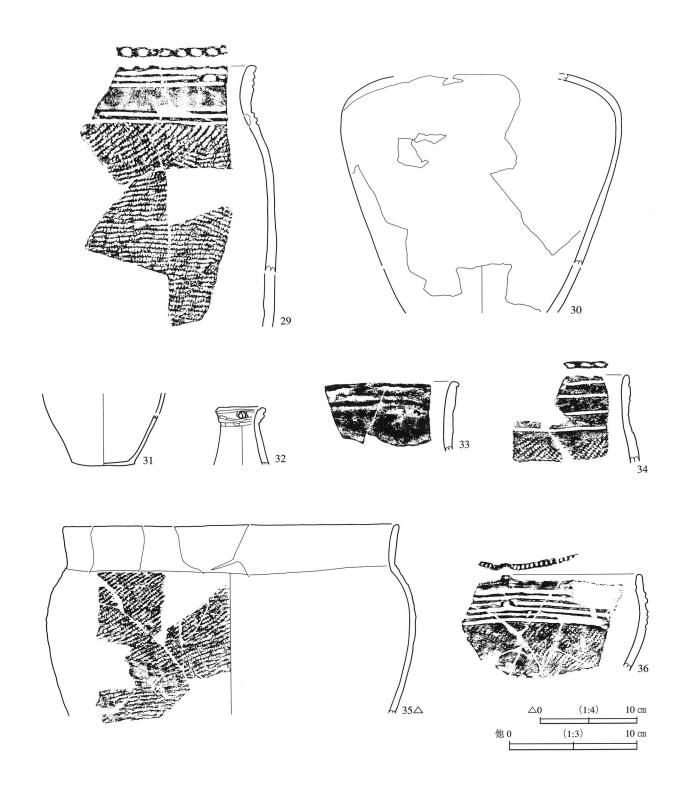


表 7 遺物観察表

No.	出土位置(遺構名・グリッド)	その他の破片のグリッド	器種·部位	特徵	時期
29	I A 12 m	=	深鉢・口~胴	小波状口縁、平行沈線、縄文LR	I - 2
30	I A 12 m	I A 10 l	壷・胴	摩滅激しい	П
31	I A 12 m	_	深鉢・胴~底	ミガキ・ケズリ	П
32	I A 12 m	\ <u></u>	壷・口縁部	平行沈線	П
33	I A 12 m	I A 12 l	深鉢?・口縁部片	浅い沈線?	П
34	I A 13 l	-	深鉢・口縁部片	口唇刻み・平行沈線・縄文LR	I - 1
35	I A 13 m	I A 12 m	深鉢・口~胴	口縁無文、縄文LR	П
36	I A 13 m	-	浅鉢・口~胴	口唇刻み、平行沈線	I - 3

第11図 中村遺跡出土遺物(5)

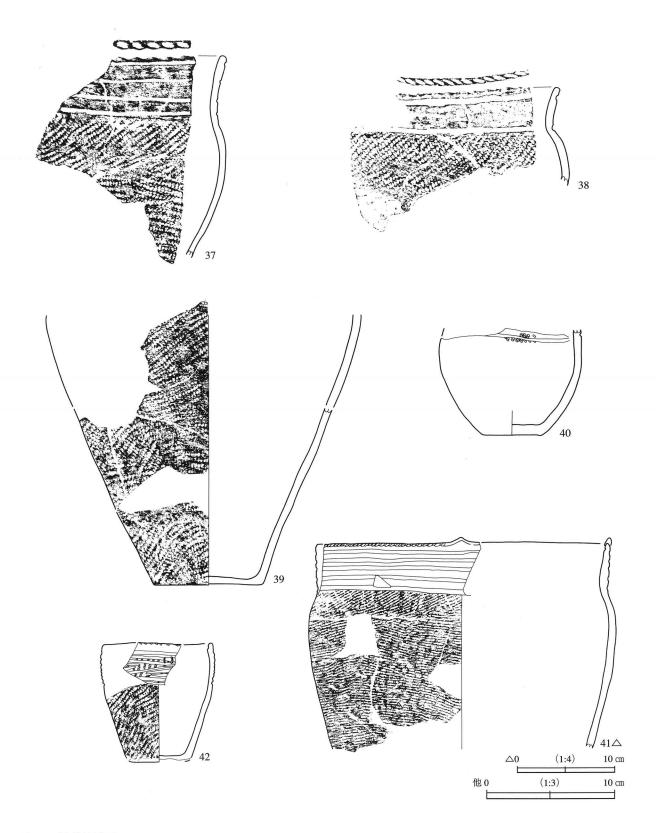


表 8 遺物観察表

No.	出土位置 (遺構名・グリッド)	その他の破片のグリッド	器種·部位	特徴	時期
37	I A 13 m	-	深鉢・口~胴	小波状口縁、平行沈線、縄文LR	I - 1
38	I A 14 n	I A 13 n	深鉢・口~胴	小波状口縁、平行沈線、縄文LR	I - 2
39	I A 14 n	I A 15 n	深鉢・胴~底	地紋のみ、縄文LR	П
40	I A 15 n	_	深鉢・胴~底	沈線、	П
41	I A 15 n	I A 14 n	深鉢・口~底	口唇刻み、沈線、縄文LR	I - 1
42	I A 15 o	_	深鉢・口~胴	口唇刻み、山形突起、平行沈線	I - 2

第12図 中村遺跡出土遺物(6)

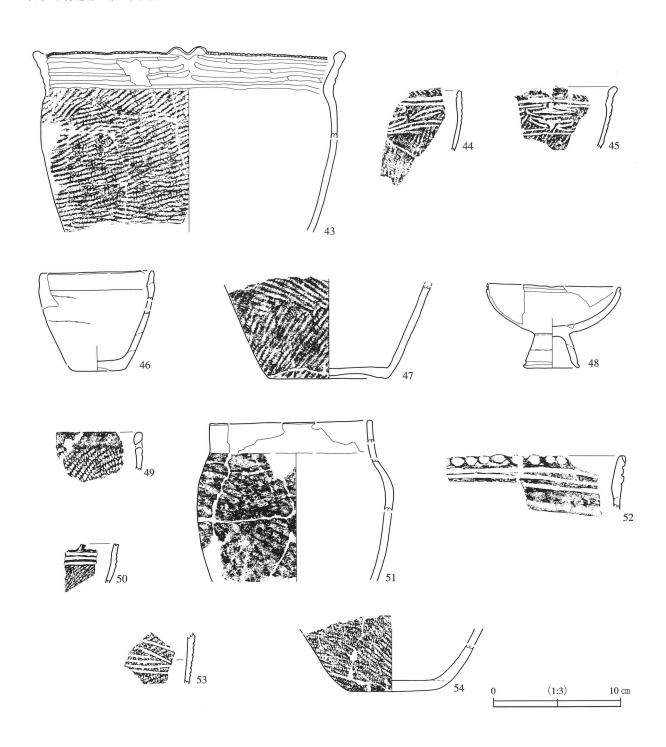


表 9 遺物観察表

10	(A) [10] E) [10]					
No.	出土位置 (遺構名・グリッド)	その他の破片のグリッド	器種·部位	特徵		時期
43	I A 16 o	-	深鉢・口~胴	口唇刻み、B突起、平行沈線、縄文LR		I - 1
44	I A 16 o	-	浅鉢・口~胴	口唇刻み、沈線、縄文LR	※ No.45 と同一個体	I - 2
45	I A 16 o	_	鉢・口縁部破片	B突起、変形工字文?	※ No.44 と同一個体	I - 2
46	I A 16 o	_	鉢・口~底	摩滅激しい、ケズリ?、輪積痕		П
47	I A 16 o	=	深鉢·胴~底	地紋のみ、縄文LR		II
48	I A 16 o	=	台付鉢	沈線、輪積痕		I - 2
49	I A 16 o	_	深鉢? · 口縁部破片	口縁無文、補修孔、縄文LR		П
50	I A 16 p	_	浅鉢・口縁部破片	突起、平行沈線、RR短条絡		П
51	I A 16 p	I A 16 o	深鉢・口~胴	口縁無文		П
52	A区北東部 検出面	I A 8 i	深鉢・口縁部破片	口唇部押圧痕、平行沈線		I - 2
53	A区北東部 検出面	_	深鉢・胴部片	沈線、縄文LR		П
54	ⅢB 19 b 検出面	B区中央 検出面	深鉢・胴~底	輪積痕、地紋のみ、縄文RL		П

第13図 中村遺跡出土遺物(7)

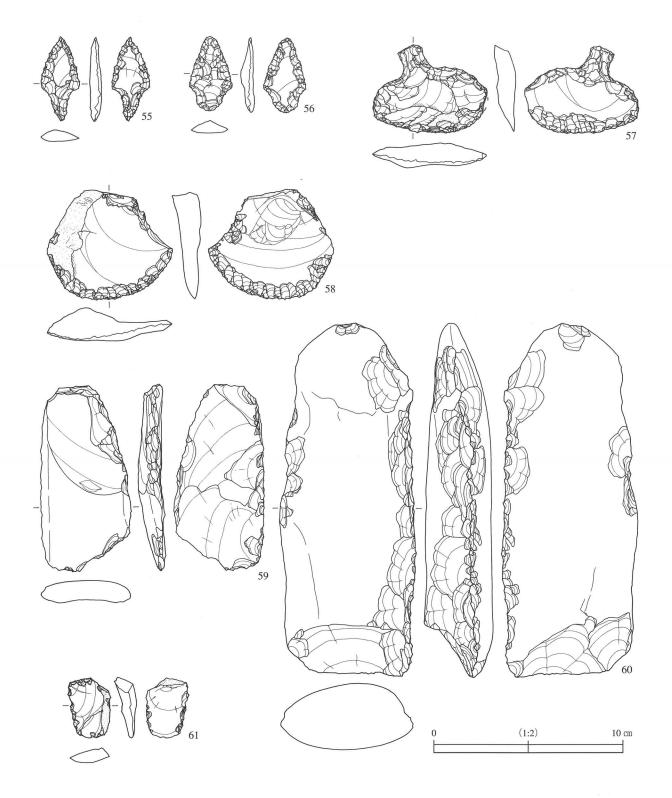


表 10 遺物観察表

No.	出土位置	器種		計測値 (cm)		重量 (g)	特徴など
NO.	山工匠匠	布产生	長さ	幅	厚さ	里里(g)	村政など
55	I A 12 m	石鏃	4.5	2	0.6	4.3	石材: 頁岩(北上山地·古生代)
56	I A 12 m	石鏃	4	2.3	0.7	4.58	石材: 頁岩(北上山地·古生代)
57	I A 9 k	石匙	4.65	6.1	1.3	27.5	石材: 頁岩(北上山地·古生代)
58	A区北東部 検出面	不定形石器	5.8	6.6	1.55	45.5	石材: 頁岩(北上山地·古生代)
59	A区 表土	打製石斧	9.9	4.85	1.4	75.4	石材:凝灰岩(北上山地·古生代)
60	A区北東部 検出面	打製石斧	18.7	7.1	3.5	656.4	石材: 頁岩(北上山地·古生代)
61	A区 表採	不定形石器	3.2	2.3	1.2	6.2	石材: 頁岩(北上山地·古生代)

第14図 中村遺跡出土遺物(8)

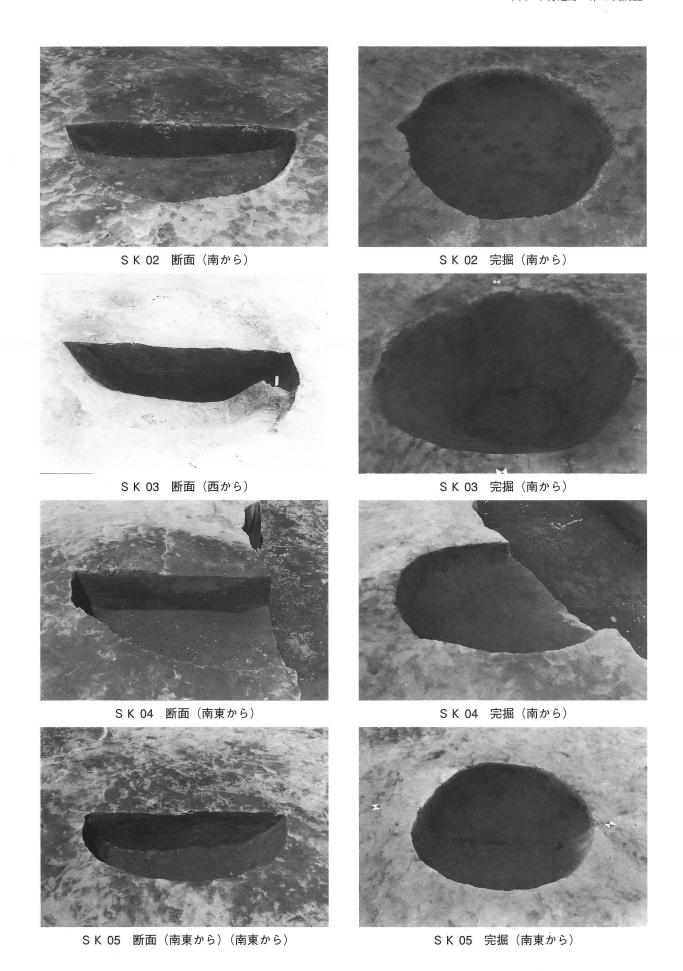


A区 全景(南東から)

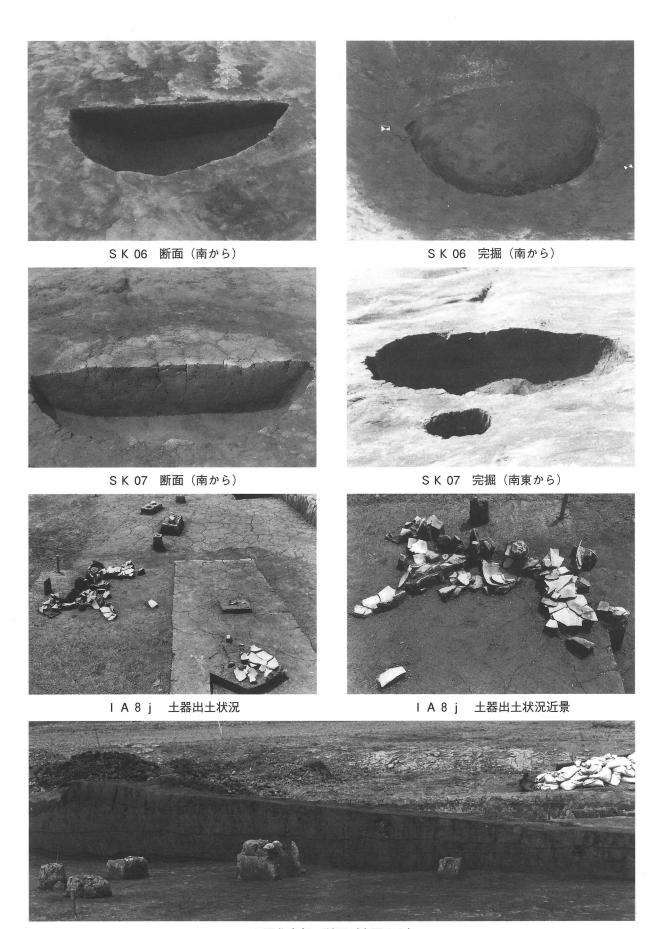


B区 全景(東から)

写真図版1 中村遺跡検出遺構(1)



写真図版2 中村遺跡検出遺構(2)

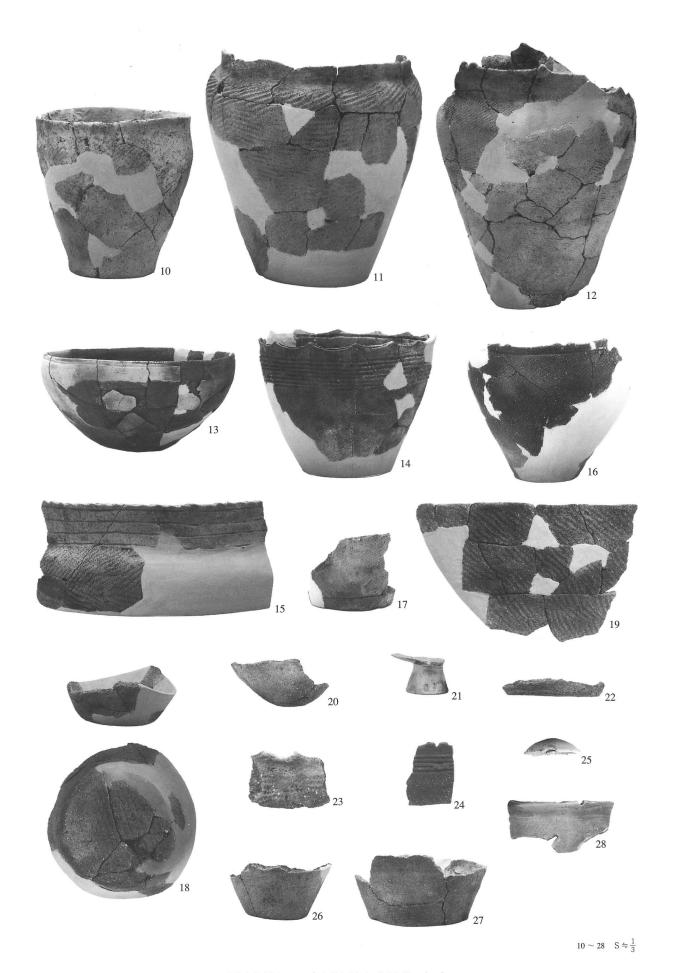


A区北東部 断面(南西から)

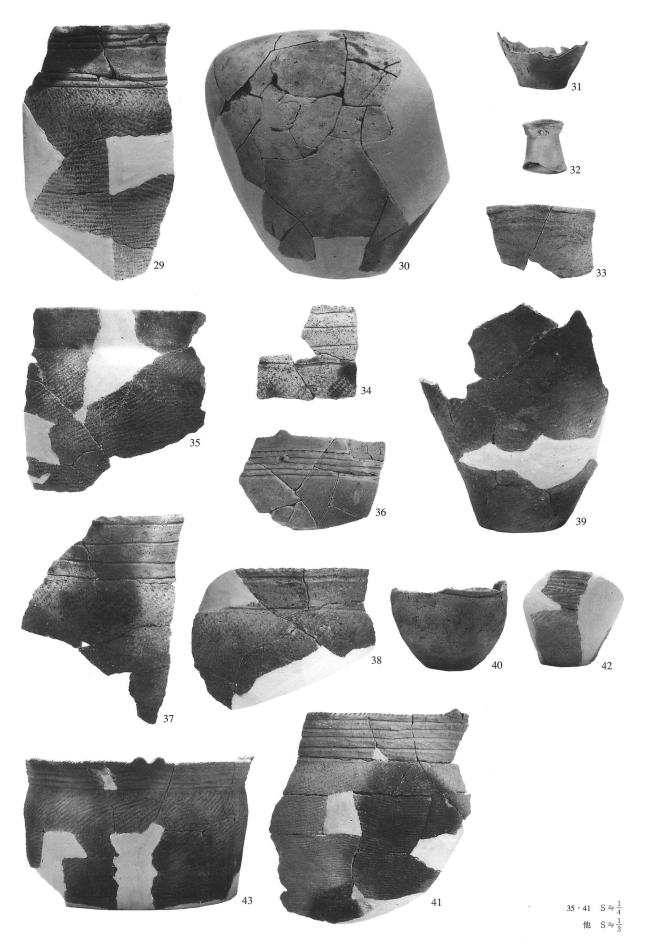
写真図版 3 中村遺跡検出遺構 (3)



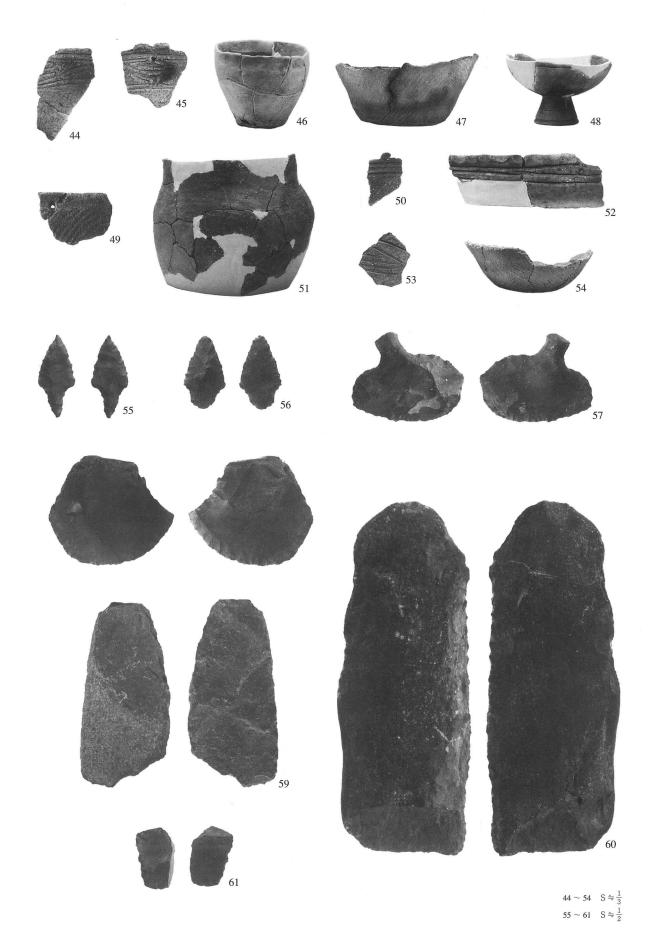
写真図版 4 中村遺跡出土遺物(1)



写真図版 5 中村遺跡出土遺物 (2)



写真図版 6 中村遺跡出土遺物 (3)



(7) 道上遺跡 第1次調査

所 在 地 奥州市前沢区白山字胎内64ほか

委 託 者 水沢地方振興局農政部農村整備室

事 業 名 経営体育成基盤整備事業白山地区

発掘調査期間 平成17年7月1日~10月24日

遺跡番号·略号 NE47-0045·DU-05

調查対象面積 8,800 m2

発掘調査面積 8,269 m²

調查担当者 川又 晋·村上 拓·菅野 梢

1. 調査にいたる経過

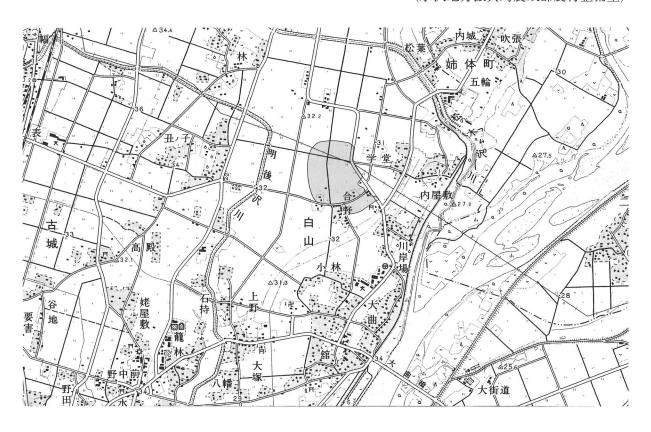
道上遺跡は、経営体育成基盤整備事業白山地区の施行に伴い、事業区域内に位置することから、埋蔵文化財調査を実施することになったものである。

本事業は、奥州市前沢区白山地内の約270haをほ場整備するもので、大部分は昭和29年~31年の非補助土地改良事業により10 a区画に整備されているが、農地幅員が2~3mと狭小で農作業の効率が悪く、水路は用排兼用土水路のため、用水不足や排水不良をきたし、維持管理に多大な労力を投じている現状である。よって本事業により営農規模拡大を目指した大区画ほ場とし、作業体系の受委託及び農地の流動化を促進し、経営規模拡大による担い手農家の育成を図ると共に、生産コスト低減のための整備を行い近代農業化による農業経営の安定を期するものである。

本事業の施行に係る埋蔵文化財の取扱いについては、ほ場整備事業主体の水沢地方振興局農政部農村整備室が、平成15年12月3日付け水地農整第663-1号で県教育委員会に試掘調査を依頼した。

依頼を受けた県教育委員会は、平成 15 年 12 月 24 日付け教生第 1550 号で回答を行い、発掘調査が必要となった。これを受けて財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに発掘調査を委託することになった。

(水沢地方振興局農政部農村整備室)



第1図 道上遺跡の位置(1:25000前沢)

2. 遺跡の位置と立地

道上遺跡は、JR陸中折居駅の南東約2.3 kmに位置する。北上川右岸の沖積平野上の微高地に立地し、標高は31m前後である。東約1 kmには北上川が南流する。調査区の現況は、水田・畑地であった。水田は、昭和30年代頃の区画整理事業によって、旧地形を削平・盛土して造成されたものである。調査区内には南北に走る旧河道が2本確認されており、遺跡内の地形は旧河道部分とそれに挟まれた微高地部分とに分かれる。近隣の遺跡としては、西に川前遺跡、北東に学堂遺跡、南東に学堂Ⅱ遺跡、南に合野遺跡が確認されている。

3. 基本層序

I層は水田の耕作土層、Ⅱ層は水田造成時の盛土層で、近現代に形成された層とみられる。Ⅲ層の黒褐色シルトは旧表土で、遺構埋土はこれを主体とする。Ⅳ層は褐色のシルトで、地山である。遺構検出はⅣ層上面で行った。地点によってはⅢ層が削平されており、I層直下にⅣ層が表出する。

I層 水田耕作土層 層厚 20 cm

Ⅱ層 盛土層 層厚 0 ~ 80 cm

Ⅲ層 旧表土層 層厚 0~20 cm 10YR2/2 (黒褐色) シルト 粘性やや有 しまり有

IV層 地山層 層厚不明 10YR4/3 (褐色) シルト 粘性有 しまり強

4. 調査の概要

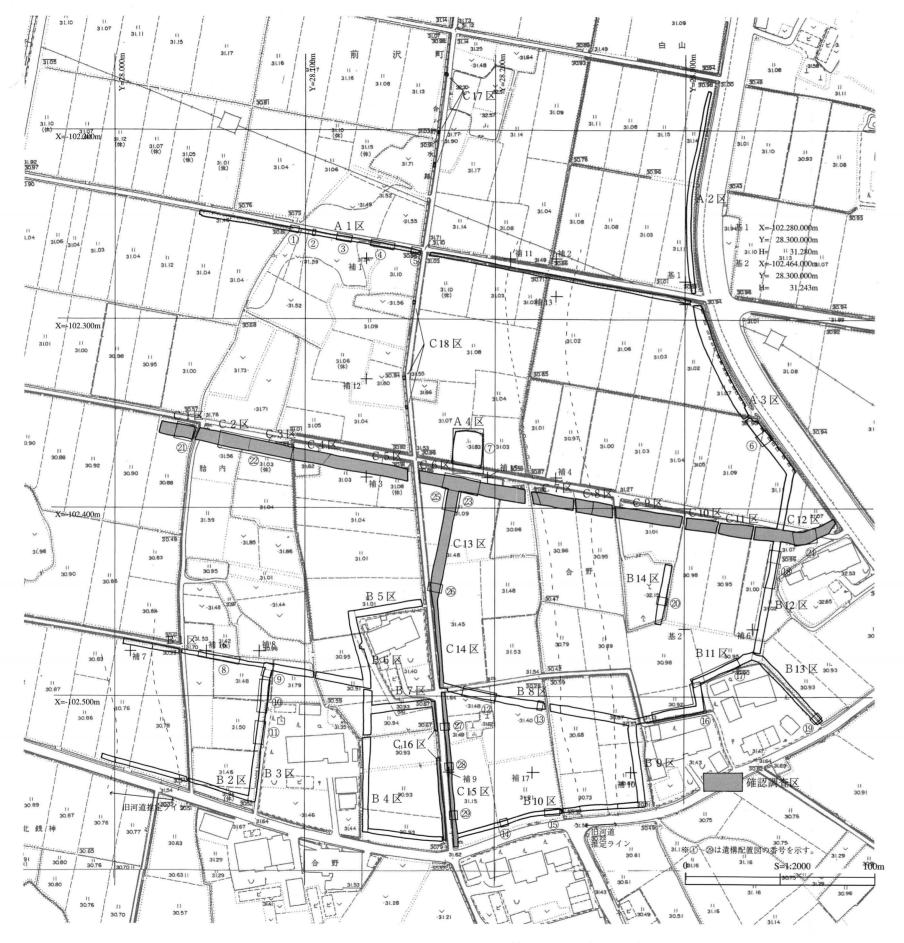
調査対象となったのは、ほ場整備事業に伴い道路・水路が建設予定となった範囲で、総面積 8,269 m^2 である。このうち、水路建設予定部分の 4,970 m^2 は遺構精査までの本調査、道路建設予定部分の 3,299 m^2 は遺構検出までの確認調査を行っている。上記のような調査原因に基づくため、調査区は幅 $2\,m\cdot 4\,m\cdot 7\,m$ などの細長い範囲に限られ、遺跡内を網目状に巡る格好となっている。調査の便宜上、北側の本調査区をA区、南側の本調査区をB区とし、確認調査区はC区とした。A・B・Cの各区は、現水田の区割りである畦畔などを目安にして、A1~A4区、B1~B14区、C1~C19区のように細分した。遺構名は、「A1区SK01」のように、検出した区ごとに名付けた。グリッドは、国家座標第 X 系に合わせて打設した基準杭をもとに、100 × 100 mの大グリッドと、それをさらに細分した 4×4 mの小グリッドを設定した。各調査区の名称、グリッドの配置等は第 2 図に示した。なお、調査区が広汎であり、紙数の制限もあることから、遺構配置図は遺構の分布する範囲のみに限り、縮尺 100分の 1(確認調査区は 200分の 1)で掲載している(第 $3\sim 7\cdot 12$ 図、配置図①~②)。

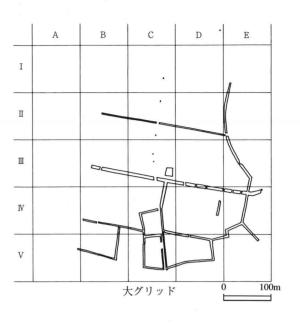
(1) 本調査区の遺構

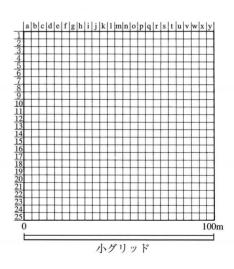
本調査区($A1\sim A4$ 区、 $B1\sim B14$ 区)で検出した遺構は、竪穴住居跡 2 棟、住居状遺構 3 棟、土坑 15 基、溝跡 2 条、柱穴状小土坑 472 個を数える。ただし、A2 区 $B4\sim 7$ 区 B9 区 では、遺構は確認されず、A2 区 B4 区 B5 区 B7 区においては遺物も出土していない。なお、A3 区の東辺部分は、現況において用水路の U 字溝が敷設されていたが、U 字溝を撤去し部分的にトレンチを入れたところ、遺構検出面より $30\sim 40$ cm深く削平され、砂利が詰められている状況であった。水路構築時に削平されたものとみられるが、遺構の遺存する可能性は低いとみられたため、部分的なトレンチのみで調査を終了している。

(i)竪穴住居跡

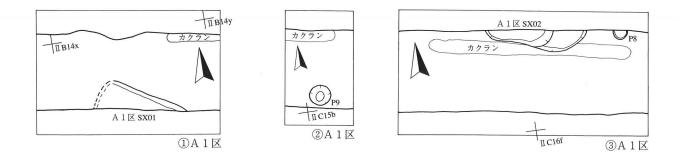
A4区SI 01 竪穴住居跡(第9図・写真図版1) Ⅲ С 19 ∨グリッドに位置する。確認できたの

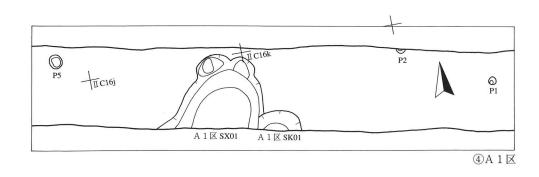


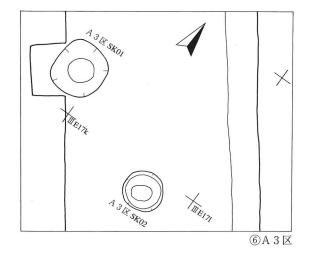


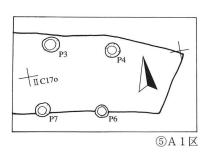


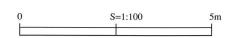
第2図 調査区・グリッド配置図

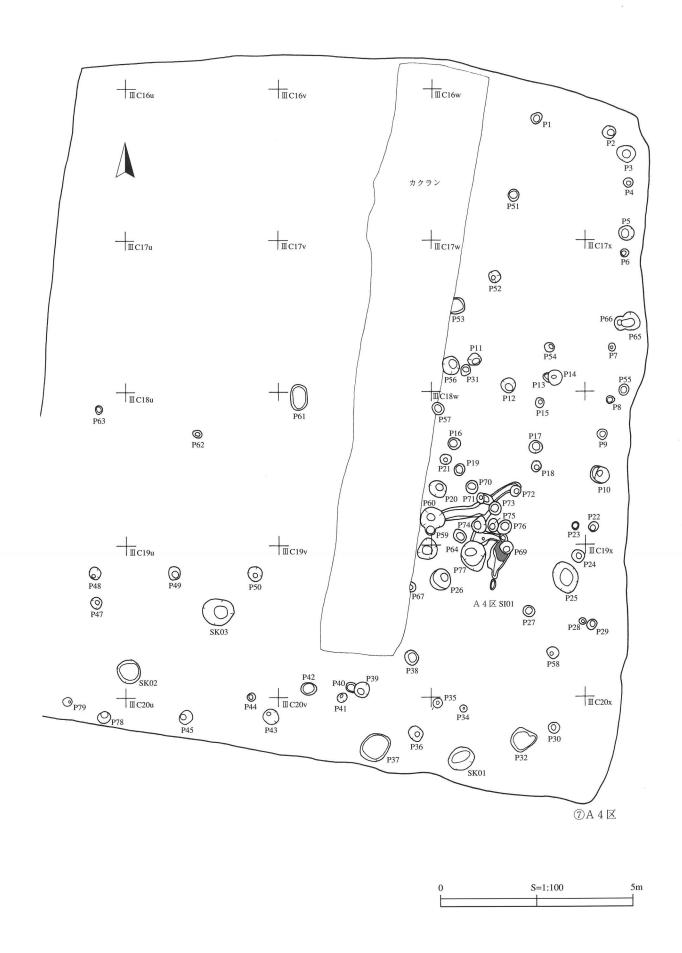




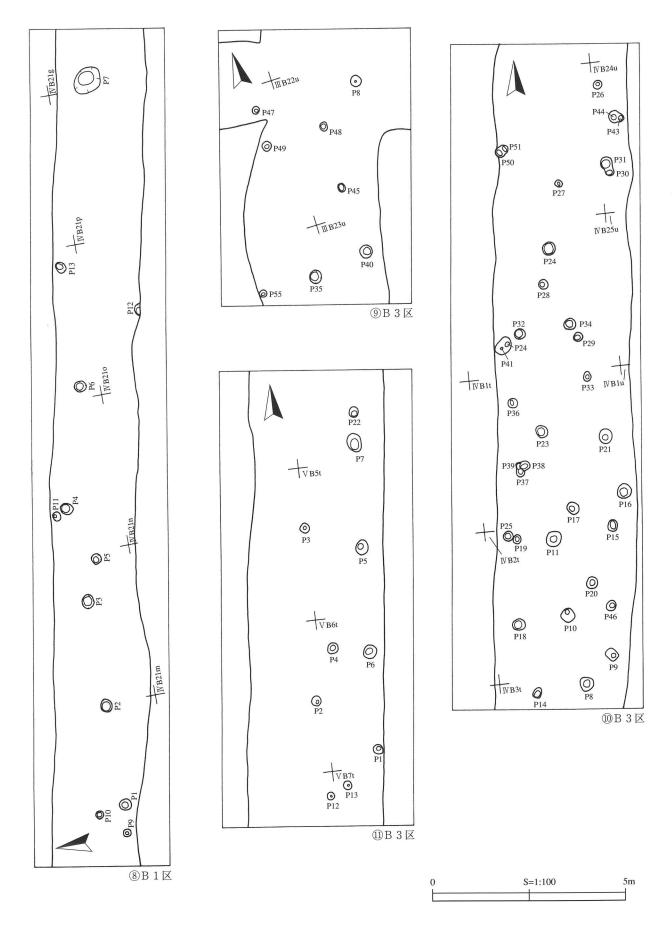




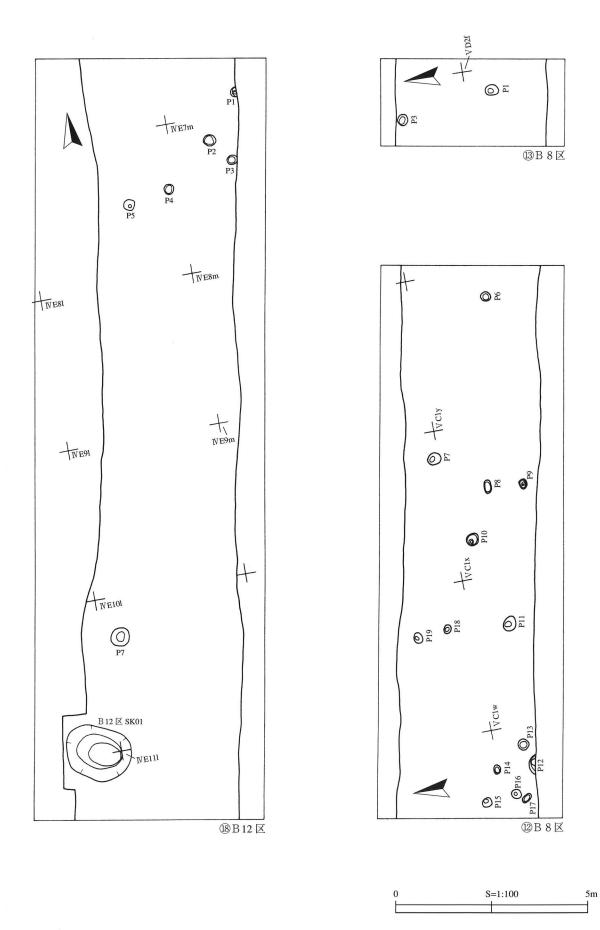




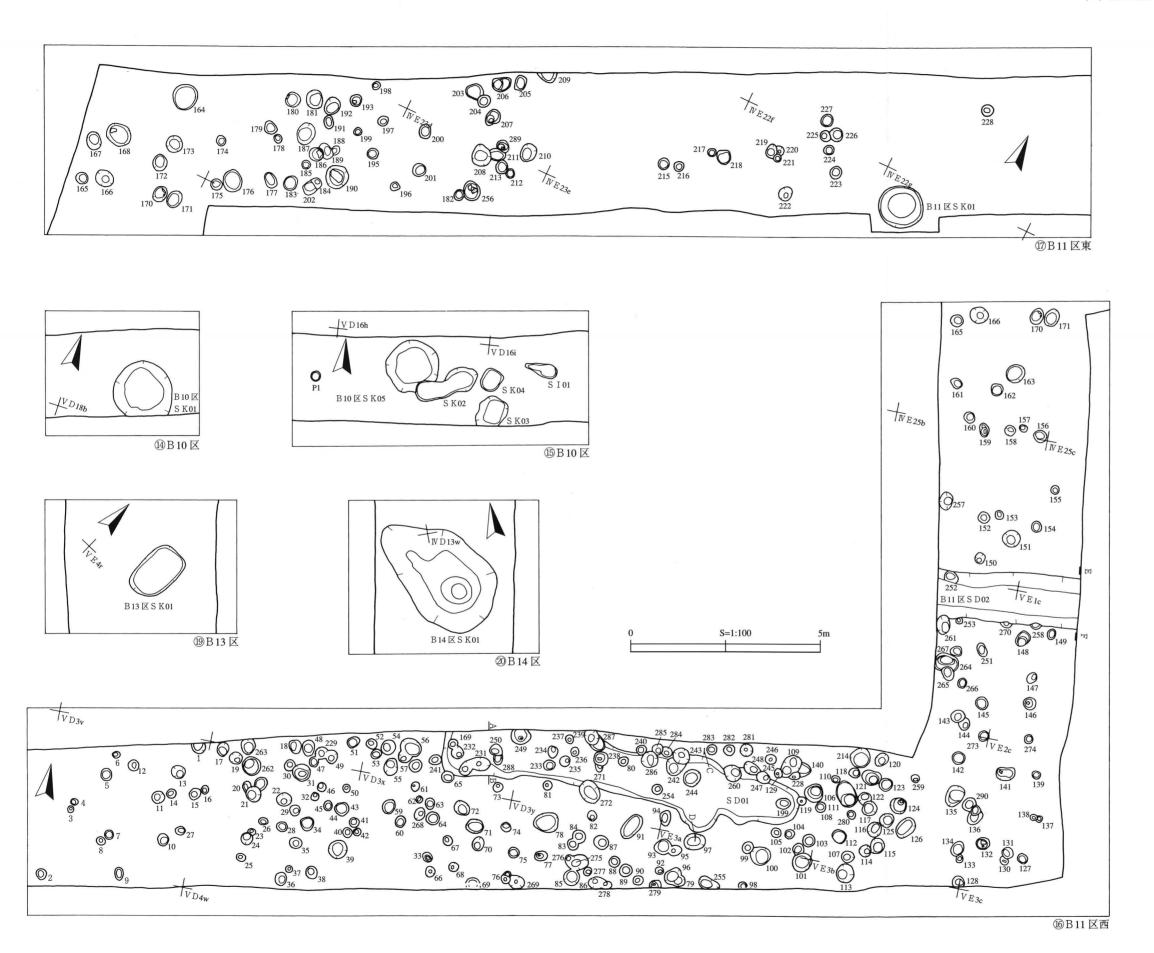
第4図 道上遺跡遺構配置図(⑦)



第5図 道上遺跡遺構配置図(⑧~⑪)



第6図 道上遺跡遺構配置図(⑫・⑬・⑱)



第7図 道上遺跡・遺構配置図(⑭~⑰・⑲・⑳)

はカマドの燃焼部とみられる焼土と煙道部のみで、住居本体の壁のプランは検出できなかった。 A4区周辺は水田造成時に削平を受けた模様で、本遺構も床面まで削平を受けたとみられる。煙道部は長軸方向 $S-20^\circ$ —Wで、深さ 5 cm程度しか確認できなかった。埋土は炭化物粒・焼土塊・地山塊などを含む暗褐色土で、煙道部天井が崩落したものと考えられる。焼土は煙道部の北側にあり、 50×40 cmの範囲で強く被熱していた。煙道部と焼土の位置関係から、住居本体は焼土の北側に位置していた可能性が高い。周辺には柱穴状小土坑数個を確認しており、一部はこの住居に伴う柱穴と考えられるが、いずれが該当するかは定かではない(P 69 は焼土を切っているため、住居よりも新期の遺構と考えられる)。遺物は、煙道部の埋土中から土師器坏・甕破片 370g が出土している。このうち、坏(掲載番号 $2\cdot3$)、甕(4)を図示した。焼土のすぐ北側には、煙道部と直交する方向に溝状の掘り込みがあり、その底面から土師器坏(1)が出土している。この外にも、検出時に付近から土師器坏片 129 g が出土しており、このうち接合した坏($5\cdot6$)、台付坏(7)を図示したが、これらも本遺構に伴う可能性が高いと考えられる。出土した土師器は 9 世紀後半~ 10 世紀代のものと考えられ、住居跡の帰属年代もこれに近い時期と推察される。

B10区SI01竪穴住居跡(第10図・写真図版2)VD16 i グリッドに位置する。検出時に、外周が赤く変色した楕円形のプランを確認した。長軸方向はS-70°-Eである。埋土中には焼土や炭化物の粒が多く含まれていた。開口部径は86×36 cm、確認面から底面までの深さは16 cmを測る。プランの西側延長線上には、10×8 cmの範囲で、僅かではあるが焼けた痕跡が確認された。このことから、検出したプランは住居のカマド煙道部分で、焼土はその燃焼部と判断した。住居本体のプランは一切確認できなかったが、表土直下で燃焼部焼土を確認したことから、本遺構は床面まで削平を受けたと推測される。煙道部の方向と焼土の位置関係から、住居本体は焼土の西側に位置していたと考えられる。煙道部の南西側に隣接するSK04は、埋土中に焼土・炭化物を含むことから、本遺構の関連施設の可能性が高い。この他に柱穴・貯蔵穴・周溝などの床面施設は検出できなかったが、SK02、SK03などの隣接遺構により削平された可能性も考えられる。調査範囲が限られていたため、調査区外に本遺構に伴う施設が検出される可能性は十分にある。遺物は、煙道部の底面から土師器甕(12)が出土しており、平安時代の住居跡と考えられる。

(ii) 住居状遺構

A1区SX02住居状遺構(第8図・写真図版1)ⅡC15 f グリッドに位置する。調査区境付近に黒褐色土の不整形プランとして確認した。北側は調査区外にあるため、全体の形状・規模は不明である。重複する遺構はない。埋土は黒褐色土主体で、地山ブロックを含む。床面は概ね平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。柱穴などの床面施設・貼床は確認されなかった。遺物は出土していない。

A1区SX03住居状遺構(第8図・写真図版1)ⅡB14 x グリッドに位置する。調査区境付近に黒褐色土のプランとして確認した。南側は調査区外にあるため、全体の形状・規模は不明である。確認できたのは北壁のみで、西壁は削平されていた。調査区境断面にみられる立ち上がりから西壁の位置を推定すると、北壁と西壁はほぼ直交し、調査区内にあるのは遺構の北西隅付近と推測される。

重複する遺構はない。床面は平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。床面の一部では黄褐色ブロック混じりの薄い広がりが確認されたが、貼床の可能性がある。柱穴等の床面施設は確認していない。遺物は、埋土中から土師器片 24 g・須恵器片 4 g・手づくねかわらけ(17)が出土している。

(iii) 土坑

本調査区で 15 基確認している。各土坑の位置、形状、規模、出土遺物などは表 1 に示した。B 10 区 S K 05・B 11 区 S K 01・B 14 区 S K 01 は近世の陶磁器などが出土しており、近世以降に帰属すると考えられる。その他に土師器・須恵器などが出土した土坑もあるが、埋土の上位などから少量が出土した程度であり、遺構の構築時期のものであるかは判断を慎重にしたい。A 3 区 S K 01・B 10 区 S K 05・B 11 区 S K 01・B 14 区 S K 01 は底面までの深さが 150 cm以上もあり、掘削作業中に湧水が著しかったことから井戸などの用途が想定されたが、詳細は不明である。

(iv) 溝跡

B 11 区 S D 01 溝跡(第 $7 \cdot 11$ 図) V D 2 y グリッド付近に位置する。長軸はほぼ東西方向である。遺構の東端は調査区内で確認されているが、西側は調査区外にあり全容は明らかでない。調査区内で確認できた長さは 9.5 mである。南西部分で南壁と西壁が直交しており、東西から南北へ軸方向を変え調査区外へ延びていくことも予想される。断面形は浅い皿状を呈し、壁の立ち上がりは明瞭ではない。底面からは多くの柱穴状小土坑を検出しているが、S D 01 よりも旧期のものとみられ、これらの柱穴状小土坑を切って構築されたと考えられる。遺物は土師器片 7.3 g が出土しているが、流れ込みの可能性が高いとみられる。

B 11 区 S D 02 溝跡(第 $7 \cdot 11$ 図・写真図版 3) V E 1 c グリッド付近に位置する。長軸方向は N - 85° - E である。東端・西端とも調査区外にあるため全長は不明であるが、調査区内で確認で きた長さは 3.75 mである。底面は平坦で、断面形は箱堀状を呈する。遺物は陶磁器($33 \sim 35$)が出土しており、近世の遺構と考えられる。

(v) 柱穴状小土坑

本調査区内で計 482 個確認した。区域別では、A 1 区で 8 個、A 4 区で 80 個、B 1 区で 51 個、B 3 区で 14 個、B 8 区で 19 個、B 10 区で 1 個、B 11 区で 290 個、B 12 区で 7 個である。A 4 区では土師器片が出土することが多く、隣接する古代の S I 01 住居跡に近い時期のものが多いと考えられる。B 1 区、B 3 区においても、ごく僅かではあるが土師器片が出土している。B 11 区ではかなり密集した状況で確認されている。一部のものには柱材や礎石も残存しており、掘立柱建物跡を構成する柱穴と思われたが、調査範囲が狭いこともあり、配置を見出すことはできなかった。出土遺物は少なく、ごく一部から土師器片、近世陶磁器片が出土したのみだが、大半の小土坑は近世に属するものと考えられる。A 1 区、B 8 区、B 10 区、B 12 区については、遺物は全く出土せず、詳細は不明である。各遺構の規模、出土遺物については、表 2 に示した。

(2)確認調査区の遺構

遺構配置図中のC1~C18区である。表土除去の後遺構検出を行い、位置の記録を行ったのみで調査を終了している。検出した遺構は、竪穴住居跡1棟、住居状遺構2棟、焼土遺構2基、土坑12基、柱穴状小土坑141個である。遺構の種別は、検出時の平面形状・規模のみにより区別している。竪穴住居跡としたものは、C13区で検出した一辺約3mの方形プランである(配置図26)。遺構が比較的密集していたのは、C2区、C6区である。焼土遺構2基はC2区で確認した。C6区は、隣接するA4区で検出した遺構との関連が考えられる。各遺構の構築時期・性格など詳細は不明である。遺物は、

表土除去中に、土師器 320 g、須恵器 216 g、陶磁器 208 gなどを採取している。このうち土師器(13・14)、陶磁器(20 ~ 23、28、39、40)、煙管(53)、石器(57・58)を図示した。なお、C 4 区・C 5 区・C 7~11 区・C 14 区・C 16 区・C 17 区では遺構は確認されず、C 3 区・C 11 区・C 12 区・C 14 区・C 16 ~ 18 区では遺物は出土していない。C 16 ~ 18 区については、現況において用水路のU字溝が敷設されていたが、U字溝を撤去し部分的にトレンチを入れたところ、遺構検出面より 40 ~ 50 cm深く削平され、砂利が詰められている状況であった。水路構築時に削平されたものとみられるが、遺構の遺存する可能性は低いとみられたため、部分的なトレンチのみで調査を終了している。

(3) 出土遺物

59 点を掲載した。(掲載番号 $1\sim$ 59、17 は写真のみ) $1\sim$ 14 は土師器である。 $1\sim$ $3\cdot$ $5\cdot$ $6\cdot$ 8は坏である。いずれもロクロ調整であり、3・6は底部に回転糸切り痕がみられ、7・9は高台を もつ。 $4\cdot 10\cdot 12\sim 14$ は甕である。土師器はいずれも、黒色処理はされていない。 $1\sim 11$ はA 4区SI 01 付近からの出土で、9世紀後半~10世紀代のものとみられる。15 は須恵器で、長頸壺の 底部付近とみられる。不掲載のものも含めると、調査区全体で土師器 1635g・須恵器 585g が出土し ている。16・17 は手づくねかわらけである。18 は渥美産、19~22 は常滑産の甕の破片である。16 ~ 22 は 12 世紀の遺物と考えられる。23 ~ 44 は中世~近世の陶磁器類である。23 は古瀬戸で、四 耳壺または水注の底部付近とみられる。24 は青磁盤の口縁部である。25 は天目茶碗、26~28 は碗、 29 は瓶の頸部、30 は徳利の体部片、31 ~ 39 は皿、40 ~ 44 は擂鉢である。陶磁器類の産地は、中国 産、瀬戸·美濃産、肥前産、東北地方産のものがある。45~47は石製品で、45·47は石臼、46は 石鉢である。石製品はいずれもデイサイト製で、奥羽山脈産の石材を用いている。48~51は木製品 である。48 は長方形の薄い板を円形に湾曲させたもので、曲げ物の側板とみられる。49~51 は円形 に加工されており、木製容器の底部とみられる。48と49は同一個体であった可能性が高いが、装着 部分などの痕跡は見当たらなかった。木製品は、いずれもスギ材を用いている。52は永樂通寶である。 1408 年初鋳の明銭である。53 は煙管の吸い口で、近世のものである。 $54\sim59$ は縄文時代の石器で、 すべて遺構外の出土である。54.56 は石箆、55 は楔形石器、57 は石鏃である。58 は破損しているが、 石匙とみられる。59 は石鍬である。石器はいずれも頁岩製で、奥羽山脈産の石材を用いている。

5. まとめ

調査区中央部および南端では平安時代の竪穴住居跡、調査区南東部では近世の柱穴群を確認した。 調査区内は削平を受けている箇所も多く、遺構の遺存状態は不良であったが、調査範囲は遺跡内のご く一部であり、今回の調査区外に遺構の広がりが存在する可能性は十分に高いといえる。

遺物は、表土中など遺構外のものも含めると、少量ずつではあるが、縄文時代から古代・中世・近世など各時代の遺物を確認している。これらは本来遺構内にあったものが遺構ごと削平され現表土中に混入したものと考えられ、遺跡内および周辺に該期の遺構が分布する可能性を示唆する。特に、県内では出土例が少ない12世紀のてづくねかわらけや中世の陶磁器類が出土したことは注目に値する。なお、道上遺跡第1次調査に係る報告は、これをもって全てとする。

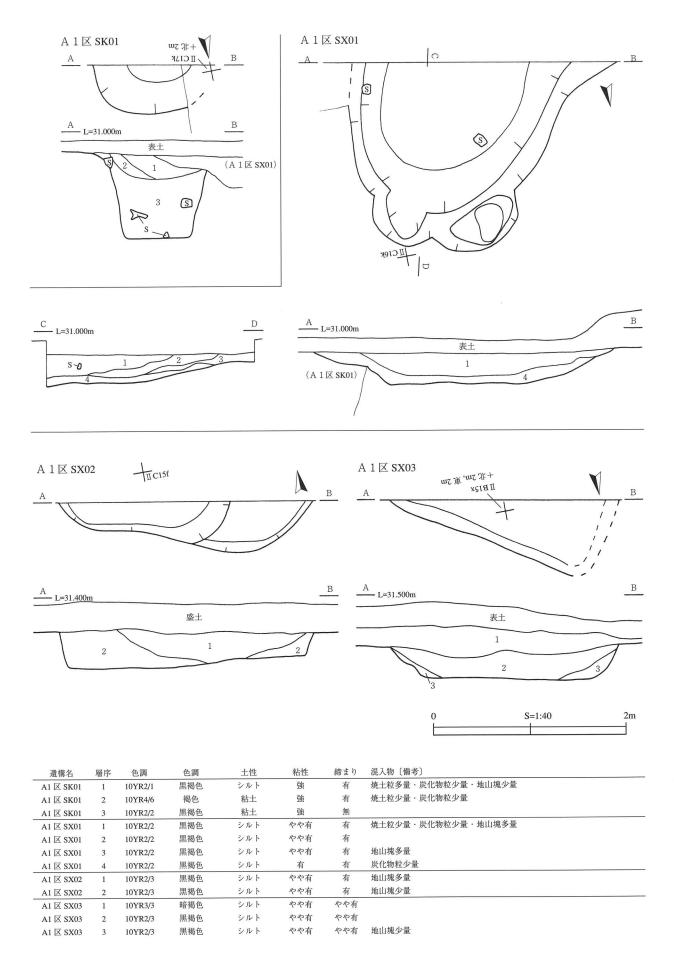
遺構名	ガリッド	重複遺構(※)	平面形 (長軸方向)	断面形 (底面・壁)	型	(CED.)	短軸 (cm)	深い(国)	底部標 高 (m)	出土遺物	備考
A1 🗵 SK01	II C 16 k	< A1 ⊠ SX01	円形?	底面は平坦で堅く締まる。 壁は外傾する。	上位はSX01に切られ、る。中位は廃土・炭化物粒を多量含む。下位は締まりの弱い粘土。	(96)	ı	91	29.85	士師器 63.9g、須恵器 18.5g、かわらけ 13.7g	:北側は調査区外。 底面より湧水。
A3 ⊠ SK01 I	Ⅲ E 18 j	なし	田影	底面は平坦。壁は外傾する。	上位は黒褐色土。下位 はグライ化し締まりが ない。	106	102	61	30.03	な つ	
A3 ⊠ SK02 I	Ⅲ E 16 j	なって	田湯	底面は平坦で堅く締まる。 壁は外傾する。	上位は黒褐色土。下位 はグライ化し締まりが ない。	148	136	190	28.72	上節器 1.6g	底面より湧水。
A4 ⊠ SK01 I	ШС20 м	なし	楕円形 (N-65°-E)	底面は平坦。壁は外傾する。	黒褐色土が主体。中位 に焼土・炭化物粒を含 む。	89	58	24	30.79	上師器 4.3g	
A4 ⊠ SK02 I	пС 19 и	なし	田影	底面は起伏がある。壁は外 傾する。	黒褐色土が主体。下位 に地山粒を少量含む。	63	09	16	30.77	なし	
A4 ⊠ SK03 I	II C 19 u	なし	楕円形 (N-30°-E)	レンズ状。底面と壁との境 界ははっきりしない。	黒褐色土が主体。	85	70	21	30.72	₩ 1	
B10 ⊠ SK01 V	V D 10 b	なし	田影	尖底(V字状)で、底面は 平坦ではない。	、黒褐色土が主体。地山 、粒の多い層と少ない層 がある。	153	(150)	125	29.51	なし	南側は調査区外。 底面より湧水。
B10 ⊠ SK02 V	V D 16 h	>B 10 ⊠ SK05	不整形 (N-63°-E)	底面は中央と西側に窪みを もつ。壁は外傾する。	単層。黒褐色土が主体 で地山粒を多く含む。	170	29	29	30.07	上師器魙 45.5g	埋土中位にビニー ル片。
B10 ⊠ SK03 V	V D 16 i	なし	長方形 (N-20°-E)	底面は平坦。壁は直立する。	上位は黒褐色土で地山 、塊を含む。下位はグラ イ化し締まりがない。	93	78	103	29.68	₩ 	南側は調査区外。 底面より湧水。
B10 ⊠ SK04 V	V D 16 i	なしな	長方形 (N-25°-E)	底面は平坦。中央に浅い窪 みをもつ。	焼土粒・炭化物粒を多く含む。	58	52	16	30.56	** 	B 10 区 SI01 関 連 か?
B10 ⊠ SK05	V D 16 h	<b 10="" sk02="" td="" ="" 円形<="" 区=""><td></td><td>底面は平坦で堅く締まる。 壁は外傾する。</td><td>上位は黒褐色土。下位 は締まりのない黒色 土。礫を多く含む。</td><td>140</td><td>138</td><td>158</td><td>29.17</td><td>土師器 9.9g、陶磁器(27·37·43·44)、石製品(46·47)</td><td>底面より湧水。</td>		底面は平坦で堅く締まる。 壁は外傾する。	上位は黒褐色土。下位 は締まりのない黒色 土。礫を多く含む。	140	138	158	29.17	土師器 9.9g、陶磁器(27·37·43·44)、石製品(46·47)	底面より湧水。
B11 ⊠ SK01 I	IV E 22 g	なし	田	底面は平坦で堅く締まる。 壁は直立に近い。	礫を多く合む。作業中 開落のため詳細な記録 なし。	115	110	178	28.79	石製品 (45)、獣骨	底面より湧水。
B12 ⊠ SK01 I	WE 11 k	なし	楕円形 (N-65°-W)	底面中央が一段深く窪む。 壁は外傾する。	作業中崩落のため記録 なし。	178	137	113	29.37	土 師 器 6.8g、須 恵 器 110.3g	底面より湧水。
B13 ⊠ SK01 V	VE3 r	なし	長方形 (N-03°-E)	浅い皿状で、底面は平坦。	地山粒を含む黒褐色土 で、単層。	148	95	16	30.41	なし	
B14 ⊠ SK01 I	IV D 13 w	なし	斯形 (N-38°-W)	南東側のみ深くなる。底面 は平坦で堅く締まる。	上位は黒褐色土。下位 は締まりの弱い粘土質 土。	359	220	188	28.82	陶器 (19)·木製品 (48· 49·50·51)	底面より湧水。
				表	道上遺跡土坑観察表	丰				※重複関係は(新)>	(旧) で示している。

区域	柱穴No	長軸(cm)	短軸(cm)	严当(cm)	底面標高(m) 備考(切り合い・出土遺物・他)
A01	P01	21	20	26	30.51	/ 解分(907日4 田工通知 医/
A01 A01	P02 P03	23 46	(14) 40	21 19	30.54 30.53	
A01	P04	39	38	28	30.44	
A01 A01	P05 P06	36 35	33	9 8	30.72 30.59	
A01	P07	37	36	24	30.43	
A01 A01	P08 P09	36 55	(31) 52	43	30.78	
A04	P01	28	26	12	30.76	
A04 A04	P02 P03	33 50	33 44	18 42	30.72 30.43	
A04	P04	24	24	7	30.84	
A04	P05	42 22	38 21	39 8	30.50 30.84	
A04 A04	P06 P07	21	18	29	30.67	
A04	P08 P09	20	20	12	30.86	
A04 A04	P10	28 52	27 45	18 34	30.81 30.66	
A04	P11	34	32	35	30.65	
A04 A04	P12 P13	40 24	(7)	15 10	30.82 30.86	>P14
A04	P14	38	35 22	36	30.61	<p13< td=""></p13<>
A04 A04	P15 P16	23 32	30	16 36	30.82 30.65	
A04	P17 P18	37 30	33 27	9 30	30.93 30.72	
A04 A04	P19	30	29	7	30.92	
A04 A04	P20 P21	48 32	43 25	57 43	30.45 30.57	
A04	P21	26	25	8	30.92	
A04	P23	20	18	6	30.91	
A04 A04	P24 P25	32 78	32 64	31 54	30.70 30.45	土師器片 6g
A04	P26	57	53	63	30.41	
A04 A04	P27 P28	29 18	28 17	40 24	30.66 30.80	
A04	P29	29	27	14	30.89	
A04 A04	P30 P31	32 29	26 26	34 18	30.66 30.71	
A04	P32	65	63	10	30.92	住居跡関連または残欠
A04 A04	P33 P34	欠番 17	19	12	30.91	SK01 に変更
A04	P35	25	25	25	30.79	
A04 A04	P36 P37	40 85	33 72	44 14	30.58 30.84	
A04	P38	39	34	32	30.68	2040、土所翠小片 41-
A04 A04	P39 P40	(22)	40 25	6	30.89 30.94	?P40·土師器小片 41g ?P39·土師器小片 40g
A04	P41	27	21	39	30.61	-
A04 A04	P42 P43	41	32 39	12 56	30.87 30.42	
A04	P44	22	20	37	30.59	
A04 A04	P45 P46	36 欠番	32	24	30.72	SK02 に変更
A04	P47	30	28	28	30.66	
A04 A04	P48 P49	31 32	30 32	29 53	30.68 30.41	
A04	P50	40	37 26	56 21	30.36	上 6年 99 月 日 2
A04 A04	P51 P52	32 32	31	26	30.76 30.71	土師器小片 3g
A04	P53	38	(32)	11	30.87	
A04 A04	P54 P55	23 28	21	17	30.89 30.75	
A04	P56	44	42	24	30.76	
A04 A04	P57 P58	33 55	30 49	52 17	30.48 30.83	
A04	P59	30	(18)	17	30.83	>P60 · 土師器片 33g <p59 14g<="" td="" ·="" 住居跡関連="" 土師器小片=""></p59>
A04 A04	P60 P61	64	53 44	20 8	30.87 30.85	《F39·江西欧网座·上邮备/1/7 14g
A04 A04	P62	26 20	21	12 10	30.79 30.77	
A04 A04	P63 P64	39	17 31	14	30.88	土師器片 39g
A04	P65	50	(40)	35	30.53	?P66
A04 A04	P66 P67	35 25	(22)	27 30	30.68 30.70	?P65
A04 A04	P68	欠番				SK03 に変更 >SI01
A04	P69 P70	34	32 32	17 22	30.87 30.80	>SIO1
A04	P71 P72	42 27	27 25	25 18	30.78 30.82	住居跡関連または残欠・土師器小片 62g 住居跡関連または残欠
A04 A04	P73	38	33	15	30.82	住居跡関連または残欠・土師器小片 25g
A04	P74	44	40	14	30.88	住居跡関連または残欠 住居跡関連または残欠・土師器小片 2g
A04 A04	P75 P76	35 40	25 32	4 8	30.97 30.92	
A04 A04	P77 P78	81 31	67 30	44 29	30.61 30.62	住居跡関連または残欠・土師器小片 75g
A04	P79	22	20	16		
B01 B01	P01 P02	36 32	28 30	38 21	30.65 30.86	
B01	P03	37	33	32	30.67	土師器片 2g
B01 B01	P04 P05	34 27	30 27	16 20	30.87 30.84	土師器片 2g · 炭化物出土
B01	P06	32	29	16	30.83	
B01 B01	P07 P08	71 31	63 30	19 28	30.81 30.58	
B01	P09	20	20	22	30.79	
B01 B01	P10 P11	21 24	20 21	14 24	30.89 30.80	
B01	P12	33	(16)	15	30.85	
B01	P13 P01	30 26	24 26	19 19	30.78 30.79	
I BUS I		27	24	29	30.68	
B03 B03	P02	27	25 30	10 17	30.82 30.80	
B03 B03	P03				39.57	
B03 B03 B03 B03	P03 P04 P05	30 38	35	36		
B03 B03 B03 B03 B03	P03 P04 P05 P06	30 38 38	35 36	27	30.70	十師器片 2g
B03 B03 B03 B03 B03 B03	P03 P04 P05 P06 P07 P08	30 38 38 38 51 36	35 36 36 35	27 10 26	30.67 30.69	土師器片 2g
B03 B03 B03 B03 B03 B03 B03 B03	P03 P04 P05 P06 P07 P08 P09	30 38 38 51 36 34	35 36 36 35 25	27 10 26 17	30.67 30.69 30.75	土師器片 2g
B03 B03 B03 B03 B03 B03	P03 P04 P05 P06 P07 P08	30 38 38 51 36 34 37 43	35 36 36 35 25 35 39	27 10 26 17 41 26	30.67 30.69 30.75 30.53 30.68	土師器片 2g 土師器片 5g · 炭化物出土
B03 B03 B03 B03 B03 B03 B03 B03 B03 B03	P03 P04 P05 P06 P07 P08 P09 P10 P11 P12	30 38 38 51 36 34 37 43 21	35 36 36 35 25 35 39	27 10 26 17 41 26 33	30.67 30.69 30.75 30.53 30.68 30.66	
B03 B03 B03 B03 B03 B03 B03 B03 B03 B03	P03 P04 P05 P06 P07 P08 P09 P10 P11	30 38 38 51 36 34 37 43	35 36 36 35 25 35 39	27 10 26 17 41 26	30.67 30.69 30.75 30.53 30.68	
B03 B03 B03 B03 B03 B03 B03 B03 B03 B03	P03 P04 P05 P06 P07 P08 P09 P10 P11 P12 P13 P14 P15	30 38 38 31 36 34 37 43 21 24 28 30	35 36 36 35 25 35 39 19 21 24 25	27 10 26 17 41 26 33 26 17 32	30.67 30.69 30.75 30.53 30.68 30.66 30.72 30.77 30.61	土師器片 5g· 炭化物出土
B03 B03 B03 B03 B03 B03 B03 B03 B03 B03	P03 P04 P05 P06 P07 P08 P09 P10 P11 P12 P13 P14	30 38 38 31 36 34 37 43 21 24 28	35 36 36 35 25 35 39 19 21 24	27 10 26 17 41 26 33 26 17	30.67 30.69 30.75 30.53 30.68 30.66 30.72 30.77	

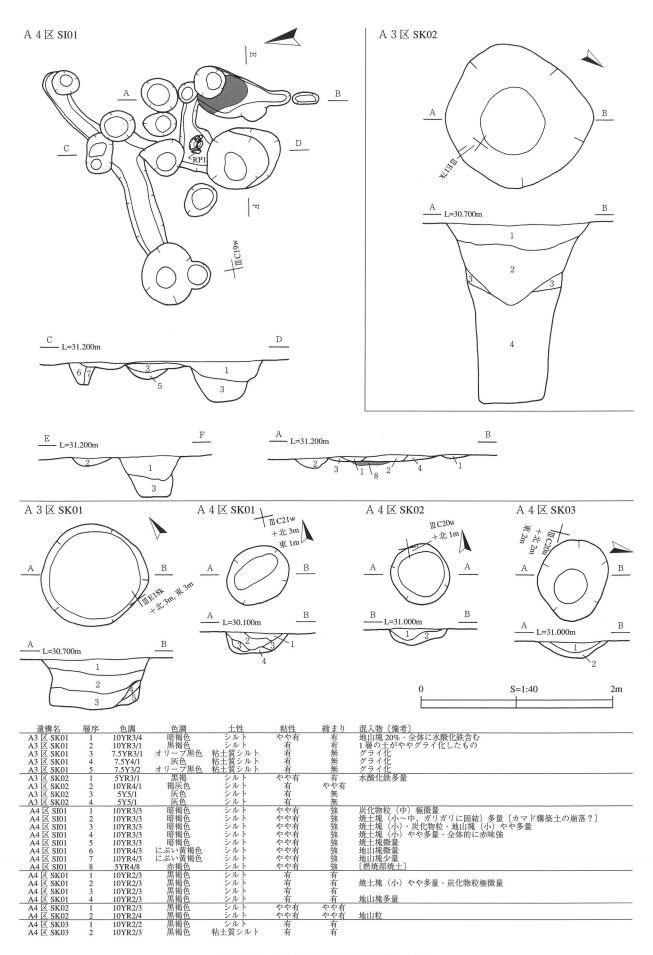
区域	柱穴No	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	底面標高(n	1) 備考(切り合い・出土遺物・他)
B03 B03	P19 P20	25 31	20	12 19	30.83 30.75	炭化物出土
B03	P21	40	36	27	30.64	
B03 B03	P22 P23	33	25 29	22	30.73 30.69	
B03	P24	35	33	20	30.70	P 24 > P 41
B03	P25	28	26	21	30.74	炭化物出土
B03 B03	P26 P27	24	24 17	36	30.51 30.58	
B03	P28	25	24	26	30.64	
B03	P29	23	23	33	30.57	D 20 > D 21
B03 B03	P30 P31	32	(20)	23	30.64 30.63	P 30 > P 31 P 30 > P 31
B03	P32	30	27	2	30.93	
B03	P33	25	20	19	30.70	
B03 B03	P34 P35	33 36	29 32	26 39	30.63 30.50	
B03	P36	27	25	38	30.52	
B03	P37 P38	(28)	(20)	21	30.71	P 37 > P 38 > P 39 P 37 > P 38 > P 39
B03 B03	P39	(28)	(22)	20	30.71	P 37 > P 38 > P 39
B03	P40	35	33	36	30.49	
B03 B03	P41 P42	30	(24)	26 37	30.61 30.52	P 24 > P 41 P 41 > P 42
B03	P43	22	(19)	33	30.54	P 43 > P 44
B03	P44	32	(24)	28	30.60	P 43 > P 44
B03 B03	P45 P46	23	20	12 26	30.73 30.65	
B03	P47	20	20	19	30.58	
B03	P48	23	21	25	30.53	
B03 B03	P49 P50	26 28	(20)	22 20	30.58 30.60	P 50 > P 51
B03	P51	22	(19)	15	30.71	P 50 > P 51
B03	P52	20	19	24	30.50	
B08 B08	P01 P02	28 欠番	28	21	30.72	
B08	P03	35	28	5	30.85	
B08	P04	欠番				
B08 B08	P05 P06	欠番 25	23	17	30.76	
B08	P07	35	32	31	30.54	
B08	P08	35	18	22	30.68	
B08 B08	P09 P10	26 35	19	16 46	30.75 30.42	
B08	P11	41	35	31	30.59	
B08 B08	P12 P13	52 32	(16)	26 8	30.62 30.82	
B08	P14	25	17	13	30.76	
B08	P15	27	24	38	30.49	
B08 B08	P16 P17	28 29	26 17	8	30.80 30.79	
B08	P18	25	19	22	30.67	
B08	P19	30	25	38	30.51	
B10 B11	P01 P1	27 37	(32)	15 34	30.56 30.32	
B11	P2	28	28	30	30.14	
B11	P3	19	18	8	30.46	
B11	P4 P5	21 31	19 28	13 8	30.42 30.56	
B11	P6	21	18	21	30.42	
B11	P7	25	24	18	30.47	
B11	P8 P9	24 25	20	21 15	30.43 30.47	
B11	P10	33	27	54	30.11	柱材残存
B11	P11	34	33 29	49	30.15	
B11	P12 P13	32 35	34	33 44	30.32 30.20	柱材残存
B11	P14	24	24	11	30.52	
B11	P15	31	25	18	30.45	
B11 B11	P16 P17	23 32	23 30	18	30.55 30.47	1110000
B11	P18	43	32	32	30.33	土師器片 9g
B11	P19 P20	32 30	31 24	66 28	29.98 30.34	
B11	P21	42	40	57	30.07	
B11	P22	32	30	17	30.48	
B11	P23 P24	20 33	17 31	38 48	30.25 30.18	
B11	P25	24	20	32	30.34	
B11	P26	24	18	13	30.51	
B11	P27 P28	25 27	21 25	12 24	30.53 30.42	
B11	P29	36	36	42	30.23	
B11	P30	30	27	22	30.44	7P31
B11	P31 P32	48 30	47 25	43 59	30.24 30.04	?P30
B11	P33	27	23	36	30.24	柱材残存
B11	P34	47	34	17 25	30.47	
B11	P35 P36	30 36	28 27	42	30.40 30.23	
B11	P37	19	18	4	30.61	Complete Park I and a second s
B11	P38 P39	32 50	30 45	52 51	30.12 30.12	須恵器片 17g
B11	P39 P40	28	25	34	30.44	
B11	P41	25	25	27	30.38	Agriculta Bill LL. o
B11	P42 P43	18 36	18 36	20 36	30.44 30.29	須恵器片 2g
B11	P44	27	23	46	30.19	柱材残存
B11	P45	21	19	17	30.47	
BII BII	P46 P47	25 26	24 24	38 14	30.27 30.51	?P229
B11	P48	41	30	26	30.41	
BII	P49	34	(28)	46	30.20	7P229
B11	P50 P51	26 34	18 32	24 26	30.42 30.40	
	P52	28	24	38	30.28	須恵器片 7g
B11	P53	26	24	13	30.54	
B11	P54 P55	38 46	36 32	35 53	30.31 30.13	
B11 B11		57	(50)	42	30.23	?P57
B11 B11 B11 B11	P56	35	(20)	48	30.19	?P56
B11 B11 B11 B11 B11	P56 P57				30.38	
B11 B11 B11 B11 B11 B11	P56 P57 P58	34	30	28		
B11 B11 B11 B11 B11 B11 B11 B11	P56 P57 P58 P59 P60	34 36 28	32 26	26 36	30.39 30.30	
B11 B11 B11 B11 B11 B11 B11 B11 B11	P56 P57 P58 P59 P60 P61	34 36 28 24	32 26 22	26 36 34	30.39 30.30 30.31	
B11 B11 B11 B11 B11 B11 B11 B11 B11 B11	P56 P57 P58 P59 P60 P61 P62	34 36 28 24 19	32 26	26 36 34 11	30.39 30.30 30.31 30.55	
B11 B11 B11 B11 B11 B11 B11 B11 B11	P56 P57 P58 P59 P60 P61	34 36 28 24	32 26 22 17	26 36 34	30.39 30.30 30.31	75DI

					底面標高(m)	備考(切り合い・出土遺物・他)
B11	P66 P67	28	25 24	64 36	30.02 30.27	
B11	P68	27	26	26	30.39	
B11	P69 P70	35 37	(22)	12 6	30.54 29.72	
B11	P71	45	35	32	30.34	
B11 B11	P72 P73	44 26	33 25	17 32	30.48 30.31	
B11	P73	26	25	22	30.64	
B11	P75	28	26	18	30.47	opa co
B11 B11	P76 P77	33 37	26 25	36 50	30.30 30.14	P269
BII	P78	55	52	45	30.20	
B11	P79	27 26	(20)	25 27	30.39 30.29	?P96 ?SD1
B11	P80 P81	24	22	19	30.45	1301
B11	P82	26	22	27	30.38	7P84
B11	P83 P84	32	(24)	37 23	30.29 30.42	?P83
B11	P85	40	40	28	30.27	
B11	P86	(46) 42	30	52 37	30.15 30.28	?P278
B11	P87 P88	29	28	10	30.54	
B11	P89	36	33	58	30.07	
B11 B11	P90 P91	28 73	23 42	20	30.47 30.52	
B11	P92	20	18	26	30.41	
B11	P93 P94	41	38 25	31 19	30.34 30.45	?P95 · 陶器(32)
B11	P95	(32)	26	25	30.39	?P93
B11	P96	47	40	36	30.31	?P79
B11	P97 P98	50 22	(18)	13	30.39 30.38	
B11	P99	33	28	28	30.34	?P100
B11	P100	(50)	47	45 42	30.19 30.22	?P99 ?P102
B11	P101 P102	47 30	27	20	30.40	7P102 7P101
B11	P103	31	30	43	30.21	
B11 B11	P104 P105	26 25	23	12 30	30.52 30.32	
B11	P106	48	48	64	29.95	
B11	P107	32	30 26	23 14	30.42 30.49	
B11	P108 P109	26 46	(30)	30	30.20	?P140 ?P129 · 須惠器片 9g
B11	P110	22	20	11	30.52	
B11	P111 P112	72 48	50 36	32 54	30.28 30.01	
B11	P113	49	46	64	30.02	
B11	P114 P115	30 39	32	18 76	30.45 29.90	
B11	P115	42	37	59	30.02	
B11	P117	38	38	38	30.23	?P122
B11	P118 P119	28	27	24 35	30.38	?SD1
B11	P120	35	29	34	30.26	
B11	P121 P122	52 33	(24)	41 38	30.18 30.21	?P117
B11	P123	34	33	20	30.38	31117
B11	P124	45	40	54	30.07	
B11	P125 P126	38 57	37 40	20	30.42 30.19	
B11	P127	25	24	25	30.25	
B11	P128 P129	33	(28)	9 35	30.57 30.26	?P109 ?P245
B11	P130	23	15	10	30.40	11107 11243
B11	P131	30	27	23	30.33 30.37	礎石
BII	P132 P133	36 18	32 17	23 5	30.57	1 堤石
B11	P134	39	33	88	29.76	
B11 B11	P135 P136	58 70	45	40	30.14	
B11	P137	19	13	7	30.45	
B11	P138	20	17	22	30.34 30.28	
B11	P139 P140	36	(30)	16	30.46	?P109
B11	P141	49	32	29	30.24	礎石
B11	P142	34	31	10	30.41	?P144
B11	P143	30	(24)	28	30.29	?P143
B11	P145	33	28	33	30.15	歴五
B11	P146 P147	33	32 23	19 32	30.27 30.20	礎石
B11	P148	40	34	50	30.02	
B11	P149 P150	25	23	10 36	30.42 30.21	
BII	P150	45	44	17	30.33	
B11	P152	29	28	14	30.48	
B11	P153 P154	24	22	11	30.48 30.46	
B11	P155	24	24	39	30.21	
B11	P156	35	31	30	30.35 30.51	
B11	P157 P158	21	29	15 37	30.30	
B11	P159	37	23	21	30.47	
B11	P160 P161	28	27	42 10	30.25 30.58	
B11	P162	32	30	41	30.27	
B11	P163 P164	51	47	26 30	30.40 30.36	
B11	P164 P165	67 31	63 27	18	30.50	
B11	P166	45	44	27	30.40	
B11	P167	67	38 55	54 32	30.14 30.36	礎石
B11	P168 P169	(24)	23	52	30.06	?P232·土師器片 11g
B11	P170	41	34	30	30.36	礎石
B11	P171 P172	44	37	27	30.40 30.41	
B11	P172 P173	43	44	37	30.27	
B11	P174	27	20	13	30.47	
B11	P175 P176	27 55	24 48	30	30.52 30.28	
		41	38	6	30.54	
B11	P177				30.52	1
B11 B11	P178	23	21	8		-
B11		23 36 38	21 28 34	23 18	30.32 30.37 30.41	礎 石

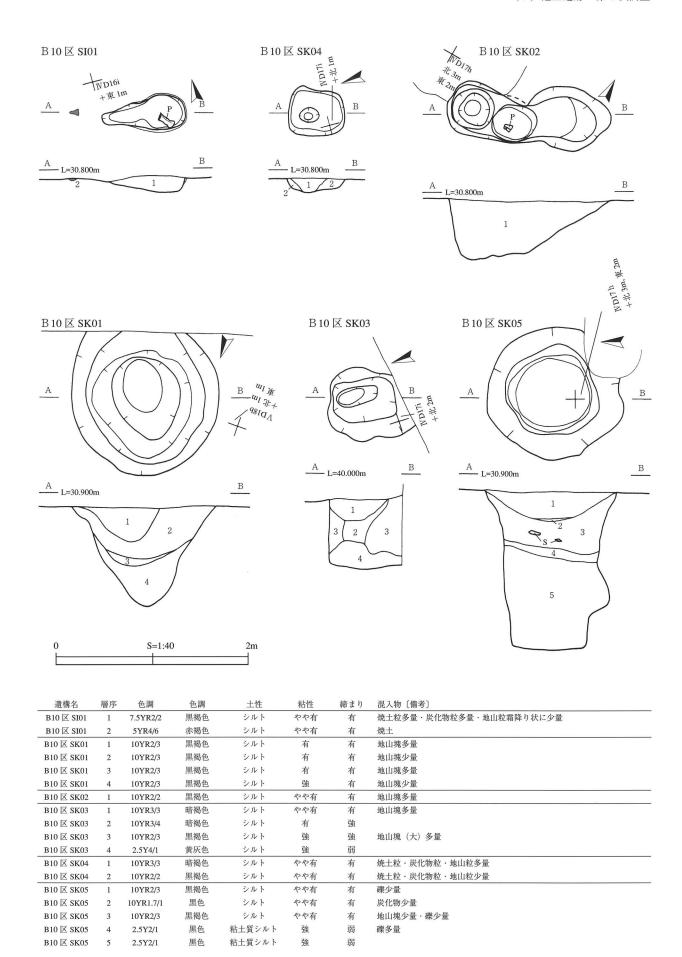
区域 B11	柱穴No P182	長軸(cm) 26	短軸(cm) 23	深さ(cm) 20	底面標高(m 30.39) 備考(切り合い・出土遺物・他)
B11 B11	P183 P184	40 30	37 (18)	37 41	30.24 30.20	?P202
BII	P185	22	22	14	30.50	
B11 B11	P186 P187	37 60	36 44	18 26	30.43 30.33	礎石
B11	P188	21	21	11	30.50	
B11 B11	P189 P190	60	(28)	71	30.38 29.90	礎石
B11	P191	35	26	31	30.29	96.41
B11	P192	45	38 30	28	30.31 29.94	礎石
B11 B11	P193 P194	21	19	<u>66</u> 5	30.55	現 名
B11	P195	28	27	11	30.48	
B11 B11	P196 P197	23	21 26	13 29	30.47	
Bll	P198	20	18	15	30.45	
B11 B11	P199 P200	36 38	28 32	9	30.37 30.47	?SD1
B11	P201	35	32	14	30.45	
B11 B11	P202 P203	34 42	(28)	24 6	30.36 30.53	?P184
B11	P204	34	35	30	30.31	
B11 B11	P205 P206	39 48	28 36	27 57	30.35 30.04	
B11	P207	44	37	33	30.28	
B11	P208	58	52	75	29.86	
B11 B11	P209 P210	48	(26)	33 22	30.28 30.38	礎石
B11	P211	38	30	18	30.44	
B11 B11	P212 P213	25 34	22 31	47	30.50 30.13	
B11	P214	51	49	20	30.40	
B11	P215	30 27	29 25	15	30.45 30.37	
B11	P216 P217	27	25	22 3	30.37	
B11	P218	35	33	8	30.53	opean opean
B11 B11	P219 P220	37 27	(18)	13	30.48 30.50	?P220 ?P221 ?P219 ?P221
B11	P221	22	21	11	30.49	?P219 ?P220
B11	P222 P223	37 34	35 31	18 35	30.40 30.25	
B11 B11	P223 P224	27	27	13	30.25	
B11	P225	29	27	15	30.45	?P226 · 磁器 (30)
B11	P226 P227	34	32	10 27	30.51 30.34	?P225
B11	P228	30	28	27	30.35	
B11 B11	P229 P230	(32)	30	35 36	30.30 30.27	?P49 ?P47 ?SD1 ?P231
B11	P231	(49)	32	30	30.27	?SD1 ?P230
B11	P232	(48)	31	37	30.20	?SD1 ?P169
B11	P233 P234	29 33	28 26	31 59	30.28 30.01	?SD1 ?SD1
B11	P235	30	27	33	30.30	?SD1
B11	P236 P237	25 23	20	26 14	30.31 30.45	?SD1 ?SD1
B11	P238	35	35	73	29.81	?SD1 ?P271 柱材残存
B11	P239	(42)	35	46	30.10	?SD1 ?P287
B11	P240 P241	33	23	27 66	30.36 29.96	?SDI
B11	P242	43	(36)	7	30.33	?SD1 ?P243
B11 B11	P243 P244	46 45	40 42	37 40	30.23 29.95	?SD1 ?P242 ?SD1
B11	P245	24	18	34	30.33	7P129
B11 B11	P246 P247	40	24	19 45	30.45 30.19	?SD1
B11	P248	40	32	33	30.31	?SD1
B11 B11	P249 P250	45 32	(38)	46 56	30.11	?SD1 ?SD1
B11	P251	37	24	19	30.30	1301
B11	P252	33	(28)	30	29.92 30.38	
B11	P253 P254	18 24	17 23	15 23	30.38	?SD1
B11	P255	54	30	8	30.53	礎石
B11 B11	P256 P257		40	21	30.36	礎石
B11	P258	32	(18)	11	30.39	?SD2
B11	P259	23	19	19 14	30.42	?SD1
B11 B11	P260 P261	53 50	34	40	30.17	/SDI 陶器 (36)
B11	P262	48	47	56	30.09	
B11	P263 P264	39 65	38 47	43 32	30.21 30.08	?P265
B11	P265	37	27	50		?P264
B11	P266	25 32	23 25	36 17	30.16 30.36	
B11 B11	P267 P268	35	26	40	30.26	
B11	P269	(34)	34	37	30.28 30.38	?P76
B11 B11	P270 P271	33 21	(14)	16 20	30.38	?SD2 ?SD1 ?P238
B11	P272	58	51	59	30.05	?P272
B11 B11	P273 P274	29 24	25 21	16 15	30.30 30.28	
BII	P275	55	38	40	30.24	?P276
B11	P276	17	(14)	40	30.25	?P275
B11	P277 P278	(26)	21	13 66	30.51 29.99	?P86
B11	P279	32	(20)	19	30.47	礎石
B11 B11	P280 P281	31	19 30	18 54	30.48 30.08	
B11	P282	30	25	43	30.19	
B11	P283	26	(20)	36	30.19	2SD1 2P285
B11 B11	P284 P285	22	(20)	13 42	30.37 30.23	?SD1 ?P285 ?SD1 ?P284
B11	P286	43	40	56	29.96	?SD1
B11 B11	P287 P288	(28)	(36)	21 15	30.39 30.41	?SD1 ?P239
B11	P288	35	30	28	30.32	
B11	P290	47	(28)	20	30.38	杜维泽 11
B12 B12	P01 P02	33	(13)	13	30.52 30.49	柱痕径 11 炭微量
B12	P03	28	25	14	30.52	柱痕径 14·炭微量
B12 B12	P04 P05	28 28	26 27	5 25	30.55 30.36	柱痕径 13 柱痕径 15
B12	P05		41	۵۵	50.50	
B12	P07	48	47	42	30.10	柱痕径 28



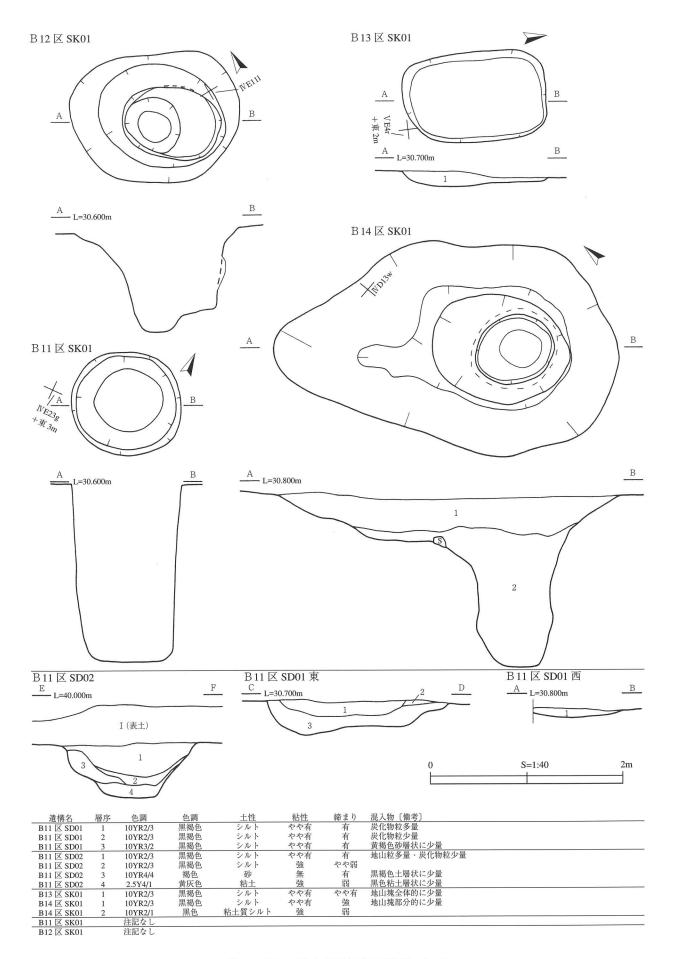
第8図 道上遺跡検出遺構(1)



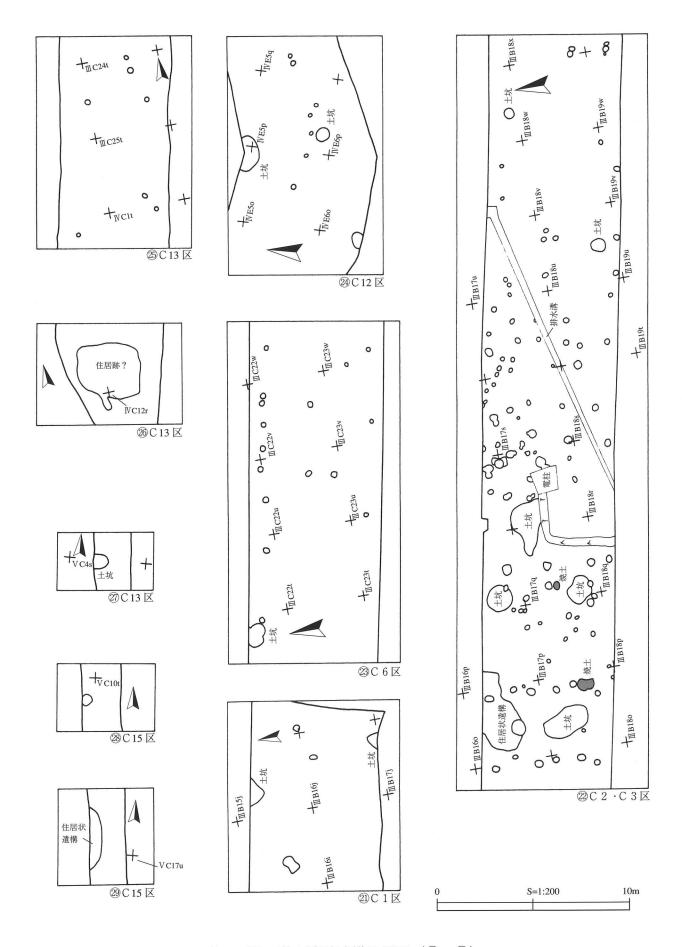
第9図 道上遺跡検出遺構(2)



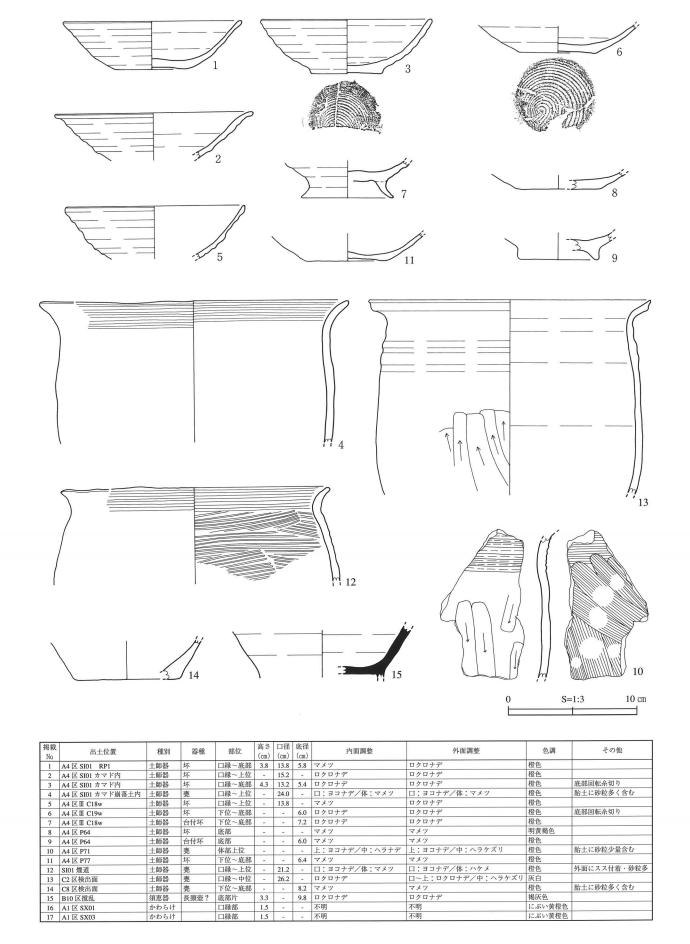
第10図 道上遺跡検出遺構(3)



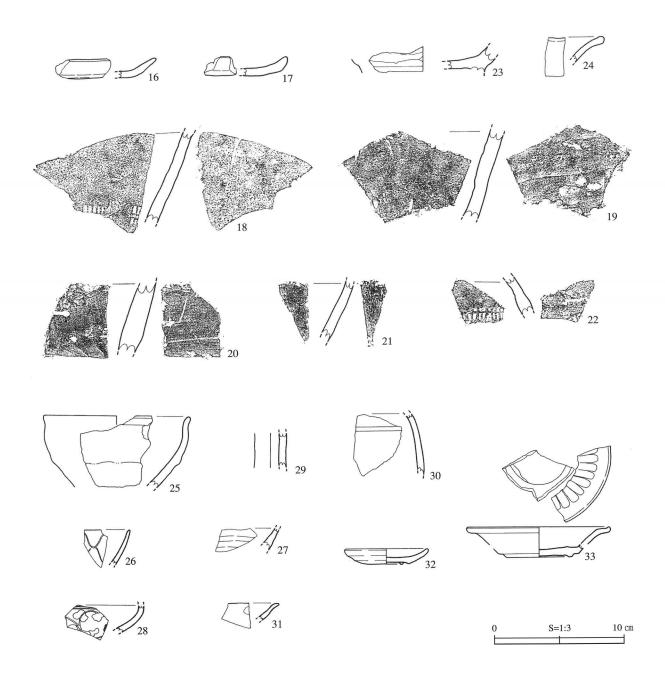
第11図 道上遺跡検出遺構(4)



第12図 道上遺跡遺構配置図(②)~②)

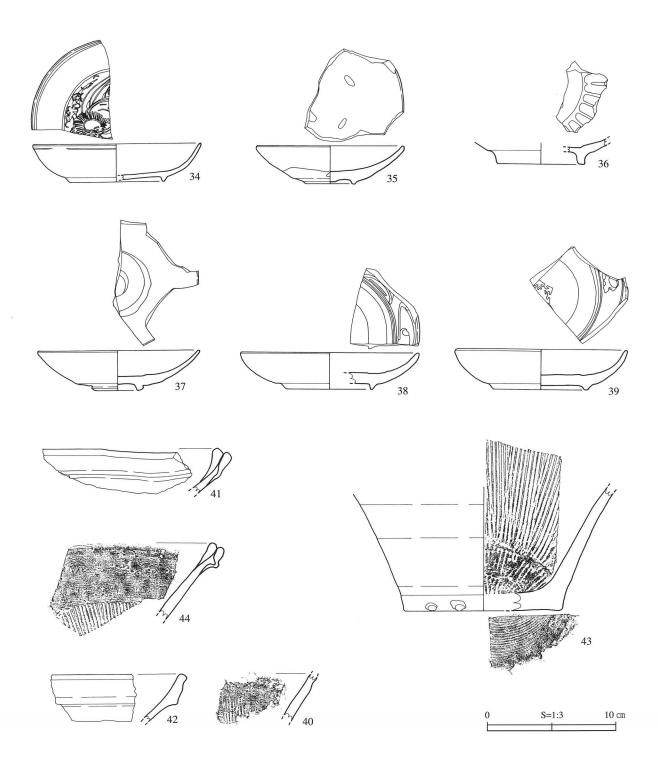


第13図 道上遺跡出土遺物(1)



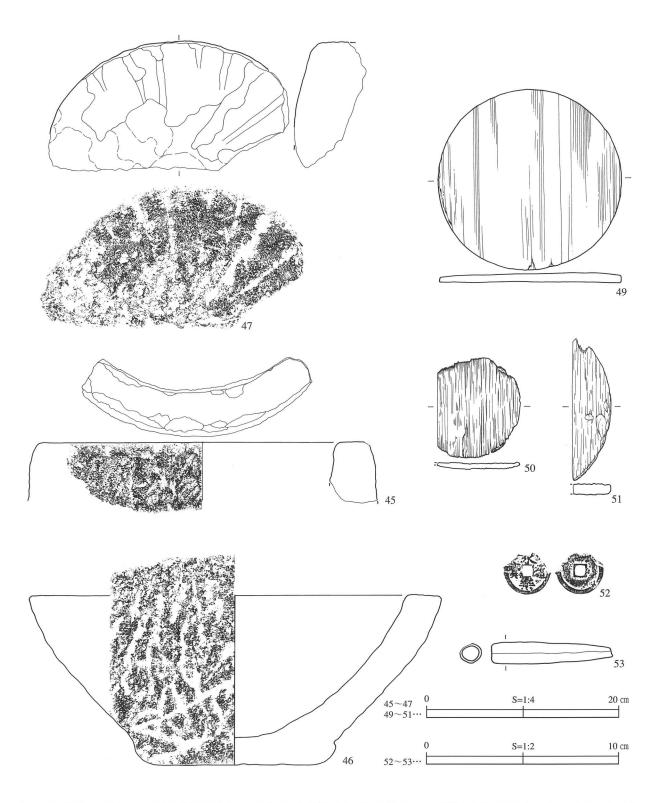
掲載 No.	出土位置	種別	器種	残存部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様	釉薬	胎土·色調	産地	年代	備考
18	A4 区表採	陶器	甕	体部片	-	8	-	-		灰色	渥美		
19	B14 ⊠ SK01	陶器	甕	体部片		-	-	-		灰色	常滑		
20	C区西側検出面	陶器	甕	体部片	-	-	100			灰白色	常滑		
21	C区西側検出面	陶器	蹇	体部片	-	-	-	-1		灰黄色	常滑		
22	C7 区検出面	陶器	甕	体部片	12	-	(2)			灰黄色	常滑		
23	C1 区検出面	陶器	四耳壺?	底部	-	7.6	10		灰釉	灰白色	古瀬戸	13c?	水注?
24	B8 区撹乱	青磁	盤	口縁部		-	15	8		灰白色	中国	15c?	龍泉窯?
25	B9 区撹乱	陶器	天目茶碗	口縁~下位		-	15	-	鉄釉	灰白色	美濃?		
26	B10 区撹乱	磁器	碗	口縁部	-	-		網目文	透明釉	灰白色	肥前	18c	大橋Ⅳ~Ⅴ期
27	B10 ⊠ SK05	陶器	腰錆碗	体部片	-	-	-	-	鉄釉	灰白色	大堀相馬	19c	
28	C5 区検出面	磁器	碗	底部付近	-	-		草花文	透明釉	灰白色	瀬戸	19c	
29	B8 区撹乱	磁器	瓶?	頸部?		-	1/2	-		灰色	不明	近世?	
30	B11 ⊠ P225	磁器	徳利	体部片	(=	-		染付	透明釉	灰白色	肥前	18c	
31	B8 区撹乱	磁器	寿文皿	口縁部	-	-	-	-	透明釉	灰白色	肥前	18c	
32	B11 ⊠ P093	陶器	丸皿	口縁~底部	6.4	3.4	1.2	-	灰釉	灰白色	美濃?	16c?	
33	B11 ⊠ SD02	陶器	折縁皿	口縁・底部	11.5	5.0	-	-	鉄釉	灰白色	瀬戸・美濃	16 末~17 初	大窯4期

第14図 道上遺跡出土遺物(2)



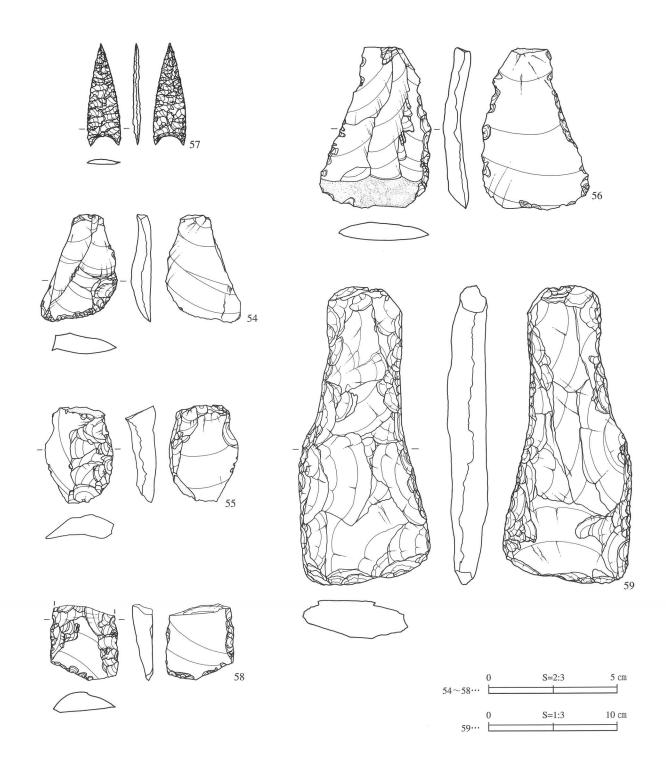
掲載 No.	出土位置	種別	器種	残存部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	文様	釉薬	胎土・色調	産地	年代	備考
34	B11区 SD02	磁器	ш	口縁~底部	13.0	7.4	3.0	風神?	透明釉	灰白色	中国	16c?	明染付
35	B11区 SD02	陶器	Ш	口縁~底部	11.3	3.8	3.0	-	透明釉	灰色	在地	19c	
36	B11 ⊠ P261	陶器	菊花皿	口縁・底部		7.0	-	-	灰釉	灰白色	瀬戸・美濃	17c	
37	B10 ⊠ SK05	磁器	Ш	口縁~底部	12.6	3.4	3.2	なし	透明釉	灰白色	肥前	18 ∼ 19c	大橋Ⅳ~V期
38	B11 区西側検出面	磁器	Ш	口縁~底部	13.8	6.7	3.9	草花文	透明釉	灰白色	肥前	18c	
39	C1 区検出面	磁器	Ш	口縁~底部	13.4	7.4	3.2	草花文	透明釉	灰白色	肥前	18c	
40	C区西側検出面	陶器	擂鉢	口縁付近		-	1.5	-	鉄釉	にぶい黄橙色	瀬戸	17c 後~ 18c	
41	B8 区撹乱	陶器	擂鉢	口縁部	-		-	-	鉄釉	灰褐色	東北地方	19c	
42	B9 区検出面	陶器	擂鉢	口縁部			-	-	鉄釉	灰褐色	東北地方	19c	
43	B10 ⊠ SK05	陶器	擂鉢	下位~底部	12	12.2	(42)	-	鉄釉	灰褐色	東北地方	19c	紐掛け痕
44	B10 区 SK05	陶器	擂鉢	口縁部	-	-	3	-	鉄釉	灰褐色	東北地方	19c	

第 15 図 道上遺跡出土遺物 (3)



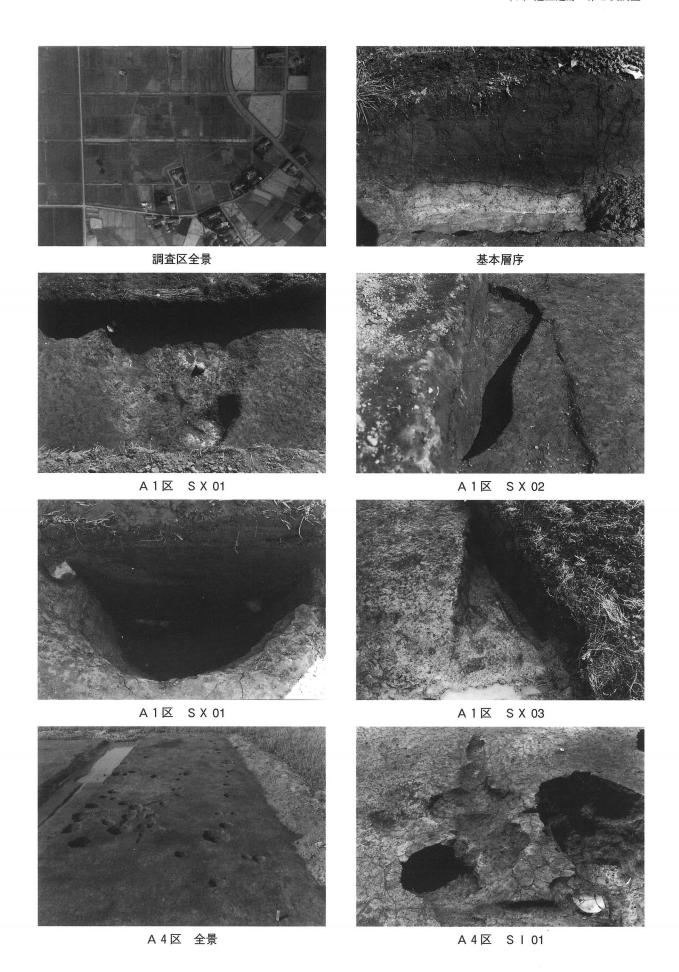
掲載No	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
45	B11 ⊠ SK01	石臼?	(23.70)	(8.50)	高さ (6.2)	950.0	デイサイト製・奥羽山脈産 (新生代新第三期)
46	B10 ⊠ SK05	石鉢?	口径 43.0	底径 21.0	器高 18.0	7400.0	デイサイト製・奥羽山脈産 (新生代新第三期)
47	B10 ⊠ SK05	石臼	(24.70)	(13.50)	(5.50)	2600.0	デイサイト製・奥羽山脈産 (新生代新第三期)
48	B14 ⊠ SK01	曲物側板	58.00	10.00	0.10	150.0	スギ製
49	B14 ⊠ SK01	曲物底板	19.35	19.00	1.10	185.0	スギ製
50	B14 ⊠ SK01	底板?	10.70	(8.60)	0.75	45.0	スギ製
51	B14 ⊠ SK01	底板?	(15.20)	(4.10)	1.20	50.0	スギ製
52	B11 区遺構外	永樂通寶	2.48	(2.15)	0.13	1.1	
53	C5 区検出面	煙管吸口	6.40	1.20	1.10	12.4	

第 16 図 道上遺跡出土遺物 (4)

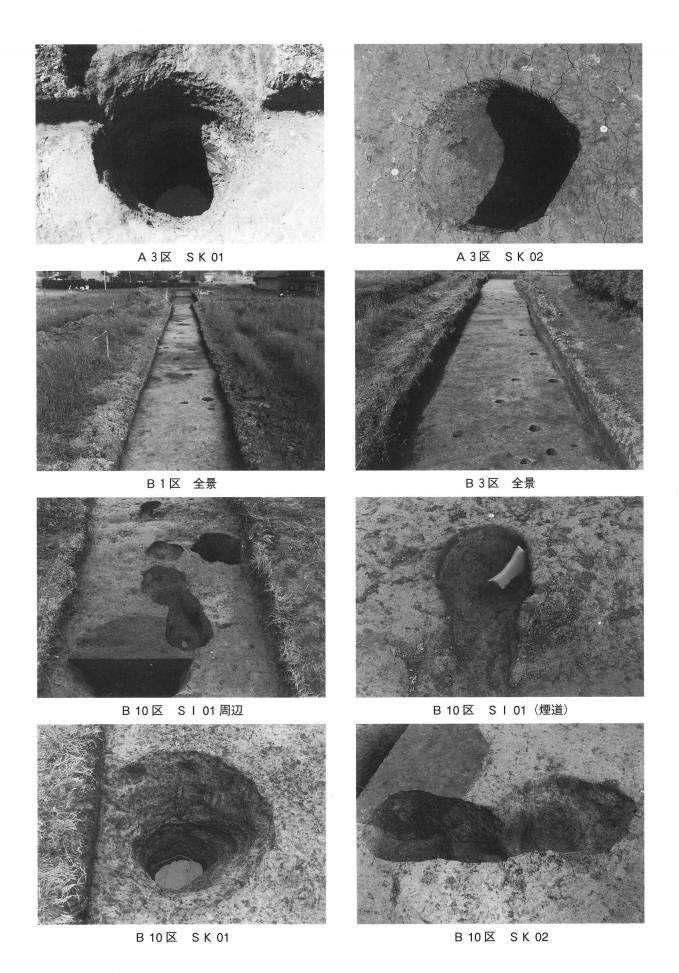


掲載No	出土位置	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
54	B8区 SD01 撹乱	石箆	4.35	2.95	0.80	8.0	頁岩製‧奥羽山脈産 (新生代新第三期)
55	B9 区検出面	楔形石器	4.30	2.20	1.20	22.4	頁岩製‧奥羽山脈産 (新生代新第三期)
56	B9 区検出面	石箆	6.45	4.28	1.10	22.4	頁岩製‧與羽山脈産 (新生代新第三期)
57	C1 区検出面	石鏃	4.05	1.30	0.30	1.1	頁岩製‧奥羽山脈産 (新生代新第三期)
58	C区西側検出面	石匙?	(3.05)	2.70	0.80	6.5	頁岩製‧與羽山脈産 (新生代新第三期)
59	B11 ⊠ SD02	石鍬	23.60	10.20	3.50	886.4	頁岩製‧奥羽山脈産 (新生代新第三期)

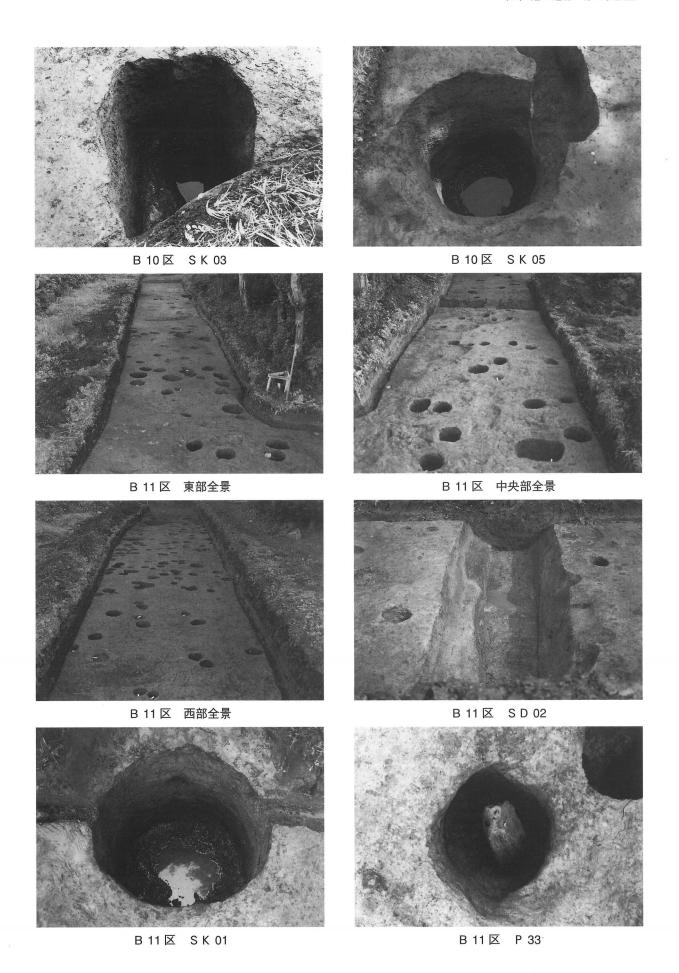
第17図 道上遺跡出土遺物(5)



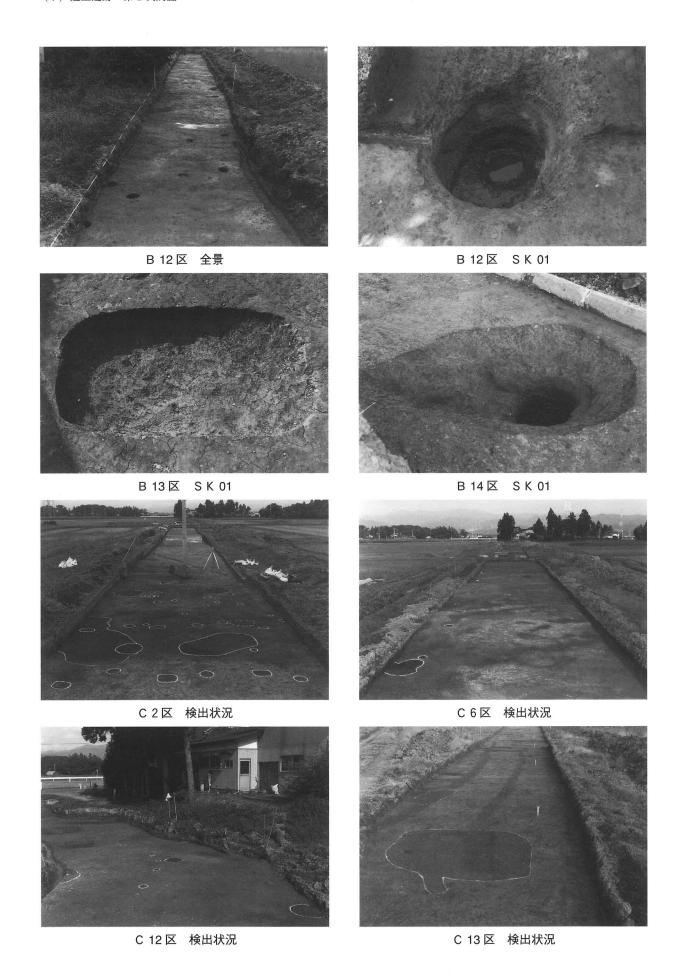
写真図版1 道上遺跡検出遺構(1)



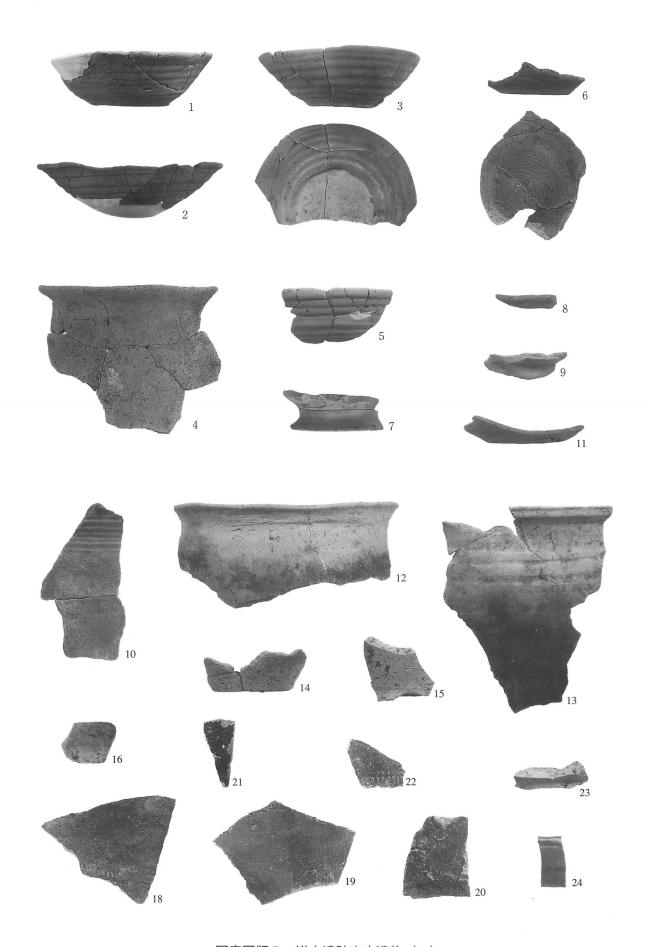
写真図版2 道上遺跡検出遺構(2)



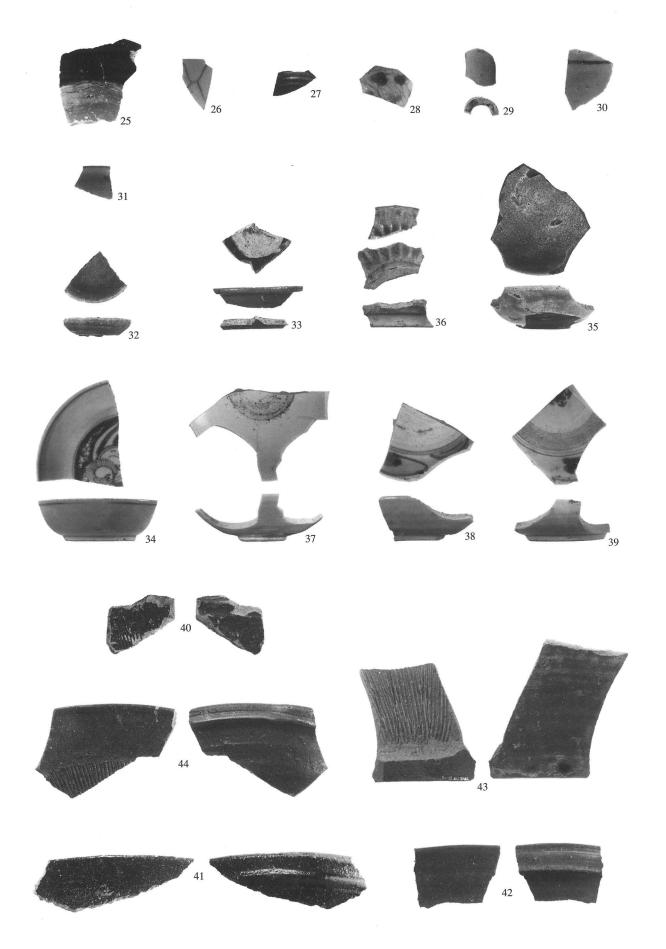
写真図版 3 道上遺跡検出遺構(3)



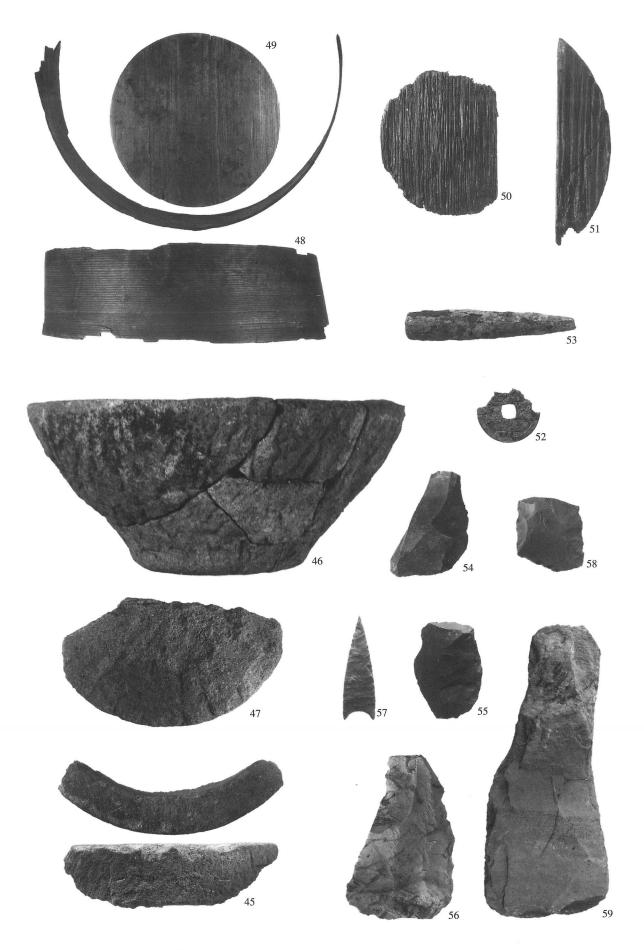
写真図版 4 道上遺跡検出遺構 (4)



写真図版 5 道上遺跡出土遺物 (1)



写真図版6 道上遺跡出土遺物(2)



写真図版7 道上遺跡出土遺物(3)

報告書抄録

	1							
ふりがな	どうのうえいせきは		ょうさほうこ	くしょ				
書 名	道上遺跡発掘調查執	告書						
副書名	経営体育成基盤整備	事業白山	地区関連遺跡	発掘調査	:			
シリーズ名	岩手県文化振興事業	美団埋蔵文4	化財調査報告	·書				
シリーズ番号	第 490 集							
編著者名	川又晋・村上拓・菅	野梢						
編集機関	(財) 岩手県文化振	興事業団埋	蔵文化財セ:	ンター				
所 在 地	〒 020 - 0853 岩	手県盛岡市	下飯岡11地	割 185 番	地 TEL	(019) $638 - 9$	9001	
発行年月日	2006年3月27日							
ふりがな	ふりがな	コ	ード	。北緯	東経	調査期間	調杳而積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	0 / //	0 / "	河(117月1日)	列111111111	朔 重
ビラのうえいせき 道 上遺跡 第1次調査	(はなけん まうしゅうし 岩手県奥州市 まえまりく 前沢区 占のやまあざたいない 白山字胎内 64 ほか	03382	NE47-0045	39 度 04 分 42 秒	141 度 09 分 31 秒	2005.07.01 ~ 2005.10.24	8,199 m ² (本調査 4,970 m ² 確認調査 3,299 m ²)	経営体育成基盤整備 事業白山地区に伴う 緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺	構	É	Eな遺物		特記事項
道上遺跡 第1次調査	集落跡 散布地	縄文 平安 中・近世 時期不明	竪穴住居跡 焼土遺構 住居状遺構 土坑 溝跡 柱穴状小土均	2 棟 2 基 5 棟 30 基 2 条 亢 626 個	手づくね 陶磁器 石製品	いかわらけ		
要約	の土地整備事業に。 焼土遺構2基、土均 辺のみの残存であっ に近世に属するもの 区外に遺構の広がり 世紀のてづくねかれ	はり削基、20 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10 10	受けて遺構の なな なな ない ない ない ない でいる でいる でいる でいる でいる でいる でいる でい	の遺存状況 た状かる。 すである。 は高い。 は器、中世	態は不良 坑 626 個 柱穴道に はい はい はい はい はい はい はい はい はい はい はい はい はい	であったが、恩を検出して東北が、恩を検出して東京といいのでは、このでは、このでは、このでは、このでは、このでは、このでは、このでは、こ	を穴住居跡 2 。竪穴住居跡 2 でかなりの 調査区外に 、平安時代の 品・木製品	る。遺跡範囲は昭和期 棟、住居状遺構 5 棟、 球は 2 棟ともおって、問 高密度で確認され、 も連続する・須恵黙、12 ・金属場が存在したも

※経度・緯度は世界測地系における数値である。

(8) 十文字遺跡

所 在 地 東磐井郡藤沢町西口字十文字 119 番地 2 ほか 遺跡番号・略号 〇 F 10 - 2292 · J M J - 05

委 託 者 千厩地方振興局農林部農村整備室 調査対象面積 131 m² 事 業 名 畑地帯総合整備事業 発掘調査面積 131 m²

発掘調査期間 平成 17 年 4 月 8 日~ 4 月 21 日 調査 担当者 千葉正彦・丸山直美

1. 調査に至る経過

十文字遺跡は、畑地帯総合整備事業藤崎地区の施工区域内に位置することから、発掘調査を実施することとなったものである。

本事業は、一関市川崎町および東磐井郡藤沢町の農村地帯346.7haを受益としている。本受益地内は、 しばしば水不足に悩まされ水田や畑地経営に支障を来たしていたことから、恒久的な水源施設の設置 を望む声が出ていた。このような状況から、水源施設として北上川に揚水機、黄海川上流に金越沢ダムを設け、安定した農業用水の供給を図るとともに、営農にかかる労働力節減を図る目的で平成4年 度に着工し現在に至っている。

本事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、千厩地方振興局農林部農村整備室が平成17年2月3日付け千地農整第696号で県教育委員会に試掘調査を依頼した。県教育委員会では試掘調査を実施し、その結果を受けて平成17年3月22日付け教生第1816号で調査が必要である旨、千厩地方振興局に回答した。これを受けて、千厩地方振興局と財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約が結ばれ、発掘調査は岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施することとなった。

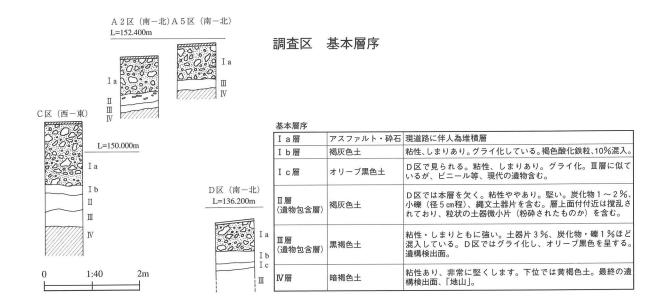
(千厩地方振興局農林部農村整備室)



第1図 遺跡の位置



十文字遺跡 周辺の地形



第2図 十文字遺跡調査区・基本層序

2. 遺跡の立地

十文字遺跡は岩手県東南部の東磐井郡藤沢町に所在し、藤沢町役場から北西へ約 3.3 km、高鳥兎山の南東麓に張り出す馬背状の丘陵上に載っており、北緯 38 度 51 分 59 秒、東経 141 度 18 分 48 秒付近(世界測地系)に位置する。遺跡は西口コミュニティセンターおよび同地区体育館周辺の丘陵頂部平坦面(標高 153 ~ 155 m)および緩斜面部(同 135 m~)に広がる。遺跡の現況は体育館敷地・宅地・道路・畑地である。

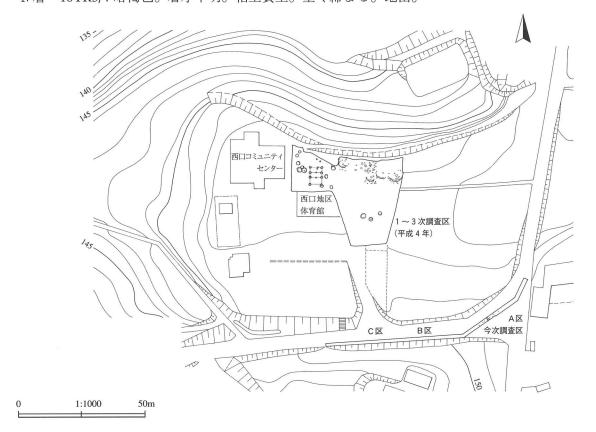
本遺跡は古くから周知されており、平成4年、西口地区体育館建設の際に町教育委員会により発掘調査が行われた(第1図)。竪穴住居跡4棟、土坑13基、掘立柱建物跡、炉跡、集石、遺物包含層が検出され、本遺跡が縄文時代中期の集落跡であることが判明している。遺物包含層からは大木8b式を主体に大木8a~10式の土器が出土し、出土総量はコンテナ200箱を越えた(藤沢町教委1997)。

今回の調査はパイプライン敷設に伴うものであり、現道部分 (標高 138 \sim 152 m) に幅 1.2 \sim 1.4 m、延長約 100 mの細長いトレンチを入れた形である。

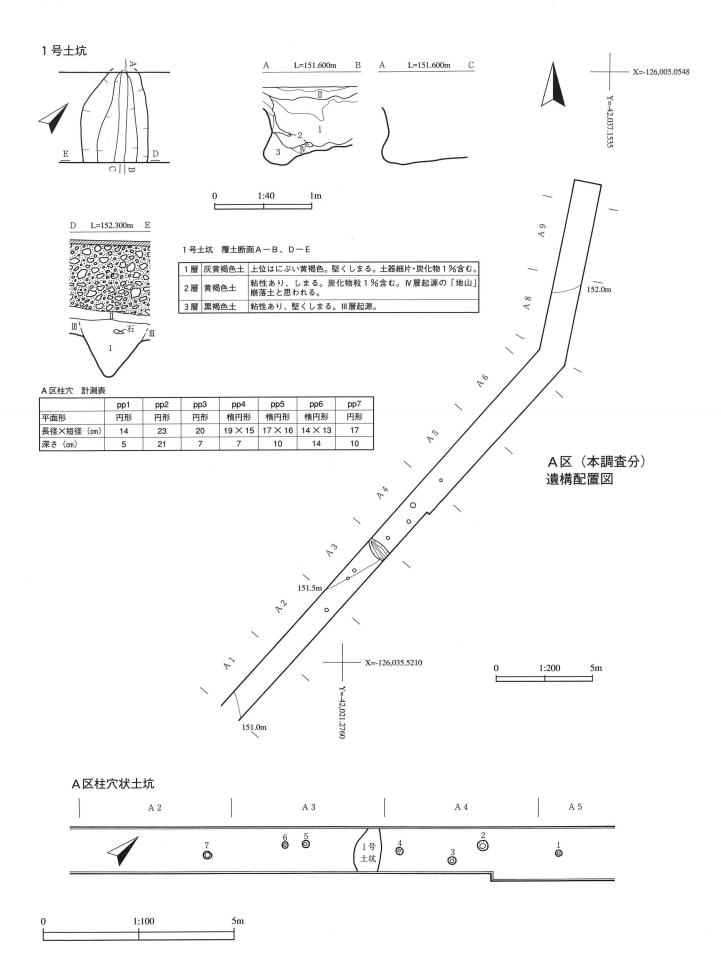
3. 基本層序

調査区の土層は次のとおりである(第2図)。

- I層 アスファルト・砕石(Ia層)および盛り土(Ib・Ic層)。層厚 $80 \sim 150 \text{ cm}$ 。現道の造成に伴う人為堆積層。盛り土層には縄文土器の小破片や少量の陶磁器破片などが含まれており、本来あった II 層および II 層より上位の堆積土層が攪乱されたものと思われる。
- II 層 10YR4/1 褐灰色。粘質シルト。層厚 $0 \sim 20$ cm。縄文時代の遺物包含層。しまりあり。傾斜上方のA区北端・D区北端部では存在しない。現道造成の際に削剥されたと推測される。
- Ⅲ層 10YR3/2 黒褐色。粘質シルト。層厚 0 ~ 70 cm以上。縄文時代の遺物包含層。Ⅱ層と同じ く削剥により A 区北端・D 区北端部では失われている。
- IV層 10YR3/4 暗褐色。層厚不明。粘土質土。堅く締まる。地山。



第3図 十文字遺跡調査区位置(A~C区)



第4図 検出遺構

4. 調査の概要と検出遺構

今回の調査は、本調査部分 33 m^2 、遺構確認調査部分 98 m^2 、総面積 131 m^2 について行った。調査区は狭小なうえに、幅が狭く細長い形状である。調査の便宜上、北東側の本調査部分をA区、確認調査部分を東からB~D区と呼称することとした(第1・2図)。調査区の形状は平面座標系に沿った通常のグリッド設定が難しい状態であったため、工事軸線に沿った4 mの区割りを設定し、南側から「A1、A2、A3…」という区名を付して、精査・遺物取り上げを行うこととした(なお、B~D区については盛り土からの出土遺物のみということから、掲載にあたっては具体の区名を示さず一括で扱った)。

調査区開始当初、遺物包含層(II・III層)の広がりを確認するため、重機により I 層を除去した。その結果、調査区の全面に遺物包含層が広がっていることを確認した。その後、A区については、段階的にIV層上面まで人力で掘り下げた。 $B\sim D$ 区では、C区の中央付近に I 箇所、層厚確認のための深掘りを行ったが、その他の部分については II 層以下の精査を行っていない。調査の結果、土坑 I 基、柱穴状小土坑 I 個、遺物包含層が検出された。

< 土坑> (第3図) A 3区とA 4区の境界付近のIV層面で検出した。西側末端部および東側が調査区外に延びている。検出部分で見ると、平面形は長さ 1.0 m以上・幅 70 cmの溝状を呈し、深さは 75 cmを測る。埋土断面で見ると、本来の構築面はⅢ層だったと考えられる。底面は幅狭くほぼ平坦で、壁は外反ぎみに立ち上がるが、やや張り出した長軸末端部では内彎している。埋土は底面付近にⅢ層起源の黒褐色土、上~中位にⅡ層系の灰褐色~明黄褐色土が堆積しており、自然堆積の様相を示している。形状から判断すると陥し穴状遺構と思われる。土坑埋土からの出土遺物はないが、形状や埋土の様相から縄文時代中期中葉に属すると推測される。

<柱穴状小土坑>(第3図) $A2区\sim A5区において検出された。当該区のIV層面で、疎らに分布する黒褐色土の円形プラン10数個を検出し、精査の結果、7個を柱穴として認定した。平面形は円形または楕円形を呈しており、径13~23 cm、深さ5~21 cmである。埋土はIII層起源と思われる黒褐色土である。竪穴住居跡の柱穴の可能性もあるが、当該区の包含層中およびIV層面では床面は確認できず、調査範囲が狭いためか配置に規則性は見出せなかった。<math>pp2\cdot3\cdot5$ から縄文土器の小破片が出土している。出土遺物および埋土の様相から縄文時代中期に属するものと推測される。

であった。II層上位では砕かれたように粒状になっている土器片も見られる。またA区では斜面上方にあたる北側で層厚は薄くなり、A5グリッド以北ではII層が確認できなくなることから、現道造成時に攪乱を受けているものと思われる。

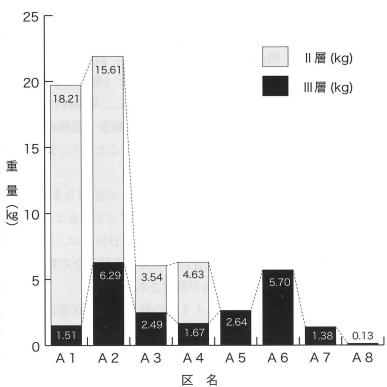
5. 出土遺物

主として遺物包含層から、総量コンテナ 6 箱弱 (総重量約 75.5 kg) の遺物が出土している。種別は縄文土器、土製品、石器であるが、縄文土器が主体を占めており、他はごく少量である。

A区出土土器重量	64083.8
B区出土土器重量	5518.2
C区出土土器重量	3561.1
D区出土土器重量	0.0
その他	975.8
土器重量	74033.0
石器石製品重量	1502.1
出土遺物総計	75535.1

表 1 遺物出土重量 (g)

<縄文土器>(第6~9図) 遺物 包含層であるⅡ・Ⅲ層、および盛 土 I 層から約74.0 kg分が出土した。 接合できたものは少なく、実測で きる立体資料は僅か17点に止まっ た。破片資料が多く明確に時期同 定しにくいものが多いが、文様に特 徴あるものを中心に、推定される時 里 期ごとに分類した73点を掲載した。量 中期:1~30。中葉~末葉のもの kg 10 が見られる。1~7は大木8a式、8 ~17 は大木 8b 式。8 は 8b-2 式、 16・17 は8b-3 式か。18~28 は大 木 9 式、29・30 は大木 10 式。後 期:31~51。初頭~中葉と思われ るものである。31~35は門前式か。 31・32 は波状口縁の波頂部の円孔、 斜位の帯状沈線文などの特徴から、 門前Ⅱ~Ⅲ式の可能性がある。36



第5図 A区グリッド別出土土器重量

 ~ 51 は加曾利B 2 ~ 3 式 (新山権現社 2 ~ 3 式、宮戸 II 式) 平行である。 $36 \sim 49$ は加曾利B 2 式 (新山権現社 2 式)、51 は加曾利B 3 式 (新山権現社 3 式) に平行する。 $52 \sim 73$ は中~後期に属すると思われるが、詳細不明のものである。 $52 \sim 61$ は半精製ないしは粗製土器の口縁部破片、 $62 \sim 73$ は底部破片。 $62 \sim 64$ は縄文、 $65 \sim 68$ は網代痕、 $69 \sim 72$ は木葉痕が底面に見られる。73 は浅鉢の底部である。

本調査を行ったのはA区のみであるが、当該区からの出土重量は約 $64.1 \, \mathrm{kg}$ である。第 $2 \, \mathrm{図に示す}$ とおり、A区は現道の建設に伴い少なからず削剥を被っており、特に北側・斜面上方のA $5 \, \mathrm{JU}$ ッド 以北では $\mathbb{I} \cdot \mathbb{I} \mathbb{I}$ 層を欠くため、出土量が極端に落ち込む。比較的残存状況の良い斜面下方のA $1 \cdot 2 \, \mathrm{JU}$ グリッドからは、 \mathbb{I} 層を主体に約 $41.6 \, \mathrm{kg}$ 分が出土しており、本来は全面が密な包含層だったものと思われる。なお、地点による(斜面の上下)による時期的な差異は明確には捉えられなかった。

<土製品>(第9図) 円盤状土製品 16点、土偶の脚部破片 1点が出土した。

<石器類> (第10・11 図) 石鏃 5 点、削掻器 15 点、敲磨器 4 点、剥片・砕片が出土した。黒曜石を母材とした石器や砕片が顕著である。

<陶磁器> 図示していないが、染付が施された肥前産の磁器碗(古伊万里)の小破片がA・C区の 攪乱層から各1点出土している。

6. まとめ

調査の結果、縄文時代の陥し穴状遺構・柱穴と縄文時代中期中葉を主体とする遺物包含層が検出された。調査区が細長く、かつ本調査部分が狭小であるため明確ではないが、次の点を指摘しておく。

遺物包含層は、土層や出土遺物の様相から、前回調査で確認された包含層と同一のものと考えられ、 集落の「捨て場」範囲が今回の調査区および調査区外にまで延びていることが確認された。なお、前 回調査での包含層出土遺物は中期中葉を主体としていたのに対して、今回はやや新しい後期初頭~中 葉期の土器出土が目立っており、地点により包含層の時期が推移している可能性がある。すなわち、 明瞭には把握できなかったものの、斜面下方側がより新しい様相を示していると考えられる。

また、遺物包含層の範囲内で土坑が検出された。当該土坑はⅢ層面で構築されていた可能性が高く、かつ、形態から見て陥し穴状遺構と考えられることから、包含層の形成途上に「捨て場」の一部がある時期には狩場として使用されていたのかもしれない。

なお、十文字遺跡に関わる報告は、これをもって全てとする。

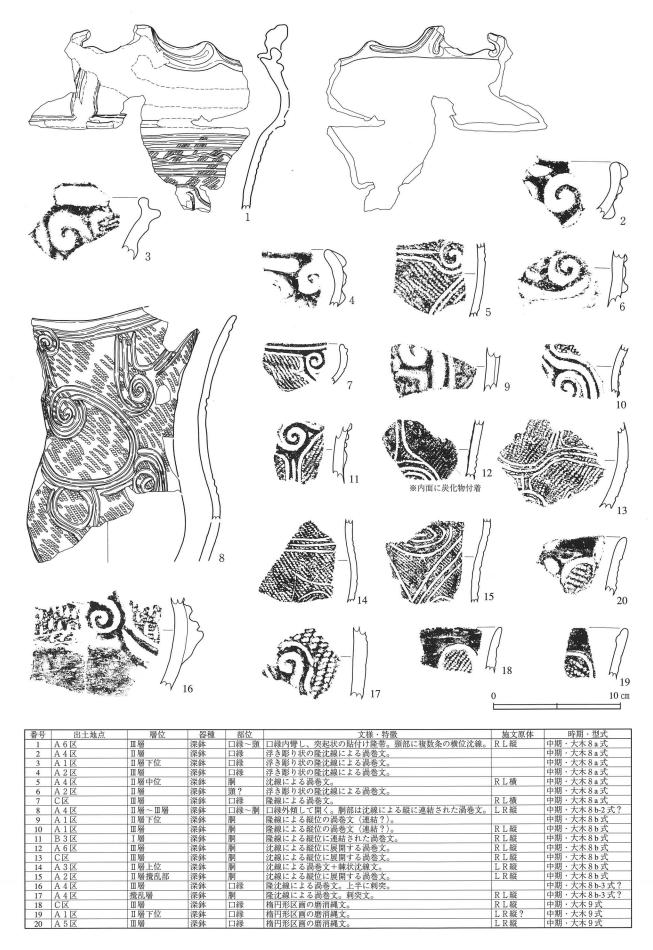
<参考文献>

藤沢町教育委員会 1997 『十文字遺跡発掘調査報告書』藤沢町文化財調査報告第14集

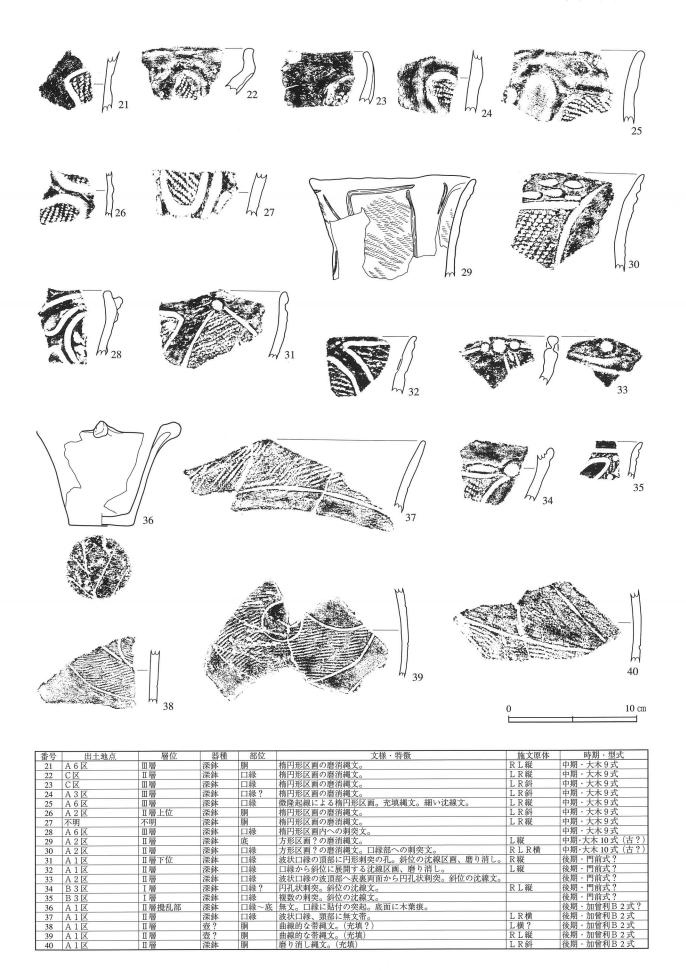
報告書抄録

ふりがな	へいせい 17 ねんど	はっくつち	ょうさほうこ	こくしょ				
書 名	平成 17 年度発掘調	查報告書						
シリーズ名	岩手県文化振興事業	団埋蔵文	化財調查報告	·書				
シリーズ番号	第 490 集							
編著者名	千葉正彦							
編集機関	(財) 岩手県文化振	興事業団埋	蔵文化財セン	ンター				
所 在 地	〒 020 - 0853 岩毛	F 県盛岡市	下飯岡 11 地	割 185 番	地 TE	EL (019) 638 -	- 9001	
発行年月日	2006年3月27日							
ふりがな	ふりがな	コ	— F	北緯	東経。	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	0 / "	0 / //	門 11 7月1日	門里田門	州 重原囚
じゅうちんじいせき 十文字遺跡	いちてけんひがしいかいでんまし 岩手県東磐井郡藤 まわまいこしてもまでしゅうもん 沢町西口字十文 で 119番地2ほか	03422	OF10-2292	38 度 51 分 59 秒	141 度 18 分 48 秒	2005.04.08 ~ 2005.04.21	131 m² 本調査 33 m² 確認調査 98 m²	畑地総合整備事業に 伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺	構	É	Eな遺物		特記事項
十文字遺跡	集落跡	縄文時代	土坑 柱穴状土坑 遺物包含層	1基 7個 1箇所	縄文土 土製品 石器		中期中葉~遺物包含層を	後期中葉にかけての を検出した。
要約		□葉の遺物	包含層を検出	ました。出	土土器は	は大木 8 a ~ 10)式、門前式	調査の結果、縄文時 、加曾利B2〜3式、 ある。

※経度・緯度は世界測地系における数値である。



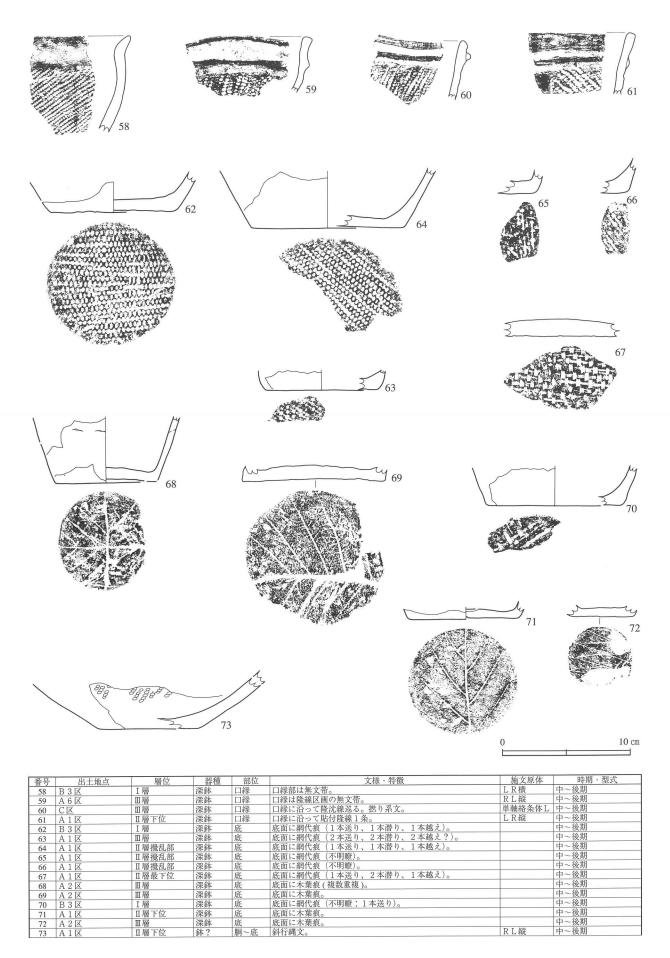
第6図 出土遺物(1)縄文土器



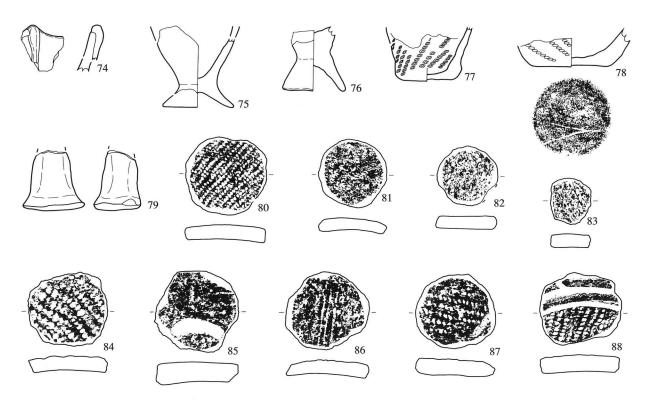
第7図 出土遺物(2)縄文土器



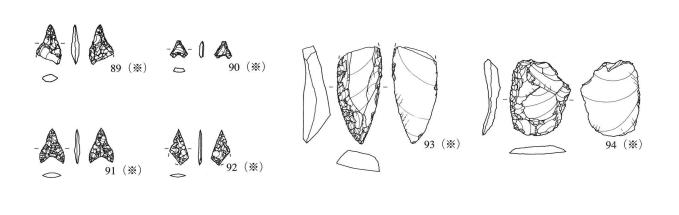
第8図 出土遺物(3)縄文土器



第9図 出土遺物(4)縄文土器

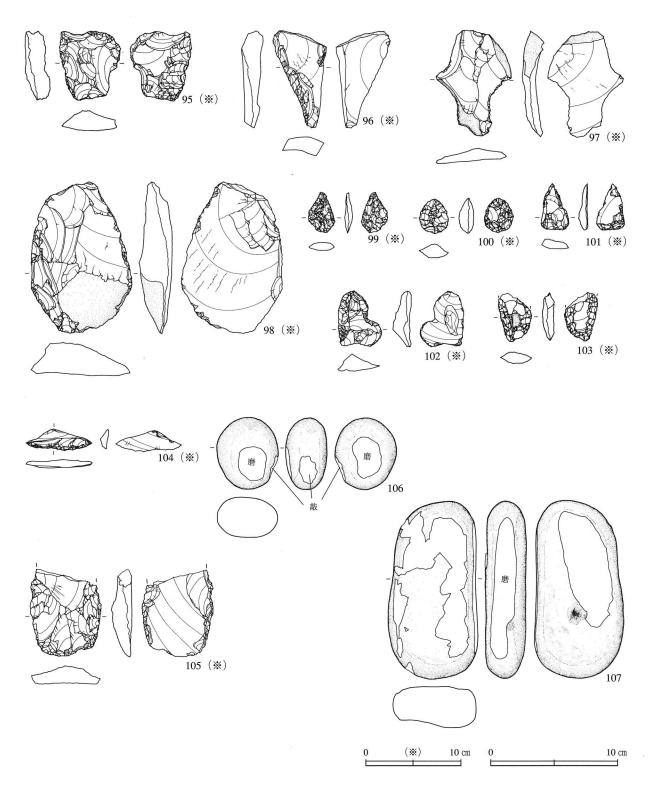


			20.00	I Is date	L. IV. sharold	12 Une (1)		n.l. 440
番号	出土地点	層位	器種	状態	文様・特徴	施文原体	重量(g)	時期
74	Α区	Ⅲ層最下位	袖珍土器		波状縁、頂部に隆帯貼付		2.8	後期
75	A 1 🗵	Ⅱ層下位	袖珍土器	胴~底	上げ底、高台付。			中期
76	A 1 🗵	Ⅱ層攪乱部		底(台部)	上げ底、高台付。			中期
77	A 1区	Ⅱ層			斜行縄文。	RLR?		中期?
78	A 1 区	Ⅱ層下位	袖珍土器		斜行縄文。	LR		中期?
79	A 2 🗵	Ⅱ層上位	土偶	脚部破片	手捏ね整形。			後期?
80	A 1 🗵	Ⅱ層下位	土製円盤	完形	斜行縄文。	LR		中~後期
81	A 1 🗵	Ⅱ層攪乱部	土製円盤	完形	表面摩滅。			中~後期
82	A 1区	Ⅲ層	土製円盤	欠損	表面摩滅。	RL?		中~後期
83	A 2 🗵	I層	土製円盤	完形	表面摩滅。			中~後期
84	A 2 🗵	Ⅲ層上位	土製円盤	完形	斜行縄文。	LR	17.0	中~後期
85	A 4 🗵	Ⅱ層攪乱部	土製円盤	完形	弧状の太い沈線(凹線)。		22.0	中~後期
86	A 2 🗵	Ⅱ層	土製円盤	完形	3条セットの細い沈線。			中~後期
87	A 1 🗵	Ⅱ層			斜行縄文。	R L		中~後期
88	A 1 🗵	Ⅱ層	土製円盤	完形	細く並行する沈線。	R L	18.9	中~後期



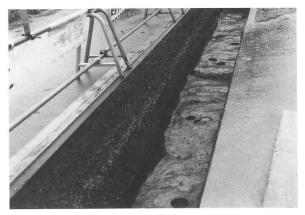
番号	出土地点	層位	器種	重量(g)	特徴	石質	産地
89	A 1区	Ⅱ層下位	石鏃	0.61	欠損。石錐か。	黒曜石	不明
90	A 2 🗵	Ⅱ層上位	石鏃		極めて小形。	凝灰岩	奥羽山脈 / 新生代新第三紀
91	A 3 🗵	Ⅲ層上位	石鏃	0.31	無茎型。基部抉入。	瑪瑙	不明
92	A 7 🗵	Ⅲ層	石鏃	0.20	欠損。石錐か。	黒曜石	不明
93	A 3 🗵	Ⅲ層	石匙	13.51	撮部欠損。	頁岩	奥羽山脈 / 新生代新第三紀
94	A 4 🗵	Ⅱ層攪乱部	削掻器	7.45	削器。片縁のみ調整。	頁岩	奥羽山脈 / 新生代新第三紀

第10図 出土遺物(5)土製品・石器

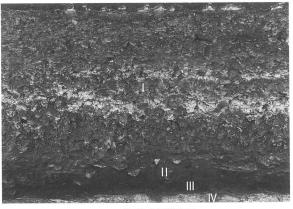


番号	出土地点	層位	器種	重量(g)	特徵	石質	産地
95	A 1 ⊠	Ⅱ層下位	削掻器	13.85	削器。片縁のみ調整。	頁岩	奥羽山脈 / 新生代新第三紀
96	A 7 ⊠	Ⅲ層	削掻器	11.08	削器。片縁のみ調整。	頁岩	奥羽山脈 / 新生代新第三紀
97	A 2区	Ⅲ層上位	削掻器	14.30	削器。刃部は彎曲・抉入し、調整は微細。	頁岩	奥羽山脈 / 新生代新第三紀
98	A 7区	Ⅲ層	削掻器	68.10	掻器。刃部は一次剥離の自然面を利用。	頁岩	奥羽山脈 / 新生代新第三紀
99	A 3 区	Ⅲ層上位	削掻器	0.77	削器?石鏃か?	黒曜石	不明
100	B区	I層	削掻器	1.80	削器。小形で円形。縁辺全体に刃部調整。	頁岩	奥羽山脈 / 新生代新第三紀
101	C区中央トレンチ	Ⅱ層	削掻器	1.44	削器?調整微細。石錐か。	赤色頁岩	北上山地/古生代?
102	A 2区	Ⅲ層	削掻器	3.66	掻器?	頁岩	奥羽山脈 / 新生代新第三紀
103	A 2区		削掻器	2.30	削器。欠損。	頁岩	奥羽山脈 / 新生代新第三紀
104	A 4 🗵		削掻器		削器。小形で羽根形。	黒曜石	不明
105	A 7区		打製石斧		欠損。掻器か。	頁岩	奥羽山脈 / 新生代新第三紀
106	A 1区		敲磨器		磨り(2)、敲き(1)。	凝灰質砂岩	奥羽山脈 / 新生代新第三紀
107	A 2 🗵	Ⅱ層	敲磨器	564.50	側面に磨り痕。特殊磨石状。	砂岩	奥羽山脈 / 新生代新第三紀

第11図 出土遺物(6)石器



A 区完屈(南西から)



A 区堆積土層断面



1号土坑完屈(東から)



1号土坑埋土断面(南から)



B区II 層検出(東から)



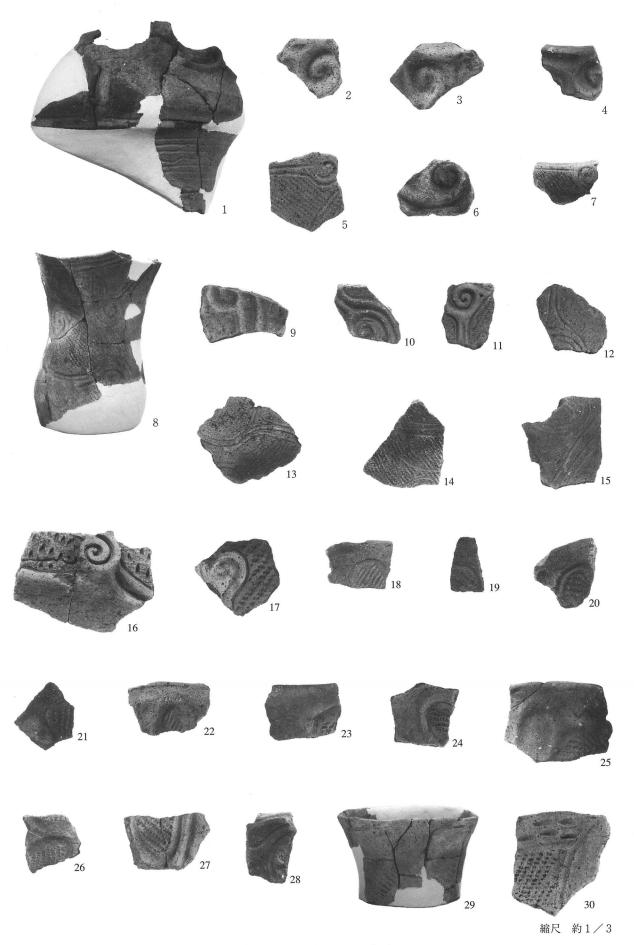
C区II層検出(西から)



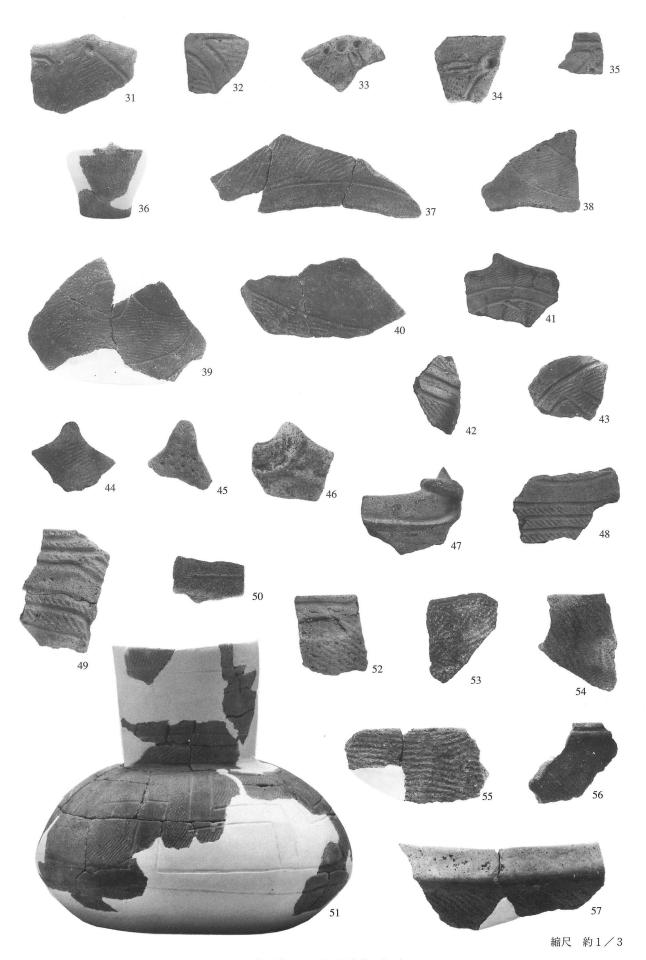
D区Ⅲ層検出(南から)



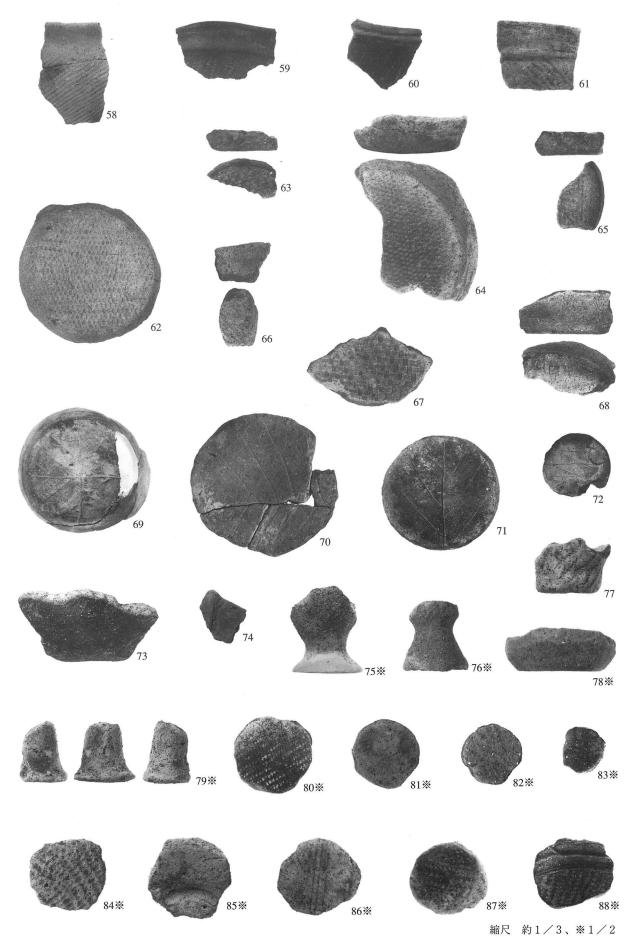
A 区精査状況(南西から)



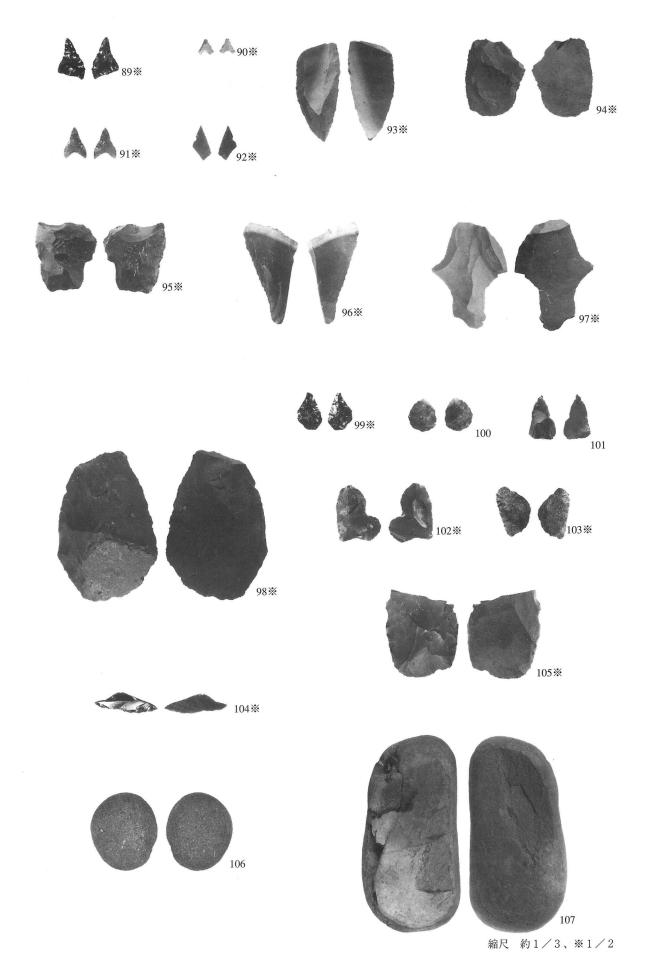
写真図版 2 出土遺物(1)



写真図版 3 出土遺物 (2)



写真図版 4 出土遺物 (3)



写真図版 5 出土遺物 (4)

Ⅱ 試掘・確認調査報告

(9~19) 八木沢Ⅱ遺跡ほか 10 遺跡

所 在 地 宫古市大字「八木沢 |· 「金浜 | 地内

委 託 者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所 試掘・確認調査面積 5,046 m²

事業名 三陸縦貫道路宮古道路建設事業

調査期間 平成 17 年 7 月 15 日~ 11 月 29 日

調査対象面積 89,430 m² 計場・確認調本面積 5,046 m

調查担当者 林 勲·米田 寛·水上明博

西澤正晴·千葉正彦·川又晋

横井猛志·荒谷伸郎

調査に至る経過

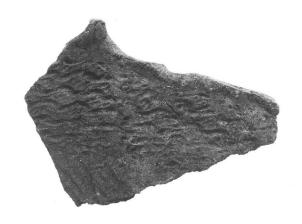
八木沢 II ほか 10 遺跡は、一般国道 45 号宮古道路事業の事業区域内に位置しているため、当該事業の施行に伴い、試掘・確認調査を実施することとなったものである。

宮古道路事業は、宮古市内の国道 45 号の線形不良及び隘路箇所を解消し、増大する交通需要に対応するとともに、三陸沿岸地域への高速交通サービスの充実を図り、地域経済の発展、連携・交流の促進のために、平成 15 年度から事業化している。

これに係わる埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、平成 16年1月26日付け国東整陸調第78号により、国土交通省三陸国道事務所長から、岩手県教育委員会に、埋蔵文化財包蔵地の確認依頼を行い、平成16年1月26日~1月28日、2月24日~2月25日にわたり分布調査を実施した。

その結果、平成 16 年 3 月 4 日付け「教生第 1879 号」により、八木沢Ⅱ ほか 10 遺跡の試掘・確認調査が必要となったことから、岩手県教育委員会と三陸国道事務所が協議を行い、調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに委託することとなったものである。

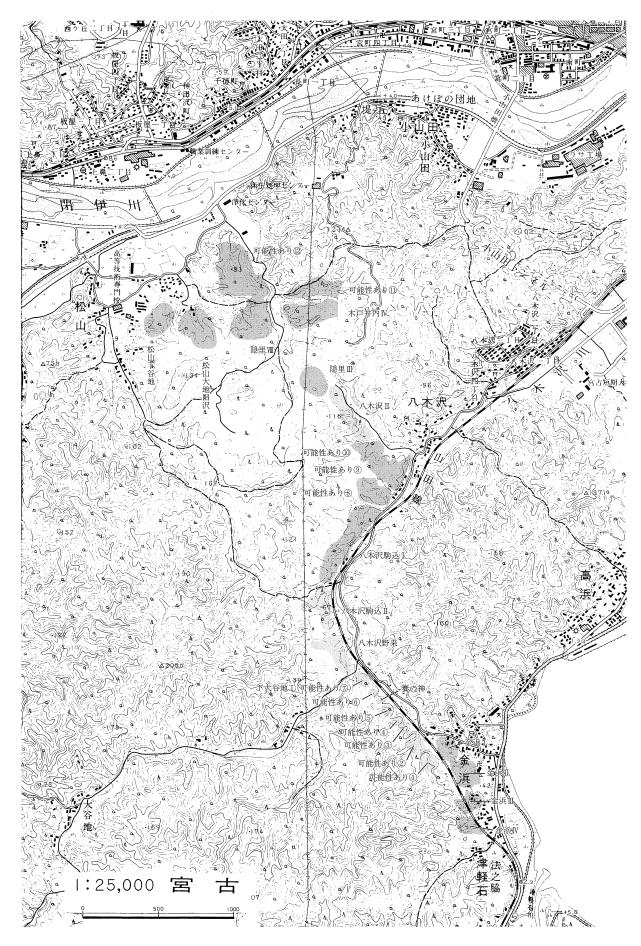
(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)





写真図版 1 八木沢Ⅲ野来遺跡出土縄文土器

写真図版 2 可能性あり②出土鉄滓



第1図 宮古道路関連遺跡位置図

(9) 可能性あり①

所 在 地 宮古市大字金浜第 3 地割字妻ノ上 調査対象面積 $6,760 \text{ m}^2$ 遺 跡 番 号 L G 43 - 2353 試掘調査面積 530 m^2

1. 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR山田線磯鶏駅の南約4.5㎞に位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川東岸に立地している。現況は畑地、山林である。今回の試掘調査範囲は、西部の山地から続く尾根部と隣接する斜面部・谷間で構成される。

2. 基本層序

I層	黒褐色~暗褐色土(表土)	層厚	$20 \sim 40 \text{ cm}$
Ⅱ層	黒色土(遺物包含層) 谷部で厚く堆積	層厚	$0 \sim 150 \text{ cm}$
Ⅲ層	暗褐色土	層厚	$0 \sim 60 \mathrm{cm}$
IV層	褐色~黄褐色土(マサ土)最終遺構検出面	層厚	層厚不明

3. 調査概要

試掘は全て人力掘削で行った。調査範囲内に38ヵ所のトレンチを設定し、表土下のそれぞれの地層で遺構検出作業を行い、IV層での検出作業を最終とした。

- (1)検出遺構 焼土遺構 1 基、竪穴状遺構 1 基、炭窯 2 基、古代廃滓場 1 ヵ所、縄文遺物包含層 1 ヵ所を検出した。谷部には縄文遺物包含層が 50~80 cm、古代以降の廃滓場が 70~100 cmの層厚で堆積している。地形的には「可能性あり②」の廃滓場と類似する。尾根部では IV層で検出し、竪穴状遺構、焼土遺構、炭窯を確認した。焼土遺構周辺は硬質面が円形に広がることから、竪穴住居跡の可能性が高い。また、斜面部では炭窯 1 基を確認した。
- (2) 出土遺物 縄文土器(中期~後期)小コンテナ1箱、陶磁器(近世以降)・鉄滓各9号袋1袋。

報告書抄録

ふりがな	な へいせいじゅうななねんどはっくつちょうさほうこくしょ									
書 名	平成 17 年度発	平成 17 年度発掘調査報告書								
副書名										
巻次										
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書									
シリーズ番号	第 490 集	第 490 集								
編著者名	名 林 勲・米田 寛									
編集機関	(財)岩手県文化	比振興事業団埋	蔵文化則	ナセンター						
所 在 地										
発行年月日	2006年3月27日									
ふりがな		コード 北緯 東経 調査期間 調査面積 調査原					調査原因			
所収遺跡名	所有	所在地 市町村 遺跡番号 。′″ 。′″ 門直知目 門宜田復 門宜原口								
_	岩手県宮古市	光学			39 度	141 度	2005.07.15			
可能性あり①	かねはまだい ちゃりき 金浜第3地割っ	っざつま かみ ショエ・ノ・L	03202	LG43-2353	36分	56分	~	530 m ²	道路整備事業	
					06 秒	04 秒	2005.11.29			
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な	遺物	特	記事項	
	集落跡	縄文時代	竪穴状造			縄文土器				
可能性あり①	生産遺跡	古代	焼土遺植	苒		鉄滓				
1,10 (2.1)										
廃滓場・遺物包含層 各1ヵ所										
	宮古湾に向かって北流する八木沢川東岸に立地し、現況は畑地、山林である。西部の山地から続く尾根部と									
要 約										
		ヌリロ住及の施 関連施設の検出			ひ女がめる。	武伽ツ桁米、	/毛似前を	せいと しん	. 碑 乂 朱 沿 C 白	
	10以件り表数	利生ル成り作山	ル元とよ	.4000	***************************************	※ 给 府 .) III. EE 201 bl.	ブリッ いいよっ	光はボナフ	

(10) 可能性あり②

所 在 地 宮古市大字金浜第 3 地割字妻ノ上 調査対象面積 $4,780 \text{ m}^2$ 遺跡番号 L G 43 - 2341 試掘調査面積 473 m^2

1. 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR山田線磯鶏駅の南約4.5kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川東岸に立地している。現況は畑地、山林である。今回の試掘調査範囲は、西部の山地から続く尾根部と隣接する斜面部・谷部で構成される。

2. 基本層序

I 層黒褐色~暗褐色土 (表土)層厚 $20 \sim 40 \, \mathrm{cm}$ II 層黒色土 (遺物包含層)層厚 $0 \sim 150 \, \mathrm{cm}$ II 層暗褐色土層厚 $0 \sim 60 \, \mathrm{cm}$ IV 層褐色~黄褐色土 (マサ土) 最終遺構検出面層厚不明

3. 調査概要

試掘は全て人力掘削で行った。調査範囲内に 50 ヵ所のトレンチを設定し、表土下のそれぞれの地層で遺構検出作業を行い、IV層での検出作業を最終とした。

- (1) 検出遺構 竪穴状遺構 1 基、製鉄炉 3 基、炭窯 2 基、古代廃滓場 2 ヵ所、縄文遺物包含層 2 ヵ所を検出した。谷部は縄文遺物包含層が 50~80 cm、その上部には古代以降の廃滓場が 80~100 cm の層厚で堆積している。北側の谷部のトレンチでは製鉄炉 3 基を確認し、鉄滓、羽口、縄文土器・石器、陶磁器が出土している。尾根・斜面部では竪穴状遺構 1 基、炭窯 2 基を確認している。また、沢を挟んで南側の谷部でも縄文土器(前期以降)・石器や大量の鉄滓が出土し、北側と同様に縄文遺物包含層と廃滓場が形成されている。
- (2) 出土遺物 縄文土器 (小コンテナ1箱)、縄文石器 (9号袋2袋)、陶磁器 (9号袋1袋)、鉄滓 (大コンテナ2箱)、羽口 (9号袋1袋)。

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅう	へいせいじゅうななねんどはっくつちょうさほうこくしょ								
書 名	平成 17 年度発	平成 17 年度発掘調査報告書								
副 書 名 巻 次										
卷次										
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書									
シリーズ番号	第 490 集									
編著者名										
編集機関	関 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター									
	所 在 地 〒 020 - 0853 岩手県盛岡市下飯岡第 11 地割 185 番地 Tx (019) 638-9001									
発 行 年 月 日		006年3月27日								
ふりがな	ふり			コード	北緯	東経。	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所有		市町村	遺跡番号					p/0.H.m.	
	岩手県宮古市大	^{おめさ} で字			39 度	141 度	2005.07.15			
可能性あり②	かねはまだい ち わりあ	ざつま かみ	03202	LG43-2341	36 分	56 分	~	473 m²	道路整備事業	
	金浜第3地割字	学表ノ上			02 秒	05 秒	2005.11.29			
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な	Access to the second se	特	記事項	
		縄文時代	竪穴状況	貴構		縄文土器・石	5器			
可能性あり②		古代	製鉄炉		3 基					
I HELLONG	近世 炭窯 2基鉄滓									
					各2ヵ所					
	宮古湾に向か	いって北流する	八木沢川	東岸に立地し	/、現況は畑	l地、山林でる	ある。西部の	の山地から	続く尾根部と	
要約	隣接する斜面部	『・谷部で構成	される。	谷部には縄プ	工時代遺物包	含層と古代し	以降の廃滓	易が2ヵ所	形成されてい	
女 和	る。尾根部・翁	斗面部では竪穴	状遺構・	炭窯を確認し	_レ た。縄文集	落の存在と、	古代以降の	の製鉄関連	施設の検出が	
	見込まれる。					** ** ** *** ***				

(11) 可能性あり(3)

所 在 地 宮古市大字金浜第 3 地割字妻ノ上 調査対象面積 3,050 m² 遺跡番号 L G 43 - 2331 試掘調査面積 358 m²

1. 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR山田線磯鶏駅の南約4.3kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川東岸に立地している。現況は山林である。今回の試掘調査範囲は、西部の山地から続く尾根部と隣接する斜面部で構成される。

2. 基本層序

I 層黒褐色~暗褐色土 (表土)層厚20~40 cmII 層黒色土層厚0~80 cmIII 層暗褐色土層厚0~40 cmIV 層褐色~黄褐色土 (マサ土) 最終遺構検出面層厚不明

3. 調査概要

試掘は全て人力掘削で行った。調査範囲内に 29 ヵ所のトレンチを設定し、表土下のそれぞれの地層で遺構検出作業を行い、Ⅳ層での検出作業を最終とした。

- (1) 検出遺構 今回の調査区では遺構を確認できなかった。
- (2)出土遺物 縄文土器2点が尾根部で出土した。いずれもⅢ層で出土したが、器面の摩滅が著しい。

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅう	いせいじゅうななねんどはっくつちょうさほうこくしょ							
書 名	平成 17 年度発	Z成 17 年度発掘調査報告書							
副書名									
卷次									
シリーズ名	岩手県文化振興	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 490 集	§ 490 集							
編著者名	林 勲・米田	動·米田 寛							
編集機関	(財)岩手県文化	財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒 020 - 0853 岩手県盛岡市下飯岡第 11 地割 185 番地 โ社 (019) 638-9001								
発行年月日	年月日 2006年3月27日								
ふりがな	ふり	がな	;	コード	。北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所名	E地	市町村	遺跡番号	0 / //	0 / "	神生为间	列111111111111111111111111111111111111	門且
	おき県宮古市ナ	おあざ			39度	141 度	2005.07.15	2	\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\
可能性あり③	かねはまだい ちゃりぁ 金浜第3地割与	Manual Control							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構主な遺物特記事項						
可能性あり③	散布地	教布地 縄文時代 縄文土器							
要約	「京士湾に向かって北流する八本沢川東岸に立地」 刊況は山林である 西部の山地から続く尾根部と隣接す								

可能性あり①

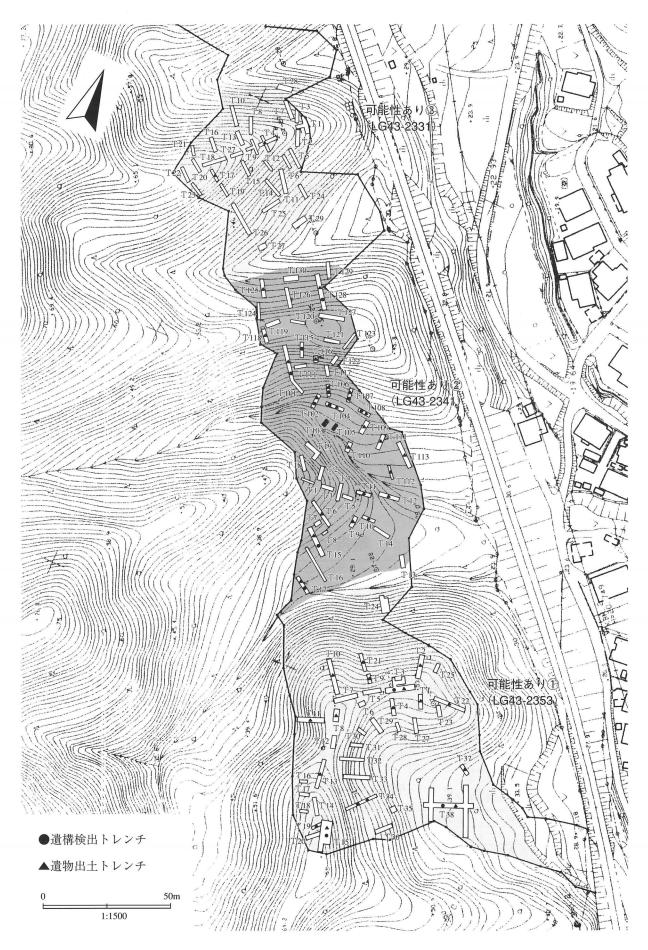
トレンチ	遺構	遺物
T 1		縄文土器
T 2		縄文土器
T 3	焼土遺構(住居の炉跡か?) 1基、炭窯1基	縄文土器(後期)
T 4		縄文土器(後期)
T 8		縄文土器(後期?)
T 9		縄文土器
T 10		縄文土器
T 11		鉄滓
T 13		縄文土器
T 15	竪穴状遺構1基	縄文土器
T 19		縄文土器
T 21		縄文土器
T 22		縄文土器
T 34	炭窯 1 基	焼土
T 37		鉄製ナイフ(現代)
T 38	廃滓場1基・遺物包含層1カ所	貝殼、近世陶磁器、鉄滓、縄文土器

可能性あり②

トレンチ	遺構	遺物			
T 6		鉄滓			
Т 9		縄文土器(前期)、磨石、石核			
T 10		縄文土器(前期)			
T 11		現代磁器、貝殼			
T 12		縄文土器(前期)、石鏃、剥片			
T 15	縄文包含層	縄文土器(羽状縄文)、鉄滓			
T 17	廃滓場範囲	鉄 涬、近世陶器			
T 101	廃滓場・縄文包含層	縄文土器(中~後期)、陶器			
T 102	廃滓場・縄文包含層	特殊磨石、鉄滓、縄文土器、木炭、現代磁器			
T 103	廃滓場・縄文包含層	鉄滓、縄文土器、			
T 104	製鉄炉3基	鉄滓、羽口多量、木炭、縄文土器、磨石			
T 105	廃滓場・縄文包含層	鉄滓、羽口多量、土師器、木炭、縄文土器			
T 106	焼土	鉄滓多量			
T 107	廃滓場・縄文包含層	鉄滓、近世陶器			
T 108	廃滓場・縄文包含層	鉄滓 (流出滓)			
T 109		木炭、鉄滓、縄文土器、近世陶器			
T 110		鉄 滓、縄文土器、羽口、木炭			
T 111		鉄滓、縄文土器			
T 112		羽口、陶器、縄文土器			
T 113		縄文土器、羽口、貝殼、鉄滓、近世陶器(18 世紀)			
T 115	竪穴状遺構1基				
T 116		鉄滓 (碗形鉄滓)			
T 118		磨石、縄文土器			
T 125		近世磁器			
T 128	炭窯(方形プラン) 1 基	縄文土器			

可能性あり③

トレンチ	遺構	遺物
T 4		縄文土器(後期以降)
T 17		縄文土器(後期以降)



第2図 可能性あり①~③トレンチ配置図

(12) 可能性あり④

所 在 地 宮古市大字金浜第3地割字妻ノ上

調査対象面積 2,140 m²

遺跡番号 LG 43 - 2320

試掘調査面積 215 m²

1. 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR山田線磯鶏駅の南約4.3kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川東岸に立地している。現況は山林である。今回の試掘調査範囲は、西部の山地から続く尾根部と隣接する斜面部で構成される。

2. 基本層序

I層 黒褐色~暗褐色土(表土)

層厚 20~40 cm

Ⅱ層 黒色土

層厚 0~80 cm

Ⅲ層 暗褐色土

層厚 $0\sim40\,\mathrm{cm}$

Ⅳ層 褐色~黄褐色土 (マサ土) 最終遺構検出面

層厚不明

3. 調査概要

試掘は全て人力掘削で行った。調査範囲内に 27 ヵ所のトレンチを設定し、表土下のそれぞれの地層で遺構検出作業を行い、IV層での検出作業を最終とした。

(1) 検出遺構 周溝 1 基。尾根から緩やかに続く斜面上に、張り出すような平場があり、約 4×10 mの広さであった。T7 を設定し、IV層上面で周溝を確認した。トレンチの範囲内では弧状のプランを確認したが、円形になる可能性もある。溝幅は約 $80~{\rm cm}$ で、深さ $30\sim 80~{\rm cm}$ と一定でない。

(2) 出土遺物 なし

報告書抄録

金浜第 3 地割字妻ノ上 06 秒 00 秒 2005.11.29 所収遺跡名 種別 主な時代 主な遺構 主な遺物 特記事項										
副 書 名 巻 次 シリーズ名 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 シリーズ番号 第 490 集 編 著 者 名 林 勲・米田 寛 編集機関(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 所 在 地 〒 020 - 0853 岩手県盛岡市下飯岡第 11 地割 185 番地 Tel (019) 638-9001 発行年月日 2006年3月27日 ふ り が な ふりがな ホリがな ホリがな ホリがな ホリがな 赤りがな ホリガな 赤りがな ホリガな ボール 遺跡番号 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	ふりがな	へいせいじゅう	いせいじゅうななねんどはっくつちょうさほうこくしょ							
巻 次 シリーズ名 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 シリーズ番号 第 490 集 編 著 者 名 林 勲・米田 寛 編 集 機 関 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 所 在 地 〒 020 - 0853 岩手県盛岡市下飯岡第 11 地割 185 番地 Tal (019) 638-9001 発行年月日 2006年3月27日 ふ り が な ふりがな コード	書 名	平成 17 年度発	平成 17 年度発掘調査報告書							
シリーズ名 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 シリーズ番号 第 490 集 編 著 者 名 林 勲・米田 寛 編 集 機 関 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 所 在 地 〒 020 - 0853 岩手県盛岡市下飯岡第 11 地割 185 番地 Tal. (019) 638-9001 発行年月日 2006年3月27日 ふ り が な ふりがな コード	副 書 名									
シリーズ番号 第 490 集 編 著 者 名 林 勲・米田 寛 編 集 機 関 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 所 在 地 〒 020 - 0853 岩手県盛岡市下飯岡第 11 地割 185 番地 ℡ (019) 638-9001 発行年月日 2006年3月27日 ふ り が な ふりがな 所在地 市町村 遺跡番号 市町村 遺跡番号 可能性あり④ 岩手県宮古市大学 会社まな まりかきでき 会社 まりかき まりかき まりかき まりかき まりかき まりかき まりかき まりかき	卷次									
編 著 者 名 林 勲・米田 寛 編 集 機 関 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 所 在 地 〒 020 - 0853 岩手県盛岡市下飯岡第 11 地割 185 番地 Tel (019) 638-9001 発行年月日 2006年3月27日 ふ り が な ふりがな コード 遺跡番号 北緯 東経 調査期間 調査面積 調査原因 所在地 市町村 遺跡番号 141 度 2005.07.15 岩砂をごとしままたで かとはまたい ま むりをごと かな 金浜第 3 地割字妻ノ上 03202 LG43-2320 36 分 56 分 2005.11.29 所 収遺 跡 名 種別 主 な時代 主 な遺構 主 な遺物 特記事項	シリーズ名	岩手県文化振興	手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
編集機関 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 所在地〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡第11 地割185番地 Tel (019) 638-9001 発行年月日 2006年3月27日 ふりがな ふりがな コード 沈緯 東経 調査期間 調査面積 調査原因 所収遺跡名 所在地 市町村 遺跡番号 2005.07.15 可能性あり④ 岩手県宮古市大字 215 ㎡ 道路整備事 の3202 LG43-2320 36分 56分 66秒 00秒 2005.11.29 所収遺跡名 種別 主な時代 主な遺構 主な遺物 特記事項	シリーズ番号	第 490 集								
所 在 地 〒 020 - 0853 岩手県盛岡市下飯岡第 11 地割 185 番地 Tel (019) 638-9001 発行年月日 2006年3月27日 ふりがな ふりがな コード 北緯 東経 調査期間 調査面積 調査原因 所収遺跡名 所在地 市町村 遺跡番号 141度 2005.07.15 音音算算 3 地割字妻 / 上 03202 LG43-2320 36 分 66 分 06 秒 00 秒 2005.11.29 所収遺跡名 種別 主な時代 主な遺構 主な遺物 特記事項	編著者名	林 勲・米田	寛							
発行年月日 2006年3月27日 ふりがな ふりがな コード 北緯 東経 調査期間 調査面積 調査原因 所収遺跡名 所在地 市町村 遺跡番号 141度 2005.07.15 可能性あり④ 岩手質宮舌古大学 会に第3地割字妻ノ上 03202 LG43-2320 36分 56分 66秒 00秒 2005.11.29 所収遺跡名 種別 主な時代 主な遺構 主な遺物 特記事項	編集機関	(財)岩手県文化	財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
ふりがな ふりがな コード 北緯 東経 調査期間 調査期間 調査原因 所収遺跡名 所在地 市町村 遺跡番号 39 度 141 度 2005.07.15 215 ㎡ 道路整備事 可能性あり④ 岩田	所 在 地	〒 020 − 0853	020 - 0853 岩手県盛岡市下飯岡第 11 地割 185 番地 ℡ (019) 638-9001							
所 収 遺 跡 名 所在地 市町村 遺跡番号 39 度 39 度 36 分 2005.07.15 音が変えている。 から は 141 度 2005.07.15 215 ㎡ 道路整備事 で 141 度 2005.11.29 で 15 からまできまった。 から 金浜第 3 地割字妻ノ上 141 度 2005.11.29 で 15 からまできまった。 から 金浜第 3 地割字妻ノ上 15 は 15 を	発行年月日	2006年3月27日								
所 収 遺 跡 名 所 在 地 市町村 遺跡番号 39 度 141 度 2005.07.15 音手県宮古市大学 かみはまたい ま わりをできまった かみ 金浜第 3 地割字妻ノ上 03202 LG43-2320 36 分 06 秒 00 秒 2005.11.29 正 道路整備事 所 収 遺 跡 名 種別 主 な時代 主 な遺構 主 な遺物 特記事項	ふりがな	ふり	がな		コード	北緯	東経	SEL -4- ALI BE	细水壳锤	細木匠口
可能性あり(4) かねはまたい ちょりゅぎごま かみ 金浜第 3 地割字妻ノ上 03202 LG43-2320 36 分 06 秒 56 分 2005.11.29 ~ 直路整備事 所 収 遺 跡 名 種別 主な時代 主な遺構 主な遺物 特記事項	所収遺跡名	所名	E地	市町村	遺跡番号	0 / "	0 / //	神雀州间	神宜田倶	神 重原囚
	可能性あり④	いかてけんみゃこ しま 岩手県宮古市ブ かねはほだい ちゃりゅ 金浜第3地割与	Making 1				道路整備事業			
可能性あり④ 周溝 1基 墓域か?	所収遺跡名	種別 主な時代 主な遺構 主な遺物 特記事項				記事項				
710 277 3	可能性あり④		周溝 1基 墓域か?							
B a l る斜面部で構成される。周溝1基のみ確認され、遺物は出土しなかった。西側の調査区外に集落形成に適し	要約	宮古湾に向かって北流する八木沢川東岸に立地し、現況は山林である。西部の山地から続く尾根部と隣接する斜面部で構成される。周溝 1 基のみ確認され、遺物は出土しなかった。西側の調査区外に集落形成に適した平場がある。遺跡周辺では宮古市長根 I 遺跡、山田町房の沢 IV 遺跡で円形周溝によって区画された古墳が確認								

(13) 可能性あり(5)

所 在 地 宮古市大字金浜第 3 地割字妻ノ上 調査対象面積 3,220 m² 遺跡番号 L G 43 - 2310 試掘調査面積 310 m²

1. 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR山田線磯鶏駅の南約4.2kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川東岸に立地している。現況は山林である。今回の試掘調査範囲は、西部の山地から続く尾根部と隣接する斜面部で構成される。

2. 基本層序

 I層
 黒褐色~暗褐色土(表土)
 層厚
 $20 \sim 40 \text{ cm}$

 II層
 黒色土
 層厚
 $0 \sim 80 \text{ cm}$

 II層
 暗褐色土
 層厚
 $0 \sim 40 \text{ cm}$

 IV層
 褐色~黄褐色土(マサ土)最終遺構検出面
 層厚不明

3. 調査概要

試掘は全て人力掘削で行った。調査範囲内に 24 ヵ所のトレンチを設定し、表土下のそれぞれの地層で遺構検出作業を行い、Ⅳ層での検出作業を最終とした。集落の痕跡を示す遺構は確認できなかった。

- (1) 検出遺構 土坑 1 基、炭窯 1 基。いずれも \mathbb{N} 層で検出した。炭窯(時期不明)は長方形プランで黒色土を埋土とする。
- (2) 出土遺物 縄文土器 (中期) 4点、土師器1点、近世陶器1点。

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅ・	うななねんどは	っくつち	ちょうさほうこ	こくしょ				
書 名	平成 17 年度発	:掘調査報告書							
副 書 名									
巻 次									
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	第 490 集	第 490 集							
編著者名	林 勲・米田	* 勲·米田 寛							
編集機関	(財)岩手県文化	財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒 020 − 0853	F 020 - 0853 岩手県盛岡市下飯岡第 11 地割 185 番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2006年3月27	006年3月27日							
ふりがな	ふり	ふりがな コード 北緯 東経 調査期間 調査面積 調査原因							
所収遺跡名	所在	生地	市町村	遺跡番号	0 / //	0 / //	調査期間	調査面積	調査原因
	いかてけんみゃこしょ	the state of the	,		39度	141 度	2005.07.15		
可能性あり⑤	かねはまだい ちゃりき	うざつま かみ テ 事 ノ ト	03202	LG43-2310	36分	55 分	~	310 m ²	道路整備事業
	並供分り地割っ	ナ安 / ユ			08 秒	58 秒	2005.11.29		
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な:	遺物	特	記事項
	生産遺跡								
可能性あり⑤	散布地	散布地 古代以降 土坑 1基 土師器							
	近世陶器								
	宮古湾に向かって北流する八木沢川東岸に立地し、現況は山林である。西部の山地から続く尾根部と隣接する。								
要 約	る斜面部・谷間で構成される。試掘の結果、縄文土器・土師器が尾根から出土しているが、集落の痕跡を示す 遺構は確認できなかった。調査区西側の事業用地外に比較的広い平場がある。居住活動の主体は今回の調査範								
		さながつた。嗣 D平場にある可			トル・北牧的仏	、い・下場がめん	る。 店往荷野	切り土作は	う凹ツ調宜戦
	I S / O LI MI	2 1 .00 (- 00 .0	110 17-14 10	, . U					

(14) 賽の神遺跡

所 在 地 宮古市大字金浜第 3 地割字妻ノ上 調査対象面積 $2,080 \text{ m}^2$ 遺跡番号 L G 43 - 2209 確認調査面積 214 m^2

1. 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR山田線磯鶏駅の南約4㎞に位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川東岸に立地している。現況は山林・畑地である。今回の確認調査範囲は、谷部と西部の山地から続く尾根部で構成される。

2. 基本層序

3. 調査概要

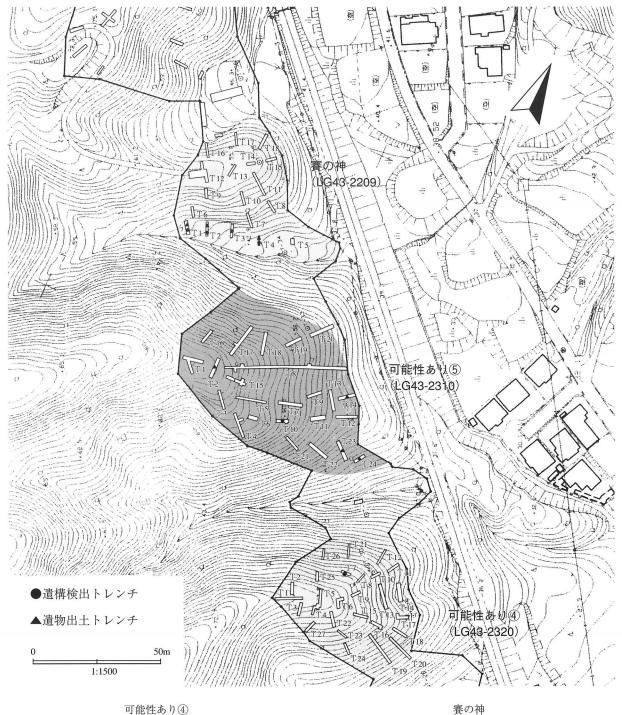
確認は全て人力掘削で行った。調査範囲内に 20 ヵ所のトレンチを設定し、表土下のそれぞれの地層で遺構検出作業を行い、IV層での検出作業を最終とした。

Ⅱ層から瀬戸・美濃産近世磁器(18世紀)が出土している。鉄滓の所属時期はこれまでの宮古市内発掘調査例を見る限り、地形的には古代の可能性が高い。尾根部は木材切り出し道路により削平された箇所があり、削平された土砂は尾根部先端にマウンド状に残されている(T14付近)。尾根部から南側斜面部にかけてマサ土の二次堆積層が2m近くあるが、尾根部全体の崩落によるか、人工的な平場造成の痕跡なのか判別できない。

- (1) 検出遺構 遺物包含層 1 ヵ所。谷部は II・Ⅲ層が厚く堆積し、Ⅱ層上面で鉄滓、Ⅱ層下部で縄文土器が出土した。谷部の II 層は 80 ~ 120 cm堆積している。遺物包含層と認識できる。
- (2) 出土遺物 縄文土器 3 点、鉄滓 1 点、鉄釘 1 点、磁器 1 点。

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅう	うななねんどは	っくつち	ょうさほうこ	くしょ	and the second s			
書 名	平成 17 年度発	^工 成 17 年度発掘調査報告書							
副書名									
巻 次									
	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	第 490 集								
	林 勲・米田	寛							
編集機関	(財)岩手県文化	財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所 在 地	$\mp 020 - 0853$								
発行年月日	2006年3月27	006年3月27日							
ふりがな	ふり	ふりがな コード 北緯 東経 調査期間 調査面積 調査原因							
所収遺跡名		所在地 市町村 遺跡番号 。, " 。, " 調宜期間 調宜即價 調宜原內							
さい かみ い せき	いかてけんみやこしま	3おあざ 上 <i>今</i>			39 度	141 度	2005.07.15		
			03202	LG43-2209	36 分	55 分	~	214 m ²	道路整備事業
	かねはまだい ちゃりき	字妻ノ上			10 秒	55 秒	2005.11.29		
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な	遺物	特	記事項
77	集落跡?	縄文時代	遺物包含	含層	1ヵ所	縄文土器			
賽の神遺跡	21718127	古代以降							
	近世 近世磁器								
	宮古湾に向かって北流する八木沢川東岸に立地し、現況は畑地、山林である。西部の山地から続く尾根部と								
要 約	隣接する斜面に	隣接する斜面部・谷部で構成される。谷部には縄文時代遺物包含層と古代以降の廃滓場が2ヵ所形成されている。縄文集落の存在と、古代以降の製鉄関連施設の検出が見込まれる。							
	る。縄又集洛(の仔仕と、古代	外域の番	送 財理他設 (/快山か兄込	らよれる。			



可能性あり④

トレンチ	遺構	遺物
T 7	周溝 (円形か?)	

可能性あり⑤

トレンチ	遺構	遺物
T 2		縄文土器
T 10	土坑1基	
T 14		土師器
T 15	炭窯1基(長方形)	
T 23		縄文土器(中期)
T 24		近世陶器(18世紀)

遺物 トレンチ 遺構 T 1 遺物包含層範囲 縄文土器、鉄滓 遺物包含層範囲 縄文土器、鉄釘 T 2 T 3 遺物包含層範囲 近世磁器(18世紀) T 4 遺物包含層範囲

第3図 可能性あり④・⑤、賽の神遺跡トレンチ配置図

(15) 可能性あり⑥

所 在 地 宮古市大字金浜第3地割字妻ノ上 調査対象面積 4,890 m² 遺跡番号 L G 43 - 2229 試掘調査面積 146 m²

1. 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR山田線磯鶏駅の南約4㎞に位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川東岸に立地している。現況は畑地、山林である。今回の試掘調査範囲は、東側を低地面(現況畑地)、西側を南部の山地から続く尾根部(現況山林)で構成される。

2. 基本層序

 I層
 黒褐色~暗褐色土(表土)
 層厚
 $20 \sim 40 \text{ cm}$

 II層
 黒色土
 層厚
 $0 \sim 20 \text{ cm}$

 II層
 暗褐色土
 層厚
 $0 \sim 20 \text{ cm}$

 IV層
 褐色~黄褐色土(マサ土)最終遺構検出面
 層厚不明

3. 調査概要

試掘は全て人力掘削で行った。調査範囲内に 21 ヵ所のトレンチを設定し、表土下のそれぞれの地層で遺構検出作業を行い、Ⅳ層での検出作業を最終とした。

尾根部の一部分は木材切り出し道路によって地形改変をうけていることが判明した。南側の低地面は立ち木がなく、畑地として利用されており、T17・18・20・21を設定した。T20・T21から近代以降の丸釘、ガラス片が出土したが、それ以前の遺構・遺物は確認できなかった。

- (1)検出遺構 なし
- (2) 出土遺物 なし

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅう	うななねんどは	っくつち	っょうさほうこ	くしょ				
書名	平成 17 年度発	掘調査報告書							
副 書 名									
卷次									
シリーズ名	岩手県文化振興	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 490 集								
編著者名	林 勲・米田	寛							
編集機関	(財)岩手県文化	比振興事業団埋	蔵文化則	ナセンター		10100			
所 在 地	〒 020 − 0853	〒 020 - 0853 岩手県盛岡市下飯岡第 11 地割 185 番地 Tel (019) 638-9001							
発行年月日	2006年3月27	日							
ふりがな	ふり	がな	;	コード	北緯	東経。	細木細門	国本高 独	細木匠田
所収遺跡名	所有	E地	市町村	遺跡番号	0 / //	0 / "	調査期間	調査面積	調査原因
	いか てけんみゃこ しき 岩手県宮古市ナ	_{おあざ} て字			39 度	141 度	2005.07.15		
可能性あり⑥	かねはまだい ちゃりゃ 金浜第3地割与	ざつま かみ	03202	LG43-2229	36 分	55 分	~	146 m ²	道路整備事業
	金浜第3地割与	产妻ノ上			12 秒	53 秒	2005.11.29		
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な	遺物	特	記事項
可能性あり⑥									
要約	安土漆に向ふって北海ナフォナ沢田東県と立地 現辺は山井湾とフェ東辺の山地ふとはノ屋田塑と際位す								

(16) 下大谷地 I 遺跡

所 在 地 宮古市大字金浜第 3 地割字妻ノ上 調査対象面積 $5,320~\text{m}^2$ 遺跡番号 $156~\text{m}^2$ 試掘調査面積 $156~\text{m}^2$

1. 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR山田線磯鶏駅の南約4㎞に位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川東岸に立地している。現況は畑地、山林である。今回の確認調査範囲は、東側を低地面、西側を南部の山地から続く尾根部で構成される。旧登録名は可能性あり⑦である。

2. 基本層序

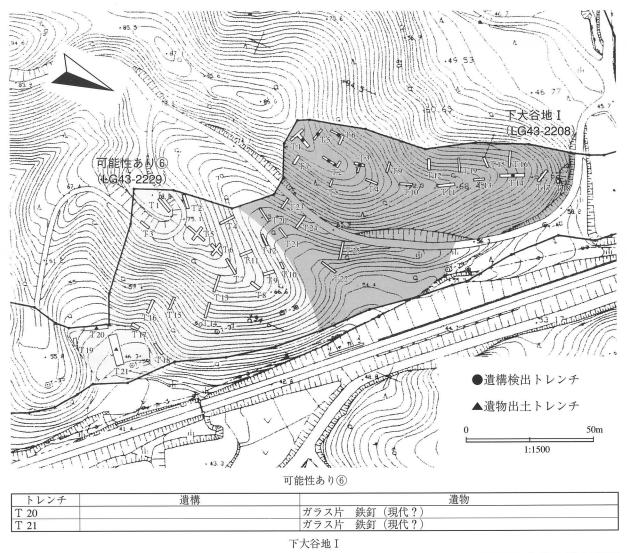
3. 調査概要

試掘は全て人力掘削で行った。調査範囲内に 25 ヵ所のトレンチを設定し、表土下のそれぞれの地層で遺構検出作業を行い、IV層での検出作業を最終とした。

- (1) 検出遺構 竪穴住居跡 3 棟、溝跡 1 条、土坑 1 基、不定形遺構 1 基。尾根部・斜面部で竪穴住居跡を確認した。T2 ではカマド煙道部が確認でき、土師器が 1 点出土している。トレンチ幅の制約から全体形状を知ることはできないが、竪穴住居跡は一辺 3 ~ 4 m の正方形ないしは長方形プランと思われる。他に土坑、溝跡、不定形遺構を \mathbb{N} 層で検出した。東側斜面については、尾根部ですでに遺構が検出されたことから、尾根部に接する斜面上部についてはトレンチを設定していない。斜面下部と低地面には T20 ~ T25 を設定したが、遺構・遺物を確認できなかった。
- (2) 出土遺物 土師器1点が出土した。

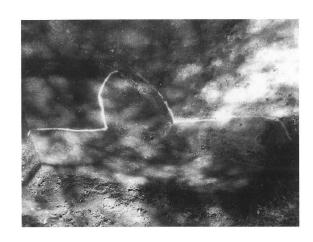
報告書抄録

ふり	がな	へいせいじゅう		っくつち	ちょうさほうこ	こくしょ						
書副巻	名	平成 17 年度発	掘調査報告書									
副	書名											
巻	次											
シリ・		岩手県文化振興	專業団埋蔵文	化財調查	·報告書							
		第 490 集										
編著	者名	林 勲・米田	寛									
編集		(財)岩手県文化	上振興事業団埋	蔵文化則	<u> </u> センター							
	在 地	$\mp 020 - 0853$	岩手県盛岡市	<u>i下飯岡</u> 第	育 11 地割 185	番地 Tel()19) 638-900	1				
70 14		2006年3月27						1,1000				
ふり	がな		がな		コード	北緯	東経。	調查期間	調查面積	調査原因		
	遺跡名	所名	E地	市町村	遺跡番号	0 / //	0 / //	門里知间	門 且 川 但	門 里原囚		
tt ##	ゃぁぃょ 谷地 I	おき県宮古市	おあざ レ<i>合</i>			39度	141 度	2005.07.15				
		右丁宗呂白川ノ maltstin		03202	LG43-2208	36分	55 分	2003.07.13	156 m²	道路整備事業		
遺	st t t t t	金浜第3地割	対象ノデ.	03202	LG43-2200	15 秒	50 秒	2005.11.29	130 m	是如正师于不		
所収:	遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な	遺物	特	記事項		
下大 *	谷地I	集落跡	古代	竪穴住馬	丟 跡	3 棟	土師器					
遺	跡	7010 23	ш т ч	溝跡	LJ \$23	1条	HH HH					
1~5	P-/-J		土坑									
	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·											
		宮古湾に向かって北流する八木沢川東岸に立地し、現況は畑地、山林である。 試掘調査範囲は、東側を低地面、										
要	約	西側を南部のL	·側を南部の山地から続く尾根部で構成される。斜面上部と下部は林道(木材切り出し道路)によって分けら									
女	ボソ	れる。林道面は	は削平が激しく	、一部Ⅳ	層が露出してい	いる。今回の	試掘調査では	ま、尾根部と	斜面上部	を中心に遺構・		
		遺物が確認され	1た。古代の集	落跡であ	うる 。							



トレンチ	遺構	遺物
T 1	竪穴住居跡	
T 2	竪穴住居跡	土師器甕
T 3	土坑	
T 5	竪穴住居跡	
T 6	不定形遺構	
T 14	溝跡	

第4図 可能性あり⑥・下大谷地 I 遺跡トレンチ配置図



写真図版 3 下大谷地 I: T2 検出竪穴住居跡



写真図版 4 下大谷地 I: T 14 検出溝跡

(17) 八木沢Ⅲ野来遺跡

所 在 地 宮古市大字八木沢第 8 地割字駒込 遺跡番号 L G 43 - 1257 調査対象面積 12,220 m² 確認調査面積 908 m²

1. 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR山田線磯鶏駅の南約3.5kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川西岸に立地している。現況は水田、畑地、山林である。本遺跡は南部を低地面(現況水田・畑地)、北部を西部の山地から続く尾根部とその谷間(現況山林)で構成される。

2. 基本層序

I層 黒褐色~暗褐色土(表土)

層厚 20~ 40 cm

Ⅱ層 黒色土

層厚 $0\sim 120~\mathrm{cm}$

Ⅲ層 暗褐色土

層厚 0~ 20 cm

Ⅳ層 褐色~黄褐色土 (マサ土) 最終遺構検出面

層厚不明

3. 調査概要

確認は全て人力掘削で行った。調査範囲内に 67 ヵ所のトレンチを設定し、表土下のそれぞれの地層で遺構検出作業を行い、IV層での検出作業を最終とした。

南部は低地部である。 $T1 \sim T3$ で遺物が出土したため、調査範囲を南側に拡大したが、八木沢川による削平と再堆積を繰り返していた。ここで出土した遺物は磨耗が著しく、流れ込んだ可能性が高い。また、遺構は確認できなかった。

一方、北部では尾根部・斜面部・谷間でそれぞれ遺構を検出した。尾根部では I 層の下が IV 層となる場合があるが、遺構・遺物は浅いところで地表から $5\sim10~{\rm cm}$ 下げた面で確認できた。竪穴状遺構、工房跡、土坑、溝跡、炭窯、遺物包含層を検出している。遺物包含層は範囲内の試掘トレンチ T55~61 から縄文前期(大木 2 式期)土器・石器が多量に出土している。また、T56・58 からは円盤形土製品が出土した。

北部の尾根は緩やかな傾斜で谷部へと続き、尾根から谷間での最大比高差は 10m 未満である。集落の形成には最適な環境で、谷部の遺物包含層形成には、尾根部の竪穴状遺構との関連性が想定される。また、遺物包含層上部からは鉄滓が数点出土している。尾根部に位置する T45 の工房跡から鉄滓が出土しており、立地的には谷間に廃滓場が形成されている可能性が高い。遺物包含層出土遺物は、捨て場でみられる一般的現象の「磨耗」や「土器片の小片化」が、沢に近い斜面部の遺物に多く観察されるものの、平坦な谷面出土遺物にはほとんど見られない。したがって、包含層内に竪穴住居跡を検出できる可能性もある。

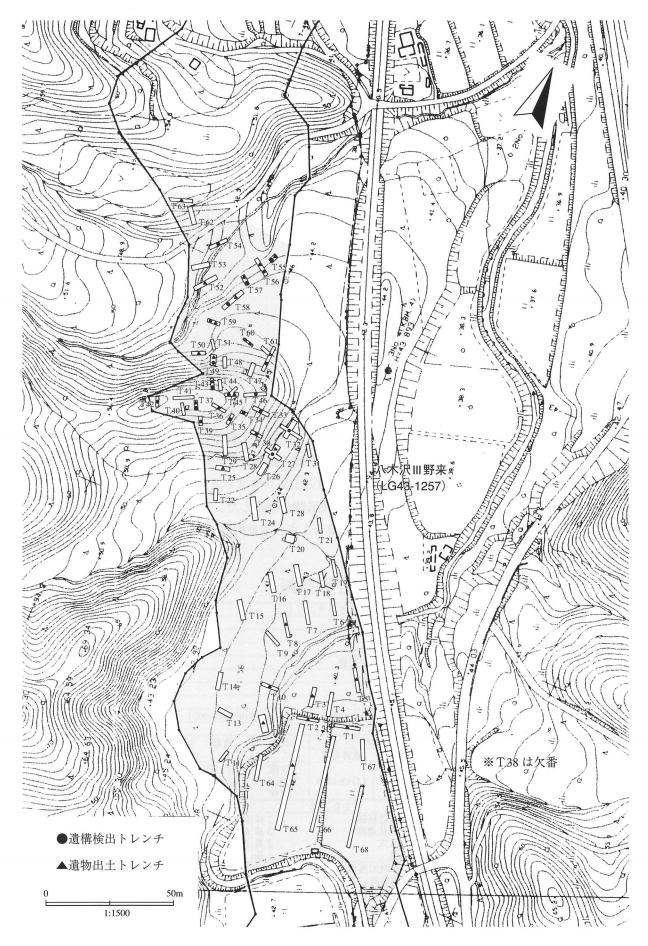
- (1) 検出遺構 竪穴状遺構 9 基、工房跡 1 ヵ所、溝跡 2 条、土坑 3 基、炭窯 1 基、縄文時代遺物包含層 1 ヵ所。
- (2) 出土遺物 縄文土器(前期) 大コンテナ1箱、陶磁器3点、縄文石器(前期) 小コンテナ1箱、 鉄滓11点、鉄釘1点、鉄片1点。

八木沢Ⅲ野来

トレンチ	遺構	遺物
T 1		縄文土器 (大洞 A')、陶器 (18 世紀肥前産)、鉄釘
T 2		縄文土器
T 3		縄文土器
T 5		縄文土器、鉄釘
Т 8		鉄釘、鉄片 (鎌?)
T 10		縄文土器(十腰内1)
T 12		砲弾、鉄釘
T 25		縄文土器 (大木 2)
T 27	溝跡	縄文土器 (大木 2)
T 30	土坑	
T 32	炭窯	
T 33	土坑	
T 34	竪穴状遺構・土坑	
T 35	竪穴状遺構 2 基	
T 36		縄文土器
T 37	竪穴状遺構	縄文土器
T 39	竪穴状遺構	
T 42	溝跡	
T 43	竪穴状遺構	縄文土器
T 45	工房跡	縄文土器(前期)、磨石、鉄滓 12 点
T 46	竪穴状遺構	
T 49	竪穴状遺構	縄文土器(前期)、鉄滓
T 50		縄文土器(前期)、鉄滓
T 52		縄文土器(前期)、剥片
T 54	竪穴状遺構	
T 55	包含層	縄文土器(大木 2)、剥片、鉄滓
T 56	包含層	縄文土器 (大木 2)、円盤形土製品、石錐、石皿、石製品、鉄滓
T 57	包含層	縄文土器 (大木 2)、尖頭器、剥片、鉄滓
T 58	包含層	縄文土器 (大木 2)、石鏃、石匙、陶器 (18 世紀瀬戸・美濃)、鉄滓
T 59	包含層	縄文土器(大木 2)
T 60	包含層	縄文土器(大木 2)
T 61	包含層	縄文土器 (大木 2)、磨製石斧、磨石、剥片
T 63		縄文土器
T 65		縄文土器(晩期)

報告書抄録

Š	り	が	な	へいせいじゅ	うななねんどは	っくつち	。 ょうさほうこ	こくしょ						
書			名	平成 17 年度発	掘調査報告書									
副巻	킡	ŧ	名											
			次											
シ	/			岩手県文化振り	興事業団埋蔵文	化財調查	£報告書							
		ズ番		第 490 集										
	著	者	名	林 勲・米田										
編	集		関		化振興事業団埋									
所			地	$\mp 020 - 0853$		「下飯岡第	第 11 地割 185	番地 Tel(019) 638-90	01				
	行乌	F月	<u> </u>	2006年3月27										
Š	り	が	な		がな		コード	北緯	東経	調查期間	調查面積	調査原因		
所!	収追	遺跡	名		在地	市町村	遺跡番号	0 / "	0 / //	Pol TV/III	阿丑四民	MILAND		
介	木	きた	ĭï	いかてけんみゃこしま	おあざ 七 <i>十</i>			39 度	141 度	2005.07.15				
1 1 7				右丁が白口巾。 や ぎ さわだい ち れ	八一 っりあざこまごめ	03202	LG43-1257	36分	55 分	~	908 m ²	道路整備事業		
野	来	遺	跡	八木沢第8地	割字駒込			22 秒	43 秒	2005.11.29				
所」	収遺	遺跡	名	種別	主な時代		主な遺構	L	主な	遺物	特	記事項		
				集落跡	縄文	竪穴状		9 基	縄文土器(前期)				
八	木	沢	Ш	生産遺跡	古代	工房跡	- III		縄文石器	1337937				
			跡		近世	土坑			鉄滓					
	•	_		遺物包含層 1ヵ所 陶磁器										
				宮古湾に向かって北流する八木沢川西岸に立地している。南部を低地面(現況水田・畑地)、北部を西部の										
					地から続く尾根部とその谷間(現況山林)で構成される。南部の低地は八木沢川によって形成された河成段									
要			約		の削平と再堆積									
				よび製鉄関連		/ ~		22/ (1)		-, <u>, , , , , , , , , , , , , , , , , </u>		, v >101H		



第5図 八木沢Ⅲ野来遺跡トレンチ配置図

(18) 八木沢駒込Ⅱ遺跡

所 在 地 宮古市大字八木沢第 8 地割字駒込 調査対象面積 14,370 m² 遺跡番号 L G 43 - 1244 確認調査面積 648 m²

1. 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR山田線磯鶏駅の南約3.5kmに位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川西岸に立地している。現況は水田、畑地、山林である。本遺跡は西部の山地から連なる尾根部と八木沢川支流によって形成された低地面で構成される。

2. 基本層序

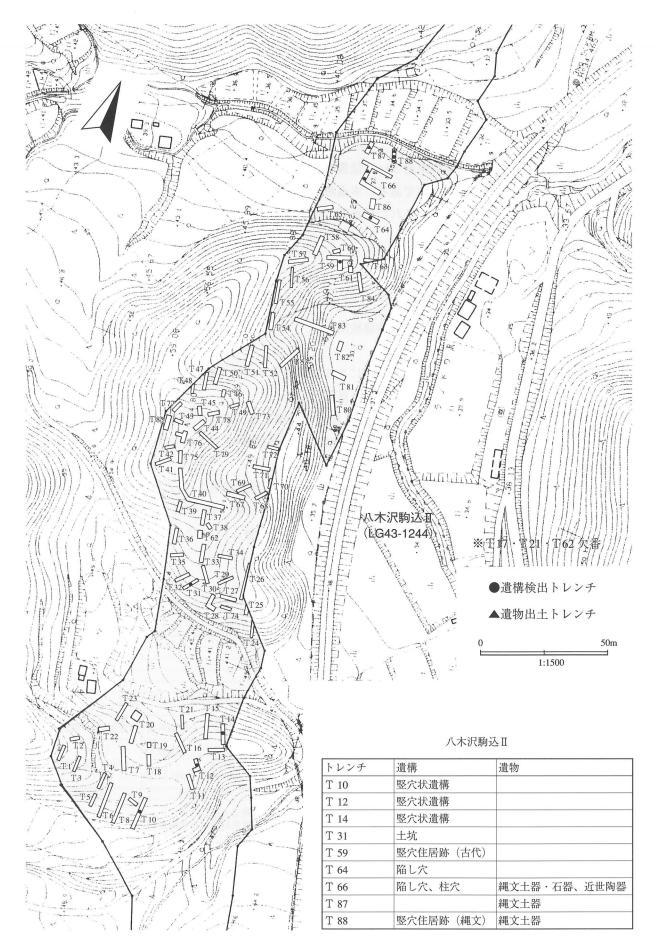
3. 調査概要

確認は全て人力掘削で行った。調査範囲内に87ヵ所のトレンチを設定し、表土下のそれぞれの地層で遺構検出作業を行い、IV層での検出作業を最終とした。

- (1) 検出遺構 竪穴住居跡 2 棟 (縄文 1 棟・古代 1 棟)、竪穴状遺構 3 基、土坑 1 基、陥し穴状遺構 2 基、柱穴 3 個。南側の尾根部で竪穴状遺構を確認し、中央の尾根部では土坑を確認した。焼土粒を伴う。北側の尾根部ではカマドを伴う古代の竪穴住居跡 1 棟を Ⅲ層で検出した。低地面では縄文時代と近世の遺構・遺物を確認した。埋土に十和田中掫火山灰が含まれる楕円形の陥し穴状遺構のほか、溝状の陥し穴状遺構、柱穴、縄文時代前期の竪穴住居跡を確認した。
- (2) 出土遺物 縄文土器(前期) 9号袋1袋、敲石1点、近世陶器1点。

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅう	ななねんどは	っくつち	ょうさほうこ	くしょ						
書 名	平成 17 年度発	掘調査報告書						,			
副書名											
巻 次											
シリーズ名	岩手県文化振興	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書									
シリーズ番号	第 490 集										
編著者名	林 勲・米田	寛									
編集機関	(財)岩手県文化										
所 在 地	〒 020 − 0853	岩手県盛岡市	「下飯岡タ	育11 地割 185	番地 Tel (019) 638-900	1				
	2006年3月27	日									
ふりがな	ふり			コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因		
所収遺跡名	所名		市町村	遺跡番号	0 / //	0 / //	PM TT 201101	阿里四項	阿里水呂		
	岩手県宮古市ガ	^{おあざ} √字			39度	141 度	2005.07.15	2	>>> 116 -bt - 64b -b- >116		
助込Ⅱ遺跡	マーダ きかだい ちゃ 八木沢第8地書		03202	LG43-1244	36分	55分	~	648 m ²	道路整備事業		
				3. 5. July 1440	30 秒	40 秒	2005.11.29	11-1-	======================================		
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な	遺物	特	記事項		
		縄文	竪穴住馬		2 棟	縄文土器					
八木沢		古代	竪穴状造	直愽		敲石					
駒込Ⅱ遺跡		近世	陥し穴			近世陶器					
	山地から連なる										
	遺構、低地で降		れた。ゴ	と側の低地面!	こは To-cu ブ	ロックが確認	忍されている	る。縄文〜	・古代の集落跡		
	と考えられる。										



第6図 八木沢駒込Ⅱ遺跡トレンチ配置図

(19) 八木沢Ⅱ遺跡

所 在 地 宮古市大字八木沢第 3 地割字中村 調査対象面積 $30,600 \text{ m}^2$ 遺跡番号 L G 43 - 0205 確認調査面積 $1,088 \text{ m}^2$

1. 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR山田線磯鶏駅の南約3㎞に位置し、宮古湾に向かって北流する八木沢川西岸に立地している。現況は水田、畑地、山林である。本遺跡は南部の山地から連なる尾根部・斜面部(現況山林)と八木沢川の支流によって形成された低地面(現況水田)からなる。

2. 基本層序

3. 調査概要

確認は全て人力掘削で行った。調査範囲内に 165 ヵ所のトレンチを設定し、表土下のそれぞれの地層で遺構検出作業を行い、IV層での検出作業を最終とした。

- (1) 検出遺構 竪穴住居跡(縄文後期) 2 棟、竪穴状遺構 4 基、炭窯 1 基を検出した。T36 で炭窯、T37 で竪穴状遺構、T49 で竪穴状遺構、T139 で縄文時代竪穴住居跡、T144 で竪穴状遺構、T157 で竪穴状遺構を確認している。いずれもV層検出。
- (2) 出土遺物 縄文土器 (9号袋2袋)、磨石1点、敲石1点、須恵器甕1点、近世陶器3点、鉄滓1点。 T139では縄文土器・石器が多量に出土している。T92・116・118・130・131・138・139・145・146・ 151・152から縄文土器・石器、T95から須恵器甕、T97から獣骨、T123から鉄滓が出土している。

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅう		っくつち	っょうさほうこ	こくしょ						
書 名	平成 17 年度発	掘調査報告書									
書名副書名											
巻 次											
巻	岩手県文化振り	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書									
シリーズ番号	第 490 集										
編著者名	林・敷・米田	寛									
編集機関		上振興事業団埋	蔵文化財	ヤセンター							
	$\mp 020 - 0853$				番地 Tel (019) 638-900	1				
	2006年3月27		1 200011 37	(* 11 · B _H , 100	щ.С (227 000 200					
ふりがな		がな		コード	北緯	東経。,,		I			
所収遺跡名			市町村	遺跡番号	0 / //	0 7 1	調査期間	調査面積	調査原因		
// 1/ / / / / / / / / / / / / / / / / /	いわてけんみやこ しお		110 110 110	(A) 田 (J							
や ぎさわに いせき	岩手県宮古市	完全			39 度	141 度	2005.07.15				
八木沢Ⅱ遺跡	や ぎさわだい ちわ	りあざなかむら	03202	LG43-0205	36 分	55 分	~	1,088 m ²	道路整備事業		
	* * * * * * * * * * * * * * * * * * *	割字中村			43 秒	49 秒	2005.11.29				
					· ·		arte of t	11-1-			
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な:	遺物	特	記事項		
	集落跡	縄文	竪穴住馬	早 跡	9 楠	縄文土器、	万 哭				
八木沢Ⅱ遺跡	未行助	古代	竪穴状			須恵器甕、					
八小八旦退跡				旦1件			1. 四面面、				
		近世	炭窯		1 叁	鉄滓					
	宮古湾に向かって北流する八木沢川西岸に立地している。現況は水田、畑地、山林である。本遺跡は西部の										
	山地から連なる尾根部と八木沢川支流によって形成された低地面で構成される。尾根部・斜面部を中心に遺構・										
要約	遺物が確認されており、縄文時代と古代以降の複合遺跡である。今回の調査地南側の事業用地外に1万㎡以上 り平場が存在し、集落の形成に最適な環境である。縄文~古代の居住活動の痕跡は事業用地外へと広がるもの										
	の平場が存在	し、集落の形成	に最適な	ネ環境である。	縄文~古代	の居住活動の	の痕跡は事業	業用地外へ	、と広がるもの		
	と想定される。										

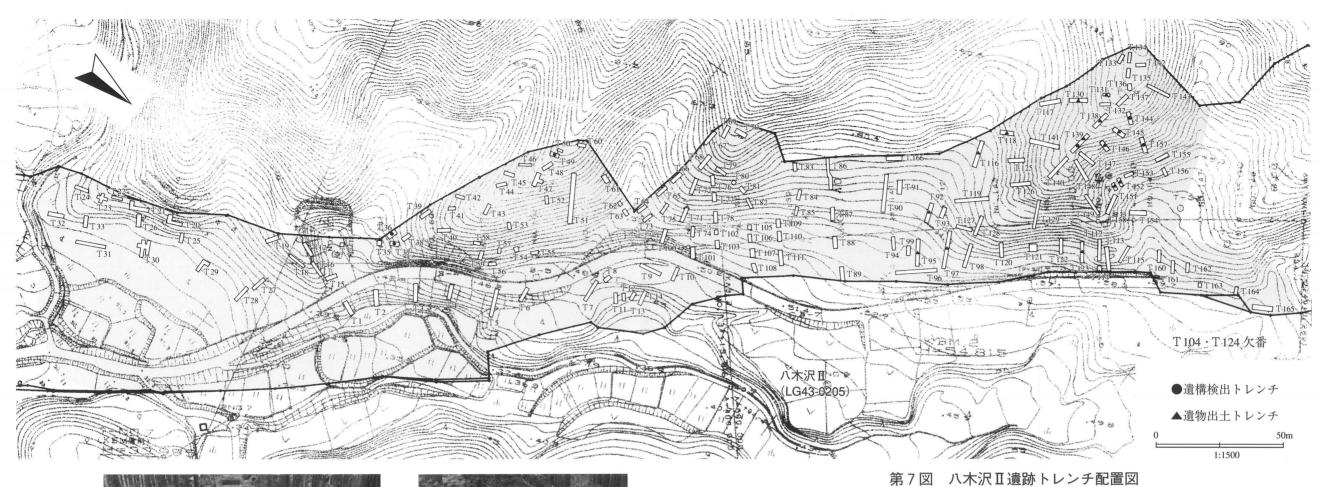




写真 5 八木沢Ⅱ:T139 検出竪穴住居跡



写真 6 八木沢Ⅱ:T157 検出竪穴状遺構



写真7 八木沢Ⅱ:T36・37 検出遺構



写真 8 八木沢Ⅱ: T95 出土須恵器甕片

八木沢Ⅱ

CITALI		
トレンチ	遺構	遺物
T 36	炭窯	
T 37	竪穴状遺構	
T 49	竪穴状遺構	
T 92		縄文土器
T 95		須恵器甕
T 97		獣骨
T 116		縄文土器
T 118		縄文土器
T 123		鉄滓
T 130		縄文土器
T 131		縄文土器
T 138	-	縄文土器、剥片
T 139	竪穴住居跡 2 棟	縄文土器 (中期~後期)、敲石、磨石、炭化物
T 144	竪穴状遺構	
T 145		縄文土器
T 146		縄文土器
T 151		縄文土器
T 152		縄文土器
T 157	竪穴状遺構	

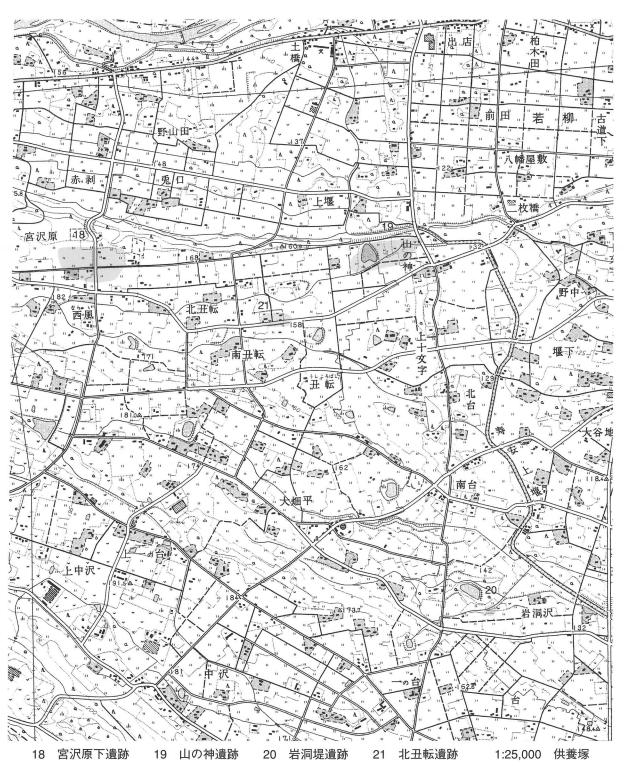
(20~23) 山の神遺跡ほか3遺跡

委 託 者 農林水産省東北農政局いさわ南部農地整備事業所 調査対象面積 107,380 m²

事 業 名 国営いさわ南部農地整備事業 確認調査面積 10,992 m²

発掘調査期間 平成 17 年 10 月 3 日 \sim 11 月 8 日 調査担当者 水上明博・丸山浩治・荒谷伸郎

菅野 梢



遺跡の位置

山の神遺跡ほか3遺跡の確認調査に至る経過

国営いさわ南部農地整備事業実施地区は、岩手県の西南部に位置し、胆沢川から北上川にかけての扇状地の右辺部にあり、標高 110 ~ 210 mの段丘地形を呈している。この地形のなかに位置する「山の神遺跡」ほか 3 遺跡は、「国営いさわ南部農地整備事業」の施行に伴って、その事業地区に存することから分布調査を実施し、その結果、縄文時代の土器等が出土したことから確認調査を実施することとなったものである。

この地区の農業は、水田を主体とした経営により発展してきたものの、所有耕地が分散し区画形状は未整備もしくは昭和30年代に整備された10 a区画がほとんどで、かんがい用水不足に加え用排水路も未整備なことから農業の近代化が図れないまま生産性の低い農業経営を余儀なくされている。

このため、農用地の効率的利用と労働生産性の高い農業経営の展開が可能な生産基盤を形成するため、国営かんがい排水事業により基幹的な用排水施設を整備し、本事業では既耕地を再編整備する区画整理 1,089ha と地目変換による農地造成 11ha の地域を一体的に施工し、併せて担い手への農地利用集積による経営規模の拡大と経営の合理化を図るとともに、土地利用の整序化を通じ農業の振興を基幹として本地域の活性化に資することを目的に、事業を進めてきた。

この地区の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が平成8年度に分布調査を実施し、「上中沢I遺跡」ほか29遺跡と平成15年度に分布調査を実施し、新たに「山の神遺跡」ほか2遺跡が確認された。

その結果に基づいて岩手県教育委員会は東北農政局いさわ南部農地整備事業所に対し事業について 照会した。回答を受けた岩手県教育委員会は東北農政局いさわ南部農地整備事業所と協議を行い、確 認調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これにより、岩手県教育委員会は平成17年度事業について平成17年1月14日付け教生第1447号により財団法人岩手県文化振興事業団へ通知した。

これを受けて財団法人岩手県文化振興事業団は、「山の神遺跡」ほか3遺跡について東北農政局い さわ南部農地整備事業所と委託契約を締結のうえ確認調査を実施することとなったものである。

(農林水産省東北農政局いさわ南部農地整備事業所)

(20) 宮沢原下遺跡

所 在 地 奥州市胆沢区若柳字宮沢原 遺跡番号·略号 NE 23 - 2347 MHS - 05

委 託 者 農林水産省東北農政局いさわ南部農地整備事業所 調査対象面積 27,200 m²

事 業 名 国営いさわ南部農地整備事業 確認調査面積 3,667 m²

発掘調査期間 平成 17 年 10 月 3 日~ 11 月 8 日 調 **査 担 当 者** 水上明博·丸山浩治·荒谷伸郎

1. 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR東北本線陸中折居駅の西方約10kmに位置し、胆沢扇状地の中央付近に東西に広がる堀切段丘上に立地している。現況は水田、畑地、牧草地である。

2. 基本土層

I 層 10YR4/2 ~ 10YR3/2 黒褐~灰黄褐色土

層厚 15 ~ 20 cm 耕作土

Ⅱ層 Ⅲ層~Ⅵ層の混土 層厚 0 ~ 50 cm 盛土

Ⅲ層 10YR1.85/1 ~ 10YR2.5/1 黒~黒褐色土

層厚 0~25 cm 遺構検出面

IV層 10YR7/6 明黄褐色テフラ

層厚0~5cm 南部のⅢ層下位に堆積

V層 10YR4/2 灰黄褐色土

層厚 0 ~ 10 cm VI層の漸移層 遺構検出面

VI層 10YR5/6 褐色土 層厚 15 cm以上 地山層 遺構検出面

第1図基本土層柱状図

(S = 1/30)

3. 調査の概要

今年度本調査(宮沢原下遺跡第 1 次調査)を実施した箇所の東側、周知の遺跡範囲と東側隣接地にあたる範囲に幅約 2.3 m、長さ 4 \sim 66 mのトレンチを 45 箇所設定し、遺構・遺物の有無を確認した。地形は北から南に下がっており、これに耕地造成時の地形改変が加わり段状(3 段)を呈する。すなわち、T 1 \sim 11・33 \sim 45 が上段、T 12 \sim 21 が中段、T 22 \sim 32 が下段である。各トレンチとも南側ほど残存状態がよい。

(1)遺構

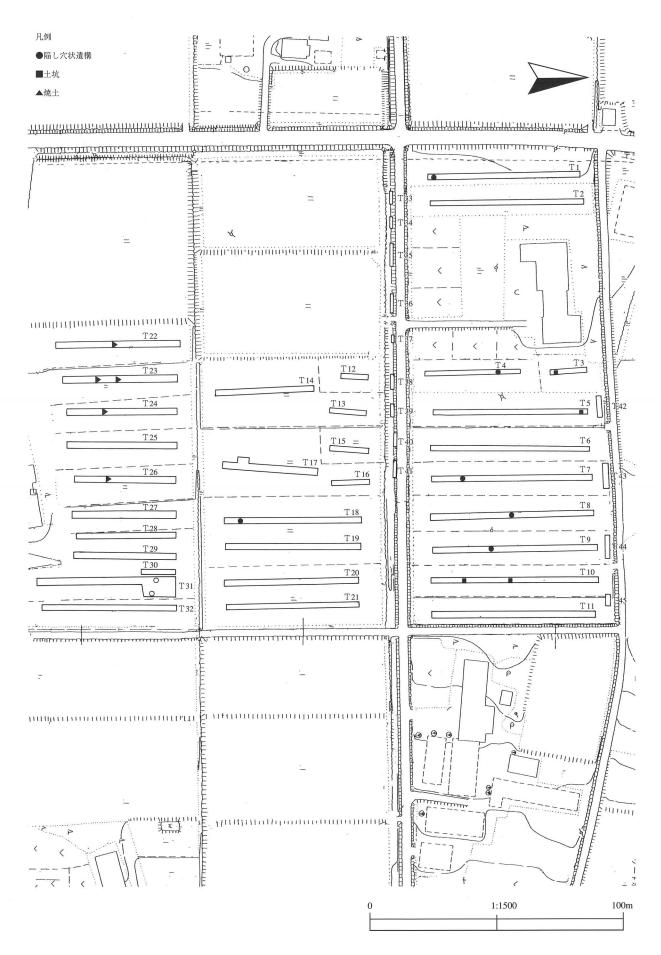
検出された遺構は、陥し穴状遺構 6 基、土坑 4 基である。陥し穴状遺構の形態には楕円形(4 基)と溝形(2 基)があり、前者のうち 3 基の埋土で IV層テフラの堆積を確認している(第 1 表参照)。

(2)遺物

T 31 の V 層中から旧石器の可能性がある頁岩製掻器(彫掻器?)1点(1)と赤色頁岩製剥片1点(2)が出土した。その他、I・Ⅱ層中から剥片1点、須恵器片1点、寛永通寳1枚(3)が出土している。

4. まとめ

遺構の大半は上段部分から検出された。同部分は今年度の本調査区と一連の地形上にあたり、検出 遺構も同種であることから一連の遺構群と推定される。いっぽう、遺物(石器 2 点)は下段部分から 出土したが、同付近には北東~南西方向の浅い沢状微地形が存在し、遺物はその北端落ち際付近に位 置していた。よってそれより北側の高位部分に遺物集中の存在する可能性が残される。



第2図 トレンチ配置図

第1表 宮沢原下遺跡検出遺構規模表

トレンチ名	遺構種別	規模(長軸×短軸)cm	トレンチ名	遺構種別	規模(長軸×短軸)cm
T1	陥し穴状遺構	220×130	T8	陥し穴状遺構	190×100
T3	土坑	140×不明	T9	陥し穴状遺構	210 以上× 150
T4	陥し穴状遺構	195 × 45	T10	土坑	100 以上× 90 以上
T5	土坑	165×不明	T10	土坑	180 以上×不明
T7	陥し穴状遺構	200 × 130	T18	陥し穴状遺構	325 × 45



T1 全景(南から)



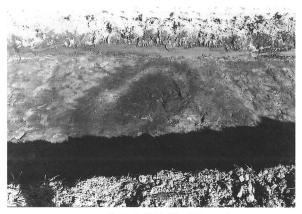
T1 陥し穴状遺構(東から)



T3 陥し穴状遺構(南から)



T6 陥し穴状遺構(西から)



T7 陥し穴状遺構(西から)



T8 陥し穴状遺構(東から)

写真図版1 検出遺構



T 18 陥し穴状遺構



T 30 遺物出土状況







(遺物 S=2/3)

写真図版 2 検出遺構、出土遺物 (2)

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうななねんどはっくつちょうさほうこくしょ								
書名	平成 17 年度系	於掘調査報告	小	277 2					
副書名									
巻次									
シリーズ名	岩手県文化振	興事業団埋蔵	文化財調査報告	書					
シリーズ番号	第 490 集								
編著者名	水上明博	上明博							
編集機関	(財) 岩手県文	f) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒 020 − 0853	020 - 0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地 TEL (019) 638 - 9001							
発行年月日	2006年3月2	006年3月27日							
ふりがな	ふりがな	コ	ード	。北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	0 / //	0 / //	IM 且 为1101	阿里. 四位		
なやざわはらした い せき 宮沢原下遺跡	# うしゅう し い きわ 奥州市胆沢 < hかやなぎあざみや 区若柳字宮 ざわはら 沢原	03215	NE23 — 2347	39 度 06 分 55 秒	141 度 00 分 49 秒	2005.10.03 ~ 2005.11.08	3,667 m ²	国営いさわ南部農 地整備事業	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺	t構	主	な遺物		特記事項	
宮沢原下遺跡	狩猟場 散布地								
要約	国営いさわ南	部農地整備事	業に係る確認調	骨査である。					

(21) 山の神遺跡

所 在 地 奥州市胆沢区若柳字山の神 遺跡番号・略号 NE 24 - 2137 YK-05

委 託 者 農林水産省東北農政局いさわ南部農地整備事業所 調査対象面積 44,900 m² 事 業 名 国営いさわ南部農地整備事業 確認調査面積 4,724 m²

発掘調査期間 平成 17 年 10 月 3 日~ 11 月 8 日 **調査担当者** 丸山浩治・荒谷伸郎

1. 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR東北本線陸中折居駅の西方約8kmに位置し、胆沢扇状地の中央付近に東西に広がる 堀切段丘上に立地している。現況は水田、畑地、牧草地、山林である。

2. 基本土層

I 層 10YR4/2 ~ 10YR3/2 黒褐~灰黄褐色土

層厚 15 ~ 20 cm 耕作土

Ⅱ層 Ⅲ層~Ⅵ層の混土 層厚 0 ~ 50 cm 盛土

Ⅲ層 10YR1.7/1 ~ 10YR2/1 黒色土

層厚 $0\sim40~\mathrm{cm}$

IV層 10YR7/6 明黄褐色テフラ

層厚 0 ~ 5 cm 一部地点のⅢ層下位に堆積

V層 10YR4/2 灰黄褐色土

層厚 0 ~ 10 cm VI層の漸移層 遺構検出面

VI層 10YR5/6 褐色土 層厚 15 cm以上 地山層 遺構検出面

第1図 基本土層柱状図 (s=1/30)

3. 調査の概要

事業区域内に含まれる周知の遺跡範囲内に幅約 2.3 m、長さ 7 ~ 82 mのトレンチを 59 箇所設定し、遺構・遺物の有無を確認した。地形は北東方向に下がっており、調査区南部には東西方向に小規模な段丘崖が走る。その北側には用水路が存在するが、これに沿うように旧沢跡が確認された。さらに、調査区外北側には大規模な段丘崖が存在する。

(1)遺構

検出された遺構は、陥し穴状遺構 7 基、土坑 2 基である。前者の形態はすべて溝形で、埋土中に IV 層テフラの堆積は確認されなかった(第 1 表参照)。

(2)遺物

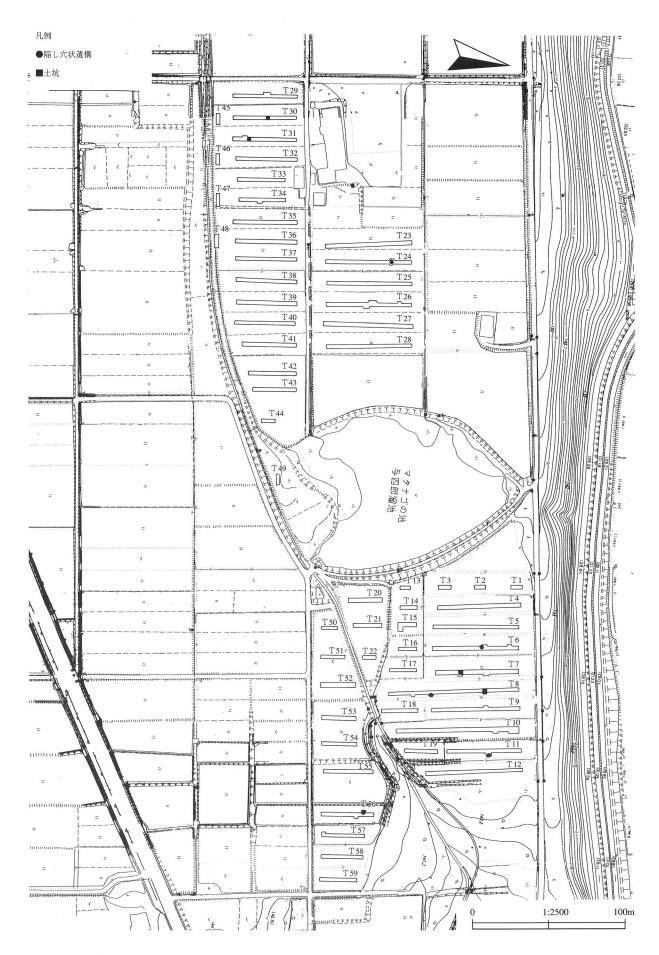
出土していない。

(4) まとめ

遺構検出地点にまとまりは見られず、散在する状態が看取された。すなわち、旧沢跡と小規模な段 丘崖を挟んだ高位面(南側)、低位面(北側)の両面に陥し穴状遺構が点々と存在するようである。

本遺跡においても明黄褐色テフラの堆積が確認されたが、これは旧沢跡内堆積土等に見られるのみで、遺構埋土中には確認されていない。

Ι



第2図 トレンチ配置図

第1表 山の神遺跡検出遺構規模表

トレンチ名	遺構種別	規模(長軸×短軸)cm	トレンチ名	遺構種別	規模(長軸×短軸)cm
Т6	陥し穴状遺構	220 × 95	T24	陥し穴状遺構	300 × 135
Т7	土坑	120 × 65	T30	陥し穴状遺構	265 × 75
TO	陥し穴状遺構	220 以上× 45	T31	陥し穴状遺構	260 × 70
Т8	土坑	150 × 80	T56	陥し穴状遺構	230 以上× 45
T11	陥し穴状遺構	255 × 110			•



T6 陥し穴状遺構(東から)



T8 陥し穴状遺構(西から)



T8 土坑 (西から)



T11 陥し穴状遺構(南から)



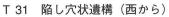
T24 陥し穴状遺構(東から)



T30 陥し穴状遺構(東から)

写真図版1 検出遺構(1)







T 56 陥し穴状遺構(東から)

写真図版 2 検出遺構

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうななねんどはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	平成 17 年度発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 490 集							
編著者名	水上明博							
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒 020 - 0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地 TEL (019) 638 - 9001							
発行年月日	2006年3月27日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	0 / //	0 / //			
やま かみいせき 山の神遺跡	東州市胆沢 メカルヤなぎあざやま 区若柳字山 の神	03215	NE24 — 2137	39 度 06 分 58 秒	141 度 02 分 04 秒	2005.10.03	4,724 m²	国営いさわ南部農 地整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
山の神遺跡	散布地 狩猟場	縄文時代 平安時代	陥し穴状遺構7基 土坑2基					
要約	国営いさわ南部農地整備事業に係る確認調査である。							

※緯度・経度は世界測地系における数値である。

T

 Π

 \mathbf{III}

IV

VI

(22) 岩洞 堤 遺跡

所 在 地 奥州市胆沢区小山字岩洞沢 遺跡番号·略号 NE 34-1263 GDZ-05

委 託 者 農林水産省東北農政局いさわ南部農地整備事業所 調査対象面積 15,300 m²

事 業 名 国営いさわ南部農地整備事業 確認調査面積 1.155 m²

発掘調査期間 平成 17 年 10 月 3 日~ 11 月 8 日 調査担当者 丸山浩治・荒谷伸郎

1 遺跡の位置と立地

本遺跡は、JR東北本線陸中折居駅の西方約7.5kmに位置し、胆沢扇状地の北西~南東方向に広がる横道段丘上に立地している。現況は水田、畑地、牧草地、山林である。

2 基本土層

I層 10YR3/2~10YR4/2 黒褐~灰黄褐色土

層厚 15 ~ 25 cm 耕作土

Ⅱ層 Ⅲ層~Ⅵ層の混土 層厚 0~80 cm 盛土

Ⅲ層 10YR3/1 黒褐色土

層厚 0~20 cm

IV層 10YR4/2 灰黄褐色土

層厚0~10cm V層の漸移層 遺構検出面

V層 10YR5/6 褐色土 層厚 15 cm以上 地山層 遺構検出面

VI層 10YR5/6 褐色土 層厚不明 軽石混入

なお、本遺跡では明黄褐色テフラの堆積は確認されていない。

第1図 基本土層柱状図

3 調査の概要

事業区域内に含まれる周知の遺跡範囲内に幅約2.3 m、長さ5~42 mのトレンチを23 箇所設定し、遺構・遺物の有無を確認した。地形は南西から北東に下がっており、調査区北部には大規模な段丘崖が存在する。山林以外は耕地造成時の地形改変によって段状を呈しており、各トレンチとも南側ほど残存状態が良い。とくにT18・19は、北側の段丘崖を埋め立てて平坦化するために南半が大規模に削平されている

(1) 遺構

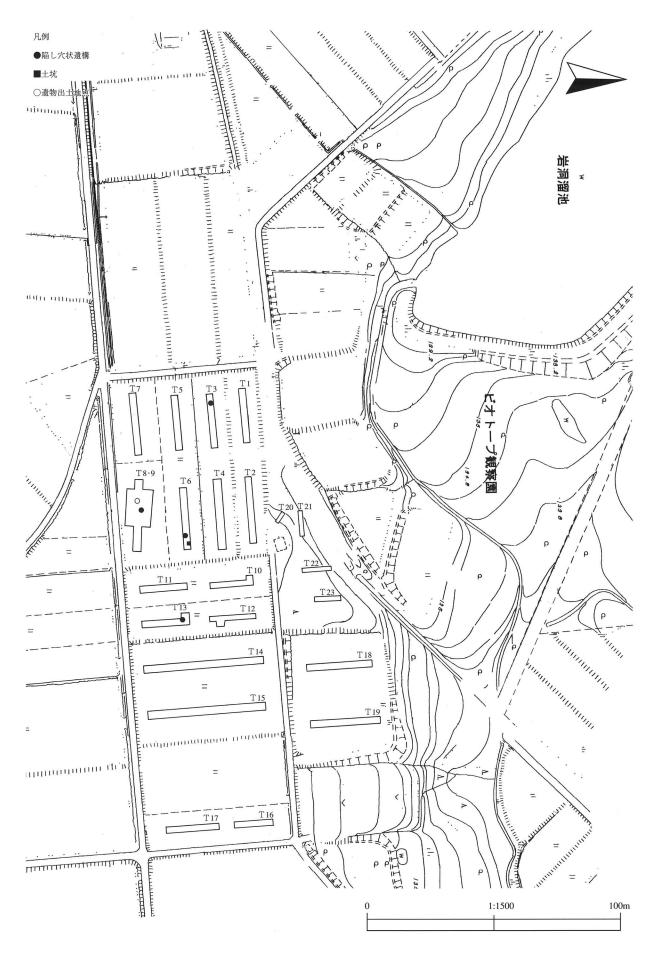
検出された遺構は、陥し穴状遺構 4 基、土坑 1 基である。前者の形態はすべて溝形で、埋土中に明 黄褐色テフラの堆積は確認されなかった(第 1 表参照)。

(2) 遺物

T8・9のⅡ層最下位で旧石器の可能性がある石刃状剥片 1点(1)、T22のⅣ層中で縄文土器 1片(4)と剥片 2点(2、3)、T23の I層中で縄文土器 10 片程度(5、6)が出土した。

4 まとめ

遺構は、高位部分となる調査範囲南西部で検出された。同付近は段丘北縁にあたり、以南はしばらくの間平坦面が続く。よって、この段丘縁に沿った東西のラインおよびこれ以南にはさらなる遺構・遺物の埋蔵が想定される。



第2図 トレンチ配置図

第1表 岩洞堤遺跡検出遺構規模表

トレンチ名	遺構種別	規模(長軸×短軸)cm	トレンチ名	遺構種別	規模(長軸×短軸)cm
Т 3	陥し穴状遺構	150 以上× 85	T 8 · 9	陥し穴状遺構	270 × 50
Т. С	陥し穴状遺構	170 以上× 65	T 13	陥し穴状遺構	315 × 105
T 6	土坑	110 以上×不明			



T1 東端北壁断面(南から)



T4 東端北壁断面(南から)



T3 陥し穴状遺構(南から)



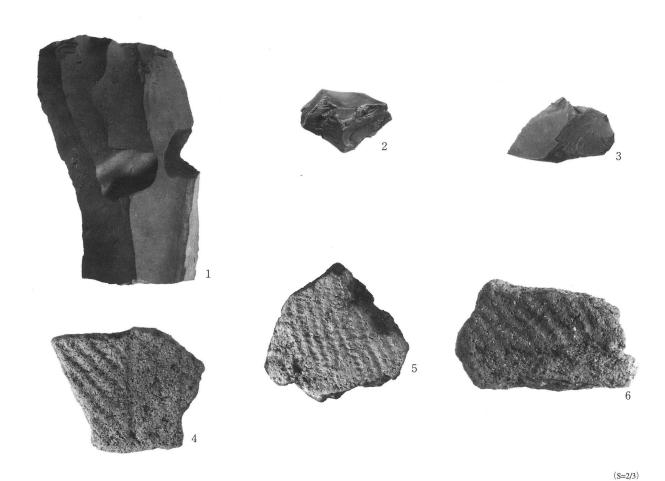
T6 陥し穴状遺構(左)土坑(右)(南から)



T8・9 陥し穴状遺構(南から)



T 13 陥し穴状遺構(南から)



写真図版 2 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうななねんどはっくつちょうさほうこくしょ								
書名	平成 17 年度発掘調査報告書								
副書名									
卷次									
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	第 490 集								
編著者名	水上明博								
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター								
所在地	〒 020 - 0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地 TEL (019) 638 - 9001								
発行年月日	2006年3月27日								
ふりがな	ふりがな	コ	ード	北緯	。東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	0 / //	0 / //			两直凉口	
がよとうづつみぃせき岩洞堤遺跡	製州市胆沢 外山字岩 ベル山字岩 が現場	03215	NE34 — 1263	39 度 05 分 43 秒	141 度 02 分 24 秒	2005.10.03 ~ 2005.11.08	1,155 m²	国営いさわ南部農 地整備事業	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
岩洞堤遺跡	狩猟場 散布地	旧石器時代縄文時代	陥し穴状遺構・ 土坑1基	4 基	石刃状剥片 1 点 剥片 2 点 縄文土器約 10 点				
要約	国営いさわ南部農地整備事業に係る確認調査である。								
	ツ治座 奴座は卅月測州ではよる粉結である								

※緯度・経度は世界測地系における数値である。

きたうしころばし (23) 北丑 転 遺跡

地 奥州市胆沢区若柳字北丑転 所 在

遺跡番号・略号 NE 24 - 2089 KUK- 05

委 託. 者 農林水産省東北農政局いさわ南部農地整備事業所 調査対象面積 19.980 m²

事 業 名 国営いさわ南部農地整備事業 確認調査面積 1,446 m²

発掘調査期間 平成 17 年 10 月 3 日 ~ 11 月 8 日

調查担当者 水上明博・菅野 梢

1 遺跡の位置と立地

本遺跡は、「R東北本線陸中折居駅の西方約10㎞に位置し、胆沢扇状地の北西~南東方向に広が る堀切段丘上に立地している。現況は水田、畑地、牧草地、山林である。

2 基本土層

I層 10YR3/2~10YR4/2 黒褐~灰黄褐色土

層厚 25 cm 耕作土

Ⅲ層~Ⅵ層の混土 層厚 0~80 cm 盛土 Ⅱ層

Ⅲ層 10YR3/1 黒褐色土

層厚 0 ~ 25 cm

Ⅳ層 10YR4/2 灰黄褐色土

V層の漸移層 遺構検出面 層厚 0 ~ 10 cm

V層 10YR5/6 褐色土 層厚 15 cm以上 地山層 遺構検出面

VI層 10YR5/6 褐色土 層厚不明 軽石混入

なお、本遺跡では明黄褐色テフラの堆積は確認されていない。

第1図 基本土層柱状図

IV

VI

Ι

事業区域内に含まれる周知の遺跡範囲内に幅約2.3 m、長さ5~56 mのトレンチを37 箇所設定し、 遺構・遺物の有無を確認した。地形は北東に向かって下がっており、T12~14の中央付近以北に小 規模な段丘崖が存在する。これに耕地造成時の地形改変が加わり、上(南)・下(北)段丘面とも南 側の削平度合いが大きく、残存状態が悪い。このほか、調査区南側(T1・15の南端)では東西方 向の浅い沢状微地形の一部が確認されており、Ⅳ~Ⅴ層が停滞性の水成堆積の様相を呈する。

(1)遺構

3 調査の概要

いずれのトレンチからも遺構は検出されなかった。

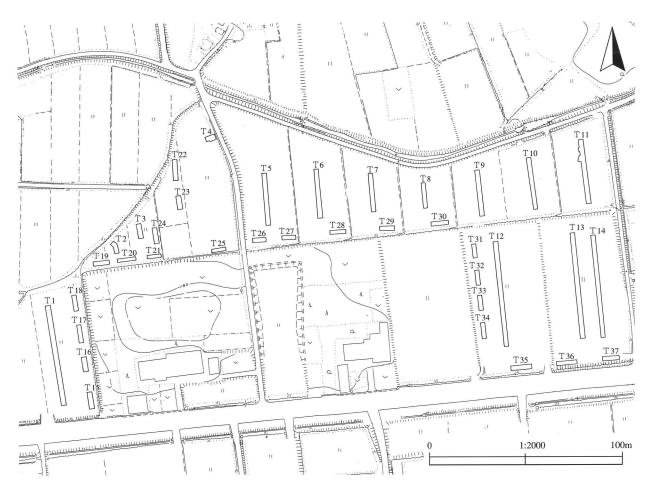
(2) 遺物

いずれのトレンチからも遺物は検出されなかった。

4 まとめ

今回の調査範囲内では、設定したいずれのトレンチからも遺構・遺物とも検出されなかった。ただし、 地形から推定される、遺構が構築される可能性の高い地点は地形改変によってすでに消失していると 考えられ、元々存在しなかったとの断定はできない。とくに、調査範囲外南北に関しては遺構・遺物 ともに埋蔵されていても何ら不思議ではない。

なお、北丑転遺跡に関わる報告は、これをもって全てとする。



第2図 トレンチ配置図

報告書抄録

ふりがな	ヘルサルドゥ	うたたわんど	ナっくつちょうき	(ほうこく	1 F				
	へいせいじゅうななねんどはっくつちょうさほうこくしょ								
書名	平成 17 年度発掘調査報告書								
副書名									
巻次									
シリーズ名	岩手県文化振り	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 490 集								
編著者名	水上明博								
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター								
所在地	〒 020 - 0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地 TEL (019) 638 - 9001								
発行年月日	2006年3月27日								
ふりがな	ふりがな	コ	ード	。北緯	。東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	0 / "	0 / //				
*************************************	與州市胆沢 < by * co š b š b š b č 区若柳字北 うしこうばし 丑 転	03215	NE24 — 2089	39 度 06 分 48 秒	141 度 01 分 39 秒	2005.10.03 ~ 2005.11.08	1,446 m²	国営いさわ南部農地整備事業	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
北丑転遺跡	散布地							範囲からは、遺構、 認されなかった。	
要約	国営いさわ南部農地整備事業に係る確認調査である。								

※緯度・経度は世界測地系における数値である。

Ⅲ 発掘調査概報

1 国関係

(24) 野中遺跡

所 在 地 二戸郡一戸町小鳥谷字野中 117-3 ほか

委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所

事 業 名 国道4号小鳥谷バイパス建設事業

発掘調査期間 平成17年9月1日~9月29日

遺跡番号·略号 JF 30 - 1033 · N N - 05

調査対象面積 1,685 m²

発掘調査面積 1,685 m²

調査担当者 荒谷伸郎・丸山浩治

遺跡の立地

遺跡はいわて銀河鉄道小鳥谷駅の北北西約800mに所在する。東側を北流する馬渕川ならびに平糠川により形成された南北方向に延びる自然堤防上に位置し、これより西側は後背湿地となる。標高は174m前後で、現況は水田、宅地等である。

調査の概要

検出された遺構は、竪穴状遺構 1 基、土坑 38 基、柱穴状土坑 242 個である。宅地造成等により削平が進み、調査区西側の一部を除く大半が表土直下において最終検出面が露出する状態であった。よって検出面からの遺構構築年代推定は不可能で、遺物出土もほとんどないため帰属時期の不明な遺構が多い。土坑の一部には寛永通宝の出土したものがあり、近世の構築と考えられる。

出土遺物は、縄文土器(前期初頭・晩期)、石核、剥片、土師器、古銭で、総量は大コンテナ1箱 分である。



航空写真(下が東)

(25) 野里上遺跡

所 在 地 二戸郡一戸町小鳥谷字穴久保 90-2 ほか 遺跡番号・略号 JF 30 - 1081・NZK-05

委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所 調查対象面積 10,000 m²

事 業 名 国道4号小鳥谷バイパス建設事業 発掘調査面積 12,230 m²

発掘調査期間 平成 17 年 4 月 14 日 \sim 8 月 31 日 調査担当者 丸山浩治・荒谷伸郎・村木 敬

藤原大輔

遺跡の立地

遺跡はいわて銀河鉄道小鳥谷駅の北西約 500 mに所在し、西側から延びる丘陵裾部の東向き緩斜面上に立地する。東側には平糠川が北流する。標高は 177 ~ 185 mで、現況は水田、宅地等である。

調査の概要

検出された遺構は、竪穴住居跡 2 棟、掘立柱建物跡 2 棟、土坑 9 基、焼土遺構・炭化物集中 16 基、溝跡 16 条、畠状遺構 6 区画、柱穴状土坑 28 個、近世墓 1 基で、このほか植物遺体残存層が約 3,000 ㎡ 確認された。遺構構築時期の推定にあたっては、遺構内出土遺物から検討が可能であった竪穴住居跡および一部土坑を除き、極めて遺物量が少ないことから検出層位および介在する十和田 a テフラ層から判断している。時期は縄文時代から近世までと幅広い。

竪穴住居跡は、奈良時代のものと推定される。1棟は1辺8m超の大形住居で、埋土内に同テフラが成層堆積していた。床面からは間仕切り溝が検出されている。

掘立柱建物跡は古代およびそれ以降の構築で、1棟は同テフラ層を掘り込む。このうちの柱穴1基から柱材が検出され、現在放射性炭素年代測定中である。

焼土遺構・炭化物集中、畠状遺構、柱穴状土坑はすべて同テフラ層上位で検出したもので、この降 灰以後の構築である。とくに焼土遺構・炭化物集中の構築は同テフラ降下直後と推定され、後者から は獣骨片が多量に出土した。

土坑、溝跡は同テフラ層の上下で検出されている。土坑は検出層位が多様で、1基は出土遺物からも縄文時代の構築と推定される。溝跡は同テフラ直下層で1条検出されており、ほかはすべてテフラを掘り込む。

出土遺物は、縄文土器(前~晩期)、石器、土師器、鉄製品(刀子など)、木製品(柱材など)、墓 副葬品の漆塗り椀、曲げ物、櫛、古銭などで、総量は大コンテナ約7箱分に相当する。



竪穴住居跡



畠状遺構

(26) 野里上Ⅱ遺跡

所 在 地 二戸郡一戸町小鳥谷字野里上 63 ほか 遺跡番号・略号 JF 30 - 2021・NZKⅡ-05

委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所 調査対象面積 6,365 m²

発掘調査面積 6,365 m²

業 名 国道 4 号小鳥谷バイパス建設事業

発掘調査期間 平成 17 年 4 月 14 日 ~ 7 月 14 日

調査担当者 村木 敬・藤原大輔

木戸口俊子

遺跡の立地

遺跡は、いわて銀河鉄道小鳥谷駅より南西約 1km に位置し、北流する平糠川によって形成された 標高 180 ~ 200m の河岸段丘上に立地する。中屋敷上遺跡は 120m 南側にある。現況は畑地である。 調査の概要

調査区は、南側と北側に大きく分かれており、南側は丘陵部の緩斜面、北側は南側より一段低い河 岸段丘上の平坦部にある。

検出された遺構は竪穴住居跡 4 棟、竪穴建物跡 2 棟、埋設土器 1 基、焼土遺構 3 基、土坑 20 基、 柱穴 28 個、包含層 1 箇所である。遺物は縄文土器と石器が大コンテナ 8 箱分出土した。

竪穴住居跡はすべて縄文時代に属している。調査区南側では中期末から後期初頭のものが2棟、調 査区北側では晩期のものが 2 棟確認されており、時期によって標高の異なる段丘を選択し集落を形成 していたことが窺えた。竪穴建物跡は出土遺物が認められなかったものの、周辺の遺跡の成果から中 世に属するものと思われる。



航空写真 (直上)

(27) 中屋敷上遺跡

所 在 地 二戸郡一戸町小鳥谷字中屋敷上 24 - 2 ほか 遺跡番号・略号 JF 30 - 2040・NYU-05

委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所 調査対象面積 360 m²

事 業 名 国道 4 号小鳥谷バイパス建設事業 発掘調査面積 360 m²

発掘調査期間 平成 17 年 7 月 15 日~ 7 月 28 日 調査担当者 村木 敬·藤原大輔

遺跡の立地

遺跡は、いわて銀河鉄道小鳥谷駅より南西 0.7 km に位置し、北流する平糠川によって形成された標高 210 m の河岸段丘、東向きの緩斜面上に立地する。野里上 II 遺跡の 120 m 北側にある。現況は荒蕪地である。

調査の概要

今回の調査では遺構は検出されなかった。調査区南西から北東方向に旧河道1条が延びており、その河道の両脇に風倒木が複数基確認された。

遺物はII層中から土器が中コンテナ1箱出土している。遺物の所属時期は縄文時代晩期のものである。



航空写真 (直上)

(28) 飯岡才川遺跡 第7次調査

所 在 地 盛岡市飯岡新田 2 地割字才川 46-1 ほか 遺跡番号・略号 LE 16-2291・ISW-05-07

委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所 調査対象面積 6,550 m²

事 業 名 一般国道 46 号盛岡西バイパス建設事業 発掘調査面積 6,550 ㎡

発掘調査期間 平成 17 年 8 月 19 日 ~ 10 月 31 日 調 2 担 当 者 村田 淳・戸根貴之・村木 敬

藤原大輔

遺跡の立地

遺跡は、盛岡市の南西部、JR 東北本線盛岡駅の南方約2kmに位置する。雫石川右岸の河岸段丘上に立地する遺跡であり、既往の調査で縄文時代の陥し穴状遺構、奈良・平安時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡などが検出されている。今次調査区の検出面標高は123m前後で、調査前の現況は宅地及び畑地であった。

調査の概要

今次調査区は、遺跡範囲のほぼ中央部に位置する。地形改変が著しくほぼ全域で表土直下が地山検出面となっていたが、遺構の遺存状況は比較的良好で、竪穴住居跡 7 棟、古墳・円形周溝 8 基、土坑14 基、陥し穴状遺構 2 基、溝跡 11 条、ピット 65 個、井戸跡 1 基、性格不明遺構 1 基を検出した。なお、調査区の中央には東西に走る旧河道が 1 条検出されており、遺構の大半は旧河道より北側で検出されている。全体的な傾向として、円形周溝は等間隔に配置されており、その隙間を埋めるように竪穴住居跡が密集して検出されている。竪穴住居跡は遺存状態が良好で、土師器を中心に平安時代の遺物が出土している。一方、古墳・円形周溝は出土遺物から奈良~平安時代初めの遺構と考えられるが、削平が著しく墳丘及び埋葬施設が残るものは皆無であった。この他に検出された遺構については時期不明なものが多いが、出土遺物からピットの一部と井戸跡は近世に属する遺構と考えられる。この他にも平面形が長方形で、墓と考えられる土坑や焼土や土器を捨てた廃棄土坑などを検出している。

遺物は土師器・須恵器が大コンテナ約4箱のほか、鉄製品(刀子・鉄鏃など)、石製品(砥石・石帯)、剥片、近世陶磁器、銭貨、木製椀が出土している。ほとんどが遺構内から出土しており、遺跡・遺構の形成時期を推定するうえで良好な資料である。なかでも腰帯具と考えられる石帯は、岩手県内では10遺跡ほどしか出土しておらず、とくに鉈尾と呼ばれる部位で、かつ瑪瑙製の石帯は、東北地方において極めて出土例の少ない遺物として注目される。



円形周溝



石帯出土状況

(29) 宮沢原下遺跡 第1次調査

所 在 地 奥州市胆沢区若柳字宮沢原地内

委 託 者 農林水産省東北農政局

いさわ南部農地整備事業所

事 業 名 国営いさわ南部農地整備事業

発掘調査期間 平成 17 年 4 月 13 日 ~ 8 月 31 日

調査担当者 戸根貴之・村田 淳・林 勲

遺跡番号·略号 NE 23 - 2347·MHS - 05

調査対象面積 24,000 m²

発掘調査面積 58,700 m²

米田 寛・千葉正彦・丸山直美

村上 拓・菅野 梢

遺跡の立地

本遺跡は奥州市の西部、JR 東北本線水沢駅の西南西約 15 kmに位置し、胆沢扇状地に形成された堀切段丘の縁辺部に立地する。標高は約 183 m前後を測り、調査前の現況は水田及び畑地である。

調査の概要

今回の調査では陥し穴状遺構 208 基、焼土集中区 1 ヶ所、性格不明遺構 2 基を確認した。陥し穴状遺構は、平面形態が楕円形のもの、溝状のもの、円形のものという 3 種類に大別できる。

楕円形の陥し穴状遺構では、埋土中に灰白色火山灰を含むことが多い。岩手県内における過去の調査では、埋土の中~上位で灰白色火山灰を確認することが多かったが、今回、底面付近でも灰白色火山灰の存在を確認した。分析の結果、西暦 915 年前後に降下したとみられる十和田 a 火山灰由来のものであることが判明した。灰白色火山灰層よりも下位の埋土中で確認された炭化物の放射性炭素年代測定の結果とも整合することから、縄文時代晩期から平安時代までの間と考えられてきた楕円形の陥し穴状遺構の年代について、平安時代には開口していたものが存在することが明らかになった。

溝状の陥し穴状遺構は調査区西側で比較的まとまって見つかっているが、中央部から東側でも散発的だが見つかっている。所属時期については、今までの研究成果等から、縄文時代中期頃と考えられる。

円形の陥し穴状遺構には、底面中央付近に杭状の穴のあるものとないものがあり、杭状の穴のあるものが比較的多い。杭状の穴のないものについては他の用途の可能性はあるものの、遺構の配置等から、陥し穴として使用した可能性が高い。所属時期については、今までの研究成果から縄文時代前期頃と考えられる。

広大な面積の調査であったにも関わらず、陥し穴状遺構を中心とするという遺跡の性格上、遺物は、縄文土器(前・後・晩期)や土師器の細片、石箆、石鏃等の石器が僅かに出土したのみである。



調査区全景(東から)



陥し穴状遺構底面火山灰検出状況(南から)

(30) 六日市場遺跡

所 在 地 奥州市衣川区大字下衣川字六日市場 遺跡番号·略号 $N \to 65-2346 \cdot M \times I-05$

委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所 調査対象面積 5,500 m²

事 業 名 一関遊水地事業衣川左岸築堤工事 発掘調査面積 5,500 m²

発掘調査期間 平成17年4月11日~9月29日 調査担当者 川又 晋・水上明博・木戸口俊子

遺跡の立地

本遺跡は奥州市衣川区の南東部に所在し、旧衣川村役場から南東約5kmに位置する。立地は衣川北岸の河岸段丘であり、標高は約24.0 mである。調査区は概ね平坦で、調査区東側と衣川に接する南端は段丘岸になっている。

調査の概要

今回の調査では掘立柱建物跡 3 棟、柱穴 154 個、溝跡 4 条、土坑 4 基、波板状遺構 2 基が検出された。SD 1 (西側)、SD 2 (東側) は調査区を南北に横切る大規模な溝である。どちらも上幅約 2 m、深さ約 1.3 mで、出土遺物から 12 世紀の溝跡と判断できる。SD 1 と SD 2 の間の空間には遺構がなく、SD 2 より東側にも遺構は全く無い。一方、西側の SD 2 よりも西側には掘立柱建物や土坑が存在し、それらの遺構が切れ目なく西隣の細田遺跡に連続して展開していく。この遺構配置から、SD 1、SD 2 は衣川北岸に広がる 12 世紀の遺跡群の東端を区画する遺構と推測できる。最も東側に位置する掘立柱建物跡 SB 1 は正方形の平面形で、特異な形状を呈している。12 世紀に属する遺物はかわらけ、国産陶器、中国産白磁、短刀、はさみがある。

12世紀以外の遺物では弥生土器、土師器が出土している。また、明確な所属時期は不明であるが 黒曜石製のラウンドスクレーパーが 3 点出土している。



航空写真(右・六日市場、左・細田遺跡)

(31) 細田遺跡

所在地 奥州市衣川区大字下衣川字六日市場

委託者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所

事業名 一関遊水地事業衣川左岸築堤工事

発掘調査期間 平成 17 年 4 月 11 日 ~ 9 月 29 日

遺跡番号·略号 NE 65 - 2334 · HT - 05

調査対象面積 5,400 m²

発掘調査面積 5,840 m²

調 查 担 当 者 島原弘征・羽柴直人

遺跡の立地

本遺跡は奥州市衣川区の南東部に所在し、旧衣川村役場から南東約5kmに位置する。立地は衣川北岸の河岸段丘であり、標高は約24.5 mである。概ね平坦な地形で、南端は衣川に向かって急激に標高を減ずる。

調査の概要

今回の調査では掘立柱建物跡 41 棟、柱穴状小土坑 900 個、溝跡 8 条、土坑 29 基、波板状遺構 2 基 が検出された。出土遺物は大別すると 12 世紀と近世の遺物があり、両時代の複合遺跡と考えられる。

掘立柱建物跡の多くは所属時期が不明であるが、四面庇建物のように、確実に 12 世紀に属する建物も存在しており、他にも 12 世紀に属する建物の存在を予測させる。また出土遺物から 12 世紀に属すると判断される土坑、溝跡が複数以上検出され、今回の調査区域が 12 世紀に使用された空間であることは確実である。12 世紀の出土遺物はかわらけ、国産陶器、中国産青磁がある。

また、近世の遺構、遺物は「六日市場屋敷」と呼ばれる近世屋敷に伴うものである。出土遺物と寛 文年間の検地帳から17世紀中葉に成立した屋敷と推測される。なお、東隣の六日市場遺跡、西隣の 接待館遺跡とは遺構が切れ目無く連続しており、一連の遺跡として把握・検討する必要がある。



衣川遺跡群全景

(32) 接待館遺跡

所 在 地 奥州市衣川区大字下衣川字七日市場

委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所

事 業 名 一関遊水地事業衣川左岸築堤工事

発掘調査期間 平成 17 年 6 月 1 日~ 11 月 16 日

遺跡番号·略号 NE 65 - 2343 · STK - 05

調査対象面積 10,600 m²

発掘調査面積 10,600 m²

調查担当者 羽柴直人・島原弘征・川又 晋

横井猛志・水上明博

遺跡の立地

本遺跡は奥州市衣川区の南東部に所在し、旧衣川村役場から南東約5kmに位置する。立地は衣川北岸の河岸段丘であり、標高は約24.5 mである。調査区は概ね平坦で、衣川と接する南端は河川の浸食により急崖になっている。

調査の概要

今回の調査では掘立柱建物跡 42 棟、柱穴状小土坑 1131 個、溝跡 8 条、堀跡 3 条、土坑 22 基、竪穴住居 5 棟、焼土 7 基が検出された。遺構検出は調査区の全面について終了しているが、精査を終了していない遺構が多々ある。堀 SD 1 は幅 7 m、深さ 2 mの規模で、調査区域の東側と西側(その間約120 m)で検出されている。これは SD 1 が調査区外の北側を巡って、東側と西側がつながっている状況と考えられ、SD 1 が遺跡を囲んでいると推測できる。さらに、堀 SD 1 で囲まれた範囲のほぼ中央部には幅 3 m、深さ 1.3 mの堀(SD 3)で囲まれた東西約 40 mの内部区画が存在し、接待館遺跡は外部区画と内部区画を持った居館と解釈できる。SD 3 からは多量の 12 世紀後半のかわらけが出土し、堀の内部でかわらけを使った儀式・儀礼が盛んにおこなわれたことを示している。

また調査区内からは、少量ではあるが $15\sim 16$ 世紀の陶磁器も出土しており、掘立柱建物の中には中世に属する建物もあると推測される。



航空写真 (直上)

(33) 衣の関道遺跡

所 在 地 奥州市衣川区大字下衣川字関谷起地内 遺跡番号·略号 $N \to 65 - 2351 \cdot K S M - 05$

委 託 者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所 調査対象面積 14,800 m²

事 業 名 一関遊水地事業衣川左岸築堤工事 発掘調査面積 14,800 m²

発掘調査期間 平成 17 年 4 月 11 日~ 11 月 14 日 調査担当者 福島正和・須原 拓

遺跡の立地

奥州市の南端、衣川によって形成された低位段丘上に位置し、南側直近を衣川が流れる。今回の調査区は衣川の曲線に沿う東西に長い形状で、調査前は水田であった。調査区の標高は23 m前後である。調査の概要

今回の調査では掘立柱建物跡 30 棟、土坑 87 基、溝跡 16 条、池状遺構 1 基、テラス状遺構 1 ヶ所、中~近世墓 5 基、カマド状遺構 15 基を検出した。掘立柱建物は 12 世紀から近世までのものがあると考えられる。また、池状遺構は西半において石を用いた州浜と考えられる岸を検出し、テラス状遺構は斜面地上部を人工的に削り出した平坦面を検出した。平坦面は帯状を呈し、南北方向に延びる。いずれの遺構も出土遺物から 12 世紀代の遺構と考えられる。今回の調査区は、層位および出土した遺物から、平安時代から近世にかけての集落跡および中世から近世にかけての墓域の一部であると考えられる。

遺物は大コンテナで約5箱出土した。12世紀代の遺物は、かわらけ3箱、渥美・常滑などの国産 陶器片1箱、中国産磁器15片である。その他の時代では中~近世陶磁器類、土師器、須恵器、灰釉 陶器2片、縄文土器などが出土した。土器・陶磁器以外には砥石、碁石、硯などの石製品、土錘、瓦 片、火打金、鉄釘などが挙げられる。



航空写真(直上)

2 独立行政法人関係

(34) 千足南遺跡

所 在 地 下閉伊郡田野畑村字千足 59-16 遺跡番号·略号 KG 11 - 1013 · SZM - 05

委 託 者 独立行政法人緑資源機構 調査対象面積 2,297 m²

東北北海道整備局下閉伊北建設事業所 **発掘調查面積** 2,297 m²

事 業 名 農用地総合整備事業 調査担当者 米田 寛·林 勲

発掘調査期間 平成17年6月1日~7月25日

遺跡の立地

本遺跡は田野畑村役場から約7km北西の山間部に位置する。標高320~330mで、遺跡西側には千足沢が普代川方向へと南流する。おおむね緩斜面地形であるが、その中でも竪穴住居跡は比較的平坦な場所に構築されている。周辺には沼袋遺跡(縄文後期前葉)、坂下遺跡(縄文後期後葉)、子木地の台遺跡(平安時代)など、普代川流域を中心に遺跡が点在する。

調査の概要

今回の調査では竪穴住居跡 3 棟、土坑 4 基、焼土遺構 3 基を検出した。出土した遺物から縄文時代 早期末~前期初頭のキャンプ跡、奈良~平安時代の集落跡と考えられる。

遺物は、縄文時代については繊維混入土器(早期末~前期初頭)がまとまって出土した。また、早期中葉の沈線文土器 2 点、尖底土器 2 点や石鏃、尖頭器、石匙、剥片、砕片などが出土している。奈良~平安時代については、土師器甕、骨片、水晶製剥片が竪穴住居跡から出土している。また、調査区西側の 2 号竪穴住居跡の埋土からは、十和田 a 火山灰と思われる灰白色火山灰を検出した。



千足南遺跡全景

(35) 飯岡才川遺跡 第8次調査

在 地 盛岡市飯岡新田 2-46-3 ほか 所

遺跡番号·略号 LE 16 - 2291 · ISW - 05 - 08

託 者 独立行政法人都市再生機構 委

調査対象面積 1,135 m²

岩手都市開発事務所

発掘調査面積 839 m²

名 盛岡南新都市土地区画整理事業 調 查 担 当 者 濱田 宏·石崎高臣

発掘調査期間 平成17年9月1日~9月29日

遺跡の立地

遺跡は JR 東北本線盛岡駅の南西約 2 kmに位置し、雫石川右岸の河岸段丘面の微高地上に立地する。 標高は 123 ~ 124m 前後である。南側には旧河道を挟んで古代の集落遺跡である細谷地遺跡が、西側 には主に縄文時代の狩り場だった矢盛遺跡が立地する。

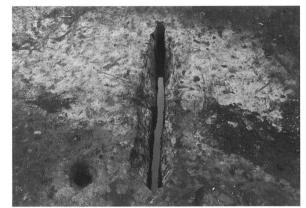
調査の概要

竪穴住居跡4棟、住居状遺構2棟、陥し穴状遺構2基、柱穴状土坑約35個を検出した。竪穴住居跡は、 9世紀後半~10世紀前半の平安時代前期のものであろう。カマドが確認されなかったものを住居状 遺構とした。竪穴住居跡を切っているが、おおむね古代に属すると考えられる。陥し穴状遺構は、縄 文時代のものと考えられる。調査区のほぼ全域から柱穴状土坑が検出されているが、掘立柱建物を構 成するようなものはない。

遺物は、土師器や陶磁器などが小コンテナで1箱ほど出土している。土師器の大部分は9世紀後半 ~10世紀前半に位置づけられるものである。



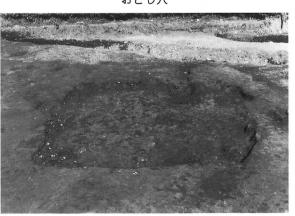
溝跡 (手前は7次調査区)



おとし穴



掘立柱建物跡 (古代)



竪穴住居跡 (古代)

(36) 細谷地遺跡 第9次調査

在 地 盛岡市向中野字野原1-6 所

遺跡番号・略号 LE 26 - 0214 · 〇HY- 05 - 09

委 託 者 独立行政法人都市再生機構 調査対象面積 1.835 m²

岩手都市開発事務所

発掘調査面積 1.835 m²

業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業 調査担当者 金子佐知子

発掘調査期間 平成 17 年 4 月 12 日~ 11 月 18 日

遺跡の立地

細谷地遺跡は、盛岡市の南西、JR 東北本線仙北町駅から南西に約1.3 kmに位置する。遺跡は雫石 川によって形成された沖積段丘上にある。標高は122m前後である。

調査の概要

今回の調査では、竪穴住居跡 11 棟、溝跡 2 条、土坑 12 基、焼土遺構 2 基、畝間状遺構 1 ヵ所、墓 壙1基などを検出した。ほとんどが、奈良、平安時代の遺構である。なお、今次調査区の北側と南側 を 10 次調査として同時に調査しており、同様に奈良、平安時代の集落跡を検出している。

過去8回にわたる遺跡西側の調査では平安時代の集落が検出されていたが、遺跡東側にあたる今回 の調査では、奈良時代の集落も存在することがわかった。奈良時代の竪穴住居跡は、調査区を南北に 伸びる沢状の地形に沿って分布し、平安時代の竪穴住居跡は西側を除き、調査区全体に分布している。

今次調査区では竪穴住居跡は奈良時代が1棟、平安時代が10棟検出された。平安時代の竪穴住居 **跡**1棟から床面に焼土跡や鉄床と見られる礫が検出されており、鍛冶を行った可能性がある。また、 小型の住居跡 1 棟から、壁外柱穴が検出されている。

溝跡はいずれも出土遺物や検出層位、墓壙、土坑との重複関係から古代と考えられる。

土坑には埋土に炭や焼土を含み、掘り方をもつものが6基ある。これらのうち、2基から焼成時の 欠損品とみられる剥片状の平安時代の土師器甕破片が多数出土した。

墓壙は火葬骨を埋葬しており、永楽通宝が出土している。

出土遺物は、大コンテナで6箱の土器、中コンテナで2箱の石器が出土した。圧倒的に平安時代の 土器が多く、奈良時代の土器は小コンテナ1箱、縄文土器、弥生土器はそれぞれ小1袋程度である。 平安時代の竪穴住居跡の1棟からは、樹木状の植物が線刻された内外面黒色の土師器小破片が出土し ている。



奈良時代の竪穴住居跡



平安時代の竪穴住居跡

(37) 向中野館遺跡 第7次調査

所 在 地 盛岡市飯岡新田 2 地割 124 - 1 ほか 遺跡番号・略号 LE 26 - 0205・〇MN-05 - 07

委 託 者 独立行政法人都市再生機構 調査対象面積 795 m²

岩手都市開発事務所 **発掘調査面積 795** m²

事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業 調 査 担 当 者 八木勝枝·水上明博·藤原大輔

発掘調査期間 平成 17 年 7 月 15 日~ 11 月 15 日

遺跡の立地

遺跡は、盛岡市の南西部、JR 東北本線仙北町駅から南西約 1.3 kmに位置し、雫石川によって形成された沖積段丘上とその周辺の旧河道(湿地)に立地する。

調査の概要

第8次調査と合わせ、縄文時代のフラスコ状土坑1基、平安時代の竪穴住居跡3棟、土坑2基、柱穴状土坑(竪穴住居跡の残骸らしい)5個、中世の曲輪跡1箇所、堀跡4条、柱穴状土坑100個以上、古代以降時期が特定できない柱穴状土坑100個以上、土師器・須恵器大コンテナ約1箱、古代の鉄器(刀子など)3点、砥石類(自然礫をそのまま利用)約50点、中世の銭貨(永楽通宝。柱穴から出土)6枚、篦状の木製品1点(堀底から出土)が発見された。

これまでの調査の続きで、調査区は三箇所に分かれ、北と中央の調査区は、7次の周りに8次の調査区が存在するため、遺構は両方の調査区にまたがるものが多い。南側の調査区は、8次のみである。

今回の最大の成果は、遺跡の北西端を調査したことで、遺跡全体の様子と地形が推測できた点である。周辺の地形は東西方向に広がり、北から南に向かって、湿地、自然堤防状の細長い段丘、湿地、広い沖積段丘と続く。遺跡は、これらの地形を南北に縦断するように立地する。

広い沖積段丘上は細谷地遺跡という古代の集落跡が広がるので、向中野館遺跡は、これと一部重複していることになる。これは、向中野館遺跡が本来中世の館跡で、北館と南館の二つからなり、その南館が、広い沖積段丘上の北西端にある可能性が高いためである。

向中野館遺跡の北西端に見つかった曲輪跡は、東西方向は堀で区画し、南北方向は湿地という自然地形に区画され、防御性の高いものであるが、規模は7×7mほどの非常に狭いもので、ここから発見された柱穴は、数が少ない上に規則的に並ばず、建物を推定復元することはできなかった。北館の主郭は、今回の調査区の東側に存在する可能性が高い。



曲輪と堀跡(南から)



曲輪上に広がる柱穴状土坑

3 岩手県・市関係



(38) 板子屋敷 3 遺跡

所 在 地 軽米町大字上舘22地割25-13ほか 遺跡番号・略号 IF74-0096・IKY3-05

委 託 者 二戸地方振興局農政部農村整備室

調査対象面積 5,100 m²

業 名 広域農道整備事業軽米九戸第2期地区 発掘調査面積 4,800 m² **発掘調査期間** 平成 17 年 6 月 1 日 ~ 11 月 11 日

調查担当者中村絵美·木戸口俊子·北田勲

遺跡の立地

遺跡は、軽米町の北部、町役場の北東約4kmに位置する。遺跡の南側を流れる雪谷川の支流である 坊里沢川によって開析された右岸に延びる丘陵縁辺部に立地し、埋没谷を挟んで西側は東斜面、東側 は南斜面となっている。今年度は東側を調査対象としており、当調査区の標高は315~281 mである。

調査の概要

今年度の調査区では、遺跡の大半を急な斜面が占める中、わずかな緩斜面である尾根頂部および南 斜面から、竪穴住居跡 8 棟、土坑 35 基、土器埋設遺構 7 基、焼土遺構 2 基が検出された。竪穴住居 跡と土坑は重複しているものが多く、また土坑は形態の違いから、時期や用途の違いがありそうであ る。

遺物は、土器が大コンテナで9箱、石器が中コンテナで1箱が遺構内外から出土している。土器は 縄文時代後期を中心に、早期、晩期、弥生時代後期のものも若干含んでいる。早期の土器は、南斜面 のごく限られた範囲の低位面からのみ出土しており、次年度以降調査する予定である。



航空写真 (直上)

(39) 舘Ⅱ遺跡

所 在 地 二戸市浄法寺町御山舘地内

委 託 者 二戸地方振興局土木部

事 業 名 緊急地方道路整備事業浄法寺工区

発掘調査期間 平成17年5月19日~9月9日

遺跡番号·略号 IE 37 - 0075 · TT II - 05

調査対象面積 3,720 m²

発掘調査面積 4,730 m²

調 査 担 当 者 丸山直美・千葉正彦

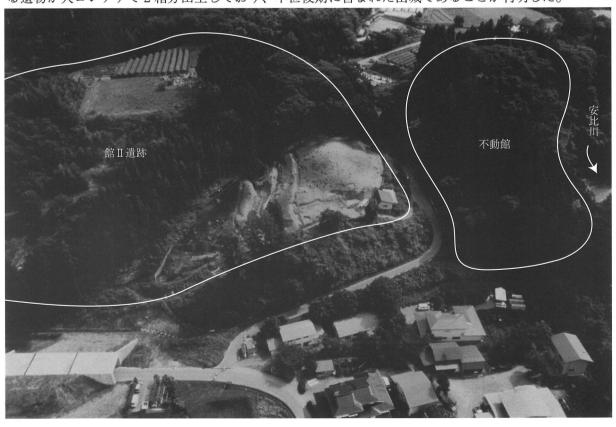
遺跡の立地

遺跡は、東北自動車道浄法寺 IC から南西約 1.2 kmの地点に位置し、東西を沢に挟まれ北側に張り出す丘陵の縁辺部に立地する。北側 0.3 kmを蛇行しながら北東流する安比川との比高は 32 ~ 39m を測る。道を挟んで西側には同じく中世城館「不動館」が隣接する。西側約 1.2 kmには、当地を所領した浄法寺氏の居館として知られ、市の教育委員会によって継続調査が行われている浄法寺城跡がある。調査の概要

土坑 14 基、円筒形陥し穴状遺構 28 基、溝状陥し穴状遺構 23 基、炉跡 1 基(以上、縄文時代)、竪穴住居跡 3 棟、焼土跡 1 基(以上、古代)、曲輪 5 箇所、帯曲輪 1 箇所、堀跡 3 条、大溝 2 条、土塁 1 箇所、切岸状遺構 2 箇所、竪穴建物跡 9 棟、竪穴状遺構 7 棟、掘立柱建物跡 1 棟(以上、中世)、柱穴群 548 個、墓壙 1 基(以上、時期不明)が検出された。

遺跡の主体である館跡は、東西両側の谷地形を利用し、南端は尾根を横断する堀で区画防御する構えとなっており、全体の規模は東西約250m、南北約300mの範囲に及ぶ。遺跡の縄張りは、前方(北方)に曲輪群を配置する東西2つの郭で構成され、今回の調査区はこのうち西側の郭にあたる。

遺物は縄文土器が少量出土しているほか、中世陶磁器片、刀子、古銭、茶臼など、主に館跡に関わる遺物が大コンテナで2箱分出土しており、中世後期に営まれた山城であることが判明した。



航空写真(北から)

(40) 飯岡才川遺跡 第9次調査

所 在 地 盛岡市飯岡新田 2-46-3 ほか 遺跡番号・略号 LE 16 - 2291・ISW- 05 - 08

委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課 調査対象面積 2,337 m² 事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業 発掘調査面積 6,107 m²

発掘調査期間 平成17年7月25日~11月10日 調査担当者 濱田 宏・村木 敬・石崎高臣

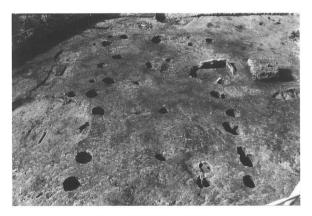
遺跡の立地

遺跡はJR 東北本線盛岡駅の南西約2kmに位置し、雫石川右岸の河岸段丘面の微高地上に立地する。標高は123~124m前後である。南側には旧河道を挟んで古代の集落遺跡である細谷地遺跡が、西側には主に縄文時代の狩り場だった矢盛遺跡が、北側には旧河道を挟んで古代の集落・墓域だった飯岡沢田遺跡が立地する。

調査の概要

竪穴住居跡 17 棟、住居状遺構 7 棟、掘立柱建物跡 5 棟、土坑 21 基、溝跡 12 条、陥し穴状遺構 20 基、円形周溝 16 基、墓壙 2 基、柱穴状土坑多数を検出した。この中には調査未了のものも含まれ、特に円形周溝は 15 基を次年度調査に持ち越している。竪穴住居跡は 9 世紀後半~ 10 世紀前半の平安時代前期のものが中心だが、これまで当遺跡での調査で未確認だった 8 世紀代のものが 2 棟検出されている。カマドが確認されなかったものを住居状遺構としたが、おおむね古代に属すると考えている。掘立柱建物は遺物の出土がなく詳細な時期は不明だが、柱穴の掘方の規模や柱間距離などから、おおむね古代 (2 棟) と近世 (3 棟) に分けられる。土坑の所属時期も不明だが、大部分は古代のものであろう。溝跡は、埋土に十和田 a テフラを含むものが 2 条あり、うち 1 条は一部未検出部分があるけれども方形に巡るようである。円形周溝は 1 基のみ精査した。年代などの詳細は次年度の課題である。陥し穴状遺構は、縄文時代のものと考えられる。調査区のほぼ全域から柱穴状土坑が検出されているが、掘立柱建物を構成するようなものはない。

遺物は、土師器・須恵器・陶磁器・鉄製品などが大コンテナで3箱ほど出土している。大部分は9世紀後半~10世紀前半のもので、一部8世紀代および9世紀前半のものも含まれる。



掘立柱建物跡(近世)



円形周溝

(41) 細谷地遺跡 第10次調査

所 在 地 盛岡市向中野字野原 1 - 17 ほか 遺跡番号・略号 LE 26 - 0214・OHY - 05 - 10

委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課 調查対象面積 6,678 m²

事 業 名 盛岡南新都市土地区画整備事業 発掘調査面積 10,545 m²

発掘調査期間 平成 17 年 4 月 12 日 \sim 11 月 18 日 調 $\stackrel{\bullet}{a}$ 担 当 者 金子佐知子・北村 忠昭

木戸口俊子・八木 勝枝

金子 昭彦

遺跡の立地

本遺跡は盛岡市の南西部、JR 東北本線仙北町駅から南に約1.3 kmに位置し、雫石川によって形成された自然堤防上に立地する。調査区の標高は約122 mである。

調査の概要

今回の調査では縄文時代の竪穴住居跡 1 棟、フラスコ状土坑 3 基、弥生時代の焼土遺構 1 基、奈良時代の竪穴住居跡 10 棟、土坑 1 基、溝跡 1 条、平安時代の掘立柱建物跡 1 棟、竪穴住居跡 35 棟、墓壙 1 基、土坑 28 基、焼土遺構 1 基、溝跡 5 条、古代の土坑 16 基、溝跡 7 条、近世の掘立柱建物跡 1 棟、墓壙 1 基、土坑 10 基、溝跡 4 条、不明遺構 2 基、時期不明の土坑 1 基、焼土遺構 3 基、溝跡 2 条が検出された。

縄文時代の竪穴住居跡は出土遺物から晩期前葉のもので、県内でも確認例の少ないものである。古代の遺構は過年度の調査と同様、平安時代の竪穴住居跡が中心であるが、これまで細谷地遺跡では確認されていなかった奈良時代の竪穴住居跡が10棟検出され、遺跡の東側に集落が営まれていることが確認された。当該期の竪穴住居跡は北西向きのカマドを持つ特徴を持っている。平安時代の竪穴住居跡は一辺が5m以上の大形のものが1棟、2~5mの中形のものが32棟、2m未満のものが2棟で、なかには一辺1.2mの非常に小形のものもある。カマドは北向き・東向き・南向き・地西向き・市東向きカマドなど様々なものがあり、1棟に2基や3基持つ竪穴住居跡もある。その他の遺構では、平安時代の掘立柱建物跡や墓壙が検出された。

遺物は大コンテナで約17箱出土し、竪穴住居跡から出土した土師器、須恵器が主体である。その他には縄文土器、弥生土器、土製品、石器、石製品、鉄製品、古銭、瓦、陶器、磁器などが出土した。特筆すべき出土遺物として、平安時代の竪穴住居跡から、断片的な資料であるが、唐草文のある瓦と考えられるものが出土した点が挙げられる。



竪穴住居跡(縄文時代)



竪穴住居跡 (平安時代)

(42) 向中野館遺跡 第8次調査

所 在 地 盛岡市飯岡新田 2 地割 124-1 ほか 遺跡番号・略号 LE $26-0205\cdot \bigcirc$ MN-05-08

委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課 調査対象面積 955 m² 事 業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業 発掘調査面積 1,202 m²

発掘調査期間 平成 17年7月15日~11月15日 調査担当者 金子昭彦

遺跡の立地

遺跡は、JR 東北本線盛岡駅から南約 2.5km、沖積段丘上と周辺の旧河道(湿地)に立地する。 調**杳の概要**

第7次調査と合わせ、縄文時代のフラスコ状土坑1基、平安時代の竪穴住居跡3棟、土坑2基、柱穴状土坑(竪穴住居跡の残骸らしい)5個、中世の曲輪跡1箇所、堀跡4条、柱穴状土坑100個以上、古代以降時期が特定できない柱穴状土坑100個以上、土師器・須恵器大コンテナ約1箱、古代の鉄器(刀子など)3点、砥石類(自然礫をそのまま利用)約50点、中世の銭貨(永楽通宝。柱穴から出土)6枚、篦状の木製品1点(堀底から出土)が発見された。

調査区は三箇所に分かれ、北と中央の調査区は、7次の周りに8次の調査区が存在するため、遺構は両方の調査区にまたがるものが多い。カマドの焚口そばに土坑を掘って底に完形の坏を置き、埋め戻すという祭祀跡が住居跡2棟に見られた点が特筆される。南側の調査区は、8次のみだが100㎡と狭く、昨年の調査区の隣で旧河道が続き、平安時代の泥炭層の中から伐採痕のある木が発見された。



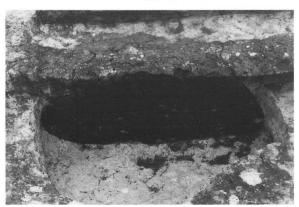
平安時代の竪穴住居跡



伐採痕のある木



カマド祭祀跡?



フラスコ状土坑

(43) 本宮熊堂A遺跡 第29 次調査

所 在 地 盛岡市本宮熊堂69-6ほか

委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南開発課

事 業 名 盛岡南新都市土地区画整備事業

発掘調査期間 平成17年6月1日~6月30日

遺跡番号・略号 LE 16 - 2107・〇KD 05 - 29

調査対象面積 283 m²

発掘調査面積 283 m²

調査担当者 濱田 宏・石崎高臣

遺跡の立地

遺跡は盛岡市の南西部、雫石川の南方約 1.5 kmにあり、雫石川によって形成された河岸段丘上に立地する。付近の標高はおよそ 123m で、隣接する本宮熊堂 B 遺跡よりも 2m ほど低くなっている。

調査の概要

今回の調査範囲は、昨年度行われた第24次調査の東側に隣接する箇所である。検出された遺構は、前回調査時に確認された旧河道のほか、縄文時代の焼土1基、炉跡2基、晩期の遺物包含層1箇所、平安時代の溝跡2条、時期不明の土坑1基、柱穴30個である。

縄文時代の遺構と遺物包含層は旧河道の北岸にあって、時期はいずれも晩期後葉に属するものである。また、土器とともに石器剥片や未製品、残核などが出土したことから、この周辺は石器製作の場であったことも明らかとなった。平安時代とした溝跡 2 条は、ほぼ平行して東に延びているが、一方だけに灰白色火山灰が堆積しており、 2 条の溝には多少の時期差があることがわかった。旧河道からは、昨年度同様縄文時代晩期後葉の土器や土製品、奈良・平安時代の土師器・須恵器、動植物遺体などが出土した。幅は $6\sim8m$ 、深さは最大で 2m を測り、東に向かうにつれて深さを増している。土壌の堆積状況から、この河は平安時代には埋まりきり、流れはほとんどなかったものと考えられる。



旧河道全景



石製品出土状況



旧河道断面

(44) 野古 A 遺跡 第 29 次調査

所 在 地 盛岡市下鹿妻字北 40-2 ほか 遺跡番号·略号 LE 16 - 2155・〇NK-05 - 29

委 託 者 盛岡市都市整備部盛岡南整備課 調査対象面積 3,455 m²

事業 名 盛岡南新都市土地区画整理事業 発掘調査面積 3,088 m²

発掘調査期間 平成 17 年 4 月 12 日~ 6 月 13 日 調 査 担 当 者 八木勝枝・金子昭彦

遺跡の立地

本遺跡は標高 124~125 m前後の砂礫段丘Ⅲ面に立地する。第 29 次調査区は 3 地点に分かれており、北・東調査区は比較的安定した高位面に立地する。南調査区には第 24 次調査区からつながる段差が認められ、微高地に古代の竪穴住居跡が位置している。

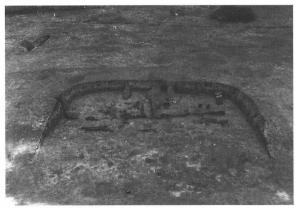
調査の概要

第29次調査では竪穴住居跡 5 棟、掘立柱建物跡 1 棟、住居状遺構 1 棟、陥し穴状遺構 4 基、土坑 10 基、 柱穴状小土坑 157 個が検出された。

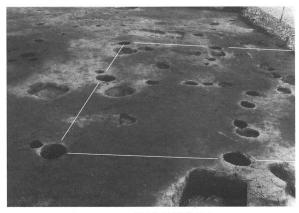
陥し穴状遺構は南調査区南西端に4基まとまって検出された。南調査区の南に隣接する第19・20次調査区でも陥し穴状遺構が14基調査されており、北への広がりを確認できた。陥し穴状遺構は細長い溝状の平面形で深さ1m近くになり、2基ずつのまとまりが等高線にほぼ直交して配置されている。出土遺物はないが、形態から縄文時代晩期の陥し穴状遺構と考えられる。

奈良時代の竪穴住居跡は、南調査区の陥し穴状遺構に近接する微高地で1棟検出された。本遺跡の奈良時代集落は過去の調査で多数検出されており、今回検出した竪穴住居は集落の南西端である可能性もあるが、調査区外の西側は標高が一段高く、野古A遺跡の未調査区や鬼柳 C 遺跡が位置しているため、別集落の一部を構成する可能性も否定できない。今回調査した1棟からは、指頭押圧により口縁部装飾が施された土師器甕が出土している。

平安時代の竪穴住居跡は北調査区で3棟、東調査区で1棟検出された。従来確認されている本遺跡の平安時代集落の一部を構成すると考えられる。北調査区で検出された3棟の竪穴住居跡の中間に住居状遺構1棟が検出された。床面の硬化やカマドが検出されなかったため住居状遺構としたが、焼土や遺物が大量に投げ込まれており、堆積土も人為堆積の様相を呈していたため、周辺の竪穴住居構築の際に生じた土の廃棄や遺物廃棄に用いられた可能性が指摘できる。掘立柱建物跡は北調査区で1棟検出された。一部調査区外だが、2間×2間と考えられる。9世紀末~10世紀初頭の土師器坏が出土している。



RA077(奈良時代住居跡)



RB004 (掘立柱建物跡)

(45) 新平遺跡

所 在 地 北上市新平 2 地割 190 番地ほか 遺跡番号・略号 ME 55 - 0081・NP-05

委 託 者 北上地方振興局農林部農村整備室 調査対象面積 4,934 m² (うち確認調査 1,750 m²)

事 業 名 経営体育成基盤整備事業江釣子第1地区 発掘調査面積 4,934 m²(うち確認調査 1,750 m²)

発掘調査期間 平成17年4月13日~7月15日 調査担当者 西澤正晴・横井猛志・水上明博

遺跡の立地

遺跡は北上市の北西部,新平地区に所在する。遺跡の中心は村崎野段丘上にあり、古代駅家跡擬定地として岩手県指定史跡となっている。今回の調査はこの段丘より一段低い面となっている。遺跡北と東側には河川改修された黒沢川が流れている。今回の調査区の標高は85~88 mであり、西から東に向けて傾斜している。

調査の概要

今回の調査では、竪穴住居跡 2 棟、溝跡 20 条、土坑 24 基、井戸跡 1 基、土器捨て場 1 箇所などが 検出された。遺物は大コンテナ数で 22 箱分が出土している。

は場整備事業に関連した調査のため、調査区が非常に細長くなっており完掘した遺構は少ない。今回の調査は遺跡本体がある段丘より一段低いため集落が存在する可能性は低いと思われたが、竪穴住居跡等の発見により平安時代の集落が一段下の段丘面にも広がっていることが確認された。これは 10 世紀後半と考えられる多量の土器群が出土したこととあわせて重要な成果のひとつといえよう。また、隣接して近世の新平屋敷が存在することから、それに関連すると思われる遺構・遺物も発見されている。



航空写真(南から)

(46) 芦萱遺跡

所 在 地 北上市新平第4地割、藤沢9地割ほか 遺跡番号·略号 ME 55 - 0068・YG-05

委 託 者 北上地方振興局農林部農村整備室 調查対象面積 200 m²

事 業 名 経営体育成基盤整備事業江釣子第 1 地区 発掘調査面積 200 m²

発掘調査期間 平成 17 年 7 月 1 日~ 7 月 22 日 調 査 担 当 者 水上明博·西澤正晴

遺跡の立地

遺跡は北上市北西部にあり、市北部の東西に広がる村崎野段丘上に立地する。調査区はこの段丘から一段低い面にかけての斜面部であり、標高は87~88mである。現況は畑地と水田である。

同じ段丘上には古代の大集落である藤沢遺跡や向かい合う西側の段丘には新平遺跡が存在する。調査区は水路付け替え分であり、幅が5mである。現状ではその中に水路が2本横断しており実際の調査面積はさらに少ないものとなっている。

遺跡の概要

検出された遺構は、土坑1基、溝跡1条、不明遺構1基であるが、遺物は古代の土器を中心に大コンテナ8箱分出土している。これは調査区全域から出土するものであり、広義の遺物包含層が厚く存在していたと考えられる。遺構はこの包含層を除去後に検出されている。調査区の幅が狭小のため、この最下位面でしか遺構が確認できなかったが、上位層中に遺構があった可能性も残る。

いずれにせよ、今回の調査はその縁辺にあたるため、本遺跡の評価はその地点の調査をまって決定 すべきと思われる。



航空写真(南から)

(47) 里古屋遺跡

在 地 住田町世田米字里古屋 11 番地ほか 遺跡番号·略号 NF 14 - 2005・SGY-05 所

委 託 者 大船渡地方振興局土木部

事 業 名 国道 397 号地域活性化支援事業

発掘調査期間 平成 17 年 4 月 8 日 ~ 6 月 28 日

調査対象面積 916 m²

発掘調査面積 916 m²

調查担当者 北田 勲・中村絵美

遺跡の立地

本遺跡は気仙郡住田町の北西部、町役場から西に約8kmに位置する。気仙川の支流である大股川北 岸の山体裾部、南向き緩斜面上に立地しており、標高は218~233mである。

調査の概要

本遺跡の調査は平成15・16年度の過去2ヵ年行っており、今年度は調査最終年である。

今回は前年度に引き続き縄文時代中期の竪穴住居跡3棟、土坑5基、中世の堀跡1条、時期不明の ピット34個が検出された。出土遺物は大コンテナで縄文土器約2箱、石器約0.5箱、石製品、銭貨 少量である。

本遺跡は前年度までの調査で、縄文時代前期後葉から後期前葉を主体とした集落であることが分か っている。竪穴住居跡はいずれも重複して検出されており、長期にわたって同一箇所に占地していた ことが分かる。また、中世の堀跡は前年度に引き続き検出され、全長 45m・幅 2m と長大であり、断 面はV字形を呈している。





調査区全景 (南から)



堀



土器出土状況

平成 17 年度 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所 長 相 原 康 副 所 長 小野寺 満 寿 [管理課] 課 長 韮 澤 正 吾 主 查 高 橋 俊 正 課長補佐 中 嶋 腎 事 主 猿 橋 幸 子 主任主查 高 橋 清 助 [調查第一課] [調査第二課] 首席文化財専門員兼 調査第一課長 浦 謙 課 長 佐々木 文 清 透 文化財専門員 小山内 主幹兼課長補佐 中 Ш 重 紀 冏 部 勝 則 課長補佐 高 橋 義 介 (世界遺産登録支援派遣) 文化財専門員 金 子 佐知子 文化財調查員 木戸口 子 俊 " 濱 田 宏 " 千 葉 正 彦 金 子 昭 彦 " 杉 沢 昭太郎 柴 " 羽 直 人 " (柳之御所支援派遣) 星 雅 之 " 村 上 拓 文化財調查員 水 上. 明 博 " 西 澤 正 晴 林 勲 11 " 丸 Ш 直 美 吉 \mathbb{H} 泰 治 11 11 北 勲 田 溜 浩二郎 11 " (県教委研修派遣) 中 村 絵 美 11 期限付調查員 野 梢 菅 " 村 木 敬 横 井 志 福 島 猛 正 和 北 村 忠 昭 " 之 戸 根 貴 11 拓 須 原 11 八 木 勝 枝 " 米 田 寬 " Ш 又 晋 11 丸 浩 治 Ш " 島 原 弘 征 11 村 田 淳 11 期限付調查員 崎 石 高 臣 荒 谷 郎 11 伸

藤

原

輔

大

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第490集

平成 17 年度発掘調査報告書

印刷 平成18年3月20日

発 行 平成18年3月27日

発 行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 電話(019)638-9001 FAX(019)638-8563

印 刷 第一印刷有限会社

〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ四丁目6-40 電話(019)646-6001

